

現代中国語の談話分析

～談話の展開とその表現形式～

村松恵子

報告番号 甲 第 2857 号

①

現代中国語の談話分析

～談話の展開とその表現形式～

村松恵子

目次

序章	本稿の目的	[4]
第1章	談話の構造	[8]
1.1	談話のまとまりを規定する要素	[8]
1.1.1	談話のトピック	[11]
1.1.2	談話のパラグラフの構造	[13]
1.1.3	談話の構造のモデル	[16]
1.2	情報伝達のルールと談話の構造	[18]
1.3	本稿における談話の言語資料	[20]
1.3.1	言語資料のインフォーマント	[20]
1.3.2	言語資料の形式	[21]
1.3.3	言語資料の談話の構造	[22]
1.3.4	言語資料に使用した記号	[43]
第2章	談話の提示部	[44]
2.1	いわゆる存現文の表現	[45]
2.1.1	従来の統語論的分析	[45]
2.1.2	存現文の表現と提示機能	[48]
2.2	‘有’の表現	[57]
2.2.1	従来の統語論的分析	[57]
2.2.2	‘有’の表現と提示機能	[60]
2.3	‘外位語’の表現(一)	[67]
2.3.1	従来の統語論的分析	[67]
2.3.2	‘外位語’の表現と提示機能	[69]

第3章 談話の展開部	[75]
3.1 談話の展開部と情報の重要度	[75]
3.1.1 ‘把’構文の従来統語論的分析	[76]
3.1.2 談話における‘把’構文の機能	[78]
3.2 談話の展開部と談話の結束性	[92]
3.2.1 述語動詞と「前置詞‘在’+場所名詞(句)」の位置	..	[94]
3.2.1.1 従来統語論的分析	[94]
3.2.1.2 「‘在’+PN+V」、「V+‘在’+PN」 と談話の結束性	[96]
3.2.2 複合方向補語と目的語の位置	[102]
3.2.2.1 従来統語論的分析	[102]
3.2.2.2 「V+C+O+‘来/去」、「V+C+‘来/去’+O」 と談話の結束性	[104]
第4章 談話の転換部	[114]
4.1 いわゆる目的語の文頭表現	[116]
4.1.1 従来統語論的分析	[116]
4.1.2 目的語の文頭表現とトピックの転換機能	[118]
4.2 「前置詞‘在’+場所名詞(句)」の文頭表現	[127]
4.2.1 従来統語論的分析	[127]
4.2.2 「‘在’+場所名詞(句)」の文頭表現とトピックの転換機能	[129]
4.3 「sentence+‘的」」の文頭表現	[138]
4.3.1 従来統語論的分析	[138]
4.3.2 「sentence+‘的」」の文頭表現とトピックの転換機能	[139]
4.4 ‘外位語’の表現(二)	[146]

第5章 まとめ	[151]
5.1 序章のまとめ――本稿で取り上げた、現代中国語の9つの表現形式	[151]
5.2 第1章のまとめ――談話の構造	[152]
5.3 第2章のまとめ	[153]
5.3.1 いわゆる存現文の表現	[153]
5.3.2 ‘有’の表現	[154]
5.3.3 ‘外位語’の表現(一)	[154]
5.4 第3章のまとめ	[156]
5.4.1 ‘把’構文	[156]
5.4.2 談話の結束性と語順	[157]
5.4.2.1 「‘在’+PN+V」と「V+‘在’+PN」	[157]
5.4.2.2 「V+C+O+‘来/去’」と「V+C+‘来/去’+O」	[158]
5.5 第4章のまとめ	[159]
5.5.1 いわゆる目的語の文頭表現	[159]
5.5.2 「前置詞‘在’+場所名詞(句)」の文頭表現	[159]
5.5.3 「sentence+‘的’」の文頭表現	[160]
5.5.4 ‘外位語’の表現(二)	[161]
5.6 残された問題点	[162]
5.7 現代中国語統語論における本稿の位置づけおよび今後の展望	[168]
注	[171]
参考文献	[173]

序章 本稿の目的

修士論文においては、現代中国語²³の文（sentence）の述語基に後置する非自立的成分のいわゆる語順について、アスペクト（述語基に関する話し手あるいは書き手の認識の仕方を表す要素と規定）の視点から考察を試みた。そしてそれは、述語基に後置する非自立的成分が、客観性の高いアスペクト形式から、主観性の高いアスペクト形式の順に位置し、さらにその後ろに、コトガラに対する話し手あるいは書き手の態度を表すムード形式、話し手あるいは書き手の聞き手あるいは読み手に対する態度を表すムード形式が位置することを明らかにしたものであった。修士論文でのこの考察によって、現代中国語の文は、その各構成成分が述語基を中心に、述語基の後ろには、述語基に関する話し手あるいは書き手の認識の仕方がより客観的である成分からより主観的である成分の順に位置していることが明らかにされた。

一方、述語基の前に位置する成分としては、通常、イ＝形容詞あるいはロ＝副詞による状況語、ハ＝前置詞とニ＝その目的語（名詞あるいは名詞句）、ホ＝助動詞、ヘ＝語気副詞および、ト＝表現の題目が存在し、イ、ニ、トは自立的成分、ハは非自立的成分である。ロ、ホ、ヘは、個別の語により、また、同一の語であっても統語上の制約によって、自立的成分として機能する場合と非自立的成分として機能する場合がある。そしてイあるいはロ、ハ＋ニ、ホ、ヘの成分は、述語基の表す動作、行為、作用、変化と、話し手あるいは書き手の認識の仕方との関連からいえば、ホはヘよりも、ハ＋ニはホよりも、イあるいはロはハ＋ニよりもより客観的である。トは、いわゆる話題、主題であり、この視点の対象からは除外される成分であることはいうまでもない。

以上のことを図式化して示すと、次頁の図〈1〉のようになる（主＝主観性、客＝客観性）。

図〈1〉



しかしながら、文 (=一つの言語表現) を構成する成分には、主として言表事態 (コトガラそれ自体) を表す成分と、主として言表態度²²⁾ (話し手あるいは書き手がコトガラをどのように認識しているか及び話し手あるいは書き手のコトガラに対する認識を聞き手あるいは読み手にどのように示すか) を表す成分の2つが存在する。図〈1〉の題目、状況語(1)の名詞(句)、述語基、目的語はいずれもその前者であり、これらは自立的成分である。

非自立的成分は前述のように、述語基を中心にしてその語順が客観的に固定しているものであるが、述語基を除くこれら3つの自立的成分はいずれも名詞あるいは名詞句によって構成されており、これらは同一の名詞(句)であっても、ときには目的語としての位置を占めたり、前置詞と結合して状況語(1)としての位置を占めたり、あるいは題目としての位置を占めたりすることができる。

われわれの言語生活において、実際に言語表現が用いられるとき、そこには必ず話し場面 (situation) や文脈 (context) が存在する。逆にいえば、ある場

面や文脈の中でのみ、言語表現は実在する。そしてまた、言語の最も基本的な役割は情報の伝達であり、その基本的な単位は一つの発話 (utterance) であり文 (sentence) である。上記の図〈1〉のような構造をもつ現代中国語の一つの言語表現も、実際の言語生活の中では、ある場面の中で一つの情報として聞き手あるいは読み手に伝達される。つまり、ある一つの言語表現は、ある場面の中で一つの情報として聞き手あるいは読み手に伝達されるのである。その際、話し手や書き手は聞き手や読み手に情報がより過不足なくスムーズに伝わるように表現形式を選択する。その場合その一つとして、自立的成分の位置を工夫するという方法がとられる。この3つの自立的成分の位置が工夫された結果としての言語表現が、次の {1} から {9} の表現形式である。

- {1} いわゆる存現文の表現
- {2} ‘有’の表現
- {3} ‘外位語’の表現
- {4} ‘把’構文の表現
- {5} 述語動詞と「前置詞‘在’+場所名詞(句)」の位置
- {6} 複合方向補語と目的語の位置
- {7} いわゆる目的語が文頭に立つ表現
- {8} 「前置詞‘在’+場所名詞(句)」が文頭に立つ表現
- {9} 「sentence + ‘的’」が文頭に立つ表現

従来これらの表現形式は、その名詞(句)の統語的特徴について「定・不定」、「新情報・旧情報」、「特定指示・総称指示」という視点から、一文のレベルにおいてのみ考察が加えられ、また、その名詞(句)の位置が選択されるメカニズムについては、何ら考察されてこなかったものである。確かに、膠着語である日本語においては、文成分の位置が変わっても、助詞が変化しない限り、文成分の統語的機能は基本的に変化しないし、屈折語である印欧諸語においては文成分の位置が変わるとその成分の統語的機能が変化する場合としない場合があるのに対して、中国語はいわゆる孤立語であり、文成分の位置が変わると文成分としての統語的機能も変化する。この点において一文のレベルで、その統語的機能を究明しようとする従来志向性は十分に首肯できる。しかし、統語的特徴といわれてきた上記の3つの視点をとってみても、ある名詞(句)が「定・不定」、「新情報・旧情報」、「特定指示・総称指示」のどの特徴を有しているのかは、話しの場面や文脈においてのみ決定されるものであって、それらは実際にその表現形式が用いられている話しの場面や文脈を離れては無用のものであり、一文のレベルにおいてこれらの視点を採用することはそもそも無理なことである。また、その

名詞（句）の位置が選択されるメカニズムも、その表現形式の話しの場面や文脈における機能と大いに関わることであるので、話しの場面や文脈を離れて一文のレベルで考察することは不可能なことである。換言すれば、このような話しの場面や文脈を踏まえた考察がおこなわれて初めて、現代中国語の言語表現の構造を解明することができ、然るべき文法体系が構築されるのである。

一般に、話しの場面（situation）や文脈（context）といっても、極く限られた表現においては一言語表現だけでそれと想定できる場合もあれば、複数個の言語表現があってもそれと確定できない場合も存在する。話し言葉に限っていうならば、通常、話しの場面が確定できるのは、あるまとまりをもった表現の集合体であり、あるまとまりをもって展開されていく対話や会話はもっとも確実にそれと限定できるものである。

本稿においては、このように、あるまとまりをもって展開される発話の集合体を談話（discourse）と称することとする。先に挙げた {1} から {9} の表現形式は談話が遂行されるプロセスにおいて、それぞれそうあるべき、あるいはそうでなければならぬ必然性を有する表現形式であって、他の表現形式には代替することのできないものである。このように、これらの表現形式は談話の遂行の上で、然るべき役割を果たしているものである。

このように、{1} から {9} の表現形式が談話上の機能と密接にかかわっているものであることによって、これらの表現形式の統語的特徴は談話上の機能と切り離して論ずることはできない。

本稿は、{1} から {9} の表現形式の談話における機能を考察することによって、その名詞（句）の統語的特徴を明らかにし、それによって現代中国語の表現の語順が決定されるメカニズムを解明し、新しい文法体系構築の方向性を示すことをその目的とする。

{1} から {9} の表現形式の談話上の機能は、前述のように談話の遂行や展開と深いかかわりをもっており、談話の遂行や展開は、いわば談話の構造そのものである。そこでまず第1章において談話そのものの構造を考察し、その考察をもとに第2章以下において、{1} から {9} の表現形式について分析を進めることにする。

第1章 談話の構造

「談話 (discourse)」という用語は従来、多義的に用いられてきたが、通常は、文 (sentence) の連続体であり、全体としてまとまりをもったものを指し、それを、書記言語と音声言語に区別し、書記言語を *writtentext*、音声言語を *spoken discourse* と呼ぶ場合もある。本稿はその分析の対象を音声言語 (*spoken discourse*) に限定する。そして、談話を、あるまとまりをもって展開される発話の集合体と規定することはすでに述べた。また、通常、書記言語において「文」と呼ばれている単位を、以下、談話における「話文」と呼ぶこととする。

1.1 談話のまとまりを規定する要素

談話は、とりとめのない雑談である俗にいういわゆる談話の場合もあるが、例えば、講演、討論、あるいは電話での依頼などは、全体として「まとまり」をもっている場合が多く、この「まとまり」は談話の構造の柱であり、大柱である。そこで、まず、この談話の「まとまり」を規定する要素について考察することにする。

談話については多数の先行研究がみえるが、ここではその「まとまり」とそれを規定している要素について言及している論考をみていく。

John Hinds 1976(p.13~)は、談話の形式として

- (1) 独白 (a monologue)、
- (2) 対話 (a dialogue)、
- (3) 会話 (a conversation)、
- (4) あるいはこれらの組み合わせのもの、

の4種類を挙げ、そして(1)から(4)のどの場合においても何についての談話であるかを決定することができるとし、この「何について」が 'the discourse topic' であり、一つの 'discourse topic' は、一つの 'paragraph' を構成する、としている。つまり John Hinds は、談話にはその形式の如何を問わず、'the discourse topic' が不可欠であり、その topic によって「まとまり」をもった paragraph が構成されると指摘している。

宮地裕1963 は、談話のスタイルとして以下の3つの要素を挙げている。

①送り手と受けての関係：一対一か、一対多数か、多数対多数か。

一方向的か、相互的か。

②目的：主張、説得、報告、説明、解説などのうち、何を目的とするのか。

③場面：日常的な場面か、改まった場面か。

閉鎖的な場面か、解放的な場面か。

宮地はこのように、談話のスタイルという視点で、「まとまり」を前提とし、それを規定する要素として、誰がどのような形で参加するのか、何を目的とするものであるのか、どのような場面で遂行されるのかの3つを指摘している。

また南不二男1983は、談話の単位を認定する手がかりとして以下の8つを挙げている。

〈1〉表現された形そのもの：前後にはっきりしたポーズがあるなど。

〈2〉参加者：話し手または書き手 (addressor)

聞き手または読み手 (addressee)

関係者 (第三者、referent)

の三種類を含む。

ひとまとまりの言語表現の参加者の範囲が一定であること。

〈3〉話題：一貫性があること。

〈4〉言語的コミュニケーションの機能：一定していること。

〈5〉表現態度 (フリ)：話し手の意向 (例えば、改まった態度など) が一定していること。

〈6〉使用言語：そこに使われている言語 (または方言) が一種類であること。

書き言葉の場合には口語体か文語体かが、一定していること。

〈7〉媒体： (例えば電話、手紙など) 一定していること。

〈8〉全体的構造：例えば、「起承転結」などの一つの型あるいは規則性があること。

南は、John Hinds の topic、宮地の3つの要素に加えて、談話で使用される言語、談話の媒体、談話の全体的構造を挙げている。

さらに、Halliday, M.A.K. and R. Hassan 1985 は、書記言語によるものと音声言語によるものを含めて、それを「テキスト (text)」、テキストをとりまく環境を「状況のコンテキスト (context of situation)」と呼び、そしてそれは、以下の3つの要素から成るとしている。

《1》話の内容 (field) : 何が話されているか。

《2》参加者 (tenor) : 誰が参加しているか。

参加者の地位、役割は何か、など。

《3》伝達的手段 (mode) : 話されるのか、書かれるのか、など。

説得的か、説明的か、教訓的か、など。

Halliday, M.A.K. and R. Hassan の《1》は、John Hinds の 'the discourse topic'、南の〈3〉であり、《2》は宮地の①、南の〈2〉、さらに《3》は、南の〈7〉に相当する。

以上、談話のまとまりとそれを規定している要素に関する先行研究の主なものをみてきた。これらの先行研究は談話のまとまりや構造などについて、多角的に論じられてはいるが、いずれも、レベルの異なるいくつかの要素が平面的に羅列されたものであることが解る。

書記言語であれ、音声言語であれ、一文や一話文を越え、それらの連続体として全体としてまとまりをもった言語表現は、形式と内容の二つの要素が必ず存在し、それらは峻別して論じられなければならない。

John Hinds の(1)独白、(2)対話、(3)会話、(4)これらの組合わさったもの、宮地の①送り手と受けての関係、②目的(Halliday, M.A.K. and R. Hassan の《3》伝達的手段と同一)、③場面、南の〈1〉表現された形そのもの、〈2〉参加者、〈4〉言語的コミュニケーションの機能、〈5〉表現態度、〈6〉使用言語、〈7〉媒体、Halliday, M.A.K. and R. Hassan の《2》参加者(tenor)、《3》伝達的手段(mode)は、いずれも形式面における要素であり、John Hinds の 'the discourse topic' 南の〈3〉話題、〈8〉全体的構造、Halliday, M.A.K. and R. Hassan の《1》話の内容(field)は、内容面における要素である。

本稿の分析の対象である音声言語としての談話についても、形式と内容の二つを峻別してそのまとまりを規定している要素をみていかなければならない。

談話における形式面の要素として、談話に参加する人と参加の仕方、談話で使用される言語、談話が遂行される媒体、談話が遂行される場面、談話が遂行される手段などを挙げることができよう。

そして、これらの要素は個別の談話が完了するまで一定していることが必要条件である。そうでなければ、まとまりをもった談話として認定されないからである。

また、内容面の要素としては、話題が存在することと、談話が全体として順序を追った展開をしていることが不可欠である。そして、話題は談話が完了するまで一貫していることが求められ、談話が順序を追った展開となるためには、話し手によって話題が提示され、話し手(と聞き手)によってそれが展開されていき、そしてそれが終結していくという構成でなければならない。そうでなければ、やはりまとまりをもった談話として成立しないからである。

以上の考察から、談話のまとまりを規定する要素は次のように設定される。

(I) 形式面の要素

〔1〕 談話に参加する人と参加の仕方

- 〔2〕 談話で使用される言語
- 〔3〕 談話が遂行される媒体
- 〔4〕 談話が遂行される場面
- 〔5〕 談話が遂行される手段

(II) 内容面の要素

- 〔6〕 話題が存在すること
- 〔7〕 話題が全体として順序を追った展開をしていること

〔1〕から〔5〕の形式面の要素については、例えば下記の(例A)や(例B)のように、いろいろな組み合わせが可能である。

(例A)

- 〔1〕 談話に参加する人と参加の仕方：一対一
- 〔2〕 談話で使用される言語：日本語
- 〔3〕 談話が遂行される媒体：電話
- 〔4〕 談話が遂行される場面：私的
- 〔5〕 談話が遂行される手段：相談

(例B)

- 〔1〕 談話に参加する人と参加の仕方：一対多数
- 〔2〕 談話で使用される言語：中国語
- 〔3〕 談話が遂行される媒体：講演
- 〔4〕 談話が遂行される場面：公的
- 〔5〕 談話が遂行される手段：解説

そして重要なことは、形式面の要素(〔1〕から〔5〕)がどのような組み合わせであっても、それが一定している限り、内容面の要素である〔6〕と〔7〕の構造は普遍的であるということである。つまり、この〔6〕と〔7〕が、談話の構造を基本的に決定している要因なのである。

そこで、以下、談話の話題と、談話の構成(順序を追った展開)について考察を進めていく。

1.1.1 談話のトピック

対話あるいは会話が遂行される場合、参加者は、その対話あるいは会話が、何について話されているかを必ず意識する。そしてこの「何について」を、本稿で

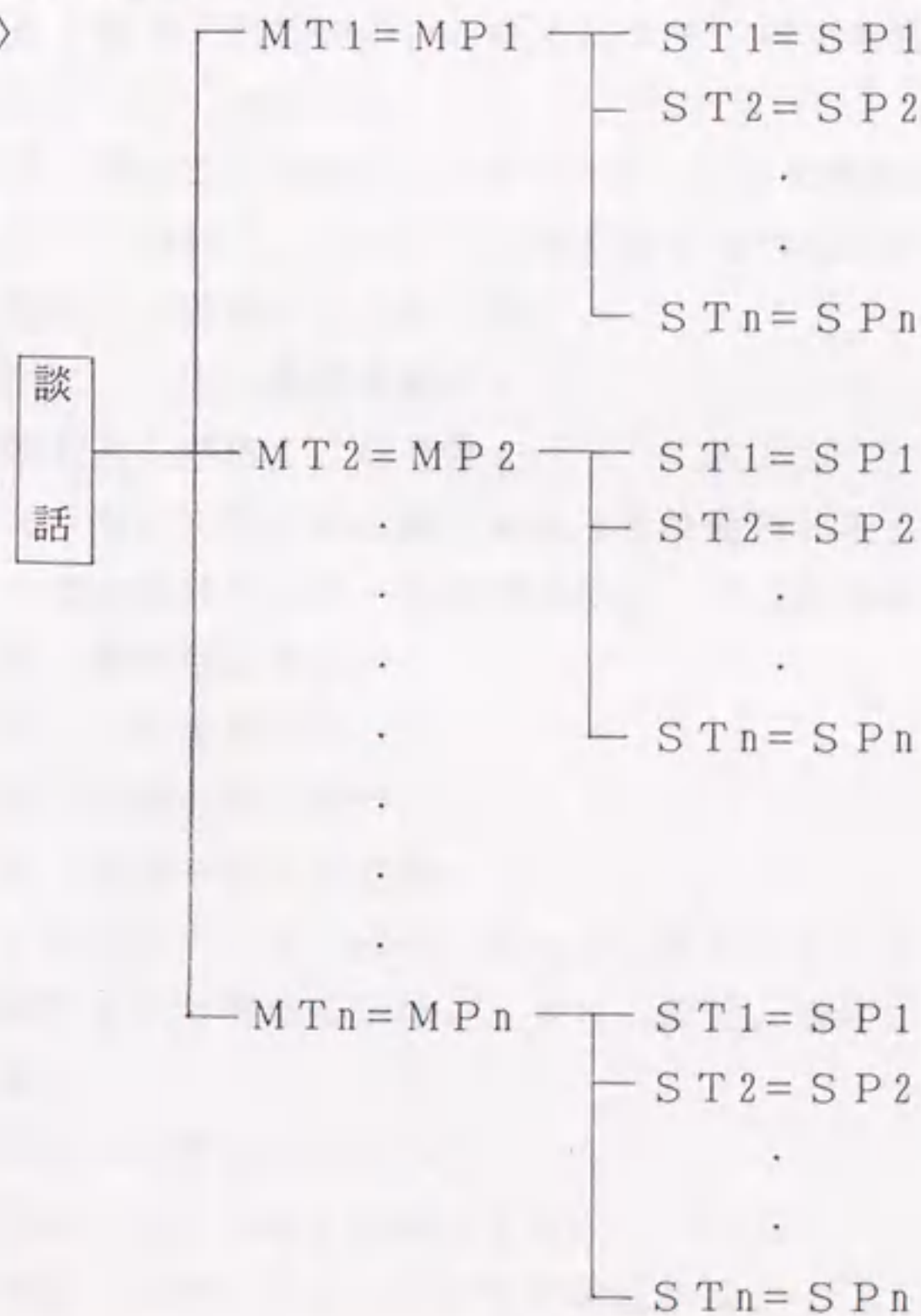
は談話の「トピック」³³⁾と呼ぶこととする。

このトピックは、(I)で挙げた〔1〕から〔5〕の形式面の要素が一定している限り、一貫しており、一つのトピックが終了すると、また次のトピックへと、トピックの転換が行われる。そして、一つのトピックのもとに、話文連続から成る内容的なひとまとまりが形成される。このひとまとまりを本稿では「パラグラフ」⁴²⁾と呼ぶこととする。つまり談話は、トピックごとにまとまったパラグラフの連続体であるといえることができる。

また、一つのトピックでまとまっている一つのパラグラフは、さらに小さなトピックごとのまとまりに分けられることがある。本稿では、この大きなトピックをメイン・トピック (Main-Topic、以下、MTと略記する)、メイン・トピックによるひとまとまりをメイン・パラグラフ (Main-Paragraph、以下、MPと略記する) と呼び、また、メイン・トピックの中の小さなトピックをサブ・トピック (Sub-Topic、以下、STと略記する)、サブ・トピックによるひとまとまりをサブ・パラグラフ (Sub-Paragraph、以下、SPと略記する) と呼ぶこととする。

以上の記述を図式化して示すと、下記の図〈2〉のようになる。

図〈2〉



次に、談話の構成について考察していくが、この談話の構成とは、MP及びSPそれぞれのレベルにおいて一つのトピックでまとまっているパラグラフの構造のことである。そこで以下、パラグラフの構造をみていくことにする。

1.1.2 談話のパラグラフの構造

従来、書記言語については、「文章の構造」、「文章の構成」あるいは「文章の型」として盛んに取り上げられてきたが、音声言語については、このような分析はほとんど行われていない。しかし、その最も基本的な構成は、人間の言語が情報伝達をその目的とする上は、書記言語においても音声言語においても基本的に同じであると考えてよからう。

本稿においては書記言語は考察の対象とはしないが、従来、書記言語について「文章の構造」、「文章の構成」、あるいは「文章の型」として論じられてきた先行研究が、ここで音声言語についてパラグラフと呼んでいるものの内部の構造を考察していく上で非常に有益であり、またその分析は音声言語にも基本的に適用できると考えられるので、ここではまず、書記言語の構造についての先行研究を概観していくことにする。

例えば、樺島忠夫1983 (p.118~) は、文章の構造の一つの捉え方として、「始め、中、終わり」という、文章全体を3つの部分に分ける構成を挙げている。

始め : 発端をまとめて書く。

中 : 主な内容を書く。

終わり : 締めくくりを書く。

そしてこれに文脈の切れ続きのあり方を明確に示すとする要素を加えて、文章全体を4つの部分に分け、その構成法として「起承転結」を挙げている。

起 : 書き起こす。

承 : これを受ける。

転 : 話題を転じる⁵⁹⁾。

結 : 全体をまとめて書く。

さらに、どのような「意図」によって書かれているかの視点から、文章全体を5つの順序をもつ部分に分け、「序言、陳述、論証、反論、結語」の構成法を示している。

序言 : 前置きを述べる。

陳述 : 自分の意見を陳述する。

論証 : 自分の意見の正当性を論証する。

反論：相手の陳述に対して反論を加える。

結語：まとめる。

そしてこの3類の文章構成法から、文章は以下のような構造をもつものであると述べている。

- A. 幾つかの順序を持つ部分から構成される。
- B. その部分には、書き手の意図および意味内容が与えられている。
- C. 各部分の間には、文脈の切れ続きの関係が存在する。

樺島の挙げた、このA、B、Cの3つの要素は、書記言語においてだけでなく、音声言語である談話においても、それが聞き手に何かを伝達しようとするものであるからには、当然、基本的に同様の構造がみられるはずである。

また鈴木英夫1984 (p.88~) は、数量的な分け方と文章の展開の仕方とを結び付けて構成を考えた場合、「〈序論—本論—結論〉という三段構成が、文章構成の基本」であり、「それ以外の文章構成は、この三段構成を簡素化したり、ふくらませたりして出来上がったものということができよう。」と述べている。確かに、上記の樺島の文章を4つに分ける構成法も5つに分ける構成法も大略、〈序論—本論—結論〉の三段構成として捉えることができる。

例えば、四段構成法の「起承転結」は、「起承」と「転」と「結」、あるいは「起」と「承転」と「結」、そして五段構成法の「序言、陳述、論証、反論、結語」は、「序言」と「陳述、論証、反論」と「結語」のように捉えることが可能である。

さらに森岡健二1965 (p.80~) は、アラン・モンロー (Alan H. Monroe) の心理的な効果をねらった動機づけの順序 (motivated sequence) による五段構成法を以下のように紹介し、「確かに人間の心理に立脚した組み立てだと思われる」と述べている。

第一 注意を引く段階

まず、話に興味をもたせ、注意を集める。

第二 必要を示す段階 (問題の提示)

話に興味を持ち始めた人に、何が大切で、何が必要かを告げ、問題を提示する。

第三 必要を満たす段階 (問題の解決法)

大切にして必要な問題の解決法を示し、必要感を満足させる。

第四 具体化の段階 (証明)

問題の解決法の実際を、具体的に目に見えるような形で示し、それがいかに有効な方法であるかを証明する。

第五 行動に導く段階

結論として、相手の決心をうながす。

このモンローの五段構成法も、それが動議づけの順序によるものとはいえ、第一と第二、第三および第四、第五、あるいは、第一、第二と第三、第四および第五、あるいはまた、第一、第二と第三および第四、第五という3つのまとまりをもった構成として捉えることは、さして無理のあることではない。

以上、書記言語におけるまとまりのある文章の構成、構造に関する主な先行研究を概観してきたが、四段構成とするものも、五段構成とするものも、それが書き手の「意図」に依拠したものであれ、動議づけの順序によるものであれ、大略、鈴木の〈序論—本論—結論〉の三段構成として捉えることのできるものであった。

さらにここで重要なことは、文章が何段構成であるかということよりも、樺島の指摘しているA、B、Cの3つの要素が必要不可欠なことである。

以上の考察をもとに、この3つの要素を、音声言語による自然発話の談話に適合した表現にいい換えると、以下ようになる。

(A) 大略、3つの順序を持つ部分から構成されている。

(B) それぞれの部分には、話し手の意図や目的がある。

(C) 各部分の間には、切れ続きの関係が存在する。

以下、(A)、(B)、(C)の3つの要素についてみていく。

談話のパラグラフを構成する3つの順序を持つ部分とは、次の通りである。あるトピックについて談話を展開させていこうとするとき、談話の流れをスムーズにするため、話し手はまず、これから話そうとしているトピックを方向づける内容の発話をし、それによって、聞き手を談話の中に誘導する。これがまず第一の部分である。そのあと話し手は、そのトピックに沿って談話を展開していく。これが第二の部分である。そして最後に、談話の終結を示す発話をおこなって、一つのトピックを終了する。これが第三の部分である。このように、一つのパラグラフは通常、この3つの部分から構成されている。本稿では、パラグラフの第一の部分、つまりトピックを方向づける内容の部分を「提示部」と呼び、第二の部分、つまりトピックに沿って展開していく部分を「展開部」、そして第三の部分、つまり談話の終結を示す部分を「終結部」と呼ぶこととする。つまり一つのパラグラフは、「提示部」、「展開部」、「終結部」の3つの順序をもつ部分から構成されている。そして(B)の、それぞれの部分の話し手の意図や目的とは、第一の部分においては、話し手がこれから話そうとしているトピックを方向づけようとすることであり、第二の部分においては、トピックに沿って談話を展開していこうとすることであり、第三の部分においては、談話を終結させようとする

ことである。またそれぞれの各部分の間には、提示部でまとまりの区切りをつけて展開部へとつながり、展開部でもやはりまとまりの区切りをつけて終結部へとつながっていくという切れ続きの関係が存在している。

談話のパラグラフは、このような構造をもつものであるが、MPの展開部は、さらに話文連続の内容的なまとまりによって下位区分することが可能であり、それをSPとすることはすでに述べた。さらにこのSPの展開部は内容的にいくつかのまとまりをもつ場合があるが、本稿ではこれをセグメント (Segment、以下、Seg.と略記する) と呼ぶこととする。パラグラフとセグメントの相違は、各セグメントの初めの部分には、提示部がないことである。

さらにまた、音声言語による自然発話の談話では、一つのトピックが終結し、次のトピックへ転換する場合に、次のパラグラフの冒頭で、聞き手にトピックの転換を知らせるための発話がなされる場合がある。このような、トピックの転換を知らせるための、パラグラフの冒頭でなされる発話の部分を、本稿では「転換部」と呼ぶこととする。転換部は提示部を包含する場合もあるが、トピックの転換を明確にするため、意図的に転換部を設ける場合もある。その場合には、パラグラフは4つの部分から構成されることになる。また、セグメントには提示部がなく、必ず転換部が提示部を包含している。このように、パラグラフとセグメントは構造の上で大きな相違がみられる。なお、セグメントで話されている内容の柱をセグメント・トピック (Segment-Topic、以下、Seg.Tと略記する) と呼ぶこととする。

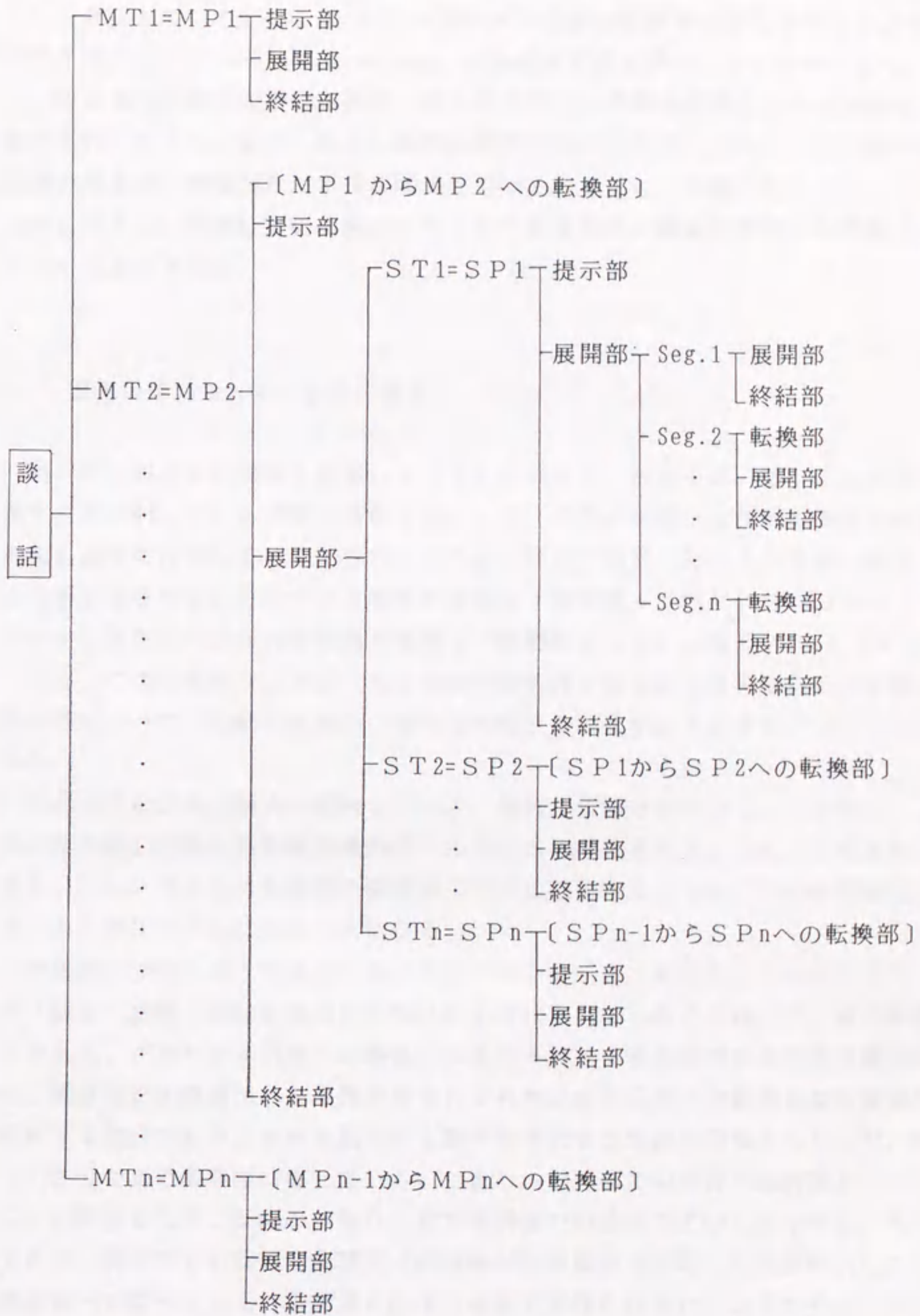
以上の考察から、談話の一つのパラグラフは、大略「提示－展開－終結」の3つの部分から成り、パラグラフの連続体である談話の構成は、「提示－展開－終結－〔転換－〕提示－展開－終結－〔転換－〕提示・・・」を大枠のモデルとして提示することができる。

1.1.3 談話の構造のモデル

以上、談話のトピックと、パラグラフの構造について考察してきたが、いうまでもなく、このトピックとパラグラフの両者は、一つの談話において密接不可分の関係にあり、全体として一つの談話を構成している。以上の考察から談話の構造をモデルとして示すと、次頁の図〈3〉のようになる。

図〈3〉

〈談話の構造のモデル〉



談話は基本的にこのような構造をもっており、MP、SP、Seg.のそれぞれのレベルにおいて、情報伝達の最も基本的な単位である話文が minimal component として存在している。そして 1.1 で述べた形式面の要素が一定しているという条件の下で、この minimal component の集積が談話を構成しているのである。

一方、情報伝達の面では、通常、話し手が新しい情報を提供し、それが両者で共有され、その上にまた、新しい情報が累加されていくといわれている。従って、談話の構造は、情報伝達と密接な関係をもっていることが予測される。

そこで次に、情報伝達の仕組みについて考察を進め、談話の構造との関係をみていくことにする。

1.2 情報伝達のルールと談話の構造

話し手が聞き手に情報を伝達しようとする場合は、話し手は、話し手と聞き手がすでに共有している知識や情報を基にして、その上に新たな知識や情報を付け加えるように伝達していくとされていることはすでに述べた。その場合、通常、話し手と聞き手が共有している知識や情報を「旧情報」(old information)、その上に新たに付け加わる知識や情報を「新情報」(new information)といっている。ここで重要なことは、ある情報が新情報であるか旧情報であるかは通常聞き手にとっての区別であるが、それを判断するのは話し手であるということである。

このような方式で話文が連続していき、情報が伝達されていくのであるが、これは各言語に共通した情報伝達のルールであると考えられる。このようにみても、1.1.3 でまとめた談話の構造は、以下に記述するように、この情報伝達のルールと密接な関係にあることになる。

談話の一つのトピックは一つのパラグラフを形成し、そして一つのパラグラフが「提示-展開-終結」の3つの部分から構成されていることは、先に述べた通りである。パラグラフの第一の部分、つまりトピックを方向づける内容の提示部は、談話を次の展開部へと展開させていくために必要不可欠な前提となる情報を伝達する部分であり、それを話し手と聞き手が共有の知識や情報とした上で、第二の部分である展開部に移っていく。つまり、提示部での情報が旧情報となったことを前提として、展開部へ移り、新たな情報が伝達されていくのである。そしてまた、提示部での情報と展開部での情報が旧情報となったことを前提として、終結部へと移っていく。談話はこのような形で展開されていくのである。

このように、話し手と聞き手が共有している知識や情報を基にして、その上に

新たな知識をつけ加えるように情報を伝達していくという情報伝達のルールは、談話の展開にもそのまま反映されており、談話の構造と密接不可分の関係にある。

なお、新情報、旧情報という概念は、第2章以下の分析と直接関わるので、ここではさらに厳密に、その概念を規定しておくことにする。

まず、旧情報についてであるが、先行研究においては、一定の文脈や場面を設定し、先行する文脈で述べられている情報を旧情報として、ある文を新情報の部分と旧情報の部分とに区別するという分析がさかんに行われてきた。例えば柴谷他1982 (p.100~) は、「今年はどのチームが優勝するだろう？」という問いに対する返答として、{a. タイガースが優勝する。/ b. 優勝するのはタイガースだ。} を挙げ、問いの中に「優勝する」という情報があることから、a、bのどちらの返答においても「優勝する」の部分が旧情報となり、「タイガース」の部分が新情報となるとしている。しかし、Halliday 1970 (p.163) は、旧情報は必ずしも先行の文脈で述べられた情報であるとは限らないとの見解を示し、次のように述べている。

「The function 'given' means 'treated by the speaker as non-recoverable information': information that the listener is not being expected to derive for himself from the text or the situation.」

つまり旧情報とは、話し手がわざわざ取り上げることをしていない情報であり、聞き手が文脈や場面からあらためて類推する必要はないと話し手が判断している情報だということである。換言すれば、先行の発話で述べられた内容だけでなく、聞き手自身のもっている知識やすでに得ている情報によって類推できると話し手が判断した知識や情報をも、旧情報に含むとするのである。このような旧情報の捉えかたは、福地肇1985 (p.16) の、「いわばある種の連想に基づく情報」と相通じるものである。福地はこの点について以下のように記述している。

「この連想関係は必ずしも言語上の意味に関するものに限らない。話者・聴者が共にもっている言語外の知識・経験に基づく連想であってもよい。言い換えれば、話者と聴者の間には暗黙の理解、言語あるいは現実の世界についての共通の認識があるということであり、実際に私たちは、そのような基盤に立って言語活動をしているのである。」

確かにわれわれは、暗黙の理解や現実の世界についての共通の認識に基づいて言語活動を行っている。そしてその暗黙の理解や共通の認識は、話し手と聞き手によって実際に発話された言語上の情報だけではなく、言語外の知識や経験などによってももたらされる。とすれば、話し手と聞き手とが共有している知識である旧情報には、先行発話で述べられた情報だけでなく、聞き手自身のもっている

知識や経験などによって類推できると話し手が判断した知識も含まれるとするのが、より現実の言語生活の実態に即し、より妥当であることになる。従って、本稿においても、旧情報を、先行発話で述べられた情報だけでなく、聞き手自身のもっている知識や経験などによって類推できると話し手が判断した情報をも包含したものと規定することにする。

次に新情報についてであるが、それは、話し手が聞き手に初めて伝達する情報であるという捉え方で見解の相違は見られず、本稿もその規定に準ずることとする。そして、先に挙げた柴谷他の例のように、話文の一部が新情報となる場合もあれば、話文全体が新情報という場合もあるという捉え方が、より言語事実に即した見解であると判断する。

以上、談話の構造と情報伝達のルールとのかかわりについて考察してきたが、このような、情報伝達のルールと密接不可分の関係にある談話の遂行には、その提示部、展開部、終結部および転換部それぞれにおいて、個別の言語表現が過不足のない情報をスムーズに伝達するように表現の上でいろいろな工夫がなされている。前述のように、この表現上の工夫と密接な関係をもっているのが、現代中国語における {1} から {9} の名詞(句)の位置である。従って、{1} から {9} の表現形式は、談話の構造や情報伝達のルールと密接不可分の関係にあり、談話レベルでの分析が求められる所以はまさにここにある。

1.3 本稿における談話の言語資料

本稿では、談話レベルで現代中国語の表現形式を分析するにあたり、談話の構造の特徴が最も自然な形で顕現すると思われる自然発話 (naturally occurring language) を録音し、文字転写したものを言語資料とした。

1.3.1 言語資料のインフォーマント

本稿で分析の資料とした中国語話者による自然発話は、インタビュー形式のもの=約 2 時間半分と、中国人二人による自由対話=約 8 時間分の、合計 10 時間半分の自然発話である。

言語資料のインフォーマント及びその収録については、下記の通りである。

また、インフォーマント(A)から(N)の中国における職業は、全員、大学の教員であり、その発話された言語は、すべて民族共通語 (= '普通话') と認定で

きるものである。

なお、各インフォーマントの年齢は、収録当時のものである。

〈インフォーマント〉

- (A)：男性、33 歳、北京生まれ、北京育ち。
- (B)：女性、28 歳、北京生まれ、北京育ち。
- (C)：女性、23 歳、北京生まれ、北京育ち。
- (D)：女性、35 歳、上海生まれ、上海育ち。
- (E)：男性、33 歳、瀋陽生まれ、北京育ち。
- (F)：男性、24 歳、太原生まれ、長春育ち。
- (G)：男性、53 歳、大連生まれ、大連育ち。
- (H)：男性、41 歳、大連生まれ、大連育ち。
- (I)：男性、32 歳、天津生まれ、天津育ち。
- (J)：男性、32 歳、北京生まれ、北京育ち。
- (K)：女性、27 歳、北京生まれ、北京育ち。
- (L)：女性、24 歳、安徽省生まれ、黒龍江省育ち。
- (M)：女性、34 歳、天津生まれ、天津育ち。
- (N)：女性、25 歳、長春生まれ、長春育ち。

〈言語資料の収録〉

インタビュー

- 資料(あ)：インフォーマント(A)、1985 年録音、約 30 分。
- 資料(い)：インフォーマント(B)、1985 年録音、約 30 分。
- 資料(う)：インフォーマント(C)、1987 年録音、約 30 分。
- 資料(え)：インフォーマント(D)、1988 年録音、約 60 分。

自由対話

- 資料(お)：インフォーマント(E)と(F)、1987 年録音、約 90 分。
- 資料(か)：インフォーマント(E)と(G)、1987 年録音、約 60 分。
- 資料(き)：インフォーマント(E)と(H)、1987 年録音、約 60 分。
- 資料(く)：インフォーマント(I)と(J)、1988 年録音、約 90 分。
- 資料(け)：インフォーマント(K)と(L)、1990 年録音、約 90 分。
- 資料(こ)：インフォーマント(M)と(N)、1990 年録音、約 90 分。

1.3.2 言語資料の形式

ここでは、本稿の言語資料の形式面について、先の 1.1 で挙げた〔1〕から〔5〕の項目の順に示しておく。

〔1〕 談話に参加する人と参加の仕方：

それぞれ参加者が二人で、一対一である。

〔2〕 談話で使用される言語：

すべて現代中国語の‘普通話’である。

インタビュー形式のものについては、インタビュアーは筆者であるので、その発話部分については、分析の対象外とした。

〔3〕 談話が遂行される媒体：

すべて、面と向かい合った一対一の直接の対話である。

〔4〕 談話が遂行される場面：

それぞれ親しい関係にあるインフォーマントによる、くつろいだ雰囲気の中での自由な対話であり、すべて私的なものである。

〔5〕 談話が遂行される手段：

話し手の個人的な見解である。

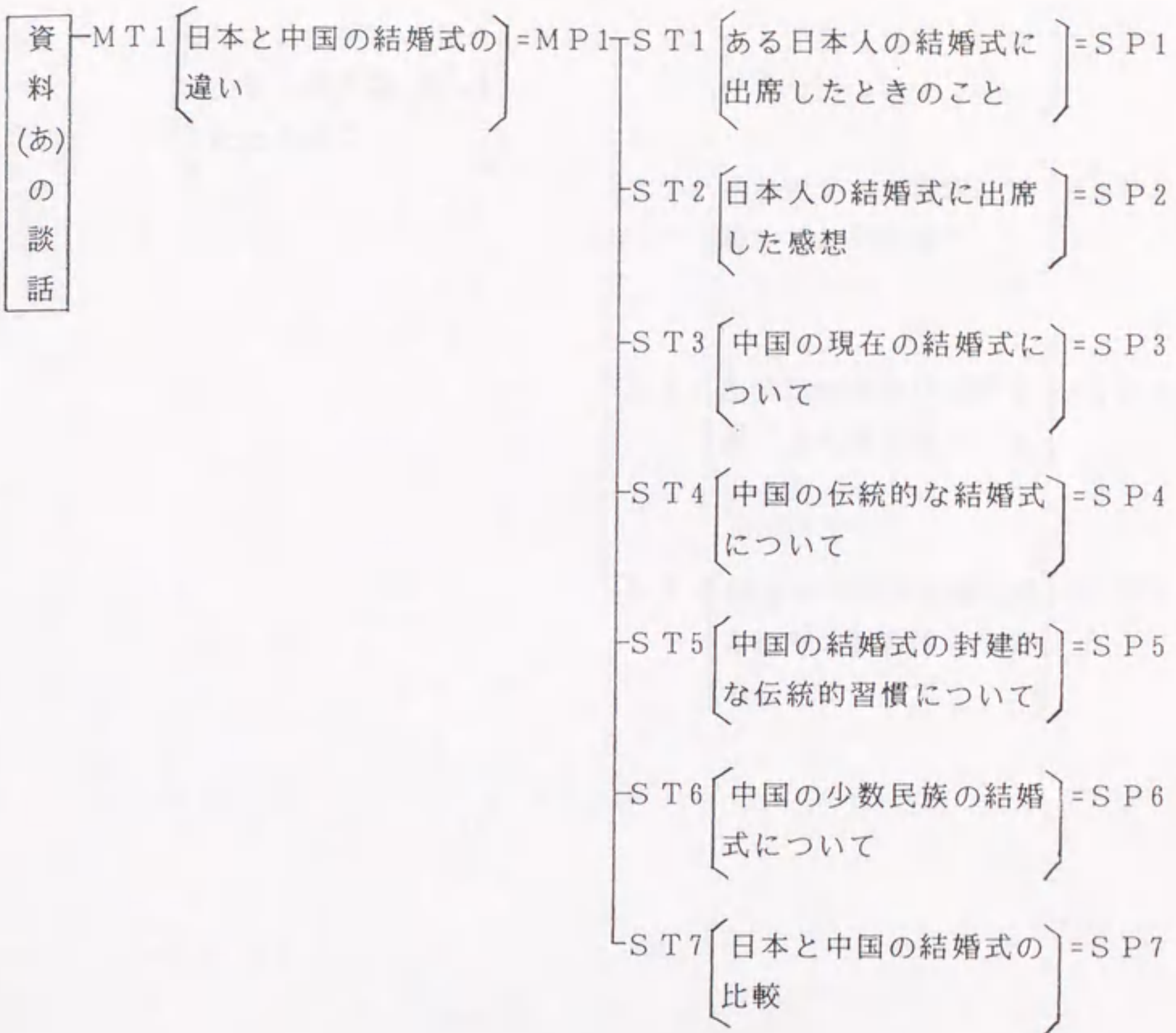
参加者が二人である一対一の面と向かい合った対話を資料として選んだ理由は、参加者が三人以上に増えれば増えるほど、トピックとして選択される要素が多くなり、トピックが一貫しにくくなるのに対して、二人の対話は、話し手の関心や注意、あるいは聞き手の関心や注意が、相手に集中しやすいため、話し手の発話をさえぎること（interruption）が少なく⁶²、トピックの一貫するケースが多い。その結果、談話の流れがスムーズになり、本稿における分析資料として適当であると判断されるからである。

また、くつろいだ雰囲気の中での自由で私的な対話を資料として選んだのは、1.1.3 で述べた談話の構造の特徴が、最も自然な形で顕現すると判断されるからである。

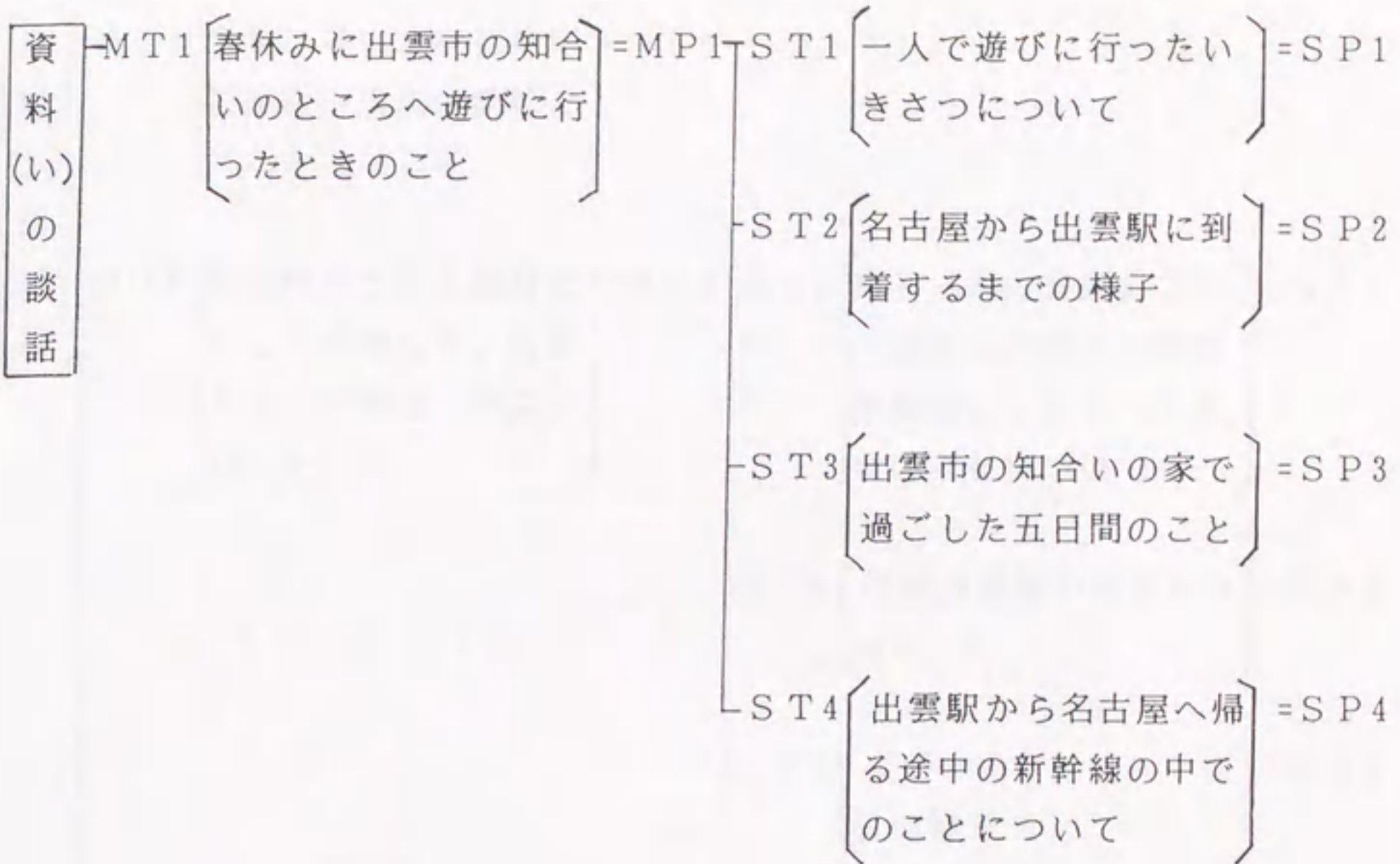
1.3.3 言語資料の談話の構造

本稿の言語資料の談話の構造については、1.3.1 に示した資料(あ)から(こ)の各パラグラフのトピックの内容を、図〈2〉にあてはめたものを、以下に列挙する。

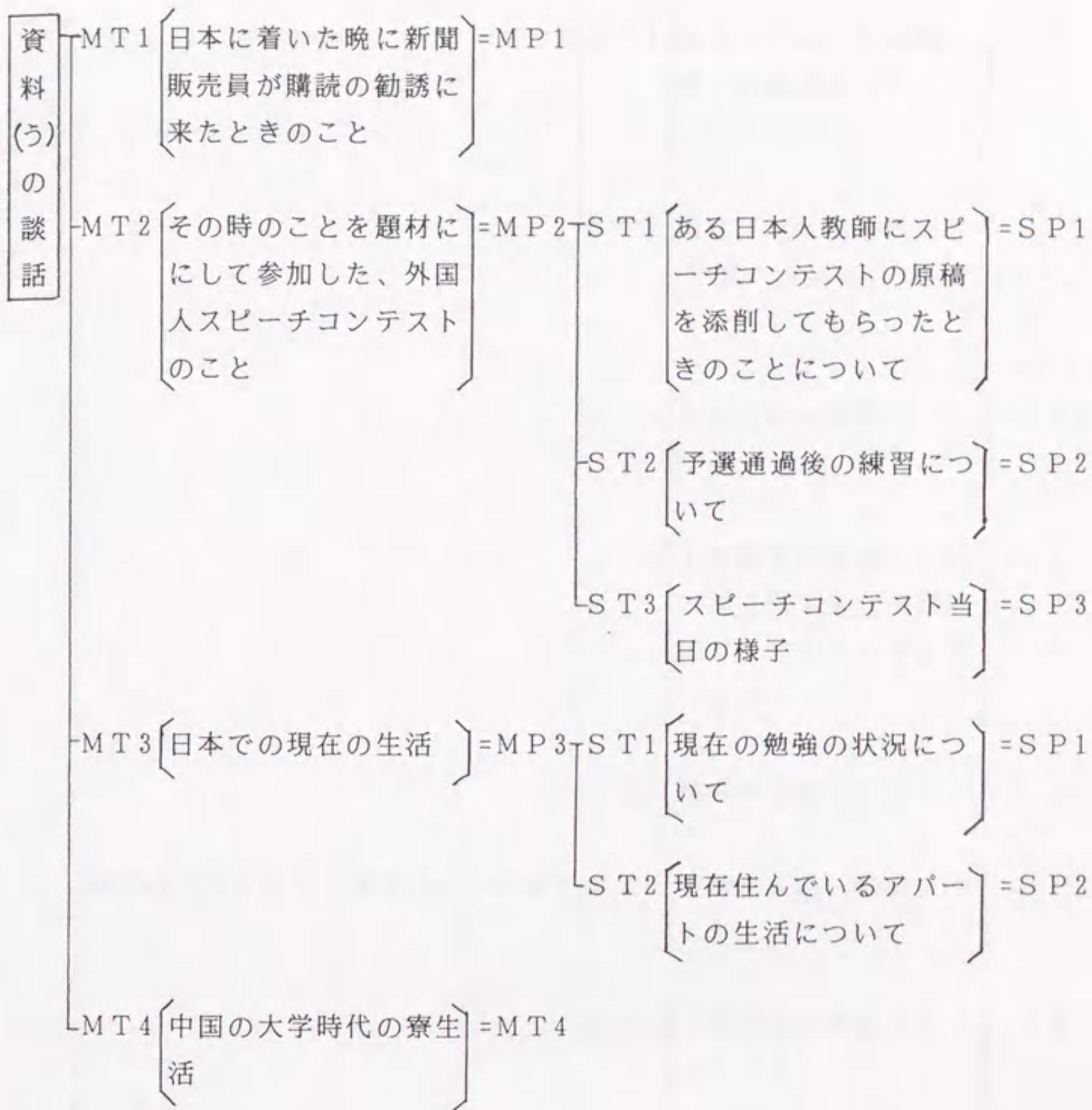
資料(あ)のトピック：インフォーマント(A)



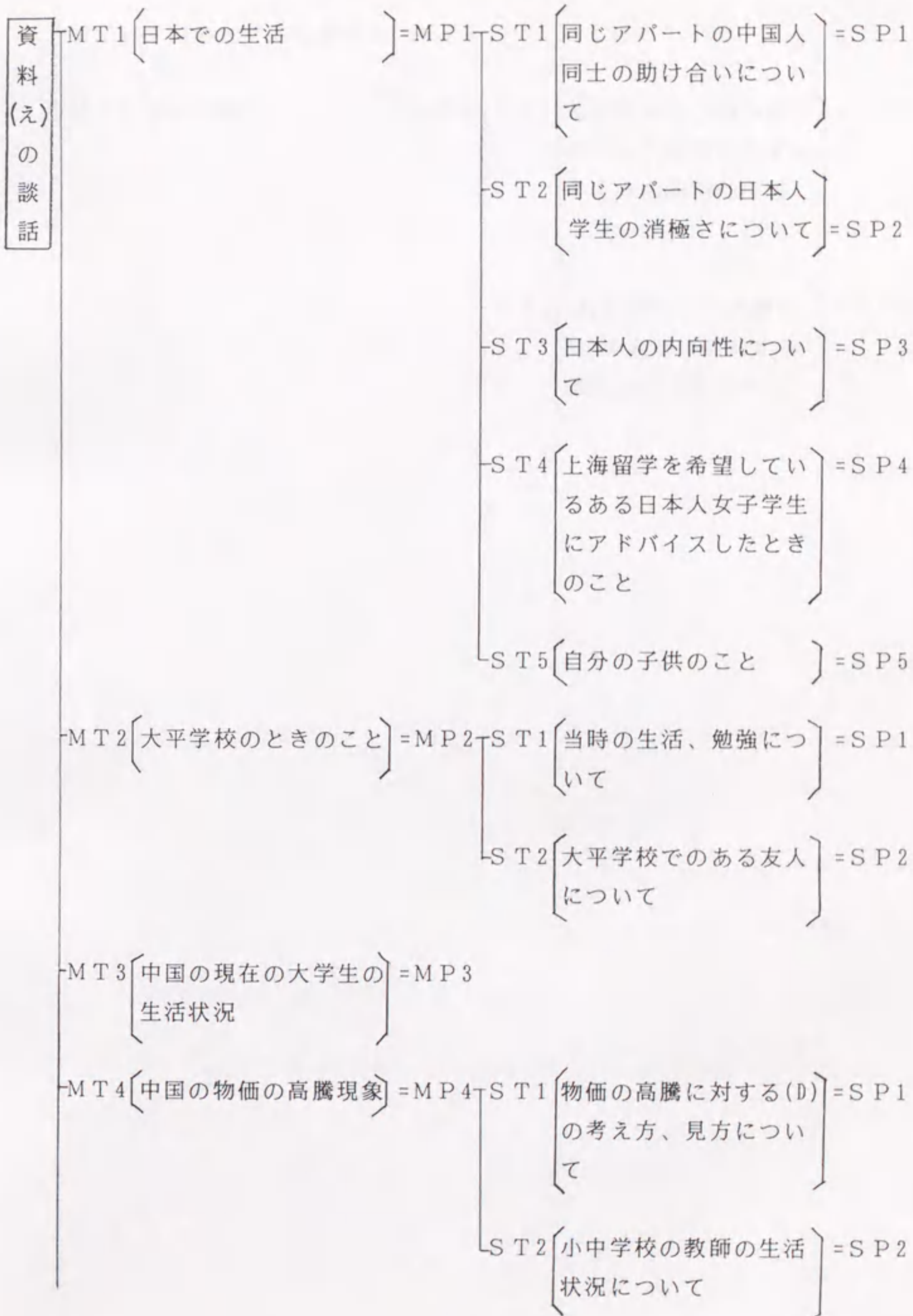
資料(い)のトピック：インフォーマント(B)

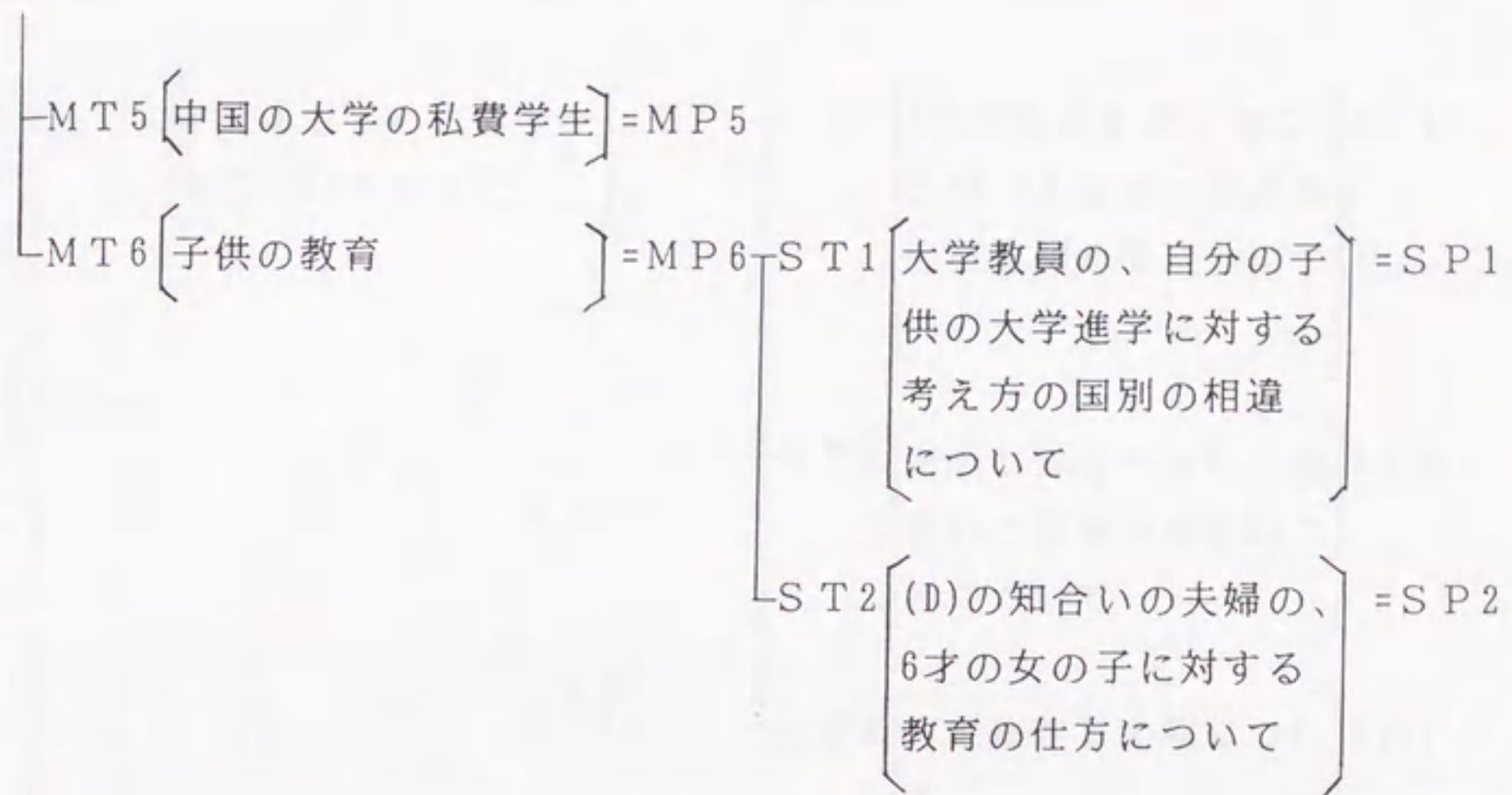


資料(う)のトピック：インフォーマント(C)

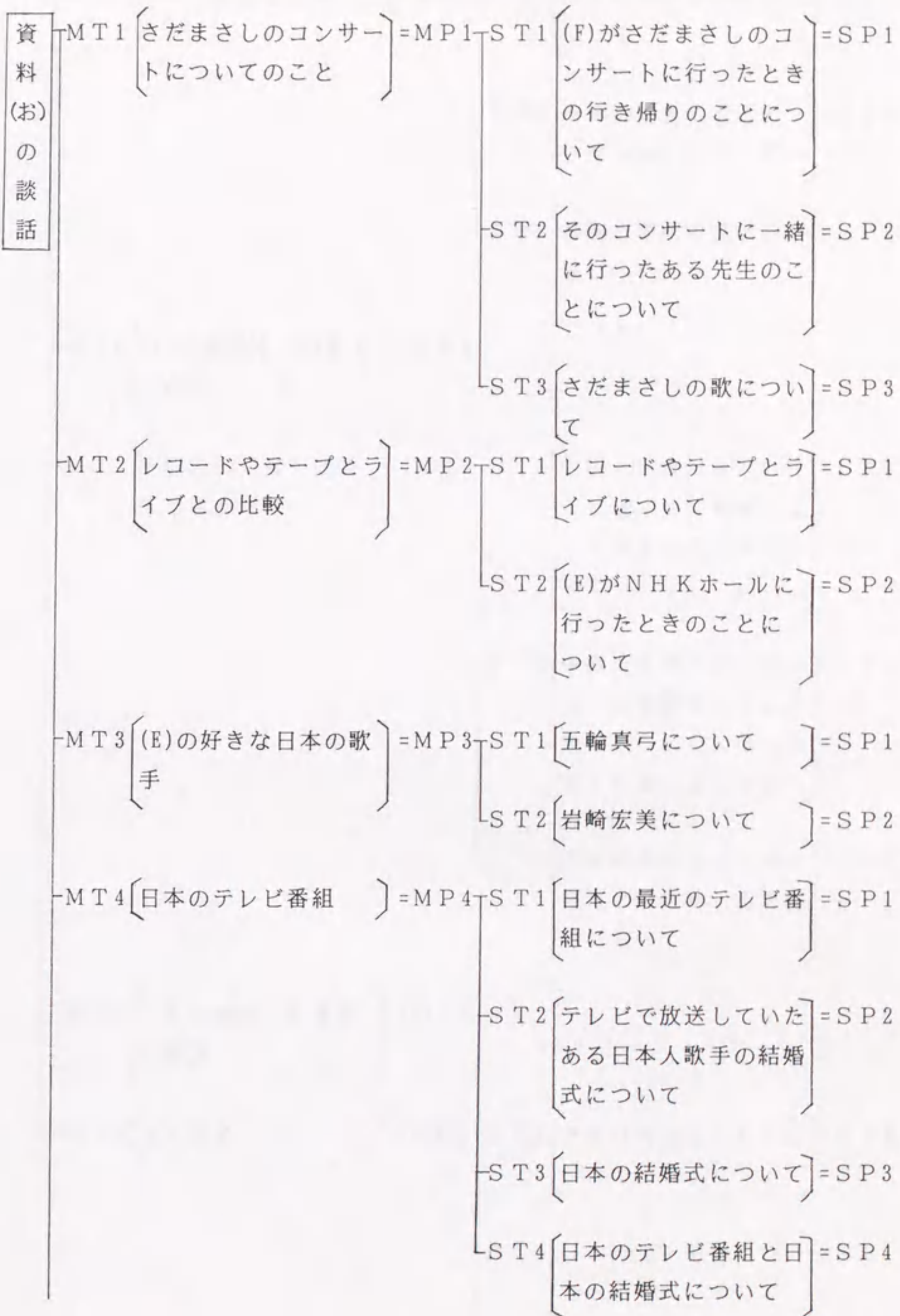


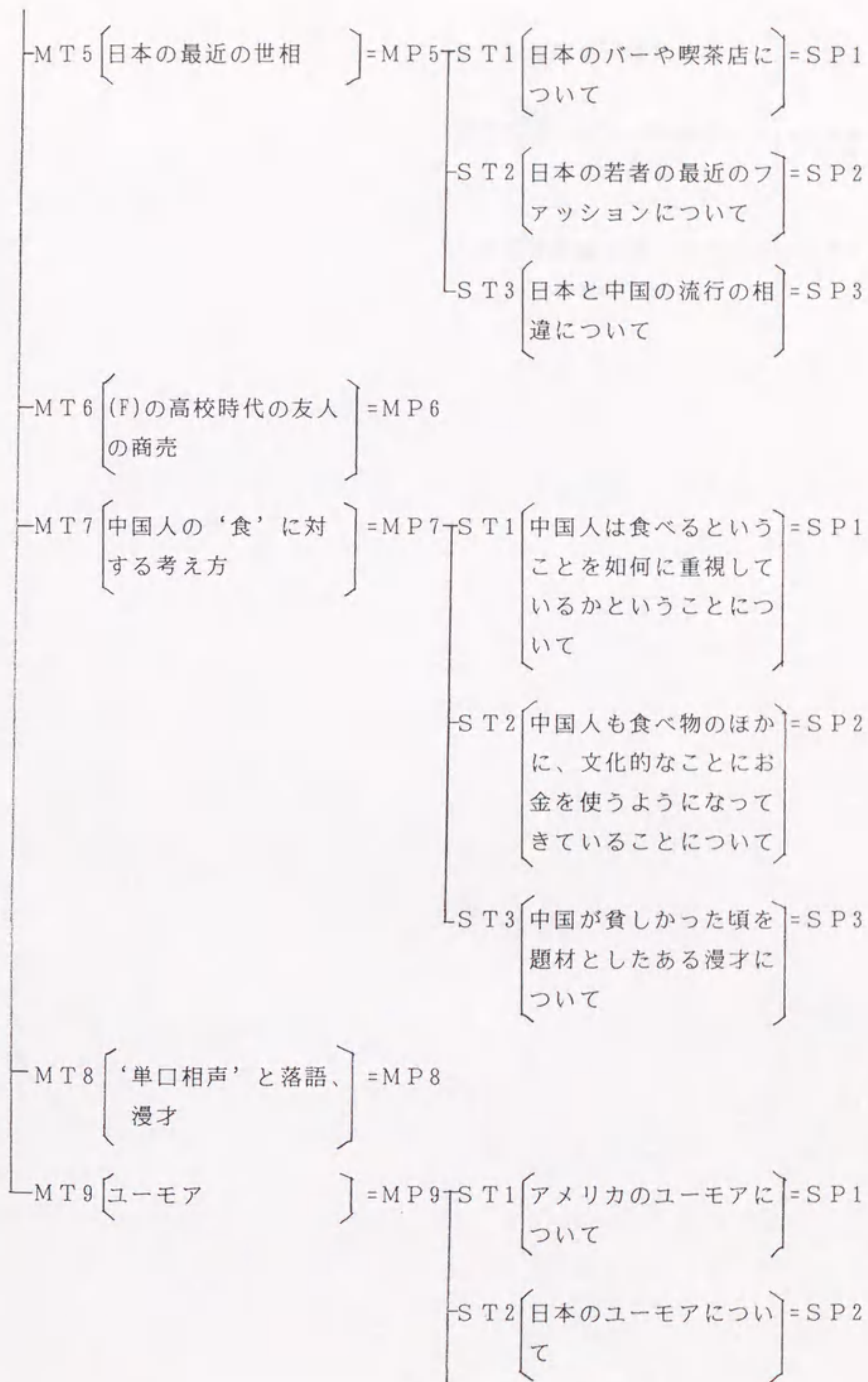
資料(え)のトピック：インフォーマント(D)





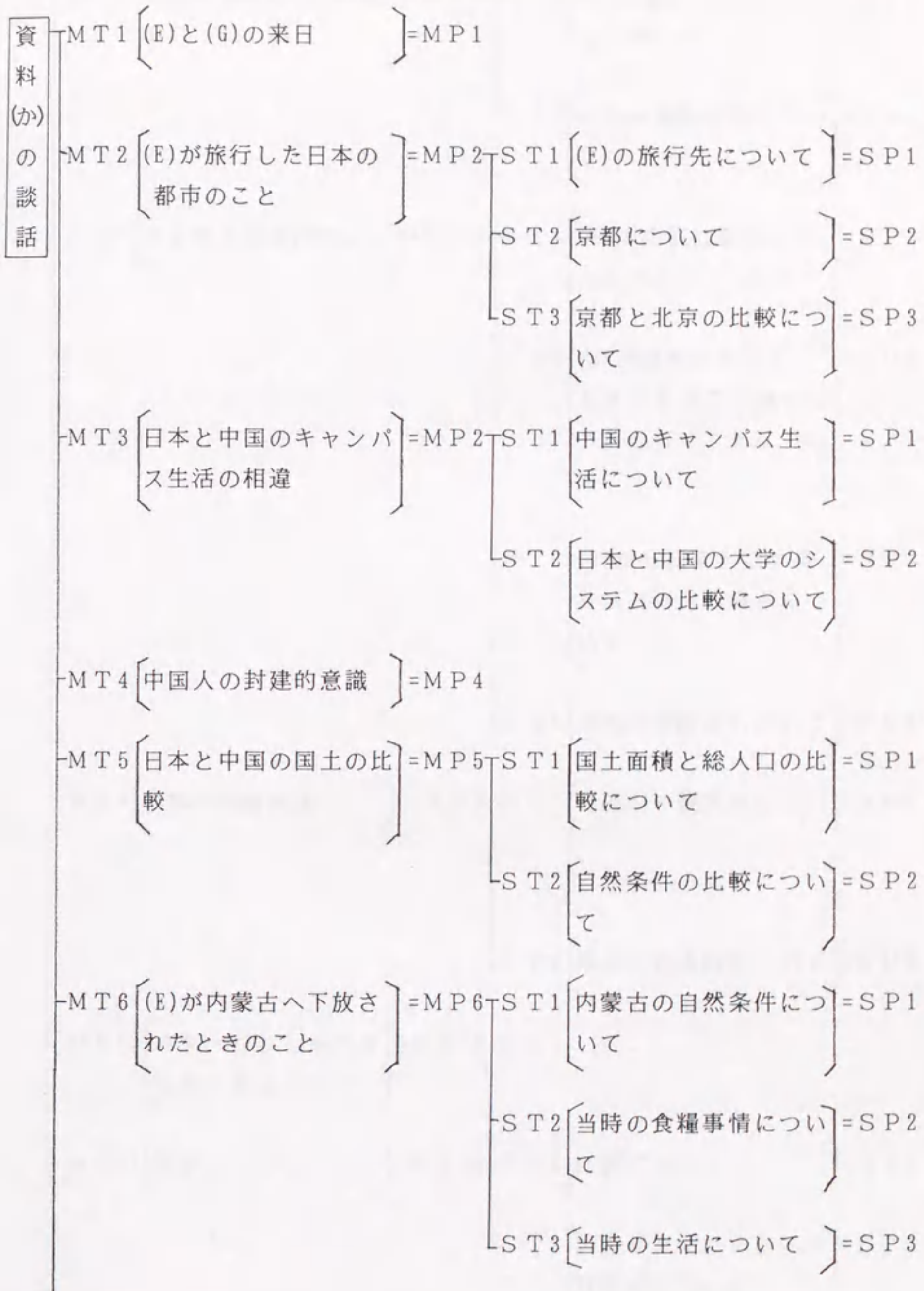
資料(お)のトピック：インフォーマント(E)と(F)





- S T 3 [新聞の漫画について] = S P 3
- S T 4 [ヨーロッパのあるユーモラスな話について] = S P 4
- S T 5 [手術後お腹にハサミを忘れた話について] = S P 5

資料(か)のトピック：インフォーマント(E)と(G)



-MT 7 [1965年当時の(G)の生活] =MP 7-S T 1 [8ヶ月過ごした山西での生活について] =S P 1

S T 2 [山西の風俗習慣について]

-MT 8 [文化大革命当時のこと] =MP 8-S T 1 [(G)が文革に参加した当時のことについて] =S P 1

S T 2 [(E)が文革に参加し、毛沢東を見に北京へ行ったときのことについて]

S T 3 [(G)が毛沢東と劉少奇を見たときの様子について]

S T 4 [当時の老幹部について] =S P 4

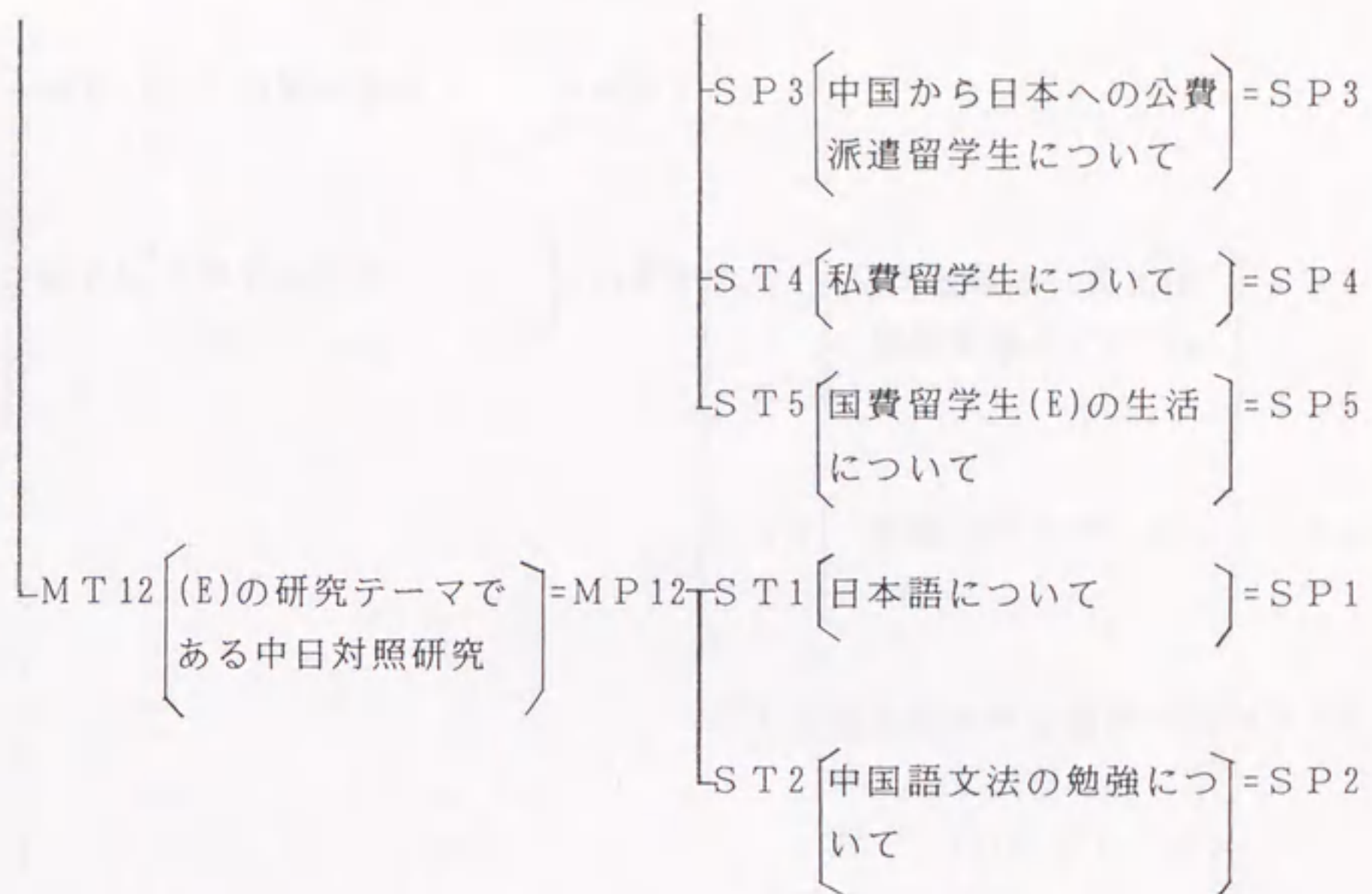
-MT 9 [中国の封建主義] =MP 9-S T 1 [中国の一般大衆について] =S P 1

S T 2 [中国の現体制について] =S P 2

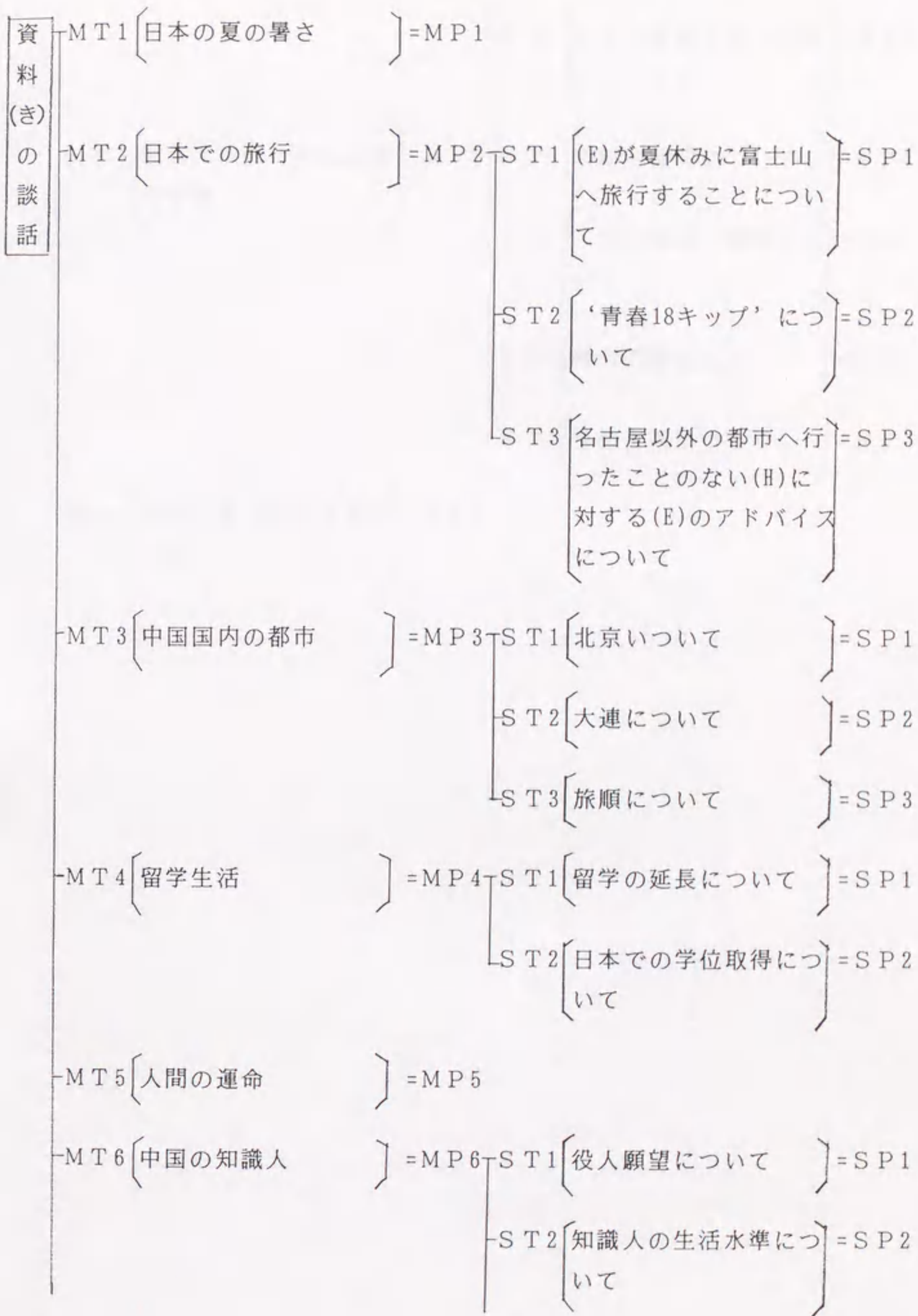
-MT 10 [北京人がおしゃべり好きであること] =MT 10

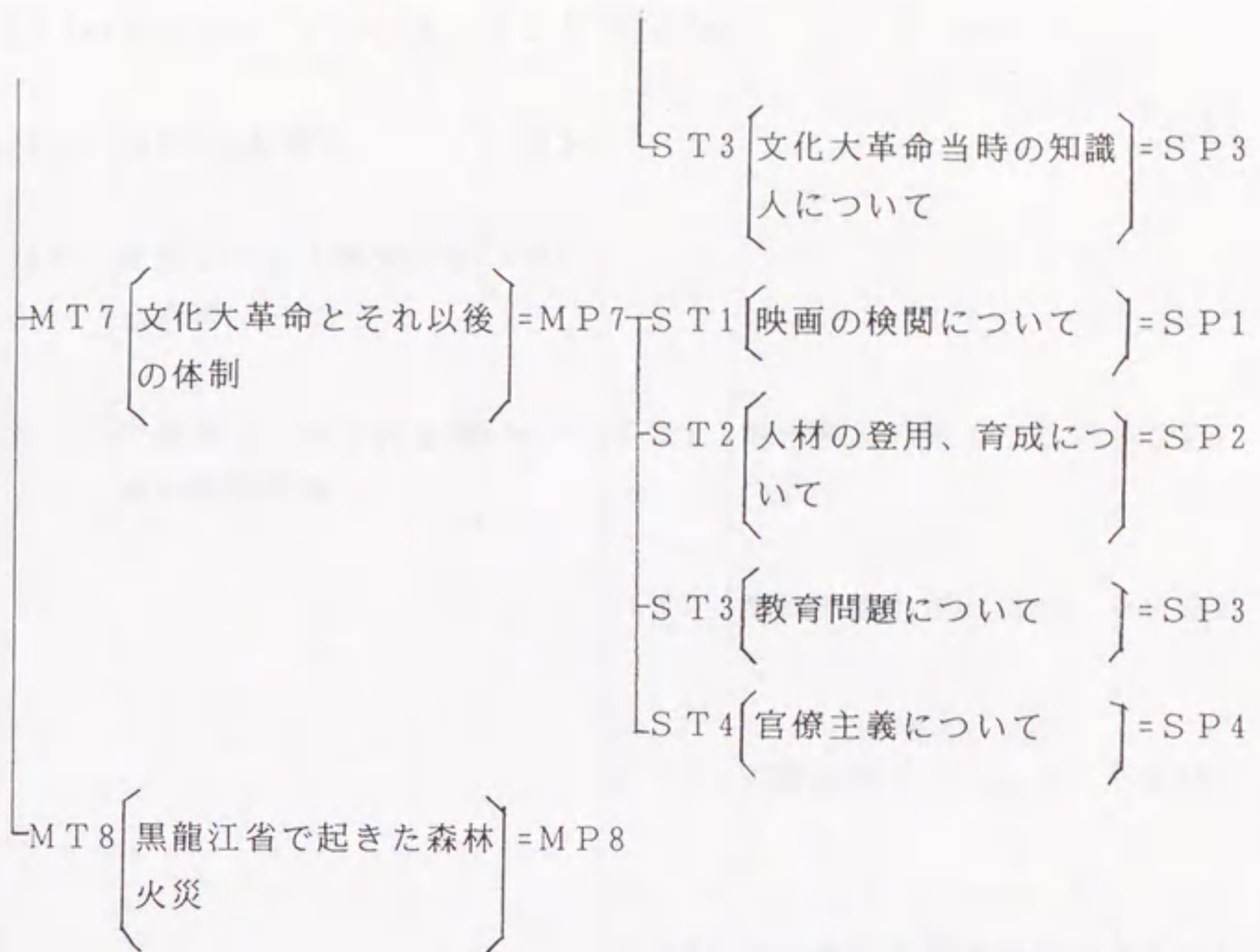
-MT 11 [留学] =MT 11-S T 1 [出国について] =S P 1

S T 2 [アメリカやカナダへの留学生について]

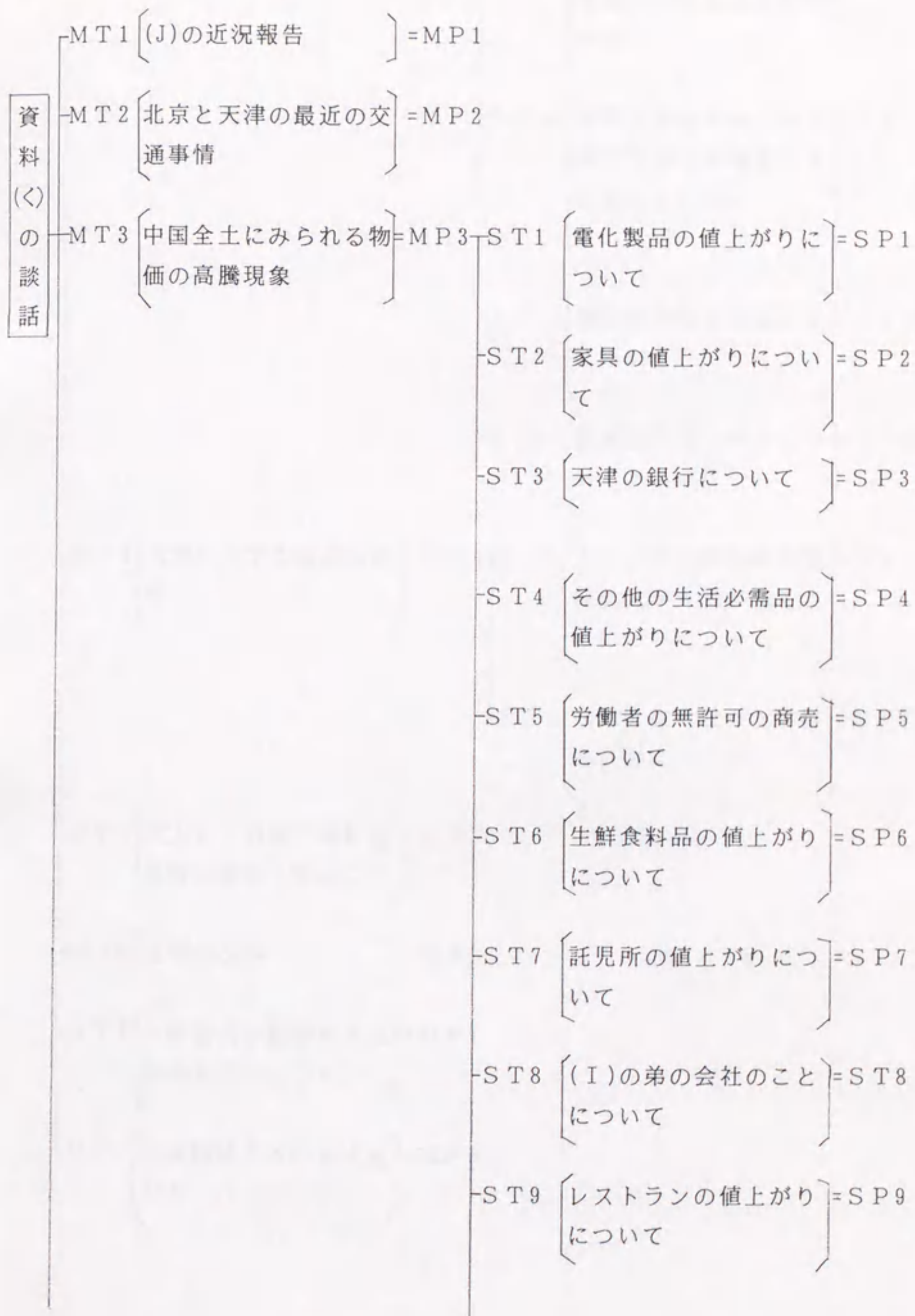


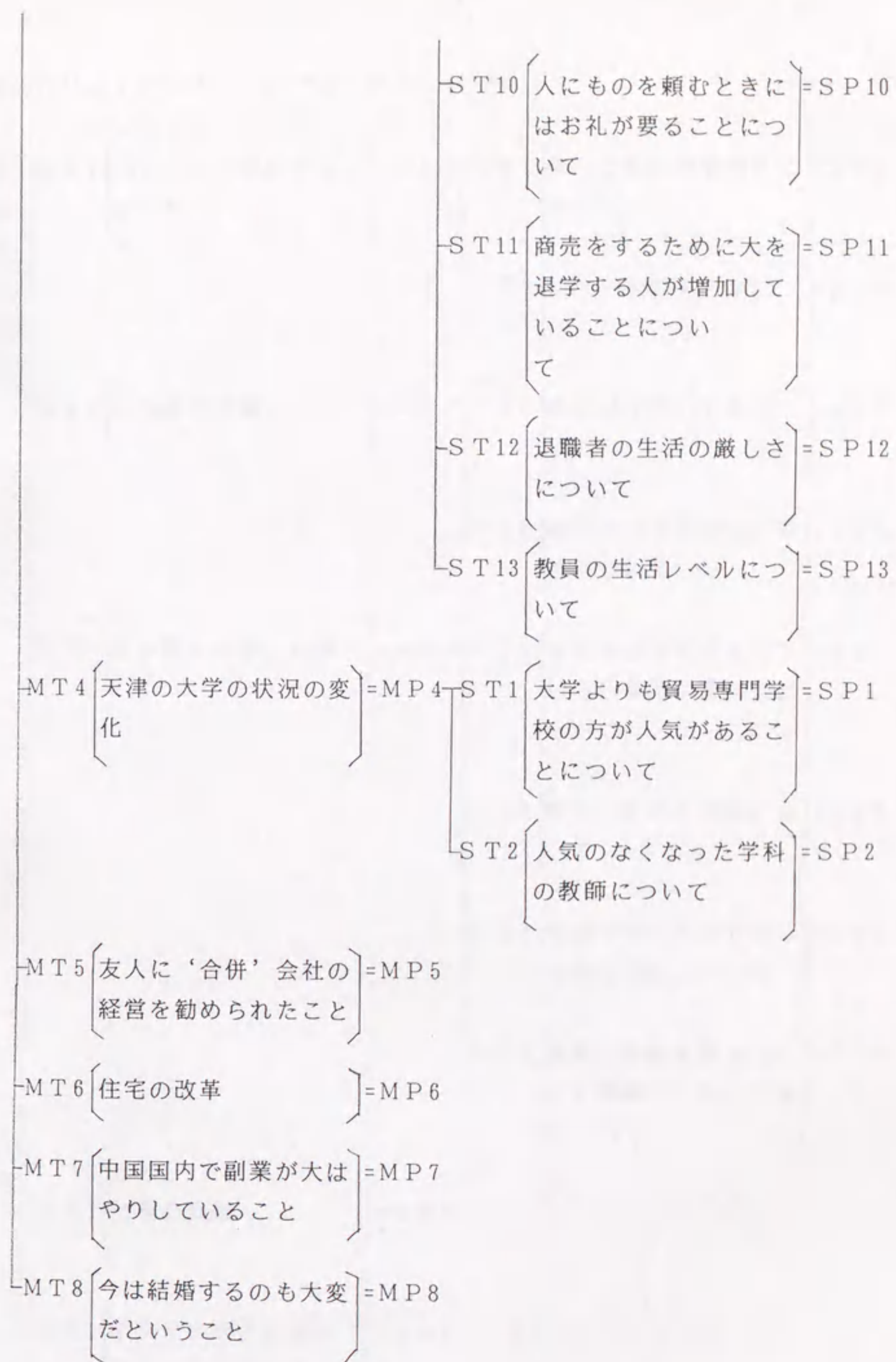
資料(き)のトピック：インフォーマント(E)と(H)



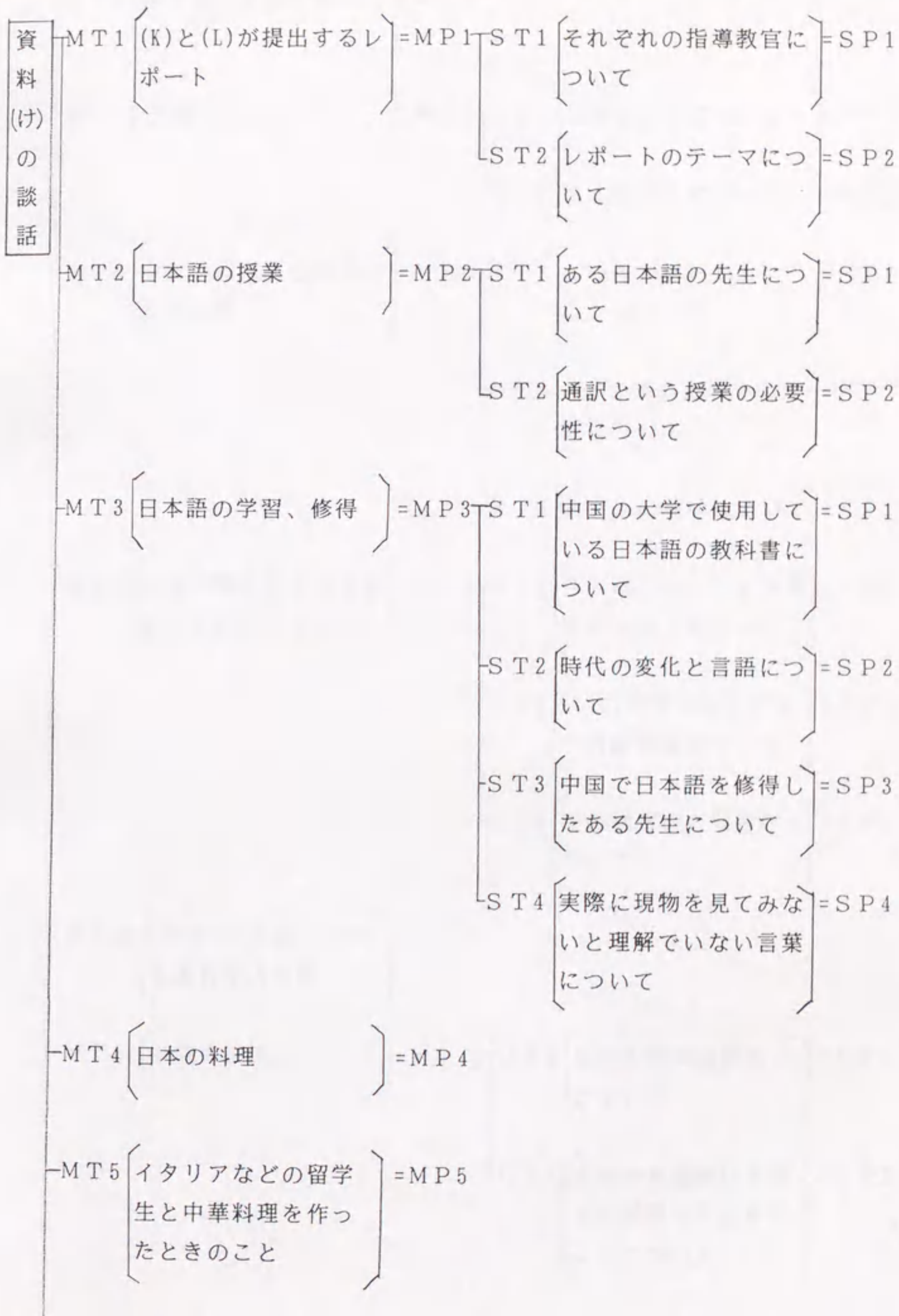


資料(く)のトピック：インフォーマント(I)と(J)





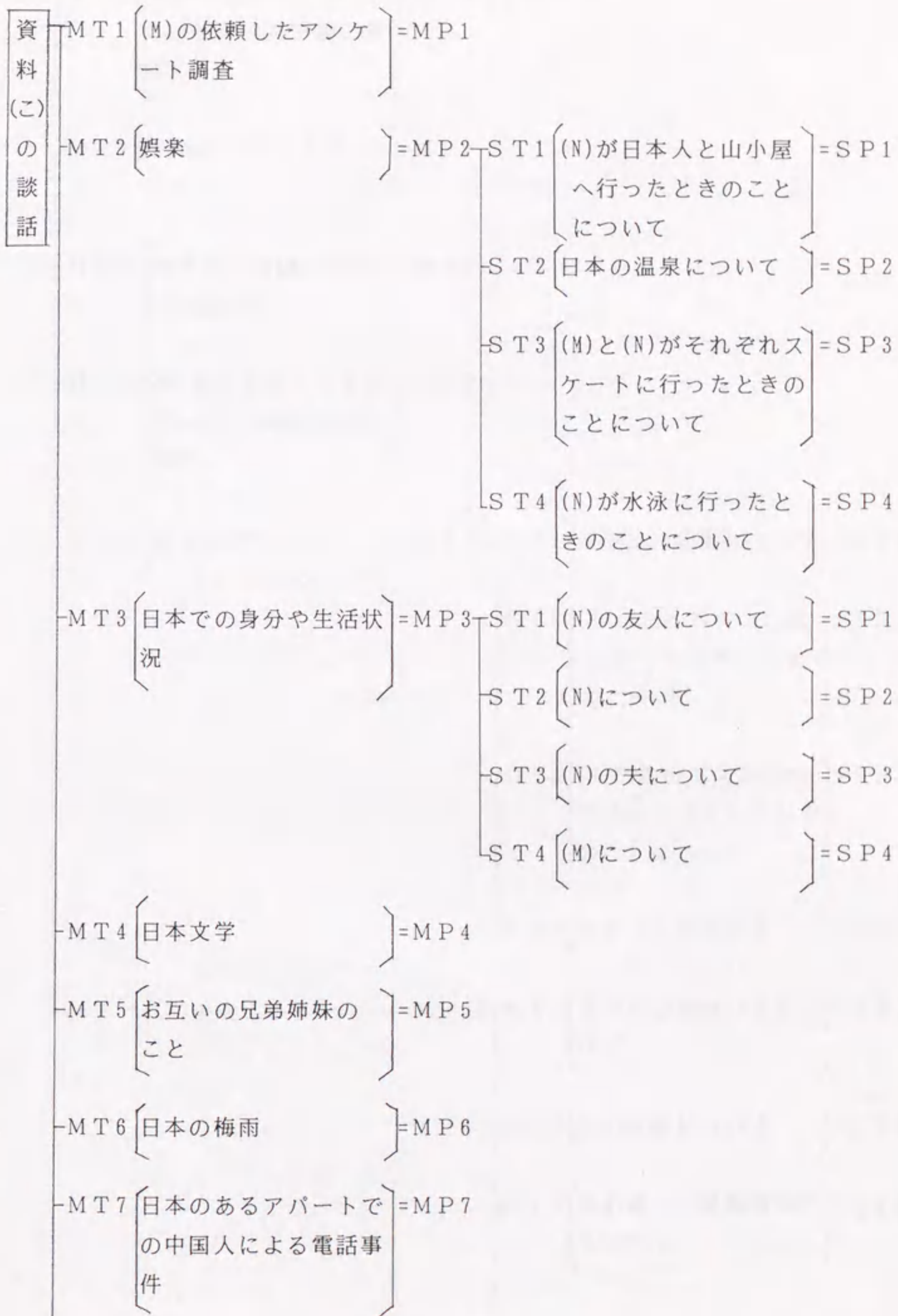
資料(け)のトピック：インフォーマント(K)と(L)



- MT6 留学生が参加するハイキング =MP6
- MT7 中国人のなまり =MP7
 - ST1 北京なまりについて =SP1
 - ST2 東北なまりについて =SP2
- MT8 中国の北方人と南方人との比較 =MP8
 - ST1 どちらが賢いかということについて =SP1
 - ST2 (L)の弟の上海での体験について =SP2
 - ST3 北京人の喧嘩について =SP3
- MT9 中国の東北地方は危険かどうかということ =MP9
 - ST1 百人以上のチンピラ集団がいることについて =SP1
 - ST2 (L)の大学の女子学生の失踪事件について =SP2
 - ST3 この地方の失業青年について =SP3
- MT10 (K)と(L)の知合いである日本人社長 =MP10
- MT11 中国の税関 =MP11
 - ST1 日本の税関の悪劣さについて =SP1
 - ST2 中国から腕時計を持って帰国したときのことについて =SP2

- MT 12 〔 深川の ' 落戸口 ' 〕 = MP 12
- MT 13 〔 企業の好む人間 〕 = MP 13
- MT 14 〔 仕事人間が趣味人間
か 〕 = MP 14

資料(こ)のトピック：インフォーマント(M)と(N)



-MT 8 (N)がアルバイトをし
ている日本語学校の制
度 } =MP 8

-MT 9 (M)の日本での住まい } =MP 9

-MT 10 現在の中国国内の大
学の状況 } =MP 10

-MT 11 (N)がアルバイトをし
ている日本語学校の
学生 } =MP 11

-MT 12 日本のパチンコ } =MP 12

-ST 1 (パチンコ犯罪について) =SP 1

-ST 2 (N)が夫とパチンコ屋
へ行ったときのこと
について } =SP 2

-ST 3 (N)の夫の友人が初め
てパチンコをしたとき
のことについて } =SP 3

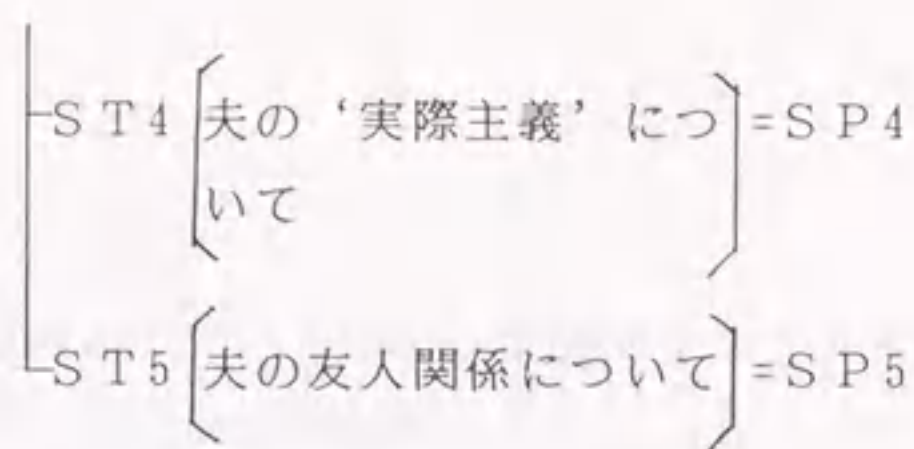
-ST 4 (パチプロについて) } =SP 4

-MT 13 (N)の夫のこと } =MP 13

-ST 1 (夫のお金の使い方につ
いて) } =SP 1

-ST 2 (夫の趣味について) } =SP 2

-ST 3 (夫の育った家庭環境に
ついて) } =SP 3



以上、本稿において、談話の構造と情報伝達の仕組みを分析し、談話の構造は情報伝達のルールと表裏一体であることを論述した。その上で、本稿の分析の対象である言語資料（あ）から（こ）を談話のまとまりと展開の図〈2〉に照合した結果を列挙して示した。

以下、言語資料をもとに、序章に示した {1} から {9} の表現形式について、その談話上の機能と名詞（句）の統語的特徴を明らかにしていく。

なお、これらの表現形式を考察する際、言語資料をそれぞれ、図〈3〉のモデルにあてはめることによって、モデルの妥当性も同時に検証していく。

またこれらの表現形式の談話上の機能や名詞（句）の統語的特徴は、談話のパラグラフを構成している各部（提示部－展開部－終結部－転換部）のそれぞれが担っている機能と密接に関係しているので、パラグラフの各部ごとに分析を進めていく。

まず第2章では提示部に、第3章では展開部に、そして最後に第4章では転換部に現れる表現形式という順序で考察を進めていくことにする。

1.3.4 言語資料に使用した記号

言語資料から抽出した、第2章以下の表現例に使用した記号については、下記の通りである。

- 「,」 : 句や節の切れ目。
- 「。」 : 話文の切れ目。
- 「、」 : 並列関係。
- 「“ ”」 : 直接発話。
- 「|」 : 話し手の意識的な音声的停頓のあるところ。
- 「!」 : 話し手のくちごもり (hesitation) があって、意識的でない音声的停頓があったり、繰り返しや言い直しののあるところ。
- 「(这个) / (那个)」 : ‘这个’ や ‘那个’ が指示詞としてではなく、話し手のくちごもりを表す語として発話されたもの。

第2章 談話の提示部

話し手はあるトピックについて談話を展開させていく際に、談話の流れをスムーズにし、聞き手の理解を助けるため、パラグラフの冒頭部において、これから話そうとするトピックを方向づける内容の発話をし、それによって聞き手を談話の中に誘導する。本稿では、このようにパラグラフ冒頭部の、聞き手に対してトピックを方向づける内容の発話部分を「提示部」と呼ぶこととした。そして提示部には、トピックの方向づけとなる事柄を談話の中に持ち込む働きをする表現形式がある。本稿ではこれを「提示話文」と呼ぶこととする。提示話文は、話文全体が聞き手に新情報を伝達している。

例えば下記の例(1)は、資料(け)の中でインフォーマント(K)と(L)が、中国の東北地方について語っている談話の一部である(資料(け)のMT9のST1参照)。

例(1)

- 1-1 K: 唉哟, 我觉得好像 | 哎, 是不是东北挺危险的呀? |
1-2 L: 我不知道有什么危险呐 |。
1-3 K: 就是说, 上 | 出去比如说, 出去什么的, 晚上 | 出去或怎么样的 |。
1-4 L: 嗯 | 反正怎么说, 反正长春是没问题, 长春挺好 |。
1-5 : 不过, 好象 | 我听说有一个 | 什么 | 流氓集团有一百 | 有一百多人吧 |。
|。

(K)と(L)は、これ以前の談話においては「北京人の喧嘩」について語っている(資料(け)参照)が、1-1において(K)が疑問文を用いて、新たに‘東北’を談話の中に持ち込んだことによって、これ以後、(K)と(L)の間では、この‘東北’が談話全体のトピックの方向づけをして談話が展開していく。

ここでトピックを方向づけた‘東北’とは「中国の東北地方」のことであり、このことはここまでの談話の流れから、(K)と(L)の間では共有の旧情報である。しかし(L)にとっては「(K)が東北を危険な地方と感じていること」は、(K)の1-1の発話によって初めて知る新情報である。このように1-1は疑問文が提示話文として用いられ、話文全体は新情報であるが、これ以降の談話は、トピックの方向づけとして談話の中に持ち込まれた旧情報である‘東北’をもとにして、その上に新しい情報を積み重ねていくという形で談話が展開していく。

例(1)では、提示話文によって話し手が持ち込もうとしている、トピックの方向づけとなる名詞(句)が、話し手と聞き手との間で共有の知識となっている旧情報であったが、しかしそれが話し手と聞き手の間で共有の知識となっていない

新情報の場合もある。このような提示話文には、現代中国語においては名詞（句）の位置に特徴がみられる。

そこで本章では、このように話し手が談話の中に持ち込もうとしている、トピックの方向づけとなる名詞（句）が、話し手と聞き手の間で共有の知識となっていない新情報である場合の現代中国語の表現形式について考察していく。

このような表現形式には、下記の3種がみられる。

1. いわゆる存現文の表現
2. ‘有’の表現
3. ‘外位語’の表現

以下、談話の言語資料をもとに、それぞれの表現形式について検討していく。

2.1 いわゆる存現文の表現

従来、一文のレベルにおいて、人あるいは事物の存在や出現、消失などの意味を表す表現は「存現文」と呼ばれてきた。ここでは、一般に存現文と呼ばれてきた表現について検討していくが、まず、この存現文が従来どのように分析されてきたかを概観し、いわゆる存現文といわれてきた表現の実態を明確にする。

2.1.1 従来の統語論的分析

存現文の範囲については、研究者によって出入りがみられる。

例えば張志公1953 (p.70~) は、下記のように、存在の表現には2類、出現、消失の表現には1類あるとしている。

存在〈1〉語順：‘某人某物－存在於－某处’

[1] 老王在办公室里。

〈2〉語順：‘某处－存在着－某人某物’

[2] 张家庄有个张木匠。

[3] 沙滩的尽头，横着一条小河。

[4] 屋子里坐满了人。

出現・消失

〈3〉語順：‘某处－出現（或消失）了－某人某物’

[5] 村子里出了一件新闻。

[6] 对面山上下来一群羊。

また朱德熙1982 (p.114~) は、存在を表す表現として下記の [7] から [9]、出現・消失を表す表現として下記の [10] から [12] の例を挙げている。

- 存在 [7] 黑板上写着字
[8] 台上坐着主席团
[9] 床上躺着一个孩子
出現・消失 [10] 对面来了一个人
[11] 屋里飞来一只蜜蜂
[12] 他们家跑了一只猫

そしてこれらに共通の統語的特徴として、

1. 目的語が不定（‘无定’ = indefinite）である。
2. 主語が場所詞である。

の2つを挙げている。

さらに刘月华等1983 (p.456~) は、存在文として下記の [13] から [17]、出現・消失を表す表現として下記の [18]、[19] の例を挙げ、また目的語が不定（‘无定’）であることがそれらに共通の統語的特徴であるとしている。

存在－語順：‘处所词语＋动词＋名词（表示存在的事物）’

- [13] 桌子上有一本书。
[14] 桌子上是一本书。
[15] 桌子上放着一本书。
[16] 天空上缀满了小星星。
[17] 河边上围了两三千人。

出現・消失－語順：‘处所词语（时间词语）＋动词＋名词（表示出现或消失的事物）’

- [18] 昨天发生了一件大事。
[19] 院子里新近搬走了三家。

このほか、陈建民1986 (P.79~) は、存現文を存在を表す‘存在句’と出現や消失を表す‘隱現句’に分け、‘存在句’として下記の [20] から [22]、‘隱現句’として下記の [23] から [25] の例を挙げている。

- ‘存在句’ [20] 壁上有一幅画。
[21] 打谷场西壁根是一个猪圈，东壁根有一眼井。
[22] 前面横着龙津河。
‘隱現句’ [23] 山上修了一条公路。
[24] 汽车上下来一个人。
[25] 房顶上掉下来块砖。

そして上記の刘月华等と同様、目的語が不定（‘无定’）であることがそれらに共通の統語的特徴であるとしている。

最後に黄章怡1987（P.130～）は、存現文の文頭には場所詞が置かれるとして、下記の5例を挙げている。

- [26] 台上坐着主席团。
- [27] 鸡窝里少了两只母鸡。
- [28] 树林里跳出一只老虎。
- [29] 河边有个小村庄。
- [30] 大门外面是一个荷花池。

以上、年代順に存現文に関する先行研究の主なものを概観してきたが、研究史的にみて、その範囲については2つの流れのあることが解る。

一つは、张志公、刘月华等、陈建民、黄章怡であり、いま一つは朱德熙である。両者の相違点は、存在を表す動詞といわれている‘在’、‘有’を用いた表現や、品定め文といわれている繫辞‘是’を用いた表現を存現文の範囲に入れるか入れないかである。

そもそも一つの言語表現を取り上げて、それが何を表しているかを論じようとする場合、さまざまな角度や視点から如何ようにでも論ずることができることはあらためていうまでもないことである。

例えば、例文[13]、[14]は、「存在」ではなく「状態」を表すとも、「対比」や「場所の取り立て」表現ともいえないことはない。そして刘月华等によれば[13]、[14]は、[15]とほぼ等価の表現ということになるが、これら3つの表現は現実の言語生活において、それぞれがそれでなければならぬ表現であり、具体的な言語活動の局面において、例えば、[13]を[14]や[15]に、[14]を[13]や[15]に代替することはできない。従って、これら3つの表現をいずれも存現文の「存在」を表す表現だとする意味は考えられない。

いわゆる存現文は、存在、出現、消失を表すといわれている類分けによってみていくと、この2つの流れは要するに「存在」の範囲についての相違である。

一方、出現、消失については、例文[5]、[6]、[10]、[11]、[12]、[18]、[19]、[23]、[24]、[25]、[27]、[28]をみる限りにおいて、見解の相違はないようみえる。しかし、例えば例文[6]において、話し手あるいは書き手の視点がどこにあるかによって、「出現」とも「消失」ともいうことができる。つまり、話し手あるいは書き手の視点が‘対面山上’に置かれれば、‘一群羊’はそこから消えるわけであるから、「消失」となり、視点が‘一群羊’に置かれれば、‘来’によって、話し手あるいは書き手の眼前により近づいて

くるわけであるから、「出現」ということになる。

例文 [12]、[24]、[25] においても全く同様の捉え方ができ、話し手あるいは書き手の視点が‘他们家’、‘汽车上’、‘房顶上’に置かれるか‘猫’、‘人’、‘砖’に置かれるかによって「消失」とも「出現」ともいうことができる。

また例えば、[18] が「出現」、[19] が「消失」とされるのは、それぞれ‘发生’、‘走’の lexical な意味によってであり、[19] の‘搬走’が‘搬来’に変換されると、まぎれもない「出現」の表現ということになる。

以上みてきたように、いわゆる存現文を従来のように意味的に範囲を限定したり、類分けすることは意味の無いことである。

次に、いわゆる存現文の統語的特徴については、张志公は語順の特徴を取り上げ、朱德熙は目的語が不定であることと主語が場所詞であること、刘月华等は語順の特徴と目的語が不定であること、陈建民は目的語が不定であること、黄章怡は文頭に場所詞が位置することをそれぞれ上げている。これらをまとめると、先行研究で取り上げられている、いわゆる存現文に共通の統語的特徴は、以下の2点となる。

(1) 動詞の後ろの名詞(句)は不定のものである。

(2) 文頭には場所名詞(句)が位置する。

一つの言語表現を構成する名詞(句)が定であるか不定であるかは、その名詞(句)が聞き手にとって新情報であるか旧情報であるかの話し手の判断によって決まるものであり、話し手のこの判断は一文のレベルでは確定できない場合が多い。また、文頭に場所詞が位置するのは、文脈の展開や談話の流れの中では然るべき根拠があつてのことであり、やはり一文のレベルで論じられることではない。

このようにみても、存現文の2つの名詞(句)の統語的性格は談話分析によつてはじめてその特徴が明らかにされるものであることが解る。

なお、動詞‘在’、‘有’および‘是’を用いた表現には、当然のことながら(1)、(2)の制約を必ずしも受けない表現例は多くみられるが、その場合の名詞(句)は定のものであり、本稿の考察の対象からは除外される。

以下、談話の言語資料に現れた存現文をもとに、(1)と(2)の2点に検討を加えながら、その談話上の機能と2つの名詞(句)の統語的特徴について考察していく。

2.1.2 存現文の表現と提示機能

下記の例(2)は、資料(く)の中で存現文の表現が用いられている部分を抽出したものである。

例(2)：資料-(く)、インフォーマント-(I)と(J)

- 2-1 I：按照世俗的观念|，当科学家啊|，拿多少钱呀？|
2-2 : 说我们系那个老师就说么|，他是系副主任|。
2-3 : 他说“我副教授才拿一百二十块钱|。我现在生活水平|，根本就|维持不了|，按现在|市场的价格|。我现在要按照维持我的生活，一个月得有三百块钱工资|，我才能维持我的生活|。”
2-4 : 他|他基本工资是一百二，再加上补贴的话，才能拿到一百七、八|，那也不够哇|。
2-5 : 你想家里养两个孩子|，他上初中、上高中，正是花钱的时候|。
2-6 : 所以呢，这|这些不|（这个）|怎么说呢|，唉|毕业之后|，不能够立刻见效的这些专业|，开始没有人报|，受冷落|。
2-7 : 文史哲|，受冷落|，根本就没人学|。
2-8 J：外语是热门|。
2-9 I：唉！|，现在是|是什么呢？|是外语|，外贸|。
2-10 : 天津市呀|，今年出了（这个）一个特别奇怪的现象|。
2-11 : 外贸最热|，比大学热|。
2-12 : 天津市呢|，有外贸技校|，就是外贸学校，就是中专|。
2-13 : 那么好多学生呢，那个分都够考重点大学的分|，但是他|，不上大学|，上外贸学校|。
2-14 : 为什么呢？|
2-15 : 第一|，外贸学校将来毕业肯定留在天津市外贸局里边工作|，不出外贸局系统|。
2-16 : 第二|，沾‘外’字|，将来|都有机会|，是吧？|
2-17 : 无论是名，还是利|，都|都有可能|。

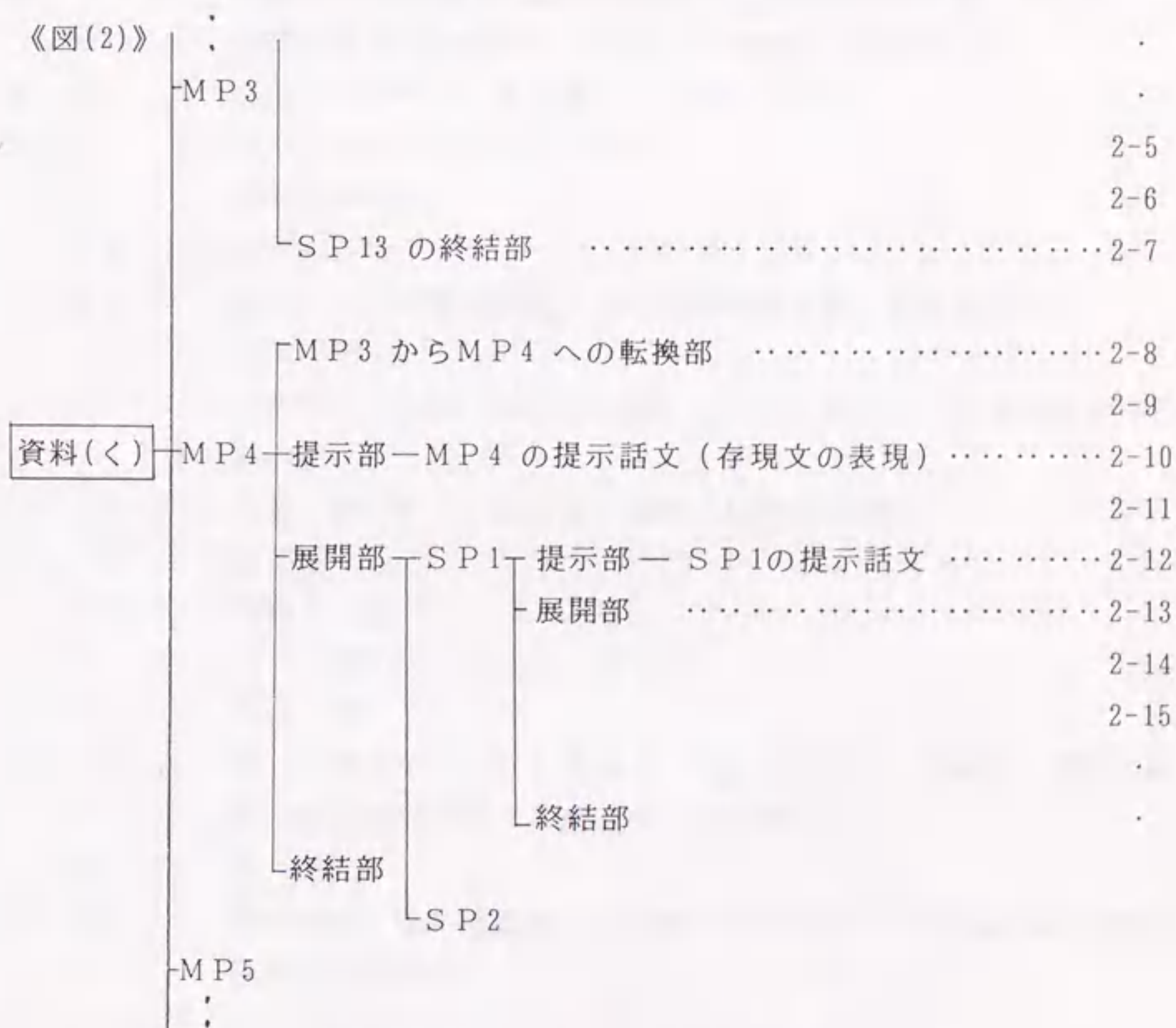
例(2)では、2-10 に存現文の表現（‘天津市呀，今年出了一个特别奇怪的现象。’）が用いられている。この表現の談話上の機能をみていくために、まず例(2)の談話の展開を順に追っていくことにする。

例(2)は、2-1 から 2-7 で一つのトピックが終了している。そして 2-8 で、それまで聞き手であった(J)がトピック転換のきっかけとなる発話をし、2-9 で話し手(I)がその発話を受けてトピックの転換を行っている。次に話し手(I)は、

2-10 において存現文を用いているが、これ以降の談話を追っていくと、その内容は 2-10 の存現文の述語動詞の後ろの名詞句である‘一个特别奇怪的现象(とても不可思議な現象)’について語られたものであることが解る。つまり、2-10 の存現文によって、新たに‘一个特别奇怪的现象’が談話の中に持ち込まれたことにより、これ以降の談話のトピックの方向が決定されることとなる。このことから、存現文が新たなトピックの方向づけとなる事柄を談話の中に持ち込むための提示話文として機能していることが解る。

例(2)を、資料(く)の談話全体の中でみると、まず 2-1から 2-7 までがMP3 中のSP12 の最後の部分であり、2-8 と 2-9 がMP3 からMP4 への転換部、そして 2-10 がMP4 の提示話文ということになる。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、下記の《図(2)》のようになる。



いま一つ、存現文の用いられている例をみることにする。

例(3)は、資料(お)の中の「日本の最近のテレビ番組」をメイン・トピック (MT4) とするメイン・パラグラフ (MP4) の一部を抜粋したものであり、3-

11 に存現文（‘前几天电视里边出来一个日本的歌手的结婚典礼’）が用いられている。

資料(3)：資料-(お)、インフォーマント-(E)と(F)

- 3-1 F：现在的电视节目，你打开，随便你看就可以，非常就是这种，嘻笑打骂的这种……
- 3-2 E：对对闹得比较多
- 3-3 F：很无聊的那种闹的那种，一点儿都没有认真劲儿的那种东西最多什么呀。
- 3-4 : 并且呢，他还挺，挺有（那个）‘人气’的。
- 3-5 E：对啊。因为是观众需要这些呢，观众需要这些然后他就……
- 3-6 F：但是观众需要这些说明一种什么问题呢，就说明一种……
- 3-7 E：欣赏水平下降了，是不是？。怎么说呢……
- 3-8 F：我总觉得这不是什么好倾向。
- 3-9 : 我有这种感觉。
- 3-10 : 你比如说哈，
- 3-11 : 前几天，电视里边出来一个日本的歌手的结婚典礼，
- 3-12 : 我看了啊。
- 3-13 : 当时呢，他那个结婚典礼呢，仪式，按的是基督教徒的那种办的。
- 3-14 : 就是牧师啊，给他俩，就是按照什么呢？
- 3-15 E：祝福吧
- 3-16 F：祝福。唉。
- 3-17 : 说“你要把她当作你的妻子吗？”
- 3-18 : 他说“嗯”。
- 3-19 : 嗯，“她无论是有什么灾难，有什么病痛，你都要，就是帮助她，越过这些山峰，越过这些险滩啊？”
- 3-20 : 他“嗯”。
- 3-21 : 就这样的，就是搞那种基督教，以前咱们在西方电影里经常看到那种场面哪哈。

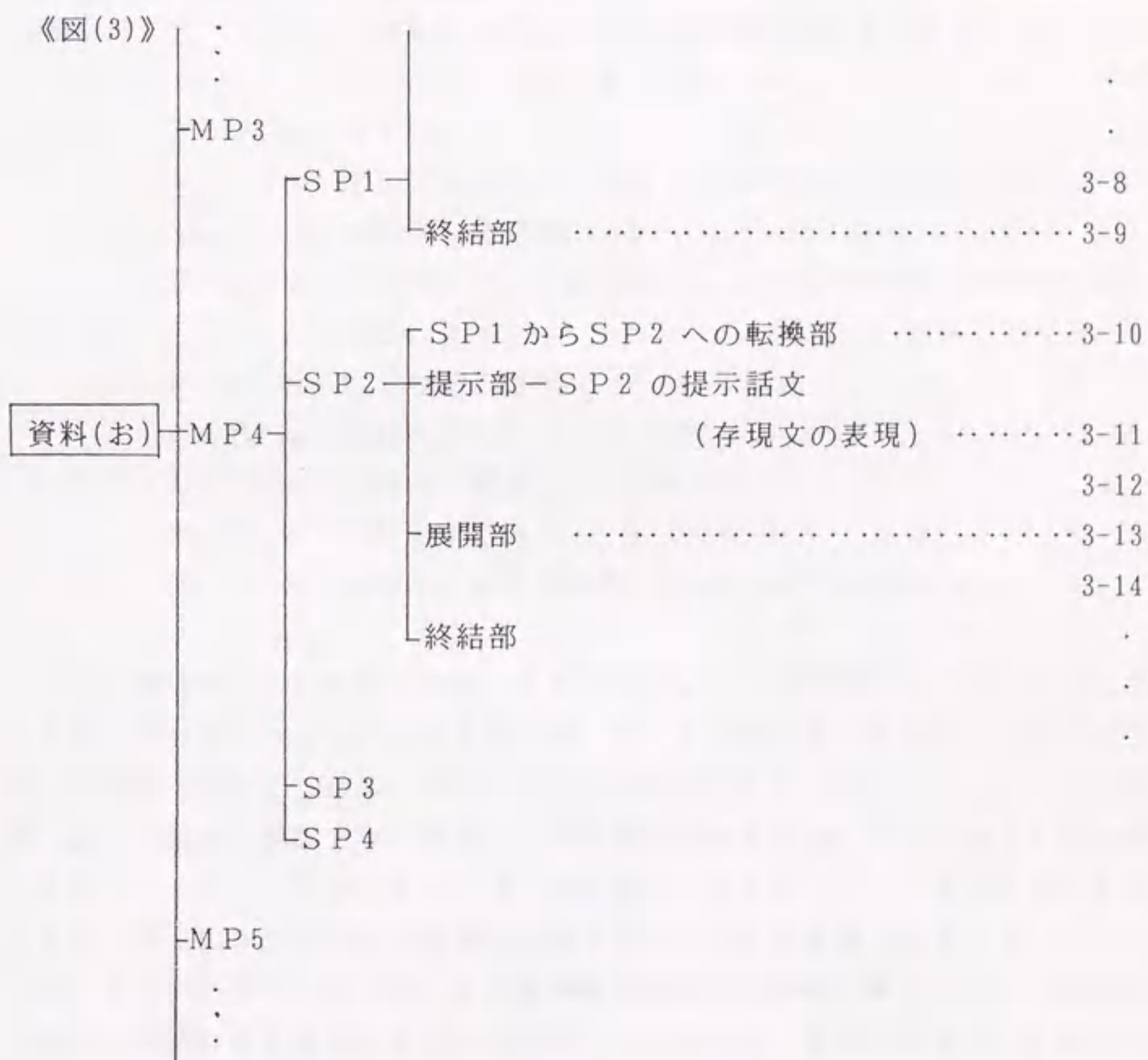
ここでも 3-11 の存現文の談話上の機能をみていくために、例(3)の談話の展開を順に追っていくことにする。

例(3)は、3-1 から 3-9 までで一つのトピックが終結している。そして 3-10

でトピックの転換が行われ、次の 3-11 において存現文が用いられている。3-11 以降の談話を追っていくと、そこでは 3-11 の存現文の述語動詞の後ろの名詞句である‘一个日本的歌手的结婚典礼（ある日本人歌手の結婚式）’について語られている。つまり、3-11 の存現文によって‘一个日本的歌手的结婚典礼’が新たに談話の中に持ち込まれ、それによってこれ以降の談話のトピックの方向が、この‘一个日本的歌手的结婚典礼’に決定されている。このことから、例(3)の存現文が上記の例(2)の場合と同様、提示話文として機能していることが解る。

例(3)は資料(お)の談話全体の中では、MP4 中の発話であるが、MP4 は4つのサブ・パラグラフに分けられ (SP1~SP4)、3-1 から3-9 まではSP1 であり、3-10 がSP1 からSP2 への転換部、そして 3-11 がSP2 の提示部の中の提示話文ということになる。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、下記の《図(3)》のようになる。



以上のことから、存現文の表現は、MPあるいはSPの冒頭の提示部において、これから語ろうとするトピックの方向づけとなる事柄を談話の中に持ち込むための表現形式であることが解る。

次に、存現文の2つの名詞(句)の統語的特徴について考察していく。

まず、(1)の動詞の後ろの名詞(句)が不定のもの、についてであるが、存現文の述語動詞の後ろの名詞(句)とは、言語資料の例(2)、(3)で分析したように、これから語ろうとしているトピックの方向づけとなる事柄を提示している部分であり、例(2)の2-10 = '一个特别奇怪的现象'、例(3)の3-11 = '一个日本的歌手的结婚典礼'がそれである。従来、これらの名詞句は、不定のものであるといわれてきた。

不定の名詞(句)とは、聞き手が「それ」と断定できないであろうと話し手が判断した名詞(句)のことであり、それには新情報の場合と旧情報の場合とがある。例えば、下記の例【ア】をみてみよう。

例【ア】ア-1 a: このあいだ久しぶりに大学時代の友人に会ったんだよ。
山田っていうやつなんだけどね。

ア-2 b: へえー。

ア-3 a: そしたらそいつ、宝くじに当たったっていうんで、そりゃもう大喜びなんだ。

ア-4 b: へえー。で、その山田っていう人、一体いくら当たったんだい?

ア-5 a: いくらだと思う?

ア-6 b: さあー。

ア-7 a: 100万だよ、100万!

ア-8 b: そりゃすごい!

ア-9 a: おれなんか300円しか当たったことないよ。

この対話のア-1のaの「山田っていうやつ」という名詞句と、ア-4のbの「その山田っていう人」という名詞句は、どちらも聞き手であるbにとっては不定の名詞句である。しかし、ア-1のaの「山田っていうやつ」は、ア-1の発話において初めて談話の中に持ち込まれた新情報であるが、ア-4の「その山田っていう人」は、「その」という指示詞が用いられていることから明らかであるように、すでにaとbの間で共有の知識となっている旧情報である。

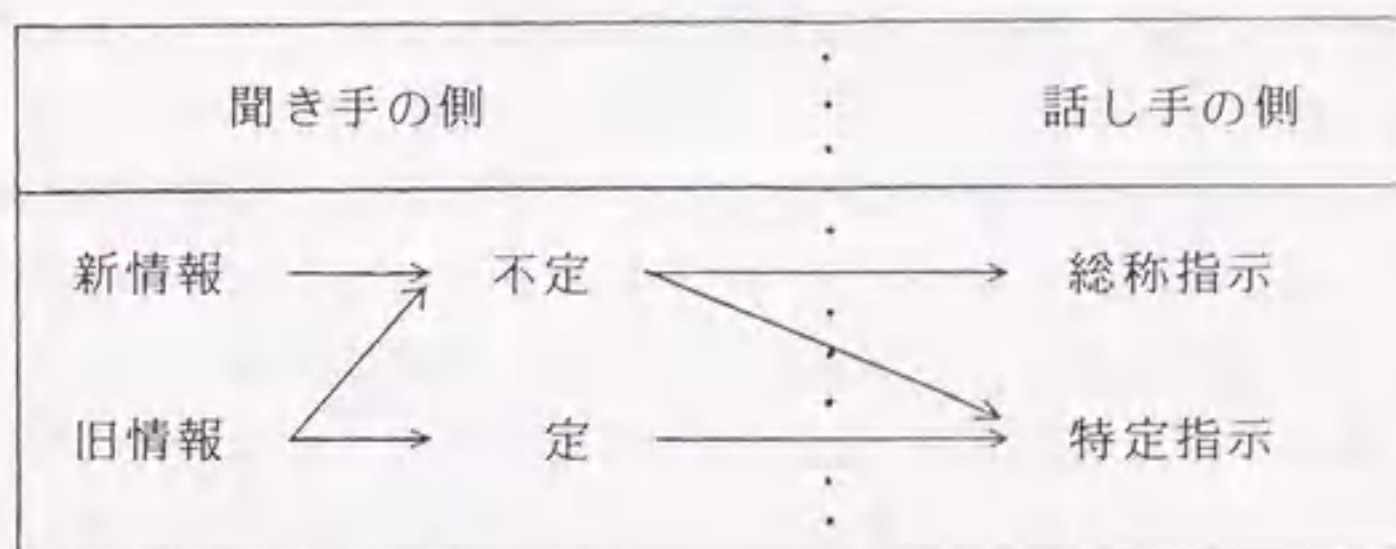
このように不定の名詞(句)には新情報の場合と旧情報の場合があり、存現文の表現が談話の中で提示話文として機能している上は、それが新情報であるか旧情報であるかは統語的に極めて重要になってくる。

そこで先の例(2)に戻ると、「一个特别奇怪的现象」は、この 2-10 の時点において、聞き手である(J)にとっては、どのような「現象」であるのか全く解らない不定の「現象」であると同時に、これ以前の発話からも、また聞き手のもっている知識からも類推することのできない、話し手(I)と聞き手(J)の間で共有の知識となっていない新情報でもある。例(3)の 3-11 の「一个日本的歌手的结婚典礼」も、聞き手(E)にとっては、どの結婚式であるか判然としない不定の結婚式であると同時に、これ以前の発話からも、また聞き手のもっている知識からも類推することのできない新情報である。

また、定・不定も、情報の新・旧も、判断するのは話し手であり、これはいうまでもなく、聞き手にとってそれがどちらであるかについて話し手が下す判断である。そこで、話し手の側の概念である「特定指示 (specific reference) ・総称指示 (generic reference)」を導入して、この名詞(句)の統語的特徴をみていくことにする。

聞き手にとって定である名詞(句)は、当然のことながら話し手の意識の中では必ず特定の指示の対象がある。しかし聞き手にとって不定である名詞(句)の場合には、話し手の意識の中では、特定の指示対象がある場合と総称指示の場合とがある。そこで 2-10 の「一个特别奇怪的现象」という名詞句を話し手である(I)の側からみてみると、それは(I)の意識の中では、このような「現象」だという特定の対象をもった「現象」であり、3-11 の「一个日本的歌手的结婚典礼」も、話し手である(F)の意識の中では、特定の指示の対象のある結婚式である。

ここまでの考察から、聞き手にとっての「定・不定」と「情報の新・旧」との関係及びこれらと話し手の意識の中にある「特定指示・総称指示」との関係は、以下のように図式化して示すことができる。



そしてこれに従って、2-10 の「一个特别奇怪的现象」という名詞句の統語的特徴をまとめると、それは(I)と(J)の間で共有の知識となっていない新情報であり、聞き手(J)にとっては不定のもの、そして話し手(I)の意識の中には特定の指示対象がある「現象」、ということになる。

また、3-11 の ‘一个日本的歌手的结婚典礼’ についても同様のことがいえる。

この ‘一个日本的歌手的结婚典礼’ は、3-11 の時点において、(E)と(F)の間で共有の知識となっていない新情報であり、聞き手(E)にとってはどの結婚式であるのか解らない不定の結婚式であるが、話し手(F)の意識の中では、それと特定されている結婚式を指している。

以上の考察から、存現文の述語動詞の後ろの名詞(句)の統語的特徴は、以下のように記述することができる。

- ◎話し手と聞き手の間で共有の知識となっていない新情報である。
- ◎聞き手にとっては不定のものである。
- ◎話し手の意識の中では、必ずこのようなものであるという特定の指示の対象がある。

次に、(2)の文頭に場所名詞(句)が位置する、という特徴について検討していく。

パラグラフの提示部の提示話文によって談話の中に持ち込まれた、トピックの方向づけとなる事柄とは、いうならば、談話を展開していく際に、一つのパラグラフが終了するまでそのパラグラフの柱となっているものである。そしてこの柱には、それを支える2つの重要な要素がある。それは「場所」と「時」である。つまり、それがどこの事柄であり、あるいはいつの事柄であるかということである。

これについては、例えば Randolph Quirk 1986 (p.78) に、次のような記述が見える。

「コミュニケーションが理解され、受け手が間違いのない位置づけを与えられるように、その手がかりとなる場所的、ないしは地理的な背景が必要とされているように思える。この点は疑いもなく人間の言語一般について当てはまることであろう」

また、「時」に関しても、以下のように述べている(同p.113~)。

「人間のコミュニケーションにおいては、時間における「位置」は空間における位置と殆ど同じ位に、どうしても大切な要因とならずにはいられないようなもののように思える。」

つまり、トピックの内容を方向づけるに際し、その場所的、ないしは時間的な位置づけをすることは、聞き手がトピックを間違いなく把握するために必要なことである。

情報伝達のルールによれば、旧情報をもとにしてその上に新情報が付け加えら

れていくのであるから、現代中国語の存現文の表現において、新情報である名詞（句）が述語動詞の後ろに位置するのは当然のことである。そしてその結果、文頭の位置（述語動詞の前）が空くことになる。その場合、提示された述語動詞の後ろの名詞（句）を場所的ないしは時間的に位置づけることが、トピックの方向づけとして重要なことであり、また、場所詞、時間詞そのものが副詞的機能を有することと相俟って、文頭の空いた位置（述語動詞の前）に場所詞ないしは時間詞が立つのは、至極当然のことである。そしてその文頭に位置した場所詞ないしは時間詞が、話し手と聞き手の間で共有の知識となっている旧情報であることも、いうまでもないことである。

先行研究においては 2.1.1 でみてきたように、刘月华等だけに、出現、消失の場合に限って‘处所词语（时间词语）+ 动词+ 名词’の記述がみえるだけであり、他はすべて、時間詞については触れていない。しかし、先の 3-11 でみてきたように、時間詞も場所詞と同様に文頭に立ち、この場合、場所詞と時間詞の区別は、統語的に意味をなさない。

以上のことから、存現文の談話上の機能と 2 つの名詞（句）の統語的特徴は、次のように記述することができる。

☆談話上の機能：

存現文は、談話の中で、これから語ろうとしているトピックの方向づけとなる事柄を談話の中に持ち込むための提示話文として機能している。

☆名詞（句）の統語的特徴

存現文 = 場所名詞(句) / 時間名詞(句) + 述語動詞 + 名詞(句)

旧情報

新情報 + 不定 + 特定指示

新 情 報

なお、言語資料には存現文の表現は 19 例現れたが、これらの表現例はすべてここで述べてきたことにあてはまるものであった。

2.2 ‘有’の表現

ここではまず、動詞‘有’を用いた表現が、従来どのように分析されてきたかを概観し、コメントを加える。

2.2.1 従来統語論的分析

従来、‘有’という動詞は、一文のレベルにおいて‘有’の前に位置する成分と‘有’の後ろに位置する名詞(句)の意味関係によって、‘有’をいくつかの意味に分類するというのが一般的な分析であった。

例えば、丁声树等1961⁷⁾(P.78~)は、‘有’の意味を下記の4類に分けている。

(甲) 領属を表し、領属にはいろいろな関係が含まれる。

[31] 说得轻巧! 你手里总共只有七个战士!

(乙) 存在を表し、その場合、通常、場所詞が主語となる。

[32] 湘潭城内从前有六家牛肉店, 现在倒了五家, 剩下一家是杀病牛和废牛的。

(丙) 列举を表す。

[33] 农民中有富农、中农、贫农三种。

(丁) 数量や比較を表す。

[34] 雪最浅的地方, 也有五寸多厚。

‘有’の表す意味をさらに細分化しているのが、刘月华等1983である。

刘月华等1983(P.434~)は、‘有’の基本的意味は「所有」と「存在」であると前置きした上で、‘有’の意味を5類に分け、それをさらに、‘有’の前の成分と‘有’の後ろの名詞(句)との意味関係から、11類に細分化し、またその一部については語順も示している。下記の分類がそれである。

(一) “所有”を表す: 名詞(一般的な事柄) + “有” + 名詞(一般的な事柄)

1. 目的語の表す事柄が主語の一部分である。

[35] 人人都有两只手。

2. 目的語の表す事柄が主語の所有である。この場合、目的語には一般に具体的な事柄を表す語が用いられる。

[36] 张老师有很多书。

3. 目的語の表す事柄が主語の属性である。この場合、目的語は抽象名詞であることが多い。

[37] 教书这个工作很有意义。

4. 目的語が表している事柄と主語が表している事柄の間には、一定の関係がある。

[38] 老教授一共有四位助手，他们正在研究一个新课题。

- (二) “存在”を表す：場所詞＋“有”＋名詞（存在を表す事柄）

[39] 屋里有人。

- (三) 発生と出現を表す：名詞＋“有”＋動詞

[40] 近年来，中小学教育也有了很大发展。

- (四) 列举して包括を表す。

1. 目的語が表している事柄が主語と同類のものである。この場合、目的語は並列構造で、且つ数量詞を含んでいる。

[41] 今天参加座谈会的有工人、学生、干部、教师等各方面的代表二十多人。

2. 複数の“有”を用いて区別して列举する。

[42] 来客也不少，有送行李的，有拿东西的，有送行兼拿东西的。

3. 目的語が数量詞であるか、あるいは数量詞名詞句を伴っている。この場合、目的語は主語が指し示す事柄の総数を表している。

[43] 这本书有三百多页。

- (五) 度量の見積あるいは比較を表す。

1. “有”の後ろに数量詞を用いるか、あるいは数量詞にさらに度量を表す形容詞を付加する。

[44] 那条河有五百米（宽）。

2. 比較を表す：“有”＋度量あるいは事柄のたとえを表す語＋形容詞

[45] 那块石头有一间房子那么大。

しかしながら、このように‘有’の意味をいくつに分類してみても、‘有’を用いた表現の本質を捉えることはできないし、‘有’の後ろの名詞（句）の統語的機能を明らかにすることはできない。極論すれば、‘有’を一文のレベルで意味分類する限り、一つ一つの表現の数だけ‘有’の意味を列举しなければならないことになる。

このほか、「存在」という観点から、‘有’の表現と動詞‘在’の表現を比較するという分析も多くみられる。

従来‘有’の表現と‘在’の表現の相違は、‘有’の表現が「場所詞＋‘有’＋存在物」、‘在’の表現が「存在物＋‘在’＋場所詞」という語順であり、また、‘有’の表現の中の存在物は不定（indefinite）で、‘在’の表現の中の存在物は定（definite）であるともいわれてきた。

鈴木直治1969 は、この2つの表現の違いを発話の重点の違いであるとし、「有」の表現は存在する物に発話の重点があり、「在」の表現は場所に発話の重点があるとした。

さらに大河内康憲1982 (p.37) は、中国語の存在文には「有」と「在」の二様の表現があるとして、下記の2例を比較している。

[46] 外面有一个学生。

[47] 老师在外面。

そして、[46]の「学生」は「文脈で未知のもの、従ってこの文はただ存在をいうだけだが」、[47]の「老师」は「既知のもの、説明が加えられるべき主題である」とし、「存在文では主題化されると、動詞まで変わるのである。「有」の前は場所、「在」の前は存在物で、「有」と「在」ではその位置がまったく入れかわる。」としている。

さらにまた、中川正之1978b は、中国語の「有」と「在」を日本語の「ある」と「いる」と対照して、分析を試みている。

以上、「有」の表現について先行研究の主なものをみてきたが、それには「有」を意味的に分類するものと、「在」との比較によって表現機能を論ずるものの2つの流れがみられる。「有」そのものの意味を明らかにしようとするものも、「在」との比較によるものも、そこに共通している方法論は、「有」の前後に位置する名詞(句)との意味の関係に着目していることである。その結果、「有」の表現は、「存在物」が不定であるとか、存在する物に発話の重点があるとか、後ろの名詞(句)は未知のものであって、説明の加えられる主題ではないなどと説明が加えられてきている。

しかしながら、[46]は、例えば、「外面有一个学生，他很会汉语。」における「一个学生」は、「説明の加えられるべき主題」であり、[47]は、例えば、「老师在外面，学生们在屋里。」の対比表現においては、「説明の加えられるべき主題」は、「老师」や「学生们」であるとは限らない。

このように、最小限の場面を設定するだけで、従来の統語的説明は破綻することになる。そこで統語論的分析には場面が不可欠であり、場面がほぼ確実にそれと確定できる談話レベルの分析が必要となるのである。

また、2.1.2で述べたように、「定・不定」、「既知・未知」は、「情報の新・旧」および「特定指示・総称指示」と深くかかわっており、これらは談話の展開を離れて論ずることはできない。「発話の重点」も勿論のことながら、談話の展開を捨象して一文のレベルで決められることではないことはいうまでもない。

以下、談話の言語資料をもとに、「有」の表現の談話上の機能と「有」の後ろの名詞(句)の統語的特徴について分析を進めていく。

2.2.2 ‘有’の表現と提示機能

下記の例(4)は、資料(う)の中で‘有’の表現が用いられている部分を抽出したものであり、この中には‘有’の表現が2回、4-9 と 4-14 に用いられている。

例(4)：資料-(う)、インフォーマント-(C)

- 4-1 : 完了以后呢|, 我想|, 那|那要是这样的话|, 那就|订吧|。
- 4-2 : 可我一看呢|, 又太|那人又太那样了, 后来我想不行|, 还是我犹豫了好几次, 我说, “是不是订呐。”|
- 4-3 : 完了以后|想来想去算了|, 还是不订吧|, 我没有把握|。
- 4-4 : 完了以后|, 可是他就不走, 他就坐在门槛那儿坐那儿|, 特别害怕|。
- 4-5 : 完了, 这时|, 就是周围|好些人|, 完了以后, 我说|, “你赶快把这让这个人走吧|, 我太害怕。”|
- 4-6 : 完了以后, 那个人没办法连推带拖就出去了|, 就走了|。
- 4-7 : 哎哟, 当时|我坐那儿就想了半天哈|, 我说, “日本|怎么这样啊? 这是干什么?|确实|可能这也是一个竞争什么呀。”|
- 4-8 : 完了以后呢|, 刚好呢|我来的是十月份吧|。
- 4-9 : 十一月份就有一个|就是|在东海地区|有一个(那个)外国人讲演比赛吧|。
- 4-10 : 它的题目就是|‘我在日本的发现’|。
- 4-11 : 我想刚好就把这写进去|, 就说我就觉得|, 日本的什么事儿都充满着竞争|。
- 4-12 : 就象|我跟好多日本人谈话也是|, 他们说|, 就说|日本人他们自己都觉得|到处都充斥着这种竞争|, 他们自己都觉得一种|不安定感|。
- 4-13 : 我也觉得是这种|, 完了以后, 就写|。
- 4-14 : 刚好呢|我|就在大学的时候呢|, 有个日本外教呢|,
- 4-15 : 她也刚好回来了|。
- 4-16 : 完了以后, 我写了以后, 就|她就给我看了看|, 她说|, 她当时就肯定了我, 她说, “你这主题特别好。”她说。
- 4-17 : 她说, 你应该把(那个)又具体指导我语法上的什么|, 说你应该怎么写怎么写|。

この2つの‘有’の表現(4-9 = ‘十一月份在东海地区有一个外国人讲演比赛。’)

’、4-14 = ‘我在大学的时候有一个日本外教。’)の談話上の機能をみていくために、以下、例(4)の談話の展開を順に追っていくことにする。

例(4)は、4-1 から 4-7 までで一つのトピックが終結している。(C)は 4-1 以前から、(C)が留学先の日本に着いたその晩に、新聞拡張員が下宿先のアパートまで新聞購読の勧誘に来たときのことを語っており、4-7 で新聞拡張員の勧誘に対する感想を述べて、このトピックを終結している。そして、4-8 でトピックの転換をおこない、次に 4-9 で‘有’の表現を用いている。そしてこれ以降の談話をみていくと、その内容は、動詞‘有’の後ろの名詞句である‘一个外国人讲演比赛(外国人スピーチコンテスト)’について語っている。つまり、4-9 の‘有’の表現によって、新たに‘一个外国人讲演比赛’が持ち込まれたことにより、これ以降の談話のトピックの方向が決定されている。

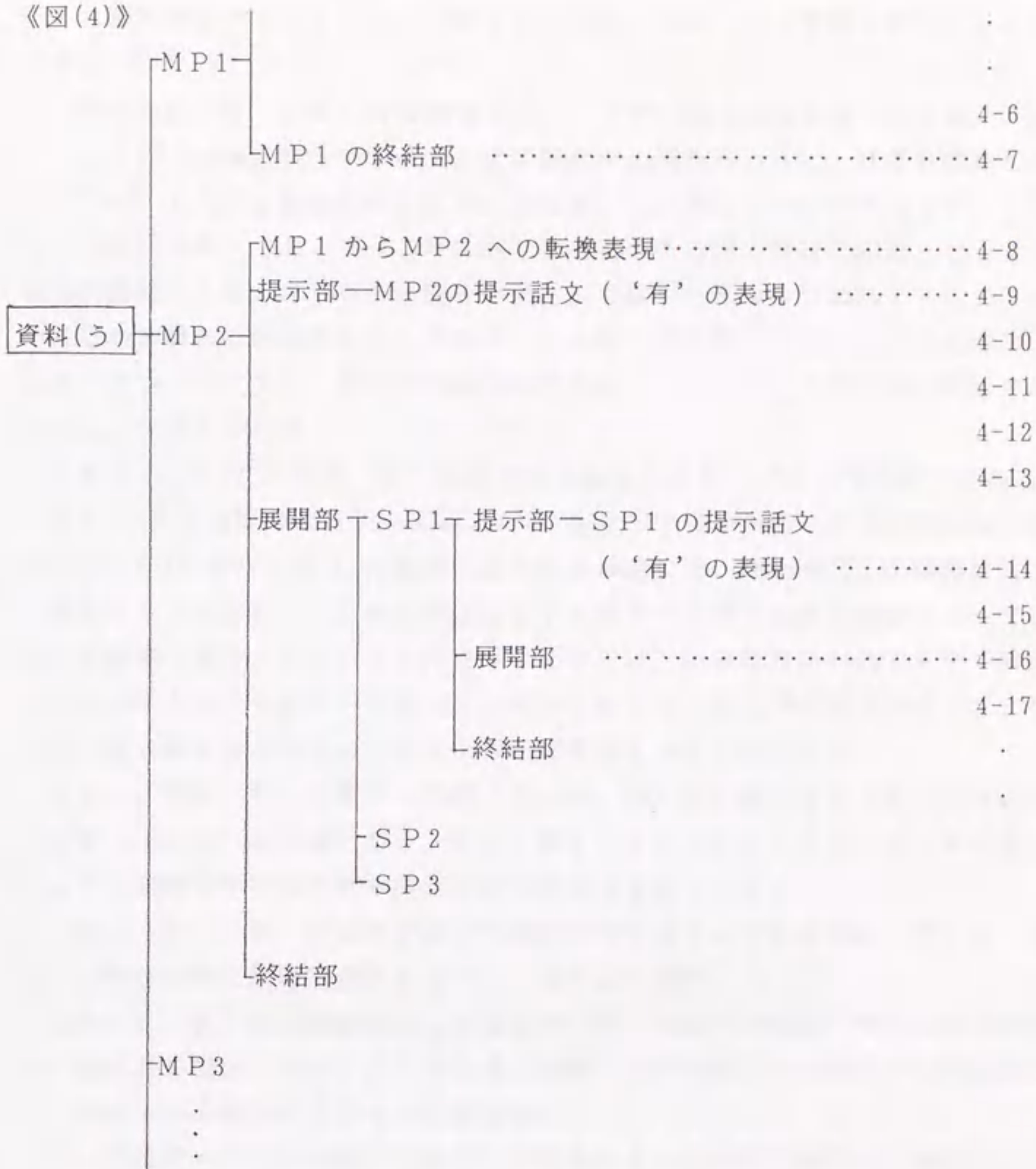
さらに例(4)の談話を追っていくと、4-14 でもう一度‘有’の表現が用いられている。そして 4-14 以降の談話は、この動詞‘有’の後ろの名詞句である‘一个日本外教(一人の日本人教師)’について語られており、具体的にはこの先生にスピーチコンテストの原稿を添削してもらった内容へと展開していく。この例からも、‘有’の表現によって談話の中に持ち込まれた、動詞‘有’の後ろの名詞(句)が、談話のトピックの方向を決定していることが解る。

例(4)を、資料(う)の談話全体の中でみていくと、次のようになる。

資料(う)ではまず初めに、「(C)が留学先の日本に着いたその晩に、新聞拡張員が下宿先のアパートまで新聞購読の勧誘に来たときのこと」が、メイン・トピック(MT1)として語られ、その次に、その時のことを題材として参加した「外国人スピーチコンテストのこと」がもう一つのメイン・トピック(MT2)として語られている。例(4)は、このMP1(=MT1)の終結から、MP2(=MT2)への転換、提示が語られている部分である。そして 4-9 の‘有’の表現は、MP2の提示部の中の提示話文ということになる。また、このMP2は3つのサブ・パラグラフに分けられ(SP1~3)、4-14の‘有’の表現は、その中の最初のサブ・パラグラフ=SP1の提示話文となっている。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、次頁の《図(4)》のようになる。

《図(4)》



以上のことから、‘有’の表現が、MPあるいはSPの冒頭の提示部において、これから語ろうとするトピックの方向づけとなる事柄を談話の中に持ち込むための提示話文として機能していることが解る。

次に、‘有’の後ろの名詞(句)の統語的特徴について考察していく。

この名詞(句)も先の2.1で考察した存現文の場合と同様、不定(indefinite)のものであるとするのが、先行研究での一般的な見解である。そこで、この名詞(句)の「定・不定」について論ずることは避けられないが、この「定・不定」の問題は2.1.2で記述したように、「情報の新・旧」及び「特定指示・総称指

示」と深く関わっているので、これら3つの視点をからめて考察していくことにする。

4-9 の動詞‘有’の後ろの名詞句とは、‘一个外国人讲演比赛’である。この‘一个外国人讲演比赛’について、まず聞き手の側からいうと、聞き手は話し手(C)が4-9でこれを談話に持ち込む以前には、この外国人スピーチコンテストに対する知識をもっておらず、これは話し手と聞き手の間で共有の知識となっていない新情報である。そしてまた聞き手にとっては、いきなりいわれても何のことであるのか解らない不定のことである。一方話し手の側からいうと、この外国人スピーチコンテストは、話し手の意識の中では、それと特定できる指示対象をもったコンテストである。

いま一つ、4-14の動詞‘有’の後ろの名詞句である‘一个日本外教’であるが、これも4-9と同様のことがいえる。4-14の‘一个日本外教’も聞き手の側からいえば、4-14で話し手(C)が談話に持ち込む以前には、聞き手はこの教師に対する知識をもっておらず、この教師は話し手と聞き手の間で共有の知識となっていない新情報である。そしてまた聞き手にとっては、いきなりいわれても全く解らない不定の人物である。一方話し手の側からいえば、話し手の意識の中では、どのような人物であるかという特定の指示対象をもった人物である。

つまり、動詞‘有’の後ろの名詞(句)は、話し手と聞き手との間で共有の知識となっていない新情報であり、そして聞き手にとっては不定のものであるが、話し手の意識の中ではそれと特定できる指示の対象である。

このように、‘有’の表現によって談話の中に持ち込まれる名詞(句)は、存現文の場合と同じ統語的特徴をもっていることが解る。

しかし、‘有’の表現の談話上の機能や‘有’の後ろの名詞(句)の統語的特徴が存現文の場合と同じであるならば、動詞‘有’の表現を存現文から独立させて、別の一つの表現形式とする必要はない。

そこで次に、‘有’の表現の談話上の機能をさらに詳細に検討し、存現文との相違をみていくことにする。

およそ談話が展開されていくとき、その事物や出来事の「実在」そのものが、話し手と聞き手との間で共有の知識となっていなければ、換言すれば、その事物や出来事の「実在」そのものが旧情報でなければ、談話を展開していくことはできない。例えば、

例 [イ] a: 来年アモイに行くよ。

b: あそう。

a: それでね、・・・

というように、aがスムーズに談話を展開できるのは、「アモイ（厦門）」という都市の实在が、話し手aと聞き手bとの間で共有の知識、つまり旧情報となっているからである。もしそうでなければ、

例〔ウ〕 a：来年アモイに行くんだけど、……

b：アモイって？

というように、聞き手bはまず、「アモイ」そのものの实在を確認するはずである。そしてaの談話の流れは一時中断し、aはその实在の説明から始めることになる。このような談話の中断を避けるために、aはbが〔アモイ〕という都市の实在に対する知識をもっていないと判断すれば、つまりbにとっては「アモイ」という都市の实在が新情報であると判断すれば、aはbに対してまず「アモイ」という都市が实在するという情報を提供し、そのことをbとの共有の知識とした上で、談話を展開していくことになる。その場合には、例えば下記のような対話になる。

〔エ〕 a：中国の福建省にアモイっていうところがあるんだけどね、来年そこへ行くんだ。

b：あそう。

a：それでね、……

そこで例(4)の‘有’の表現にもどると、4-9の‘一个外国人讲演比赛’と、4-14の‘一个日本外教’は、どちらも話し手と聞き手の間で共有の知識となっていない新情報であって、聞き手にとっては不定のものであるが、話し手の意識の中では特定の指示対象のあることはすでに述べた通りである。しかし、そこで‘有’の表現を用いているのは、ただそれだけではなく、‘一个外国人讲演比赛’や‘一个日本外教’の实在そのものが聞き手との共有の知識となっていないと話し手が判断したからであり、その实在そのものをまず聞き手との共有の知識とする必要があると話し手が判断したからである。つまり‘有’の表現形式は、‘有’の後ろの名詞（句）の「实在」そのものを、まず聞き手との間で共有の知識とする必要があると話し手が判断した場合に用いられる提示話文であり、提示話文の中でもっとも情報量の少ない表現形式である。

そしてこの表現形式と存現文との最も大きな相違は、存現文が提示部においてしか用いられないのに対して、‘有’の表現がその「实在」そのものを聞き手との共有の知識とする働きをするため、談話の展開部においても用いられるところにある。下記の例(5)がそれである。

例(5)：資料-(う)、インフォーマント-(C)

- 5-1 : 而且吧 | , 比如说 | 放假的时候 | , 每个人都去旅行吧 | 。
5-2 : 都旅行回来的时候, 都要带点儿吃的东西 | 。
5-3 : 比如说 | 我去京都玩儿的时候吧, 我也得带点儿什么东西 | ,
5-4 : 放在 (那个) | 我们那个宿舍一进门呢, 有个缝纫机 | ,
5-5 : 有 | 一个缝纫机, 放在那个缝纫机上 | ,
5-6 : 上面写着; ‘おみやげですどうぞ这是我带回来的礼品 | , 请大家吃吧。
’ |
5-7 : 就这样呢 | , 一个人 | 可以吃到好多地方的 | 。

例(5)は、(C)が「日本での現在の生活」をメイン・トピック (MT3) としているメイン・パラグラフ (MP3) の中で、「現在住んでいるアパートの生活」をサブ・トピック (ST2) として語っているサブ・パラグラフ (SP2) の展開部の一部である。

ここで(C)は、そのアパートの女子大生達の仲の良さを紹介している。そのアパートの女子大生は、旅行に行ったとき、他のみんなのためにおみやげを買ってきて、そのおみやげをミシンの上に置いておくのだが、そのアパートの中に入ってすぐのところ、一台のミシンが「実在」していることを、聞き手は知らない。そこで(C)はこの談話の展開部の中で‘有’の表現を用いて(5-4)、まずそのミシンの「実在」そのものを聞き手との共有の知識とし、そしてそれ以降の談話が展開されていく。

このように‘有’の表現は、その「実在」そのものを聞き手と共有の知識とする必要があると話し手が判断した場合には、談話の展開部においても用いられることがある。しかしその場合、そこで新たに談話の中に持ち込まれた事柄には、談話のトピックを新たな方向へ向かわせるほどの影響力はない。つまり、存現文によって新たに談話の中に持ち込まれた事柄は、必ず談話のトピックを新たな方向へ向かわせる働きをするが、‘有’の表現によって新たに談話の中に持ち込まれた事柄は提示部において用いられた場合においてのみこのような働きをし、展開部においてはこのような働きはしない。

以上、‘有’の表現の談話上の機能及び‘有’の後ろの名詞(句)の統語的特徴について考察してきた。言語資料には‘有’の表現例は 95 例あり、そのうち提示部で用いられているものは 23 例、展開部で用いられているものは 72 例であり、いずれもここで考察してきた談話上の機能と統語的特徴を有するものであった。

また、この考察からも解るように、従来一般に行われてきた、この‘有’の表現を動詞‘在’の表現と比較するという分析方法は、あまり有益ではなさそうである。動詞‘在’を用いた表現は、話し手と聞き手の間で、すでに共有の旧情報となっているものについて、単にその所在地を明らかにする表現であり、この点で‘有’の表現とは本質的に異なるものである。動詞‘在’の表現は本稿の考察の対象ではないので、ここではこれ以上言及しない。

以上、2.1 と 2.2 において、話し手と聞き手との間で共有の知識となっていない新情報であり、同時に聞き手にとっては不定のものであるが、話し手の意識の中では特定の指示の対象がある名詞（句）を談話の中に持ち込むための表現形式をみてきた。またこれらの表現形式には、その名詞（句）が述語動詞の後ろに位置するという統語上の共通点がみられるが、2.3 では、名詞句が、文頭に立つ‘外位語’の表現形式について考察していく。

2.3 ‘外位語’の表現（一）

話文の中には、同じ人や事物を指す要素が2つあり、一方は文頭に位置し、もう一方はそれを代名詞に置き換えて表現されるものがある。『汉语教科书』（P. 559～）では、このような表現形式の中の文頭の要素を‘外位語’と呼び、またその例として下記の〔48〕、〔49〕を挙げている。

〔48〕 掌握中文、学好专业，这是我努力的方向。

〔49〕 要去参观的同学，张同志已经替他们买好船票了。

以下、本稿でもこのような表現形式を、‘外位語’の表現と呼ぶこととする。

このような‘外位語’には、話し手の発話の時点において、話し手と聞き手との間で共有の知識となっていない新情報の場合と、発話の時点においてすでに共有の知識となっている旧情報の場合とがある。そしてこの表現形式は、‘外位語’の部分が新情報の場合と旧情報の場合とでは、その談話上の機能と‘外位語’の部分の名詞句の統語的特徴が異なる。

ここでは、談話の提示部に用いられる前者の場合、つまり文頭の‘外位語’が新情報である場合について、その談話上の機能と‘外位語’の部分の統語的特徴をみていくことにし、‘外位語’が旧情報の場合については、第4章で考察するが、まず、従来、この‘外位語’の表現がどのように扱われてきたかを概観し、コメントを加える。

2.3.1 従来統語論的分析

‘外位語’の表現を取り上げている先行研究は、以外と少ない。

まず『汉语教科书』（p. 559～）は、上記の〔48〕、〔49〕の例を挙げ、その文頭の要素については、単に「文の構造の外に位置する（‘处在构造之外’）」と記述しているだけである。

また、张志公等、林兴仁、黄章怡などでは、この‘外位語’を‘复说（繰り返し述べる）’あるいは‘复指（繰り返し指し示す）’という、より広い概念の一部として捉えられている。

张志公等1953（p. 158～）は‘复说’表現の中で、代名詞によって繰り返される例として、下記の〔50〕、〔51〕を挙げている。

〔50〕 青春，这是多么美好的时光啊！

〔51〕 这位同日本侵略者周旋了整整十年的老战士，他的作战经验是非常丰富的。

また、林兴仁1983 (P.92~) は下記の [52]、[53] を、黄章怡1987 (P.148~) は下記の [54]、[55] を、それぞれ‘复指’の表現の中で代名詞によって繰り返される例として挙げている。

[52] 祖国，这不是一个普通的词儿，这是一个至亲至爱的名字、尊贵的名字、神圣的名字。

[53] 不爱川北的人，我决不爱他。

[54] 夺取全国胜利，这只是万里长征走完了第一步。

[55] 这个人我认识他。

そして林兴仁は、この代名詞による‘复指’の表現には、下記の〈1〉と〈2〉の2つの働きがあると述べている。

〈1〉文頭の名詞句を強調する。

〈2〉文の構造を簡潔化する。

また黄章怡は、[55] を例に文の構造を分析し、‘我’は主語、‘这个人’は‘他’の‘复指成分’とする捉え方と、文全体を主述述語文とする捉え方の、2つがある、と述べている。

さらに、倪宝元等1985 (p.204) は下記の [56]、[57] を、吕叔湘1986 は下記の [58]、[59] を、それぞれ主述述語文の中の一類として扱っている。

[56] 劳动以后收获的愉快，那是任何物质享受都不能比拟。

[57] 国家的统一，人民的团结，国内各民族的团结，这是我们的事业必定要胜利的基本保证。

[58] 老张，他肯帮助人，人也愿意帮助他。

[59] 服务工作，清洁工作，城市离不开它，农村离不开它，工场离不开它，家庭生活离不开它。

以上、‘外位语’の表現について先行研究を概観してきたが、それには2つの流れのあることが解る。一つは张志公等や林兴仁のように、‘外位语’を‘复指成分’と捉えるものであり、いま一つは倪宝元等や吕叔湘のように、文全体を主述述語文とする捉え方である。また黄章怡はこの2つの捉え方がどちらも可能であるとしている。この表現形式の構造を‘复指成分’と捉えるのは、一つの言語表現に現れる代名詞や指示詞の表すものが、その表現の中に存在するということをいっているにすぎず、主述述語文と捉えるのは、単に一つの言語表現の表現形式の類分けであり、いずれも‘外位语’表現の名詞(句)の統語的特徴を記述するものではない。

また‘外位语’は、新情報の名詞句の場合と旧情報の名詞(句)の場合があるが、先行研究では、上記の例からも明らかであるように、すべて旧情報の場合を

取り上げており、新情報の場合については全く取り上げられていない。このことは、先行研究においては、「外位語」が「情報の新・旧」という視点から分析されていないことを意味している。しかし、「外位語」が新情報の名詞句の場合と旧情報の名詞（句）の場合とでは、その談話上の機能が異なり、このような名詞（句）の統語的特徴の違いによる談話上の機能の相違は、「外位語」表現を一文のレベルではなく、談話レベルで分析しない限り、明確にすることはできない。

また林兴仁には、「外位語」に「強調」の働きや文の構造を簡潔化する働きがあるとされているが、「強調」も談話のレベルにおいてはじめて導入され得る概念であり、「外位語」表現の名詞（句）の統語分析においても談話分析は不可欠である。

そこでここでは、談話の提示部に用いられる、「外位語」が新情報である場合の表現について、その談話上の機能と「外位語」の部分の統語的特徴を、談話の言語資料に現れた「外位語」の表現例をもとに考察していく。

2.3.2 「外位語」の表現と提示機能

下記の例(6)は、資料(い)の中で「外位語」の表現が用いられている部分を抽出したものであり、6-3において「外位語」の表現＝「我认识的出云市入泽先生，他事先呢给我写过一封信。」が用いられている。

例(6)：資料-(い)、インフォーマント-(B)

- 6-1 B：我利用（那个）春假的时候儿去了一趟就是出云市，
6-2 三月二十九号到四月五号。
6-3 当时去的时候儿吧，我认识的出云市（那个）入泽先生，他事先呢给我写过一封信，
6-4 说，要我（那个）休息的时候，休假的时候呢到他家去玩儿。
6-5 当时我想呢自己去呢有点儿寂寞，
6-6 我想约（那个）张丽群一块儿去，
6-7 结果张丽群呢不愿意去，没办法只好我自己去了。
6-8 因为我吧（那个）坐车吧晕车，
6-9 所以呢，我一听说要到远地方去旅行吧很高兴，但是，一听说要坐车呢，就特别发愁，
6-10 因为，我一晕车吧，就吃不下饭。

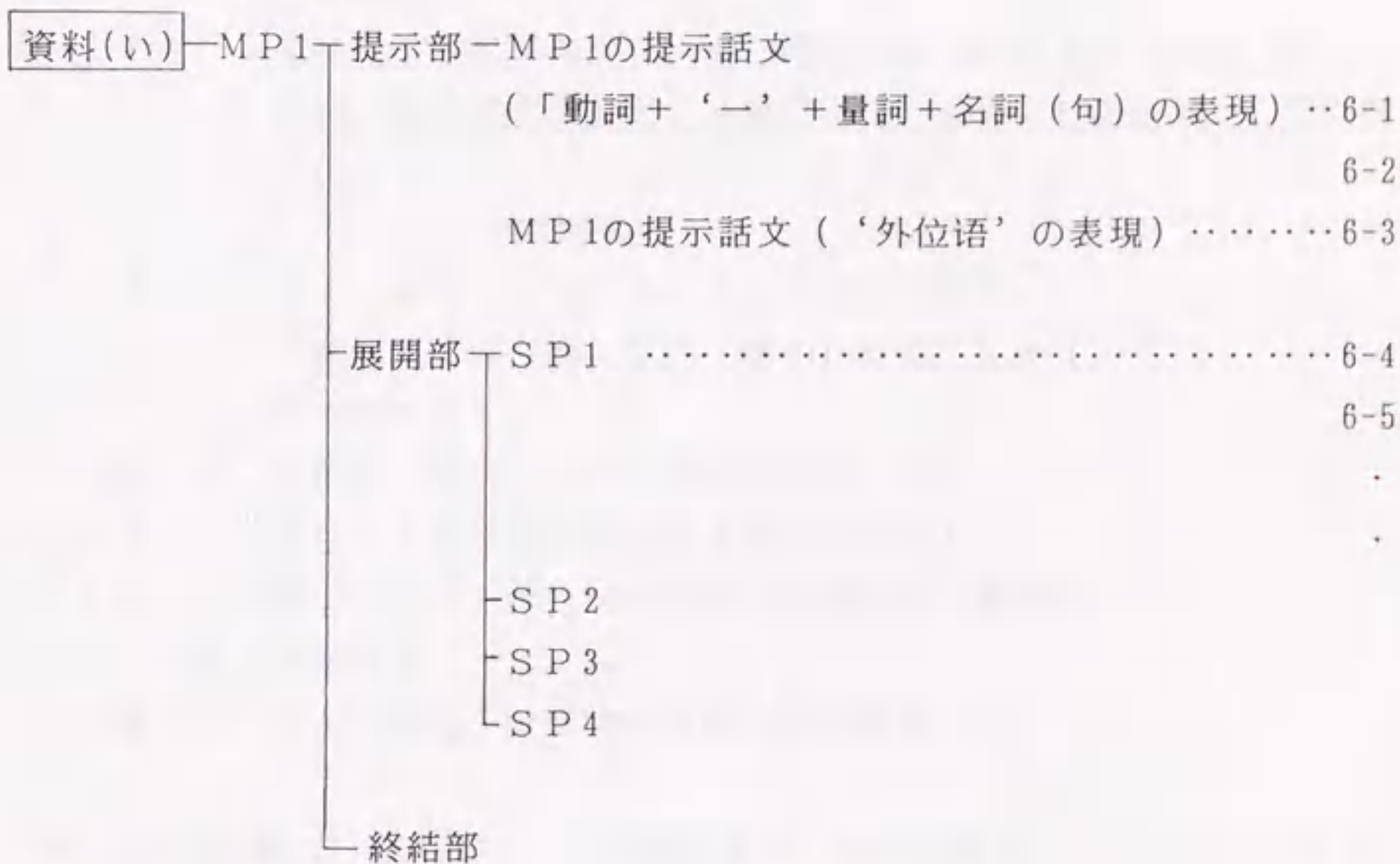
6-11 : 结果还是因为人家(那个)盛情难却吧!, 只好去了!。

資料(い)は、(B)が「春休みを利用して、出雲市の知り合いのところへ遊びにいったときのこと」が一貫したメイン・トピックとして語られている。上記の例(6)は、資料(い)の第一発話から、「一人で遊びに行きたいきさつ」をサブ・トピック(ST1)としたサブ・パラグラフ(SP1)を抜粋したものである。この中では6-3において‘外位語’の表現が用いられているが、例(6)の談話の展開を順に追いながら、6-3の‘外位語’の表現の談話上の機能をみていくことにする。

(B)は、まず6-1において、これから語ろうとしている談話のトピックを提示し⁹²、6-2で出雲市の知り合いのところへ遊びに行った期間を示し、そのあとの6-3において‘外位語’の表現＝‘我认识的出云市入泽先生,他事先呢给我写过一封信。’を用いている(‘我认识的出云市入泽先生’を、代名詞‘他’に置き換えて、もう一度表現している)。そしてこれ以降の談話の展開を追っていくと、この表現によって提示された‘入泽先生’は、これ以後、この談話の中で一貫した重要人物として語られていく。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、下記の《図(6)》のようになる。

《図(6)》



いま一つ、‘外位語’の表現が用いられた例をみることにする。

下記の例(7)は、資料(け)の中で‘外位語’の表現が用いられた部分を抽出したものであり、7-11で‘外位語’の表現＝‘我学校的那苏琪，她日语就是学成之前吧，从来没出过国，没到日本来过。’が用いられている。

例(7)：資料-(け)、インフォーマント-(K)と(L)

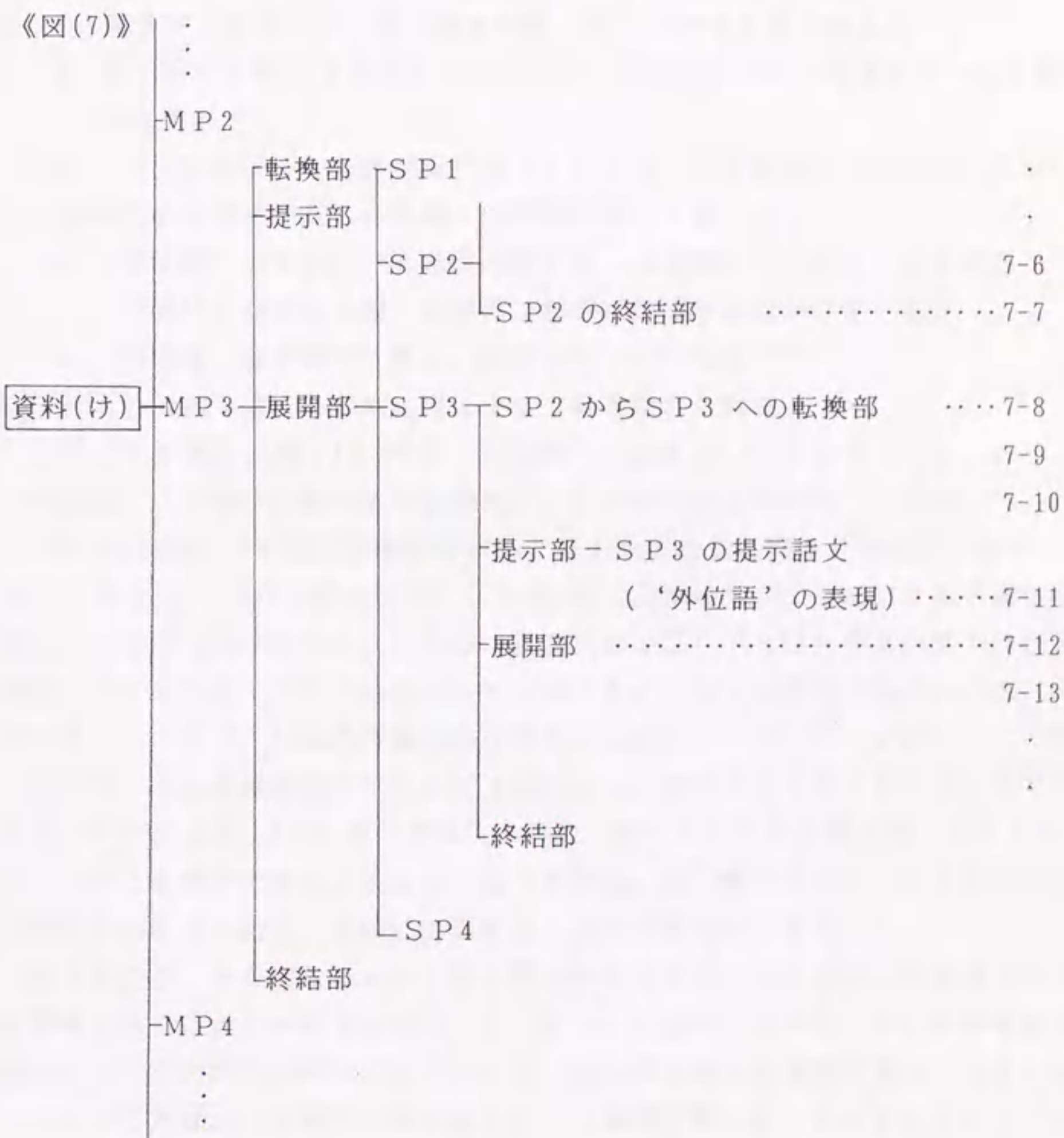
- 7-1 L：语言吧，也随着时间，随着时代的改变而改变。
- 7-2 :我(那个)我来日本之前，给我们(那个)处长提出来申请，
- 7-3 :其中就有一条，(那个)就在国内(那个)日语呀，怎么学也
|是不行，真的。
- 7-4 :就是你书本上的，课本是课本，
- 7-5 :现实的，现在日本那个社会，就是日语发展到什么程度，根本就
不知道。
- 7-6 :连一点儿，比如说，现在‘流行语’什么的，(那个)现在生活
方式呀什么的，全不知道。
- 7-7 K：对。
- 7-8 :也|不过，话又说回来，
- 7-9 :你要说，在国内学日语学不成吧，学不好吧，
- 7-10 :也不见得。
- 7-11 :就是我学校的那苏琪，她|她是从来没出过|嗯|就是(那个)
日语，就是学成之前吧，从来没出过，(那个)出过国|，没到日
本来过|。
- 7-12 :她说|她说的特别好。
- 7-13 :后来，她第一次到日本来，人家特别惊奇。
- 7-14 :人家问说“你在哪儿学的(那个)日语？”|
- 7-15 L：她说什么呀？|
- 7-16 K：她说的，她说：“我是在国内学的”|。
- 7-17 :人家以为她是在日本哪个大学毕业的呢|。
- 7-18 L：嗯|。但是，她在国内肯定经常和日本人接触吧？|
- 7-19 K：不知道|。
- 7-20 :不过，她是|好像她当过周总理的翻译|

例(7)は、資料(け)の中で、「日本語の学習、修得」をメイン・トピック(MT3)としているメイン・パラグラフ(MP3)の一部を抜粋したものである。こ

こでも例(7)の談話の展開を順次追っていくことによって、7-11の‘外位語’の表現の談話上の機能をみていくことにする。

例(7)を順にみていくと、7-1から7-7で一つのトピックが終結している。そして7-8から7-10で、(K)がトピックの転換を行い、次に、7-11において‘外位語’の表現＝‘我学校的那苏琪，她日语就是学成之前吧，从来没出过国，没到日本来过。’が用いられている（‘我学校的那苏琪’を、代名詞‘她’に置き換えて、もう一度表現している）。そしてこれ以降の談話をみていくと、これ以後、この‘外位語’の表現によって提示された‘苏琪’という女性のことがトピックとして語られている。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、下記の図(7)のようになる。



以上の例から、‘外位語’の表現がMPあるいはSPの冒頭の提示部において、これから語ろうとするトピックの方向づけとなる事柄を談話の中に持ち込むための提示話文として機能していることが解る。

次に、‘外位語’の統語的特徴について、先の2.1と2.2で考察した名詞(句)と比較しながら検討していくことにする。

上記の例(6)の6-3、例(7)の7-11の‘外位語’は、それぞれ‘我认识的出云市入泽先生’、‘我学校的那苏琪’であった。これらの名詞句は、存現文表現や‘有’の表現によって談話の中に持ち込まれた名詞(句)と比較すると、以下の3点において共通の特徴を持っている。

1. これらの名詞句は、発話の時点において、話し手と聞き手との間で共有の知識となっていない新情報であること。
2. 聞き手にとっては、誰であるか解らない不定の人物であること。
3. 話し手の意識の中では、この人だという特定の指示の対象をもった人物であること。

しかし、‘外位語’の表現が提示話文として用いられる場合、次の3点において、存現文の表現や‘有’の表現との相違がみられる。

4. ‘外位語’の中心になる名詞の前には、必ず聞き手がそれと特定するための助けとなるような、旧情報である限定成分が置かれている。
5. ‘外位語’は文頭に位置し、題目となっている。
6. ‘外位語’は、必ず代名詞によって置き換えられる。

この3点を順次、例(6)と(7)の‘外位語’の表現についてみていくと、6-3の‘外位語’(=我认识的出云市入泽先生)の中心になる名詞は‘入泽先生’、7-11の‘外位語’(=我学校的那苏琪)の中心になる名詞は‘苏琪’であり、そして6-3の‘我认识的出云市’、7-11の‘我学校’が、中心になる名詞に前置している限定成分である。これらの限定成分は話し手と聞き手との間で共通の認識に立てるものであることによって、聞き手にとって新情報であるはずの‘入泽先生’、‘苏琪’がある程度の限定を加えられることになり、それによって話し手には、それが聞き手にとって定(definite)的なものとなっていると判断される。そのことは、7-11の‘苏琪’の前に‘那’という指示詞が用いられていることから明かである。このように‘外位語’が、聞き手にとって定的なものと判断されるがために、文頭に位置することが可能なのである。

限定成分が、中心になる名詞の前に置かれていても、その名詞句全体はやはり新情報であることにはかわりはない。そして5.で述べたように、この名詞句は文頭に立ち、この話文の題目となっている。新情報が話文の文頭の題目の位置に立つということは、「旧情報+新情報」という情報伝達のルールに合わないことに

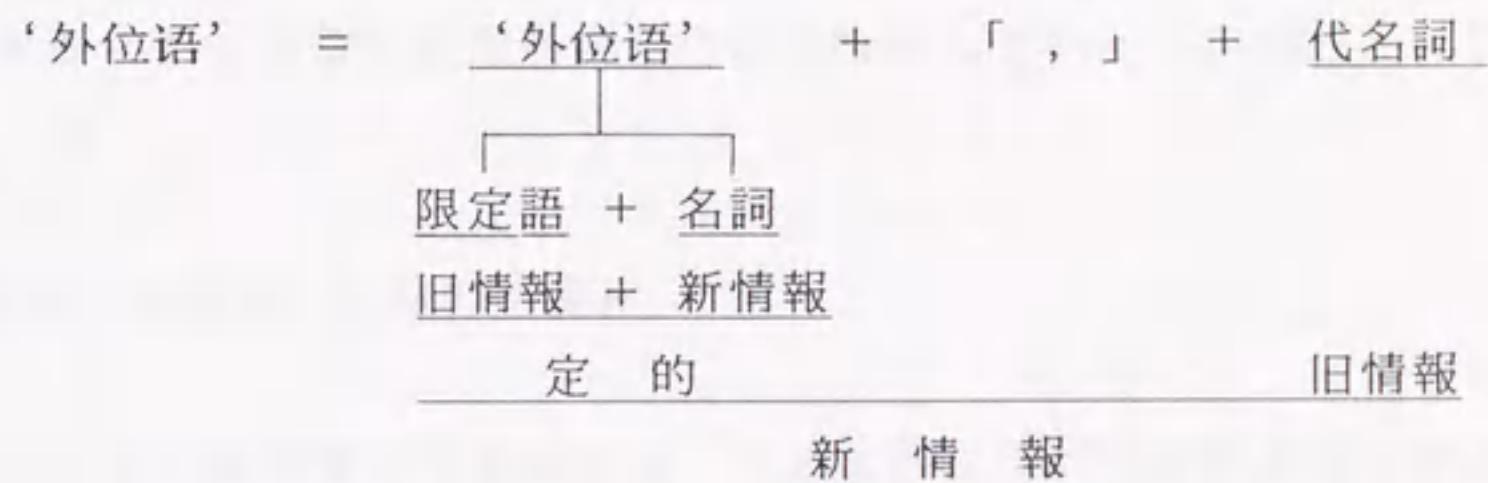
なる。そこで、新情報である名詞句と近い位置で、それをもう一度代名詞で表現するという形式をとることによって、旧情報化するという措置がとられるのである。これが‘外位語’の表現であり、その名詞(句)の統語的特徴である。

以上の考察から、‘外位語’の談話上の機能とその名詞(句)の統語的特徴は、以下のように記述することができる。

☆談話上の機能：

‘外位語’が新情報である場合の表現は、談話の中で提示話文として機能している。

☆統語的特徴



なお言語資料には、‘外位語’が新情報の場合の表現例は16例あった。そしてこれらの表現例はいずれもここでの記述にあてはまるものであった。

第3章 談話の展開部

話し手は、談話の提示部において、これから話そうとしているトピックの方向づけをして聞き手をその談話の中へ誘導した後、その談話の本題である展開部へと話を進めていく。そして展開部において話し手は、聞き手がその談話の論点を明確に理解できるように配慮する。そのために、聞き手により効率よく、より効果的に、そして過不足なく情報伝達のできる表現形式を選択することになる。その場合、「情報の重要度」と「談話の結束性」の問題が優先的に考慮される。

そこで本章においては談話の展開部に用いられ、情報の重要度と談話の結束性の問題とかがかわりの深い表現形式について考察していく。

3.1 談話の展開部と情報の重要度

言語によって伝達される情報には、その言語表現の談話における機能の相違によって、重要度の上で差異がみられる。従って、話し手は通常、この情報の重要度を考慮して表現形式を選択することになる。

この点については、福地肇1985 (p.13~) に次のような指摘がみえる。

「伝達する情報には重要なものと、それほど重要でないものがある。旧情報に較べて新情報が重要なのはもちろんであるが、新情報の中にもより重要なものとそうでないものがあり、旧情報の中にもやはり重要度の違いがある。伝達する情報が全て同じ程度に重要であっては聴者にとって負担である。話者は重要な情報とそうでない情報を適切に配列し、重要な情報には聴者の注意が向きやすいように伝達するのである。」

ここで福地は、新情報は旧情報と比較して、相対的に重要度が高いと記しているが、展開部では、新情報の名詞(句)が導入されることは少なく、それはおもに提示部かあるいは転換部においてである。また、たとえ展開部で導入されたとしても、その名詞(句)は、提示部あるいは転換部で導入された場合と違って、トピックの方向を換えるほどのものではない。そこで展開部においては、主として旧情報の名詞(句)の重要度の差異を考慮して、表現形式が選択されることになる。そして、福地が述べているように、重要な情報は聞き手の注意が向きやすいように表現が工夫される。

そこで、ここでは、展開部の中で重要度の高い旧情報である名詞(句)を明示している‘把’構文についてみていくことにする。

3.1.1 ‘把’構文の従来統語論的分析

「前置詞‘把’ + NP + VP」の語順からなる構文を本稿では‘把’構文と呼ぶことにする。

従来‘把’構文は、述語の後ろに置かれる目的語が、前置詞‘把’によって述語の前に取り出されたものであるといわれてきた。つまり、ある文が通常の語順においては、文の成分が「主語 - 述語 - 目的語」の順に並ぶものであることを前提とし、その文が前置詞‘把’を用いることによって「主語 - ‘把’ - 目的語 - 述語」という語順に変わるとするのである。しかし、一つ一つの言語表現は、それぞれその使用場面において過不足のない情報伝達の上で、それぞれが他の表現と代替することのできない表現価値をもっているものであり、「通常の語順」あるいは「表現の基本形」なるものを設定し、現実に存在し生き生きと機能している表現をその変形だとする捉え方は根本的に誤りである。さらに、この捉え方は、「言語事実をあるがままに記述する文法体系の確立」という近年来の統語論研究で一般的認識となっている流れに逆行するものである。ともあれ、このような語順変化を前提とした‘把’構文が成立するための統語論上の条件は、従来、目的語の側面から、また述語の側面から分析されてきた。それによると、‘把’構文成立の条件は、次の3つにまとめられる。

- 〈1〉目的語 (= ‘把’の後ろの名詞(句)を指す) が定 (definite) のものであること。
- 〈2〉述語が目的語に対して「処置」の意味を表すものであること。
- 〈3〉述語が「述語動詞 + 付加成分」の構造であること。

しかし〈2〉については、王力1954a が‘把’構文を述語の意味的特徴から‘処置式’と呼んで以来、その名称とともに、賛否両論あり、多くの議論がなされてきた。例えば呂叔湘1955や胡附・文焯1957などは“処置式”とは呼ばず、ただ‘把字用法’、‘把字句’と呼んでいる。「処置」とは、行為者の行為がその対象に対して積極的に働きかけて処置するという意味であり、‘処置式’という名称は、‘把’構文の述語がこのような意味的特徴を有しているということから命名されたものである。しかし実際には、その行為が積極的、意図的、あるいは意識的なものとはいえない例が多くみられ、そこでこの名称に対する批判が出てきたのである。例えば下記の[60]から[62]は、その行為が行為者自身が意図的あるいは意識的にすることができる例であるが、[63]から[65]は、その行為が非意図的・非意識的なものである⁹²。王力1954b ではこのような表現

を‘処置式’の‘转化(derivation)’であるとして、‘継事式(consecutive form)’と呼んでいる。

[60] 你把这句话再想想看。

[61] 把三百级台阶一口气走完。

[62] 把两手拍了一下。

[63] 把日子误了。

[64] 把机会错过了。

[65] 先把太太得罪了。

このように王力は、‘把’構文を述語によって2つに分ける立場に立っているが、これに対して[60]から[65]を同一視する立場をとっているのが、呂叔湘や胡附・文焯、杉村博文1984などである。

杉村は、[60]から[65]の‘把’構文に共通する‘文法的意味’を探ろうとしており、その見解は、以下のようにまとめることができる。

[63]から[65]は「心理的屈折・情動を言語の上に投影して生じた規則違反」であり、「このようにして生まれた規則違反も、ひとたび形式化し定着したなら、違反を犯す動機となった心理の屈折や情動の喪失を代償として、新たな規則として正当な地位を獲得することになる」。

そして杉村は、「この規則違反は自身の文法的意味を有しており、その文法的意味は“処置式”から決して逸脱するものではなく」、すべての‘把’構文を通して「形式と意味の結合が立派にみられる」と結んでいる。

[60]から[62]と[63]から[65]を二分しない立場に立とうとする杉村の姿勢は十分に理解されるが、しかし、[60]から[62]を「正当」とみなし、[63]から[65]を「正当なものの規則違反が形式化し定着したもの」とする見解は、基本的には、王力と同様[60]から[65]を二分する立場に立ったものであることに変わりはない。

言語事実として、行為者がその対象に対して積極的に働きかける意図的、意識的な表現とそうでない表現が存在する限り、それを一類に包含したり、二類に分割したりすることはさしたる意味はない。ここで問題とされなければならないことは、これらの‘把’構文の‘文法的意味’が同じであるかそうでないか、統語的特徴がどうであるかである。この点で‘把’構文の成立条件とされている前述の3項が検証されなければならないが、‘把’で受ける名詞(句)の「定・不定」の問題は第2章でふれたように、談話の展開を離れて論じられることではない。また、「処置」かそうでないかについても、例えば、‘把姑娘的东西丢了。’

(呂叔湘1955、p.179)において、「彼女の物をなくした」は一般的には非意図的、非意識的な行為とされるが、談話の展開によっては、意図的、意識的な行為

である場合もある。さらに、述語動詞に付加される成分は、動作、行為の結果や状況を表すものであり、situation が確定しているか、それと想定できる場合に用いられるものである。

このように、「把」構文の統語的特徴とされる3つの成立条件はいずれも談話の展開と深くかかわっており、一文のレベルで分析できるものではない。

なお、呂叔湘1955、传雨贤1981、宋玉柱1986、鈴木晴子1988 は、「把」構文は、従来「把」を用いることによって目的語を述語の前に取り出した表現であるという前提に立っているため、「述語-目的語」の構文(=「动宾句」)への変換が可能であるか不可能であるかという観点から、「把」構文が成立するための統語論上の制約を分析しているが、前述のように、この分析方法はあまり意味のあるものではない。なお、これについては3.1.2で触れることにする。

以下、談話の言語資料に現れた「把」構文の表現例をもとに、「把」構文成立のための3つの条件(上記の〈1〉から〈3〉)を検討しながら、その談話上の機能と「把」に後置する名詞(句)の統語的特徴について考察していく。

3.1.2 談話における「把」構文の機能

従来、「把」構文が成立するための条件といわれてきたのは、次の3つであることはすでに述べた。

- 〈1〉目的語(=「把」の後ろの名詞(句)を指す)が定(definite)のものであること。
- 〈2〉述語が目的語に対して「処置」の意味を表すものであること。
- 〈3〉述語が「述語動詞+付加成分」という構造であること。

以下、条件〈1〉から順次考察を進めていくことにする。

下記の例(8)は、資料(あ)の中から「把」構文の表現が発話されている部分を抽出したものであり、8-12で「把」構文=「把我也介绍上去了」が用いられている。

例(8): 資料-(あ)、インフォーマント-(A)

- 8-1 A: 我昨天呢|, 去丰田市|参加了一次|朋友的婚礼|。
- 8-2 : 我来到日本以后|, 这已经是第二次参加朋友的婚礼了|,
- 8-3 : 但是第一次和第二次呢, 不同|。

- 8-4 : 第一次呢, 只出席了! 披露宴! , 并没有参加披露宴前面的仪式! 。
- 8-5 : 因为, 我到日本来以后呢! , 特别想! 研究一下日本的! 风俗习惯! , 了解一些! 民俗方面的东西! 。
- 8-6 : 所以呢, 非常想参加一次前面的(那个)仪式! 。
- 8-7 : 但是听说呢! , 在日本呢! , 参加前面的仪式呢! , 一般都是家里人! , 还有些亲戚! , 外人呢一般的都不好参加! 。
- 8-8 : 所以呢, 后来我找了朋友以后, 跟朋友说! , 说“我一定想! 看一看! , 如果说不能参加呢! , 站在其他地方看一看举行什么样的仪式! 也可以的! 。”
- 8-9 : 这样呢, 朋友就同意了我的! 要求! , 昨天呢, 我就! 跟着他们一起呢, 参加了前面的仪式! 。
- 8-10 : 仪式呢, 一开始大家进去以后! , 在神前呢, 举行了各种各样的活动! 。
- 8-11 : 完了以后呢, 又! 一直到最后尾儿! 双方的家庭就是新娘的家庭跟新郎的家庭呢! , 互相进行了介绍! 。
- 8-12 : 因为, 我既然参加了呢! , 所以呢, 把我也介绍上去了! 。
- 8-13 : 我也觉得非常难为情! ,
- 8-14 : 因为跟大家也不认识! , 只是想看一看! , 结果也介绍了! 。
- 8-15 : 完了以后呢, 也参加了! 披露宴! 。

資料(あ)は、「日本と中国の結婚式の違い」が一貫したメイン・トピック(MT1)となっており、またこれは7つのサブ・トピック(ST1~7)に分けられる。上記の例(8)は、資料(あ)における(A)の第一発話から、「ある日本人の結婚式に参加したときのこと」をサブ・トピック(ST1)としたサブ・パラグラフ(SP1)全体を抜粋したものである。この中では8-12で‘把’構文=‘把我也介绍上去了’が用いられており、この表現における‘把’の後ろの名詞は‘我’である。‘我’とは資料(あ)における(A)のことであり、これは聞き手にとっては「定」のものである。

いま一つ、‘把’構文の表現例をみることにする。

下記の例(9)は、資料(お)において、「中国人の‘食’に対する考え方」をメイン・トピック(MT7)とするメイン・パラグラフ(MP7)の中で、(F)が中国が貧しかった頃を題材としたある漫才の内容を語ったものである(ST3=SP3)。

例(9): 資料-(お)、インフォーマント-(E)と(F)

- 9-1 F：你说起中国穷的事情来了哈丨，
- 9-2 : 我听丨听过一个相声丨，
- 9-3 : 天津人说的哈丨，天津的一个说相声的老头丨。
- 9-4 : 单口相声你听过没有？丨
- 9-5 : 就是
- 9-6 : 中国特别穷的时候丨，有一个村子丨，有一家（这个）丨特别穷丨。
- 9-7 : 老头、老婆丨，就是老夫妻呀丨，两个人在那儿住。
- 9-8 : 那房子吧丨，漏雨。
- 9-9 : 夏天漏雨，冬天透风丨，就是丨门子也（那个）丨破门、破户的哈丨。
- 9-10 : 住在里边。
- 9-11 : 家里边什么财产丨财产都没有丨，
- 9-12 : 就有一个坛子丨，坛子里边呢，放着半坛子小米丨。这就是丨。
- 9-13 : 当时呀丨，因为是饥荒啊，那是他家最主要的，就是丨财产啊丨。
- 9-14 : 有一天晚上呢丨，老头、老太太还没睡着丨，
- 9-15 : 老头呢，在炕上躺着丨抽旱烟丨，老太太呢，迷迷糊糊地丨半睡半醒的丨。哈哈。
- 9-16 : 半夜了丨，（这个）小偷就来了丨。
- 9-17 : 那小偷儿呢丨，偷偷地就丨因为它没有门呐丨，那门就开着呢，夏天丨。小偷就钻进来了丨，钻进来就摸丨，摸摸摸就摸着（这个）坛子了丨。
- 9-18 : 手伸进去一摸丨，‘啊！丨，是小米’丨。
- 9-19 : 当时最贵重的就是吃的了丨。
- 9-20 : 这小偷说：“好咧丨，我就把这小米拿回去吧”丨。
- 9-21 : 他就准备把这个小米呢丨，带回去丨。
- 9-22 : 他就把（这个）上衣脱下来铺在地上丨，
- 9-23 : 完了，拿这个坛子准备把这小米……丨。
- 9-24 : 因为（这个）抱着坛子走丨特别沉吧丨。
- 9-25 : 然后他把这小米想倒在（这个）衣服上来一包丨，卷着就走了，不是丨。
- 9-26 : 当时呢丨，老头就发现了丨。
- 9-27 : 老头烟袋锅子丨就是丨（那个）当时烟灰已经噎掉了，没有火星儿了啊丨。
- 9-28 : 小偷还以为他俩都睡着了丨。

- 9-29 : 老头就把(那个) 小衫子啊 | , 他的(那个) 上衣呀, 一勾 | , 一团 | , 放在自己被窝里不吭气了 | 。
- 9-30 : 那个小偷呢 | , 拿这个坛子“哗叹” | 回头啊 | , 抱起来回头“哗”就倒地上了 | 。
- 9-31 : 完了, 一摸 | , 小褂没了 | 。
- 9-32 : 小偷怎么摸都没有 | , 小偷就 | 特别着急 | ,
- 9-33 : 他纳闷啊, 纳闷就 | “嗯?” (这个这个) ‘嗯’声就出来了 | 。
- 9-34 : 当时那老婆呢, 就醒了 | ,
- 9-35 : 老婆就“哎呀! | , 老头子啊 | , 小偷进来了” | 。
- 9-36 : 老头就说“没小偷你放心吧!” | 。
- 9-37 : 那小偷一听让人发觉了 | , 赶快就猫那儿 | , 半天没吭声 | 。
- 9-38 : 过了那么十来分钟 | , 觉得可能又睡着了 | , 他起来又摸 | 。
- 9-39 : 又摸又摸还没有 | , 小偷怎么想都怎么不对头儿, 就纳闷儿得不行啊 | , “嗯?” 又“嗯”出来了。哈哈。
- 9-40 : 这老婆子赶快站起来说 | , “唉 | , 老头子啊, 快起来吧, 还是小偷来了” | 。
- 9-41 : 老头儿说: “没有 | , 绝对没小偷 | , 你放心睡觉吧” | 。
- 9-42 : 那小偷不乐意了 | , 小偷说 | , “没有? | , 没有我小褂哪去啦?” | 哈哈 | 。
- 9-43 E: 哈哈, 完了 | , 被抓住了 | 。
- 9-44 F: 反有这么一个笑话 | 。
- 9-45 F: 挺有意思的啊 | 。

この話は、貧しい老夫婦の家に盗みに入った泥棒が、その老夫婦の唯一の財産である「粟」を盗もうとしたが、逆にその家の主であるおじいさんに、自分の「上着」を盗まれそうになったという内容である。(F)は、この中で‘把’構文を6回用いている(9-20、9-21、9-22、9-23、9-25、9-29)。この6回の‘把’構文の‘把’の後ろの名詞(句)をみると、そのうち4回は‘这小米(=粟)’(9-20、9-21、9-23、9-25)であって、残りの2回は‘上衣=小衫子(=上着)’(9-22、9-29)であり、これらはすべて聞き手にとって「定」のものである。さらにもう一つ、下記の例(10)をみてみよう。

例(10): 資料-(お)、インフォーマント-(E)と(F)

- 10-1 E: 不过话又说回来了 | ,

- 10-2 : 中国人有一个不好的地方, 就是实在太爱吃|。
- 10-3 : 中国咱们有句话叫“民以食为天”。
- 10-4 : 反正一天到晚就是为了吃|,
- 10-5 : 就是|而且呢, 就是|解放以后啊|, 政府的第一个目标|, 就是|首先得解决吃饭的问题|, 是吧|。
- 10-6 : 所以(那个)|老毛啊|, 就是|(这个)|在文化大革命的时候儿也是|, 第一个话就是‘深挖洞, 广积粮’|。
- 10-7 : 广积粮|, 只要有了粮(这个)|怎么说|手里有粮|, (这个这个)心里不慌什么的|。
- 10-8 : 所以中国人把(这个)吃|把(这个)吃看得是特别重要的啊|。
- 10-9 : 而且|, 但是呢|, (这个)|这方面重要|,
- 10-10 : 比如在文化方面哈|, 在|精神方面呢|, 就好像有时就不那么重要了啊|。

例(10)は、資料(お)の「中国人の食に対する考え方」をメイン・トピック(MT7)としたメイン・パラグラフ(MP7)の中で、「中国人は食べるということをいかに重視しているか」ということをサブ・トピック(ST1)としたサブ・パラグラフ(SP1)の一部である。

この中で(E)は、10-8で‘把’構文=‘中国人把吃看得是特别重要的啊’を用いている。この表現において‘把’の後ろの名詞相当語は‘吃(=食べること)’であるが、これは上記の例(8)、(9)の場合と違って、「定・不定」という概念があてはまらない。

このように例(8)、(9)、(10)から解るように、‘把’の後ろの名詞(句)は、例(8)、(9)のように、聞き手にとって「定」のものの場合もあるが、例(10)のように、「定・不定」の概念があてはまらない場合もあり、〈1〉を‘把’構文成立の条件とするのは適切ではない。

そこで以下では、上記の言語資料をもとに、‘把’の後ろの名詞(句)の特徴について検討し、同時に‘把’構文の談話上の機能を考察していく。

これを考察するにあたって、まず例(8)の談話の展開を、順を追ってみていくことにする。

(8-1, 8-2)

- ・(A)はこれまでに二度日本人の結婚式に出たことがある。

(8-3, 8-4)

- ・しかし一度目は披露宴に出席しただけで、披露宴の前に行われる結婚式には出席しなかった。

(8-5,8-6)

- ・(A)は日本の風俗習慣をより深く知るため、ぜひとも結婚式に出席したいと思った。

(8-7)

- ・しかし日本では、結婚式には普通、家族と親族しか出席しないと聞いていた。

(8-8,8-9)

- ・そこで友人に頼んで、何とか結婚式に出席させてもらった。

(8-10,8-11)

- ・結婚式の最後に、新郎と新婦の家族の紹介が行われた。

(8-12)

- ・そしてその結婚式には(A)も出席していたので、(A)も紹介されることとなった。

(8-13,8-14)

- ・新郎新婦の家族と全く面識の無い(A)は、そのことをとても心苦し思った。

(8-15)

- ・そのあと、披露宴にも出席した。

以上が例(8)の談話の展開である。8-12の‘把’の後ろの名詞=‘我’は(A)自身のことであり、例(8)における‘我’が(A)自身のことであるということは、資料(あ)の(A)の第一発話の時点から、すでに話し手と聞き手の間で共有の知識である旧情報となっている。そして資料(あ)のSP1は、(A)が日本人の結婚式に出席した際の経験を語ったものであるので、(A)はいうならばこのSP1の登場人物の中の主人公である。しかし‘把’の後ろの‘我’は、ただ単にSP1の主人公を意味しているだけではない。‘把’の後ろの‘我’は、‘我’=(A)の出席した結婚式の主催者にとっては、新郎側にとっても新婦側にとっても、全くの赤の他人である‘我’である。このことは8-9までのところで聞き手に伝達されている。そして結婚式の主催者が、全くの赤の他人である‘我’を紹介するという行為は、通常行われる行為ではなく、非常に特異な行為である。(A)はその特異な行為がなされたことを‘把’構文を用いて表現しているのである。つまり、このSP1全体の談話の中で(A)が最も伝えたい情報が8-12の内容なのであり、SP1の最初(8-1)から‘把’構文の前文(8-11)までは、8-12の‘把’構文での内容を伝達するための伏線である。

次に例(9)について検討していく。

例(9)の中の‘把’の後ろの名詞(句)である‘这小米’と‘上衣’は、やは

り話し手と聞き手の間で共有の知識となっている旧情報である。‘这小米’はその老夫婦の家にある「粟」のことであり、また‘上衣’は泥棒の「上着」である。しかしこの話においては、どちらもただ単にそれだけのことを意味しているだけではない。‘这小米’と‘上衣’のこの話の中での意味を探っていくため、‘把’構文が用いられている発話の内容を、順を追って試みていくことにする。

(9-20、9-21)

・泥棒が粟を持って帰ろうとする。

(9-22)

・泥棒が上着を脱いで地面に敷く。

(9-23、9-25)

・泥棒が粟を上着でくるんで持って行こうとする。

(9-29)

・その家の主であるおじいさんがそれに気づいて、その上着をキセルで引っかけて自分の寝ている布団の中に入れる。

これらは、この話の主要な登場人物である「おじいさん」と「泥棒」の、‘小米’と‘上衣’を巡る行為のすべてである。この中の‘小米’は、その老夫婦の唯一の財産であり、‘上衣’は、その唯一の財産である‘小米’をこれに包んで盗もうとして、逆におじいさんに盗まれそうになった‘上衣’であり、またこれが原因で主人に捕まってしまった‘上衣’である。いうならば、この2つの名詞(句)はこの話の中の key-word であり、この key-word を巡る行為のすべてが‘把’構文を用いて表現されているのである。

さらにもう一つ、例(10)について試みていく。

例(10)は「中国人の食に対する考え方」をメイン・トピックとして語っている談話の一部である。この‘把’の後ろの名詞相当語、つまり‘吃(=食べるということ)’は(E)と(F)との間で共通の認識に立てるものであり、もちろん旧情報である。しかもそれはこの談話のメイン・トピックそのものであって、「昔から中国人が身体における頭と同様のもの」として考えてきた‘吃’なのである。そしてこの話文における行為者である中国人が、‘吃’をどのように見なしているかの見解(‘特別重要’=特に重要である)は、そのまま(E)のこのトピックに対する見解でもある。つまり(E)は、このメイン・トピックそのものに対する自分の見解(=「中国人は食べるということを特に重要に考えている」)を、‘把’構文を用いて(F)に伝達しているのである。

以上の考察から、‘把’構文の後ろの名詞(句)の統語的特徴は次のようにまとめることができる。

‘把’の後ろの名詞(句)は、話し手と聞き手の間で共通の認識や知識となっている旧情報であり、その談話において特別な意味が付加されているものである。例えば、例(8)の‘我’は、ただ単にそれが「その談話における主人公である私」であるだけでなく、「結婚式の主催者と何の関わりもない赤の他人である私」という意味が付加された‘我’である。また、例(9)の‘这小米’と‘上衣’も、それが単に老夫婦の家にある‘小米’、泥棒の‘上衣’というだけでなく、「老夫婦の唯一の財産である粟」という意味が付加された‘小米’であり、「これに粟を包んで盗もうとし、それが原因で主人に捕まってしまった上着」という意味が付加された‘上衣’である。同様に、例(10)の‘吃’もただ単に食べるということの意味しているのではなく、「その談話のトピックそのもの」であって、「昔から中国人が身体における頭と同様に重要なもの」として考えてきたという意味が付加された‘吃’なのである。そして、その談話において特別な意味が付加された‘把’の後ろの名詞(句)は、その談話における key-word となっており、またその表現の伝達内容は、その談話において非常に重要な key-information である。

次に、述語が目的語 = ‘把’の後ろの名詞(句)に対して「処置」の意味を表すものであるという条件〈2〉について検討していく。

「処置」の意味を表すかどうかというのは、述語の表す動作、行為が意図的、あるいは意識的なものであるか、それとも非意図的、あるいは非意識的なものであるかということに関わる問題である。

このような観点から、例(8)、(9)、(10)に現れた‘把’構文の中の述語部分をみると、例(8)の‘介绍上去’、例(9)の‘拿回去’、‘带回去’‘脱下来’、‘倒在’、‘勾、团、放在’は、いずれも動作主、行為者によって意図的、ないしは意識的になされた動作、行為である。しかし例(10)の‘看’は、例(8)、(9)と比較してみると、意図的であるのか非意図的であるのか、あるいは意識的であるのか非意識的であるのかの判断はつきにくい。この点をさらに明確にするため、もう一つ、述語が明らかに意図的な動作、行為でも意識的な動作、行為でもない‘把’構文の用いられた言語資料の例を挙げることにする。

下記の例(11)は、資料(い)の中で‘把’構文が用いられている部分を抜粋したものである。

資料(い)は、(B)が「春休みを利用して、出雲市の知合いのところへ遊びに行ったときのこと」が一貫したメイン・トピックとして語られている。例(11)は、その中の「名古屋から出雲駅に到着するまでの様子」をサブ・トピック(ST2)としたサブ・パラグラフ(SP2)であり、2.3の例(6)の続きの部分である。

例(11)：資料-(い)、インフォーマント-(B)

- 1 1 - 1 B：当时呢，我买的呢 |，是从名古屋到 | 冈山的（那个）新干线 |。
- 1 1 - 2 : 从岡山到（那个）出云市呢没有新干线 |，只得（那个）坐（那个）国铁 |。
- 1 1 - 3 : 结果而且（那个什么那个）国铁吧从岡山到（那个） | 出云市的（那个）国铁吧还特别 | 就是摇得厉害 |，晃得厉害 |，很晃 |。
- 1 1 - 4 : 所以呢，这样呢，碰上我这个（那个）晕车的人呢，就 | 更（那个）晕了 |。
- 1 1 - 5 : 当时我下了（那个）就是从名古屋坐新干线吧，到（那个）岡山以后呢 |，还可以 |，
- 1 1 - 6 : 因为很快 |，新干线呢，又挺稳的 |，所以，我一点儿感觉也没有 |。
- 1 1 - 7 : 然后，从（那个）岡山吧 |，坐（那个）国铁到出云市 |，可给我折腾坏了 |，
- 1 1 - 8 : 上去了以后，那要乘（那个）三个多小时的车呢 |，
- 1 1 - 9 : 就是国铁要坐三个多小时 |。
- 1 1 - 10 : 当时吧，二十分钟以后呢，我就不行了 |，
- 1 1 - 11 : 我就要 | 好像要吐 |，特别恶心 |。
- 1 1 - 12 : 然后我索性呢，就让自己睡着 |，
- 1 1 - 13 : 结果开始呢，老是睡不着 |，睡不着 |，
- 1 1 - 14 : 到最后了，我记的吧，是 | 下午 | 四点半 |，五点半 | 到出云市 |。
- 1 1 - 15 : 我把时间记错了 |，
- 1 1 - 16 : 其实呢，人家是四点半就到出云市 |。
- 1 1 - 17 : 后来我一想呢，后面还有两个小时呢，
- 1 1 - 18 : 因为这时候我看表的时候呢，是三点半 |。
- 1 1 - 19 : 我一想后面到五点半呢，还 | 还有两个小时干脆睡一觉吧 |，结果我就睡着了 |。
- 1 1 - 20 : 睡着了嘛，到（那个）出云市的时候儿 |，嗯 | 终点 |，正好国铁是终点 |。
- 1 1 - 21 : 结果我睡着了 |，旁边的人呢 |，也没人叫我 |，人家呢，都下去了 |。
- 1 1 - 22 : 都下车了 |，我自己还睡呢 |。
- 1 1 - 23 : 多睡了（那个）可能多睡了有一刻钟呢 |，结果没人管我 |，人

家终点站也没人管。

- 1 1 - 2 4 : 最后呢，可能是不知道那个好心肠的人吧，去把（那个）！车长给叫来了！，
- 1 1 - 2 5 : 然后呢，就把我给叫醒了！，说；“你还不下去呀？”！
- 1 1 - 2 6 : 结果我在（那个）！睡梦中马上醒过来了哈！，
- 1 1 - 2 7 : 我不知道怎么回事儿！，吓我一跳！。
- 1 1 - 2 8 : 我想怎么回事儿！，完了我说；“我要到出云市”！，操一口（那个）！不流利的（那个）！日语呀！。
- 1 1 - 2 9 : 因为，我还没（那个）就睡眼惺松的那样子了！，所以人家一看我，肯定想呢，这肯定是！外国人！。
- 1 1 - 3 0 : 所以我呢，我说的；“我要到出云市”！。
- 1 1 - 3 1 : 他们说；“这就是出云市”！。
- 1 1 - 3 2 : 我又问；“我说这不是”！。
- 1 1 - 3 3 : 我一看表呢，我说；“是四点！，应该是五点半到！，现在刚四点半！，所以这不是出云市”！。
- 1 1 - 3 4 : 我还跟人家辩解！，还跟人辩解！，结果人周围的人都笑我！。
- 1 1 - 3 5 : 然后外面呢，就是车站上有卖东西的小摊子的那些哈！，
- 1 1 - 3 6 : 小卖部的那些服务员呢！，也笑我，都在外面看我！。
- 1 1 - 3 7 : 可能以为又是什么呀，事件呢，发生了，说；“这个人怎么不下车呀”！
- 1 1 - 3 8 : 简直是我特别觉得（那个）丢了面了哈！。
- 1 1 - 3 9 : 我当时下来，
- 1 1 - 4 0 : 因为（那个什么）我到出云市以后！，人家那入泽先生呢，和他的！夫人要来接我！，接站的！。
- 1 1 - 4 1 : 结果到站上！找不见我！，都很着急！。
- 1 1 - 4 2 : 我认识入泽先生吧！，他已经是七十岁的老人了！，他的夫人呢已经六十二岁了！。
- 1 1 - 4 3 : 所以，两位老人呢，在车站也急坏了！，也找我！，找半天找不着！。
- 1 1 - 4 4 : 最后我呢！，晃晃悠悠刚睡醒的那样子，还没睁开眼睛就下来了！，好像看到救星一样赶紧扑过去！。
- 1 1 - 4 5 : 结果人家说；“あ、よくいらっしゃいました”！。
- 1 1 - 4 6 : 我呢，还不知道怎么回事儿呢，我就重复地说了一遍；“よくいらっしゃいました”！。
- 1 1 - 4 7 : 我把我自己的到来说成，用了日语的（那个什么）用成敬语！。

- 11-48 : 所以呢,我当时,后来又过了十分钟,都出了站以后,我才清醒过来|。
- 11-49 : 我才知道|,啊|,我原来是(那个)睡着了|,这要不是终点的话呢|,那|那不定给我到倒什么地方了|。

資料(い)のSP2は4つのセグメント(Seg.1~4)に分けられる。その内容は以下の通りである。

Seg.1 (11-1 ~ 11-9) = Seg.T1

- ・名古屋から出雲市までの行き方と、自分の乗り物酔いとの関連。

Seg.2 (11-10 ~ 11-19) = Seg.T2

- ・岡山で新幹線から在来線に乗り換えて、出雲市へ向かう電車の中での様子。

Seg.3 (11-20 ~ 11-38) = Seg.T3

- ・出雲駅に到着した電車の中でのこと。

Seg.4 (11-39 ~ 11-49) = Seg.T4

- ・出雲駅のプラットフォームでのこと。

このSP2の中では‘把’構文が4回用いられている。そのうち、11-24、11-25、11-47の‘把’構文の述語は、いずれも動作主、行為者の意図的あるいは意識的な動作、行為であることに異論はないであろうが、Seg.2の11-5の‘把’構文=‘我把时间记错了’の中の述語である‘记错(=記憶し間違える)’は、決して意図的な行為でも意識的な行為でもない。(B)が時間を記憶し間違えたのは故意にではなく、それは勘違いによるものである。そして従来あまた議論されてきたように、‘把’構文の中の述語には、意図的、ないしは意識的な意味をもつものと、そうでないものがあることは確かであるが、これを二分する必要があるかどうかは、その談話上の機能が二分されるかどうかにかかっている。そこでこれについて、11-15の‘把’構文と先の言語資料の例(8)、(9)、(10)の‘把’構文とを比較しながら検討していく。

例(8)、(9)、(10)についてはすでに述べた通りであるが、ここで、いま一度その表現を追ってみると、例(8)の‘把我也介绍上去了’の伝達内容は、そのSPの中で話し手が最も伝えたいと思っているものであり、例(9)の6つの‘把’構文の伝達内容は、その物語のkey-wordを巡る主要な登場人物の動作、行為の全てを伝えている。そして例(10)の‘中国人把吃看得是特别重要的’の伝達内容は、そのSPのトピックに対する話し手の見解そのものであった。つまり例(8)、(9)、(10)の‘把’構文の伝達内容は、その談話において非常に重要なkey-informationであったが、例(11)の11-15はどうであろうか。

まず、11-15 の‘把’構文の中の‘把’の後ろの名詞(=‘時間’)をみると、ここで‘時間’といっているのは、(B)が在来線に乗って出雲駅に到着する時間のことであり、これは話し手と聞き手の間で共有されている旧情報であるが、この談話の中で、「(B)が出雲駅に到着する時間」という特別の意味が付加された‘時間’であることは明白である。

次に、この‘把’構文=‘我把时间记错了’の談話上の機能であるが、この‘把’構文は、先に述べた通り、SP2 中の Seg.2 に現れたものである。しかしこの‘把’構文の伝達内容は、Seg.2 は勿論のこと、Seg.3、Seg.4 にまで及んでおり、「わたしが出雲駅に到着する時間を記憶し間違えた(11-15)」ことによって、ぐっすり寝てしまい、そのために Seg.3、Seg.4 で語っている様々な事件が起ったのである。つまり、‘我把时间记错了’という表現の伝達内容は、Seg.2 においてだけでなく、Seg.3、Seg.4 においても重要な情報であり、このことから11-15 がSP2 における key-information であることが解る。

このように見ていくと、‘把’構文の中の述語の表す動作、行為が意図的、あるいは意識的であろうと、そうでなかろうと、談話上の機能はまったく同じであり、述語の表す意味が意図的か非意図的か、あるいは意識的か非意識的かの違いが、‘把’構文を二分する根拠とはならないということになる。ということは、‘把’構文において、述語の表す意味が意図的あるいは意識的であるかどうかということは、‘把’構文成立の条件には何等関与していないということであり、‘把’構文を‘処置式’と呼ぶこと自体が妥当性を欠くことになる。要するに‘把’構文成立の条件とされている〈2〉は意味のないことになる。

ここまでの考察で、‘把’の後ろの名詞(句)は、旧情報であって、その談話の中で特別な意味を付加された、談話の key-word であり、また‘把’構文の伝達内容は、その談話の中の key-information であるということが明らかになった。

さらに、‘把’構文が成立するための条件とされてきた〈3〉(=述語が「述語動詞+付加成分」という構造であること)について考察していくが、この条件は‘把’構文の伝達内容が談話の中で key-information であることと深い関わりがある。

‘把’構文の述語動詞に付加される成分には、次のようなものがある¹⁰²。

- (1) V+時態助詞 : [66] 把茶喝了
- (2) V+V : [67] 把桌子擦擦
- (3) V+方向補語 : [68] 把他叫进来
- (4) V+動量詞 : [69] 把话又说了一遍
- (5) V+前置詞句 : [70] 把这封信带给小王
- (6) V+‘得’補語 : [71] 把这马累得浑身大汗

(7) V+結果補語 : [72] 把靴都走破了

(8) 連用修飾語+V : [73] 把被子往小孩身上拉

確かに‘把’構文の述語動詞にはこれらの付加成分が要求される。そこで考えなければならない問題は、これらの付加成分が述語動詞に付加されるということは、何を意味しているのかということである。

述語動詞にこれらの成分が付加されると、そこに共通して見られる意味は、述語動詞の表す動作、行為、変化などの結果の状態、状況であることはすでに述べた。例(8)から例(11)の‘把’構文の述語にもすべて(1)から(8)の成分のいずれか一つないしは複数がみられる。そしてそれらは、動作主、行為者の‘把’の後ろの名詞(句)に対する動作、行為、変化などの結果の状態、状況を説明している。

‘把’構文の伝達内容は、前述したようにその談話における key-information であるが、その伝達内容が重要であるか重要でないかを判断するのは話し手である。そしてそれが重要であると判断した場合、その情報に、話し手の主体的なかわり、態度及び動作、行為、変化などの結果に対する認識を表す要素が付加されるのは当然のことである。‘把’構文の述語動詞に付加されている成分は、動作主、行為者のその談話の key-word に対する動作、行為、変化などの結果の状態、状況を表しているが、実はそれらは、上記のような話し手の主体的なかわりや態度及び認識の仕方を表す要素なのである。そしてこのことは、談話の key-word である名詞(句)が述語動詞の前に置かれることと深いかわりがある。

話し手の主体的なかわりや態度及び認識の仕方を表す要素は情報伝達上極めて重要であり、聞き手に強く印象づける必要がある。また、談話上の key-word である名詞(句)も重要であり、述語動詞の後ろに、述語動詞の付加成分と、談話の key-word を共起させると、相対的にどちらかの成分が聞き手にとって印象のうすれたものとなる危険性がある。それを避けるために、位置の上で任意性のある名詞(句)が述語動詞の前に置かれるのである。しかし、述語動詞の前の名詞(句)は基本的に題目の位置であり、この名詞(句)は題目ではないので混乱を避けるため、また、聞き手の注意を喚起するため、‘把’でマークされたのである。

以上の考察から、‘把’構文の談話上の機能と‘把’の後ろの名詞(句)の統語的特徴は、以下のように記述することができる。

この表現形式は、談話の展開部においてその伝達内容が非常に重要であることを、換言すれば、情報としての重要度が極めて高い key-information であることを聞き手に知らせる働きをしている。

また、「把」の後ろの名詞（句）は、旧情報の中で、その談話において特別な意味を付加された、談話の key-word であり、「把」構文とはその談話の key-word である名詞（句）を前置詞「把」でマークすることによって聞き手の注意を喚起し、動作主、行為者の動作、行為、変化などに対する話し手の主体的なかわりを表現する形式である。そしてその伝達内容が、その談話において非常に重要な key-information であると話し手が判断した場合においてのみ、使用される構文である。

このようにみていくと、本来あるべき語順として「主語－述語－目的語」が存在していることを前提として、述語の後ろに置かれる目的語が、前置詞「把」によって述語の前に取り出されたものとする従来の「把」構文の捉え方は、根本的に意味のないことであり、また「把」構文を「主語－述語－目的語」という語順に転換させて考察するという分析方法も、同様に意味のあるものではない。つまり、本来あるべき語順が存在するかそうでないかは問題ではなく、「主語－述語－目的語」の表現も「主語－「把」－名詞（句）－述語」の表現も、現実の言語生活においてはそれぞれがそれぞれの表現機能をもって使用されており、談話上の機能も名詞（句）の統語的特徴も異なるということである。

なお、言語資料には「把」構文の表現例は 68 例みえたが、いずれも上述した談話上の機能と統語的特徴を有するものであった。

3.2 談話の展開部と談話の結束性

談話の結束性 (cohesion) とは、話文と話文の意味的なつながりをいい、これは談話の展開部においては、話し手が聞き手に対して、談話の展開とその論点を明確に伝達し、理解させる上で、極めて重要なことである。

然らばこの結束性は、どのような手段によって示されているのであろうか。

これについては Halliday, M.A.K. and R.Hassan (1976) に詳細な分析がみえる。そこでは英語における結束性を示す手段が取り上げられており、そのうち統語的なものとして下記の (1) から (3) を、また語彙的なものとして (4) と (5) が示されている。

(1) 指示 (Reference) : 以下の3類がある。

1. 代名詞によるもの
2. 指示詞によるもの - this, that, here など。
3. 比較・対照によるもの - the same, another, bigger など。

(2) 省略 (Ellipsis) : 以下の3類がある。

1. 名詞の省略
2. 動詞句の省略
3. 節の省略

(3) 代用 (Substitution) = 前出の項目の繰り返しを避けるため、それを 'one, so' などで代用する。 : 以下の3種の代用がある。

1. 名詞句の代用
2. 動詞句の代用
3. 節の代用

(4) 接続詞 (Conjunction) : 以下の4種に大別される。

1. 付加 (additive)
2. 反意 (adversative)
3. 原因 (causal)
4. 時 (temporal)

(5) 語彙的つながり (Lexical cohesion) = 一つの語彙項目が他の語彙項目と構造的に関係をもつ。

そしてさらに (5) については、Halliday, M.A.K. and R.Hassan (1985) では、下記のように3つに下位分類されている。

1. 繰り返し (Repetition) - a bear → the bear,
dine → dining など。
2. 同義語反復 (Synonymy)

3. 連語関係 (Collocation) - snow と white ,
smoke と pipe など。

このほか、Halliday, M.A.K. and R. Hassan (1985) は、構造上の仕組みによって作られる結束性として下記の(6)から(8)を挙げている。

- (6) 平行性 (parallelism)
- (7) 主題-題述 (theme - rheme)
- (8) 新-旧 (new - given)

しかし、これについてはこれ以上の詳しい記述はみられない。

談話の結束性を示す手段については、Halliday, M.A.K. and R. Hassan (1976, 1985) に見たように、統語的な手段としては、従来から一般的に、「指示」や、「代用」、「省略」が取り上げられてきている。しかし結束性を示す統語的な手段は単に、「指示」や「代用」、「省略」だけではない。

談話の結束性が、そもそも話し手の論点や意図を明確に伝達するために不可欠な要素であり、これらの「指示」や「代用」、「省略」がその手段であることはすでに述べたが、一方、言語表現の形式においても「語順」が話し手の論点や意図を明確に伝達するために必要不可欠な方法であるからには、「語順」もその手段の一つであるとして差し支えなからう。そもそも孤立語である現代中国語は屈折語の印欧諸語とは異なり、「語順」によって、構造的な意味関係が決定されるという統語的制約をもった言語であり、また、話し言葉においては、接続詞は通常ほとんど用いられることはない。このことは、現代中国語においては、「語順」が談話の結束性の上で重要な役割を果たさざるを得ない宿命を背負っていることを示唆している。そこで以下では、談話の結束性という観点から、現代中国語の名詞(句)の語順について検討していく。

現代中国語の中で、談話の結束性と深くかかわる語順の問題には、次の2つが考えられる。

1. 述語動詞と「前置詞「在」+ 場所名詞(句)」の位置
2. 複合方向補語と目的語の位置

「前置詞「在」+ 場所名詞(句)」は、述語動詞に前置する場合と後置する場合がある。本稿ではこれ以降、前者をア、「「在」+ PN + V」、後者をイ、「V + 「在」+ PN」と略記して記述していく。

また、複合方向補語は、目的語が複合方向補語の間に割り込む場合と、複合方向補語に後置する場合があり、本稿ではこれ以降、前者をウ、「V + C + O + 「来/去」」、後者をエ、「V + C + 「来/去」 + O」と略記して記述していく。

ここで分析の対象となるのは、アとイ、ウとエの知的意味 (cognitive meaning) ¹¹⁾が同じ場合であることはいうまでもないが、どのような理由でいずれの語順の選択がおこなわれるかが明らかにしていくことである。

「知的意味が同じである」とは、アとイ、ウとエが、場面や文脈を離れた環境で、同じ意味内容を表しているということである。例えば、

ア = ‘我在名古屋住。’ と

イ = ‘我住在名古屋。’ はどちらも「私は名古屋に住んでいる。」という共通の意味内容をもっており、

ウ = ‘他买回水果来了。’ と

エ = ‘他买回来水果了。’ はどちらも「彼は果物を買って帰ってきた。」という共通の意味内容をもっている。このような場合、アとイ、ウとエはそれぞれ「知的意味が同じである」とされる。

然るに、上記のような、文の構成成分が同じで、その知的意味も同じである2つの表現のうち、どのような理由で、どちらの表現が選択されるかについては、従来の統語論研究において、いまだ十分な回答は得られていない。ここでは談話の結束性という概念を導入して、この点について考察していくことにする。

まず、3.2.1 で述語動詞と「前置詞‘在’ + 場所名詞(句)」の位置の問題、つまり、ア.「‘在’ + PN + V」の表現とイ.「V + ‘在’ + PN」の表現の相違を、次に 3.2.2 で複合方向補語と目的語の位置の問題、つまり、ウ.「V + C + O + ‘来/去」」の表現とエ.「V + C + ‘来/去’ + O」の表現の相違を、それぞれ談話の言語資料に現れた表現例をもとに分析していく。

3.2.1 述語動詞と「前置詞‘在’ + 場所名詞(句)」の位置

ここではまず、ア.「‘在’ + PN + V」とイ.「V + ‘在’ + PN」の2つの表現の相違が、従来どのように分析されてきたかを概観し、コメントを加える。

3.2.1.1 従来の統語論的分析

王还1957 は、アとイの表現を、‘在’の後ろの名詞(句)の意味の違いに着目して、下記のように、アをAとBの2類に、イをC、D、Eの3類に分けている。

ア-A: '在'の後ろの名詞(句)は、動作の発生の地点を表す。

[74] 在椅子上睡觉

B: '在'の後ろの名詞(句)は、動作の発生の地点であり、同時に動作の到達の地点でもある。

[75] 在黑板上写字

イ-C: '在'の後ろの名詞(句)は、動作の主体が動作を経て到達した地点である。

[76] 他倒在床上

D: '在'の後ろの名詞(句)は、動作の受け手が動作を経て到達した地点である。

[77] 他关在监牢里

E: '在'の後ろの名詞(句)は、動作の受け手が動作を経て到達した地点であり、文の中で'把'構文が用いられる。

[78] 把字写在黑板上

そしてBとDの相違について、次のように記述している。

B: どの地点においてその動作、行為がなされたかに重点がある。

D: 動作の受け手の到達した地点に重点がある。

また王还1980にも「'在'+場所名詞(句)」についての記述がみられるが、その見解は王还1957と基本的に同じである。

これに対して、アとイの表現の知的意味が同じである場合については、次のような先行研究がある。

刘月华等1983(P.393~)は、下記の例を比較して、[79]は動作をきわだたせた表現、[80]は場所をきわだたせた表現だとしている。

[79] 小明在床上睡。(アの表現)

[80] 小明睡在床上。(イの表現)

このほか、James H-Y.Tai 1975は、下記の例を比較して、[81]は述語の動作を強調した表現であり、[82]は結果を強調した表現であるとしている。

[81] 他在床上睡。(アの表現)

[82] 他睡在床上。(イの表現)

またJames H-Y.Tai 1975では、アとイの表現の後ろに、それぞれ同一の成分を付加した文を作ることによって、両者の表現の適格度を探ろうとしている。例えば、下記の[83]と[84]を比較した場合には、[83](アの表現)の方が適格度が高く、[85]と[86]を比較した場合には、[85](アの表現)は非文となり、[86](イの表現)しか成立しないとしている。

[83] 他在床上躺着，把这件大事都忘了。(アの表現)

[84] ? 他躺在床上，把这件大事都忘了。（イの表現）

[85] * 他病得快死了，在床上躺着，不省人事。（アの表現）

[86] 他病得快死了，躺在床上，不省人事。（イの表現）

以上アとイの表現の相違について、従来の統語論的分析を概観した。その結果、従来アとイの表現は、いずれもその表現のどこに重点が置かれているのか、あるいはどこをきわだたせているのか、強調されているのか、という観点からの分析であることが解る。しかし、このような分析が根本的に意味をなさないことは、次のような分析によって明らかとなる。

例えば、[75]と[78]は知的意味が同じであるが、これらの表現を構成している成分は、‘黑板’、‘写’、‘字’の3つである。これら3つの成分が結合して現代中国語の一つの表現として成立するのは、[75]と[78]以外には存在しない。つまり、‘*写在黑板上字’あるいは‘*写字在黑板上’は不成立である。それは‘宾语’成分と「‘在’+PN」成分が述語動詞の後ろに共起できないという統語的制約によって、いずれかの成分が述語動詞の前に位置することを余儀なくされるからである。このことは、[79]と[80]、[81]と[82]についても全く同様である。

そこで重要なことは、‘宾语’成分と「‘在’+PN」成分のいずれが述語動詞の前に位置するかには任意性はなく、‘宾语’成分とPNの性格によって、提前できるものとできないものが統語的に制約されているということである。

従って、この統語的制約を無視して、‘宾语’成分あるいは「‘在’+PN」の提前された結果の表現だけを取り上げて、強調だの、表現の重点だのと論ずることはできないのである。

このように、‘宾语’成分と「‘在’+PN」成分の性格を明らかにすることが、これらの表現を解明することであり、それらの性質は談話の流れの中では自ずと明確なものであって、一文のレベルで捉えられるものではない。

そこで以下、談話の言語資料に現れた表現例をもとに談話レベルの分析を行うことによって、アとイの表現の談話上の機能と名詞（句）の統語的特徴について考察していく。

3.2.1.2 「‘在’+PN+V」、 「V+‘在’+PN」と談話の結束性

前置詞‘在’の後ろに動作、行為の行われる場所を表す名詞（句）が置かれる

場合、この名詞（句）は、話し手と聞き手の間で共有の知識となっていない新情報であることはなく、必ず、発話の時点においては、話し手と聞き手の間で共有の知識となっている旧情報の名詞（句）に限られることはすでに述べた。。

下記の例(12)は、資料(お)の中からア＝「‘在’＋PN＋V」の表現が発話されている部分を、例(13)は、資料(か)の中からイ＝「V＋‘在’＋PN」の表現が発話されている部分を、それぞれ抽出したものであり、例(12)では 12-12 でアの表現（‘他家就在一社那附近住。’）が、例(13)では 13-17 でイの表現（‘我住在学校里。’）がそれぞれ用いられている。また、12-12 の‘在’の後ろの名詞句＝‘一社那附近’も、13-17 の‘在’の後ろの名詞句＝‘学校里’も、その発話の時点においてはすでに旧情報であることはいうまでもない。

例(12)：資料-(お)、インフォーマント-(E)と(F)

- 12-1 F：昨天晚上我去听！佐田雅治的音乐会去了！，在（那个）金山！。
- 12-2 E：还挺远的啊！。
- 12-3 F：嗯，金山的市民会馆！。
- 12-4 E：你回来怎么回来的？！
- 12-5 : 还有车？！
- 12-6 F：回来！当时我是（那个）！去的时候儿我是坐地铁去的！，是六
点开始！。
- 12-7 : 完了的时候儿已经九点半了！，
- 12-8 : 三个半小时啊！。
- 12-9 E：啊！，那么长！，还挺长呐！。
- 12-10 F：真挺长！。
- 12-11 : 但是呢！就是跟我一起听的吧！，还有我们一个老师！，
- 12-12 : 他家就在一社那附近住！。
- 12-13 : 所以说呢！，就坐他的车就顺便回来了！。

例(13)：資料-(か)、インフォーマント-(E)と(G)

- 13-1 E：所以，北京这城里边，就是有农村，也有城市！。
- 13-2 : 所以，叫（那个）叫什么，叫！叫（这个）啊！‘城市里的村庄’
！，经常这样说啊！。
- 13-3 : 所以，北京总面积还是大的。
- 13-4 : 我要回家呀，我从学校回家，得两个半小时！，到我家！。
- 13-5 G：哦，你从××大学？！
- 13-6 : 你家是在……

- 13-7 E: 因为××大学是在北京最东头|, ××大学那墙那边, 就不算××区啦|, 就是(这个)××县了|, 墙那头|。
- 13-8 : (这个)|我家呢|, 是在北京的(这个)|最西北角的(那个)香山|。
- 13-9 : 我家呀|, 是在(那个)最西北角的香山|。
- 13-10 : 所以从学校|到我的家|, 是个大吊角啊|, 而且, 要通过北京市里。
- 13-11 : 北京市里呢, 红灯特别多不是吗|, 公共汽车也慢。
- 13-12 : 有的时候, 坐不上车, 特别挤|,
- 13-13 : 所以得|两个半小时|。
- 13-14 G: 那你也是每天通勤吗?|
- 13-15 E: 不是, 不是通勤。
- 13-16 : 我学校里有房子|,
- 13-17 : 我住在学校里|。
- 13-18 : 因为, 中国的大学呀, 跟日本的大学不一样。
- 13-19 : 它|日本大学呀|, 学校就是学校|, 没有教员、教工宿舍, 没有学生宿舍呀|。
- 13-20 : 我们中国呢, 就是小城市啊|, 什么都有|。
- 13-21 : 所以|就那怕就|这怎么说, 除了(这个)生活设施, 服务设施, 就|哪怕就|就是修下水道的|, 都有专门有一个|(这个)管道班|,
- 13-22 : 然后|烧锅炉的, 还有一个锅炉班|,
- 13-23 : 还有|司机有一个司机班什么的|,
- 13-24 : 就简直就跟一个小城市的|这么一个|(这个)|机能啊|。
- 13-25 : 日本就不一样,
- 13-26 : 日本就是学校是学校|。
- 13-27 : 学校修下水道呢|, 就到外面请(这个)| (那个)| (这个)|ぎょーしゃ啊|,
- 13-28 : 就请ぎょーしゃ的来修|。
- 13-29 : 所以|学校的结构不一样哈|。

例(12)は、資料(お)の「さだまさしのコンサートのこと」をメイン・トピック(MT1)としたメイン・パラグラフ(MP1)の中で、「(F)がそのコンサートに行ったときの行き帰りのこと」(ST1)について語っている部分(SP1)であり、12-12の‘在’の後ろの名詞句=‘一社那付近’がどのあたりを指してい

るのかは、(F)のこの発話の時点において、聞き手である(E)にはすでに解っており、それは(E)と(F)の共有の旧情報である。

また 13-17 の‘在’の後ろの名詞句＝‘学校里’も、12-12 の場合と同様、発話の時点においてはすでに旧情報であり、聞き手である(G)にはどこの学校を指しているのかは解っていることである。

このようにアとイの表現にみられる名詞(句)は、いずれも旧情報であるが、その相違は名詞(句)の位置である。そこで、名詞(句)の位置がどのような理由によって選択されるかについて、以下、例(12)、(13)の談話の展開に着目してみていくことにする。

例(12)の内容を順に追っていくと、12-1 で(F)は、さだまさしのコンサートを聴きに「金山」まで行ったということを(E)に伝えている。次に、「金山」と(F)の住んでいるところとの位置関係をすでに知っている(E)は、すぐに(F)がコンサート終了後に夜遅く金山からどのようにして帰宅したのかということを疑問に思い、12-4 で(F)が「金山」から帰宅した方法について質問している。この質問に対して(F)は、12-13 で、コンサートに一緒に行った先生に車で「ついでに送ってもらった」、と答えている。しかし、(F)はそのように答える前に、12-12 でアの表現を用いて、「‘他家就在一社那付近住。(＝その先生は一社の近くに住んでいる)’」という情報を提供している。そしてそれは、その先生が(F)を自宅まで送るという行為が、「ついでに」なされた行為であるということを、(E)にわからせるのに必要な情報である。

(F)はこの情報を提供することによって、次の2つのことを(E)に伝えようとしている。まずその一つは、「一社」というところが、その先生の「住んでいる」ところだということ。そしてもう一つは、「一社」というところと、コンサートの行われた「金山」と、(F)が住んでいるところとの位置関係である。つまり、コンサートの行われた「金山」から、先生が車で「一社」まで帰るルートの途中で(F)が住んでいるということである。コンサートが終わればその先生は当然自分の「住んでいる」ところへ帰ることになる。そして、(F)が次の 12-13 で答えているように、その先生に「ついでに」送ってもらおうということが成立するためには、コンサートの終了後、その先生が「一社」という自分の「住んでいる」ところへ帰るという行為がなされなければならない。つまり「一社」というところがその先生の「住んでいる」ところであり、(F)の居住地が、先生が車で帰宅するルートの途中にあることによって、「ついでに送ってもらおう」という表現が成立可能なのである。

従来の分析によれば、アの表現は動作に重点をおいた、あるいは動作を強調した表現であった。とすれば、12-12 の表現は動詞‘住(＝住んでいる)’に重点

をおいている、あるいは‘住’を強調しているということになる。しかし上でみてきたように、12-12をそれ以降の発話との意味的つながりからみると、12-12においては、‘一社’と‘住’はどちらも同等であり、どちらにより重点がおかれているとも、どちらが強調されているとも判断を下すことはできない。

これに対して、表現例 13-17 のイの表現はどうであろうか。

例(13)の内容を順に追っていくと、13-1 から 13-3 までは(E)が北京という都市について語っている。そして北京に実家のある(E)は、次の 13-4 から 13-13 で実家と勤め先の大学との位置関係を説明している。その説明を聞いた(G)は 13-14 で、(E)が実家から大学まで毎日通っているのかどうかを確認している。これに対して(E)は、13-15 でそれを否定し、13-16 で大学に宿舎があることを説明し、その次の 13-17 でイの表現を用いて「‘我住在学校里。(=私はキャンパス内に住んでいる。)’」と述べている。

ここで(E)がアの表現(=‘我在学校里住。’)ではなく、イの表現(=‘我住在学校里。’)を選択した理由は、それ以下(13-18 から 13-29)の内容がその回答を与えている。

13-18 から 13-29 で一貫して述べられていることは、中国の大学と日本の大学の「学校の中の相違」である。つまり、13-17 の文末の旧情報である名詞句‘学校里’=‘キャンパス内」は、それ以降の発話の内容と関連しているが、(E)がそこに「住んでいる(=‘住’)」ことは、13-18 以降で語られていることとは直接関係がない。そこで(E)は、13-18 以降で語る内容が‘学校里」と意味的に連続していることを(G)に示唆するため、‘学校里」という名詞句に聞き手の注意を引き、それを聞き手の印象に残す必要がある。そのためにはアの表現よりも、名詞句‘学校里」を文末に置いたイの表現(=‘我住在学校里。’)の方が、より効果的であると判断したのである。

福地肇1985(p.47~)は、文末の位置について「より重要な情報をもつ部分を、文の後部に置くのが自然なのである。最もよく知られているのは「後部の重み」(end-weight)とでも言うべき傾向であろう。」と述べている。つまり文末という位置は、最も聞き手の印象に残りやすい位置だということである。

以上の考察の結果、アとイの表現の談話上の機能と名詞(句)(=PN)の統語的特徴は、次のように記述することができる。

アは、PNとVの両方が、この表現以降の発話の内容と意味的に同等に関連しており、話し手がPNとVを同等に聞き手に印象づける必要があると判断した場合に用いられる表現である。一方、イはこの表現以降の発話の内容が、VよりもPNと意味的につながりが強く、特にPNに聞き手の注意を引き、聞き手に強く

印象づける必要があると判断した場合に用いられる表現であり、ア、イのPNはどちらも旧情報に限られる。

以上、アとイの表現について、それぞれの語順が選択される理由について考察したが、言語資料には、知的意味が同じであって、アとイの表現がいずれも可能な表現例は 27 例あった。そしてその表現はすべて、ここでの考察にあてはまるものであった。

3.2.2 複合方向補語と目的語の位置

ここでもまず、ウ。「V + C + O + ‘来/去’」とエ。「V + C + ‘来/去’ + O」の2つの表現の相違について、従来どのように分析されてきたかを概観し、コメントを加える。

3.2.2.1 従来統語論的分析

従来、ウとエの2つの表現の相違は、複合方向補語の意味、目的語の性格や構造、長さなどの観点から分析されてきた。例えば、陈信春1982は、ウの表現しか成立しない条件として、次の3つを挙げている。

(1) 目的語が場所的なものである場合。

[87] 咱们得设法教他逃出城去。

(2) 複合方向補語が状況の変化を表す場合。

[88] 喝了两杯茶，他觉出饥来。

(3) 複合方向補語の間に事態助詞の“了”がある場合。

[89] 突然在那草棚的一扇竹门边喊出了这一声来。

また、エの表現しか成立しない条件としては、次の2つを挙げている。

(4) 目的語が疑問の意味を表している場合。

[90] 你倒说出来是谁呀？

(5) 目的語が主語-述語の構造であるかまたは、複文である場合。

[91] 由瑞丰的话里，他听出来，大家确是采取了默默的抵抗。

このほか朱德熙1982 (p.129~)は、目的語が‘有定 (definite)’の場合はエの表現は成立しないとしている。

さらに张伯江1991は、これらの先行研究を踏まえたうえで、現代小説《骆驼祥子》、《四世同堂・惶惑》、《1985 小说在中国》の中から886個の例文を集め、次の3つの観点から、分析を加えている。

1. 目的語が‘有指 (referential)’の成分か、

‘无指 (nonreferential)’の成分か。

2. 目的語が‘定指 (identifiable)’の成分か、

‘不定指 (nonidentifiable)’の成分か。

3. 目的語が‘新信息 (new information)’か、

‘旧信息 (given information)’か。

そして分析の結果として次の3点を指摘している。

1. 目的語が‘无指’成分の場合は、エよりもウの方が圧倒的に多い。
(‘无指’例の総数=136、その内、ウの例=128、エの例=8)
2. ウは‘不定指’を比較的寛容に受け入れ、‘定指’に対しても強烈的な拒否はしない。エは‘定指’を強烈的に拒否する。
3. ウは長い目的語を嫌う傾向があり、エは短い目的語を強烈的に嫌う傾向がある。よって、エの方が‘新情報’を表す傾向が強い。

张伯江のこの分析は、従来の研究を大きく前進させるものであるが、ウ、エの成立条件、あるいはそれぞれの使用傾向を、目的語の性格や意味的特徴によって分析するにとどまり、ウとエの両方の表現が可能で、その知的意味が同じである場合の両者の相違については、全く言及していない。

知的意味が同じである場合の相違については、朱德熙1982(p.129)で少しふれられている。そこで朱德熙は、目的語が‘无定 (indefinite)’ の場合には、ウとエのどちらも成立するが、‘有定 (definite)’ の場合にはウしか成立しないとしており、目的語が‘无定 (indefinite)’ の場合の例として、下記の2つを挙げている。しかしこの場合、ウとエがどのように使い分けられているかについては、何の記述もみられない。

[92] ウ、飞进一只苍蝇来
 エ、飞进来一只苍蝇

[93] ウ、拿出一本书来
 エ、拿出来一本书

ウ、エの表現形式の相違については、それが目的語の位置のみを異にするものであることによって、目的語の性格が着目されることはいわば当然のことである。しかし、例えば、陈信春はウの表現しか成立しない条件として、「目的語が場所的なものである場合」を挙げているが、これに対して、朱德熙は [92]、[93] の例にみられるように、目的語が非場所的なものでも成立するとし、明らかな矛盾がみられる。また、陈信春はエの表現しか成立しない条件として、「目的語が疑問の意味を表している場合」として、[90] の例を挙げているが、[90] は厳密に言えば、ここで考察の対象としているウの表現でもエの表現でもない。

仮に、[90] をエの表現の一つとするならば、それは、陈信春がエの表現しか成立しないいま一つの条件として挙げている (5) の一類に入るものである。

このように、先行研究において、矛盾した分析の結果が提示されたり、説得力のない知見が示されたりするのは、やはり、これらの分析が一文のレベルで考察されたことによる限界を如実に示している。

さらに、この陈信春の (5) は、従来目的語が「長いものである場合」と一般的にいわれてきた条件であるが、それは、陈信春の指摘している、主語-述語、

あるいは複文という構造に限らず、例えば、連語、文 + ‘的’ + 名詞の構造であっても差し支えない。この点について、仮に、一文のレベルで考察してみても、現代中国語は孤立語であって、語と語あるいは句と句の意味的な関わりは基本的に語順によって決定される性格をもっており、ウの表現の場合、目的語が一単語のレベルを越えて複雑な構成になればなるほど複合方向補語の2つの補語のお互いの位置が遠ざかることになり、結果として2つの補語の意味的な関わりが疎となり、不明確になる。この現象を避けるために、2つの補語を近い位置におき、目的語を後ろの位置におくエの表現が用いられることになるのである。

このことは、張伯江の「ウは目的語が定の場合は比較的寛容に受け入れ、エは強烈に拒否する」という指摘や、朱德熙の「目的語が不定の場合はウとエのいずれもが成立するが、定の場合にはウしか成立しない」との知見と相通じるものである。なぜならば、目的語が定の場合は旧情報に限られることによって、対話者間で旧情報となっている名詞（句）は通常単語のレベルを越えて表現されることは少ないからである。しかし、第2章で言及したように、これらの表現における目的語の「定・不定」あるいは「情報の新・旧」は、いずれも談話の展開によってそれと決定されるものであり、一文のレベルでは考察できない問題である。

張伯江はせつかく現代小説から例文を蒐集しているにも関わらず、単に計量的な分析を加えているにとどまり、個別の表現における目的語の性格について分析の加えられていないのが惜まれる。

以下、談話の言語資料をもとに、ウとエの相違を考察していく。

3.2.2.2 「V + C + O + ‘来/去’」、 $\left[V + C + ‘来/去’ + O \right]$ と談話の結束性

ウ = 「V + C + O + ‘来/去’」とエ = 「V + C + ‘来/去’ + O」の表現の相違を明らかにしていくには、やはり、その知的意味が同じである場合の方が、目的語の統語的特徴がより鮮明につかめるので、分析の対象をそれに限ることはすでに述べた。

先の 3.2.2.1 で触れたように、朱德熙1982(p.129)は、目的語が‘无定 (indefinite)’の場合には、ウとエの両方が成立すると述べている。この点を考察するため、下記の例(14)をみることにする。

例(14)は、資料(お)の中から(MT5のST3)、ウの表現が発話されている部分を抽出したものであり、14-10でウの表現 = ‘你说起这事来’が用いられている。

例(14)：資料-(お)、インフォーマント-(E)と(F)

- 14-1 E：但是呢，如果那样的衣服如果拿到中国呢，人们肯定就会觉得是旧的，
- 14-2 :就是这好像是五十年代的样式什么的啊。
- 14-3 :或者！因为中国人！（这个）！现在呢，就是刚刚慢慢，中国人呢，衬衣啊，刚刚！开始，刚刚开始从肥大！往（这个）紧身儿！往（这个）比较合身的（这个）方向！（这个）努力啊，
- 14-4 :刚开始朝这个方向。
- 14-5 :可是呢，日本呢，它是（这个）！从（这个）瘦，又开始！肥大了啊。所以有人说吧，这是一种复古现象，复古现象啊！。
- 14-6 :因为（这个）就是！原来！意大利的时候，有一个（这个）意大利的（那个）文艺复兴啊，
- 14-7 :首先！是不是说（这个这个）！文化，或者！差不多所有的东西都是一样，发展到一定地步之后呢，
- 14-8 :然后！差不多！觉得！觉得自己走到头的时候，又会向回！向回返一返！。
- 14-9 F：对啊！。
- 14-10 :你说起这事来，
- 14-11 :我想起一句话。
- 14-12 :（那个）！那是谁说的了啊，科学技术有（这个）进步啊，艺术这个东西啊，就是谈不上什么进步、不进步，它就是一种变化！。
- 14-13 :有人这么说的！。
- 14-14 :就是说，把！很古的时候的艺术品，和现在的艺术品摆在一起呀，它都是！就是！就是无与伦比的一些精品！。
- 14-15 :而（这个）！就是说！没法说那个高，那个低，
- 14-16 :它都有它的就是个性和特点！。
- 14-17 :也就说艺术吧，有人说是！没有什么就是进化，它只有变化！。
- 14-18 :有人这么说！。

このウの表現は、その知的意味が同じであるエ＝‘你说起来这事’で表現する

ことも可能である¹²⁾。

例(14)においてウで表現しなければならない理由については後で述べることにし、ここでは目的語 = ‘这事’ に焦点を当ててみる。この目的語 = ‘这事’ には指示代名詞 ‘这’ が用いられていることから、これが定 (definite) の名詞句であることは明らかである。朱德熙は、目的語が不定 (indefinite) の場合においてはウとエの両方が成立するが、定 (definite) の場合にはウしか成立しないとしている。しかし上記の例から、目的語が定 (definite) のものであっても、ウとエの両方が成立する場合のあることが解る。従って、ウとエの両方の表現が成立する場合、その目的語が定か不定かということは、両者の表現の相違を考察する上で重要な要素ではないということになる。

それではウとエの両方の表現が成立する場合、その目的語は統語的にどのような特徴をもっているのであろうか。例(14)の 14-10 の表現例からいえることは、14-10 の目的語 = ‘这事’ が、14-6 から 14-8 までの(E)の発話の内容を(F)が言い換えたものであることから、14-10 の目的語 = ‘这事’ は発話の時点においてすでに旧情報となっている名詞句だということになる。

以下でこの点について、さらに言語資料に現れた表現例をもとに検討していく。

なお、ウとエの表現例は、ウの表現の場合には、その知的意味が同じであるエの表現が、エの表現の場合には、その知的意味が同じであるウの表現が、それぞれ成立することを前提としている。

下記の例(15)、(16)は、それぞれ資料(か)、資料(け)の中からウの表現が発話されている部分を抽出したものであり、例(15)では 15-8 に、例(16)では 16-2 にウの表現が用いられている。

例(15)：資料-(か)、インフォーマント-(E)と(G)

- 15-1 G：(那个)毛主席坐车接见的时候呢，我们是第一排。
- 15-2 : 前面呢，一排哈，是解放军，后边那一排就是我们。
哎。
- 15-3 E：首都红卫兵呀？
- 15-4 G：啊，首都红卫兵。
- 15-5 : 然后那一次，毛主席接见，还有刘少奇接见的时候，(那个)毛主席先过来的。
- 15-6 : 然后，我们这边哈都是男的，喊的声音特别大。
- 15-7 : 毛主席就在我们这，离着也就是，前面有个三、四步那么远吧，
- 15-8 : 他转过头来，

15-9 : 把他那巨大的手掌挥舞着, 嘿哎 |。

例(16): 資料-(け)、インフォーマント-(K)と(L)

16-1 L: 其实我想レポート里提出的论点吧 |, 有的时候它不见起就是
(那个) 嗯 | 代表什么一定的, 代表个人意见, 一定都是正确的
|。

16-2 K: 就是。因为有的时候 |, 即使 | 就是レポート这个东西吧哈 |,
它就是说 | 它不见得你非得要得出一个结论来 |,

16-3 : 你就是有什么想法, 反正你就写上就行了 |。

16-4 : 比如说 |, 有 (这个) 疑点 |, 或者是疑问的地方啊, 你提出来
了 |,

16-5 : 然后, 别人看了以后呐, 也许有人会有异议, 或怎么样的 |,

16-6 : 然后哪, 大家呢 |, 对你提出意见什么的 |。

16-7 : 那, 要象 (那个) 咱们写的论文, 就必须得拿出自己的观点 |,
那个就更难一步了 |。

まず例(15)からみていく。

例(15)は、資料(か)の「文革当時」をメイン・トピック (MT8) としたメイン・パラグラフ (MP8) の中で、「(G)が毛沢東と劉少奇を見たときの様子」(ST3) について語っている SP3 の一部であり、15-8 でウの表現 (= ‘他转过头来’) が用いられている。この表現の中の目的語は ‘头’ であり、文頭の ‘他’ が毛沢東を指していることから、この ‘头’ が毛沢東の ‘头’ であることは明かである。従って 15-8 の目的語 = ‘头’ は旧情報であるということになる。

例(16)は、資料(け)の MT1 (= (K)と(L)が提出するレポートのこと) の中の ST2 (= レポートのテーマ) について語っている SP2 の一部であり、16-2 にウ = ‘得出一个结论来’ が用いられている。この中で目的語は ‘一个结论’ である。ここでいっている ‘结论’ とは、(K)と(L)が提出することになっているレポートのテーマについて分析した結果のことである。このことは、(K)の 16-2 の発話が(L)の 16-1 の内容を引き継いだものであることから、聞き手の(L)には類推可能である。従って、16-2 の目的語 = ‘一个结论’ もやはり旧情報であるということになる。

以上、例(14)、(15)、(16)の3例から、言語資料に現れたウの表現における目的語の統語的特徴について考察した。次に、エの表現における目的語について考察していく。

下記の例(17)、(18)、(19)は、それぞれ資料(く)、資料(け)、資料(こ)の中からエの表現が発話されている部分を抽出したものであり、例(17)では 17-6 に、例(18)では 18-2 に、例(19)では 19-9 に、エの表現が用いられている。

例(17)：資料-(く)、インフォーマント-(I)と(J)

- 17-1 I：我们那！现！现在呢！，就是！天津反正有好多企业啊！，
17-2 ：这帮！（这个）！退休职工刚退休的时候，还是百分之一百了！，
17-3 ：后来由于什么不景气呀！，或者是什么，各种原因的！，确实呀
！，退休这部分人！，给企业！，可以说造成一种负担！，是吧
！。
17-4 ：等于这帮人得养活着，这帮人！。
17-5 ：可是呢！，按着！在！咱们！在日本，咱看着的原理呢！，那么
我从进厂这！这一天起！，每月我就！就从！实际上我！平时从
我工资里，
17-6 ：扣出来一部分！，
17-7 ：做保险用了！。
17-8 ：所以你！给我的那笔钱呢，还是我自己的钱！。
17-9 ：但是现在咱们呢！，企业也可能当初那个没搞好！，
17-10 ：所以现在觉得是负担。

例(18)：資料-(け)、インフォーマント-(K)と(L)

- 18-1 L：语言吧，也随着时间，随着！时代的改变而改变！。
18-2 ：我（那个）我来日本之前！，给我们（那个）处长提出来申请，
18-3 ：其中就有一条！，（那个）就在国内（那个）日语呀！，怎么学
也！是不行，真的。
18-4 ：就是你书本上的，课本是课本，
18-5 ：现实的！，现在日本那个社会，就是日语发展到什么程度，根本
就不知道！。
18-6 ：连一点儿，比如说，现在‘流行语’什么的！，（那个）现在生
活方式呀什么的，全不知道！。

例(19)：資料-(こ)、インフォーマント-(M)と(N)

- 19-1 N：他（那个）就是什么！性格也是就是前进型的！。
- 19-2 : 他吧，比如说，喜欢什么，喜欢那些东西吧，喜欢画画呀，喜欢（那个）作诗！，喜欢写作！。
- 19-3 M：他画画，画挺好的，是啊？！
- 19-4 N：嗯！。喜欢写作、喜欢（这个）写毛笔字什么的啊！。
- 19-5 : 就是他那方面，就是！那方面的！还喜欢摄影！，喜欢游泳！，
- 19-6 : 哎呀，他喜欢的东西倒是真多！。
- 19-7 : 喜欢什么，他就买什么！。
- 19-8 : 喜欢吉他！，
- 19-9 : 今天买回来一个吉他，
- 19-10 : 花了两万，还是多少，买回来！。
- 19-11 : 那吉他原来卖六万多呢，
- 19-12 : 他买！买回来一个吉他，玩两天之后，又买了一个吉他！。

例(17)は、資料(く)のMT3 (=中国全土にみられる物価の高騰現象) の中のST12 (=退職者の生活の厳しさ) について語っているSP12の一部であり、17-6 にエ = ‘扣出来一部分’ が用いられている。この中で目的語は‘一部分’である。ここでいっている‘一部分’とは、毎月の給料の一部のことであり、このことは、(I)の17-5の発話から、聞き手の(I)には類推可能である。従って、17-6の目的語 = ‘一部分’は旧情報ということになる。

次に例(18)は、資料(け)のMT3 (=日本語の学習、修得) の中のST2 (=時代の変化と言語) について語っているSP2の一部であり、18-2 にエ = ‘提出来申请’ が用いられている。この中の目的語は‘申请’であり、これが、(L)が日本に留学する前に日本に来るにあたって、自分の所属している中国の大学に出した申請のことであるということは、同じ中国からの留学生である(K)には類推可能な情報である。従って、18-2の目的語 = ‘申请’もやはり旧情報ということになる。

例(19)は、資料(こ)のMT13 (= (N)の夫のこと) の中のST2 (=彼の趣味) について語っているSP2の一部であり、19-9 にエ = ‘买回来一个吉他’ が用いられている。この中で目的語は‘一个吉他’である。この‘吉他’については、すでに19-8で(N)が談話の中に持ち込んでいることから、19-9の‘一个吉他’もやはり新情報とはいえない。

以上、例(14)から(19)において、ウとエの表現における目的語の統語的特徴をみてきた。その結果、上記の6例はウ、エのどちらの表現においても、その目的語が旧情報であるという統語的特徴を有していることが明らかとなった。

言語資料に、知的意味が同じであって、ウとエの表現がいずれも可能な例は、上記の6例を含めて21例あった。そしてその全ての例について目的語を検討したところ、残りの15例についても上記の6例と同様、その目的語は、聞き手のもっている知識から類推可能な旧情報であった。これらの21例から、知的意味が同じであって、ウとエの表現がいずれも可能な場合、その目的語である名詞(句)が新情報であることはないと言断することは早計であろうが、下記の例(20)の談話の流れが、新情報でない可能性を濃厚に裏付けている。

例(20)：資料-(け)、インフォーマント-(K)と(L)

- 20-1 K：哎呀，我们同学|，我|我们同学(那个)回|回国的时候，就跟我|跟我们一起的啊|，
20-2 :他带了可能是|带了三块，还是|四块手表|。
20-3 L：唉，现在手表也算什么，小件吗？|
20-4 K：不，手表不算件|。
20-5 L：那我怎么听孟老师说算件呢？|
20-6 K：不算，不算。我|我带回去两块|。
20-7 L：对，对。他知不知道？你带回去的。
20-8 K：他知道。

例(20)は、資料(け)の「中国の税関のこと」をメイン・トピック(MT11)としているメイン・パラグラフ(MP11)の中で、「日本から腕時計を持って帰国したときのこと」(ST2)について語っているSP2の一部である。この中では20-6でエの表現(=「我带回去两块。」)が用いられている。

複合方向補語の用いられた表現は、それだけで「V」と「C」と「来/去」の3つの情報を伝達し、目的語をも含めると、述語部分で4つの情報を伝達することになる。20-6も「V=「带」」、「C=「回」」、「去」と目的語=「两块」の4つの情報を伝達している。これは述語部分の情報量としては多すぎる。しかしながら、例(20)には、20-6での発話以前に、これらの情報がどのように伝達されてきたかが明瞭に現れている。それを順を追ってみていくと、20-1で「回」が日本から中国へ帰るという意味であること、20-2で「带」が日本から中国へ帰国する際の行為であることと、「块」が腕時計のことであること、が

伝達されている。つまり、20-6 における複合方向補語の表現の、4つの情報のうち3つまでが、すでに旧情報として共有されているのである。複合方向補語は、通常このような情報伝達の流れの中で用いられることが多いのは、聞き手に対する情報量の負担を軽減するための話し手の配慮である。しかし、常にそうであるわけではなく、複合方向補語の表現は本来、情報過多であるために、その目的語である名詞（句）には少なくとも旧情報が好まれる傾向にあるとって差し支えなさそうである。

次に、上記の6例をもとに、その目的語である名詞（句）が旧情報の場合に、ウとエの表現が選択される理由について考察していく。

まずウの表現について検討していくが、いま一度、ウの表現が用いられている例(14)、(15)、(16)について、それぞれの談話の展開を追っていくことにする。

例(14)は「日本と中国の流行の相違」について語っている談話の一部であった。

(E)は 14-1 から 14-5 で日本と中国の服装の流行の相違について具体的に述べ14-6 でイタリアのルネサンスを導入することにより、14-5 までで述べた見解を裏付けている。次に(F)は 14-9 でこれに同意した後、14-10 においてウの表現＝‘你说起这事来’を用いている。その目的語は‘这事’で、それがイタリアのルネサンスのことを指していることについては、先に述べた通りである。そして、14-10 からその次の 14-11 への展開は、‘你说起这事来(14-10)，我想起一句话(14-11)。’＝「あなたのいったそのことから、私はある言葉を思い出した。」となり、14-12 以降の談話の内容をみていくと、それは(F)が思い出したある言葉についての内容であり、イタリアのルネサンスとは直接関係はない。

次に、例(15)では、(G)が非常に近い距離から毛沢東を見たときの様子が語られていた。具体的には、15-7 で毛沢東と自分の距離が3、4歩ほどであったことが紹介され、次の 15-8、15-9 で、そこでの毛沢東の動作が紹介されている。その動作とは、15-8＝「こちらを振り向いて」、15-9＝「あの大きな手を振っていた」というものであり、15-8 でウの表現＝‘他转过头来’が用いられている。そして15-8 と 15-9 は「15-8 が行われたのち、15-9 が行われた」というように、時間的には連続した動作である。しかし、その意味的なつながりの上からこの2つをみると、15-8 の目的語＝‘头’と15-9 とは直接関係はない。

例(16)は「(K)と(L)が提出するレポートのテーマ」について語っている談話の一部であった。

ここではまず 16-1 で(L)がレポートの論点について述べ、次に 16-2 で(K)が(L)の 16-1 の内容を引き継いでウの表現を用いて‘它不见得你非得要得出一个结论来’と述べている。その目的語は‘一个结论’で、これが(K)と(L)が提出することになっているレポートのテーマについて分析した結果の結論であることは、

先に述べた通りである。そして 16-3 以降の談話を追っていくと、そこでは分析した結果の結論については直接述べられておらず、その結論に至るまでの諸々の状況について語られている。

ここまでの考察から、話し手がウの表現を用いる場合、この表現における目的語の意味内容は、この表現以降の発話の内容とは関連性の低いことが解る。

次に、エの表現について検討していく。

ここでもいま一度、エの表現が用いられている例(17)、(18)、(19)について、それぞれ談話の展開を追っていくことにする。

例(17)は、「中国全土の物価が高騰する中での、退職者の生活の厳しさ」について語っている談話の一部であった。

(I)は 17-1 から 17-4 で、中国の定年退職者の医療費の支払方法について述べており、次に 17-5 から 17-7 で日本の保険制度について説明している。そして 17-6 で エの表現 (= ‘扣出来一部分’) が用いられている。その目的語は ‘一部分’ で、これが、毎月の給料の一部のことであるということは、先に述べたとおりである。このことは 17-5 と 17-6 の発話から明白であるが、次の 17-7 をみると、‘做保険用了。’ となっており、この 17-6 と 17-7 は内容的に関連性が非常に高く、それは「毎月の給料の中から(17-5)、その一部を差し引いて(17-6)、そしてそれ (= ‘一部分’) を保険として使っている(17-7)」という内容である。

また例(18)は、「日本語の学習、修得における時代の変化と言語」について語っている談話の一部であった。

(L)は 18-2 で エの表現 (‘给我们处长提出来申请’) を用い、日本に留学する前に、自分の所属している中国の大学に対して申請したことを述べている。そして 18-3 ですぐに「その中」= ‘其中’ といって、18-2 のエの表現の目的語である ‘申请’ を受け継いで ‘申请’ を ‘其’ にいい換え、それ以降、18-6 まですべて申請の内容を説明している。

もう一つ、例(19)についてみていく。

例(19)は、「(N)の夫の趣味」について語っている談話の一部であった。

(N)は 19-1 から 19-8 まで夫の趣味について語り、19-9 でエの表現 = ‘今天买回来一个吉他’ を用いている。そしてそれ以降の内容を追っていくと、19-10 から 19-12 まで、19-9 のエの表現の目的語である ‘吉他’ について語っている。

上記の3例から、話し手がエの表現 = 「V + C + ‘来/去’ + O」を選択するのは、目的語 (= ‘O’) が意味する内容とそれ以降の発話の内容とが、直接関連しているためであることが解かる。換言すれば、目的語 (= ‘O’) の意味内容とそれ以降の発話の内容とが直接関連している場合に、エの表現が選択

される。

以上の考察から、ウとエの表現の談話上の機能と目的語の統語的特徴は、次のように記述することができる。

この表現以降の発話の内容が、この表現の目的語と意味的に直接関連があり、特に聞き手の注意を目的語に向け、目的語を強く印象づける必要がある場合に、エが用いられ、そうでない場合にはウが用いられる。そしてこのことから、エの表現の方が談話の結束性の働きが強いことが解る。また、複合方向補語はもともと情報過多の表現であるので、聞き手に対する情報量の負担の軽減のため、目的語である名詞（句）には旧情報が好まれる。

以上、6つの例を挙げてウとエの表現の相違について検討してきた。例(14)から例(19)は全て複合方向補語「C + ‘来’」の例であるが、複合方向補語「C + ‘去’」についても言語資料には多くの表現例が現れ、ウ、エの表現の選択は「C + ‘来’」の場合と同じである。

なお、言語資料には、知的意味が同じであって、ウとエの表現のいずれもが可能な表現例はこの他に 15 例あったが、それらはすべて、ここで記述してきたことにあてはまるものであった。

第4章 談話の転換部

一つのトピックについて談話が終了すると、次にトピックの転換が行われ、また新たなトピックについて談話が展開されていく。

転換ということを考えるとき、それには3つのレベルがある。その3つのレベルとは、先の1.1.3 でまとめた談話の構造の3つのレベルであり、一つは、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフ (MP_n からMP_{n+1}) への転換、二つ目は、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ (SP_n からSP_{n+1}) への転換、もう一つは、セグメントから次のセグメント (Seg._n からSeg._{n+1}) への転換である。そして MP_n から MP_{n+1}、SP_n からSP_{n+1}、Seg._n から Seg._{n+1}への転換が行われるとき、MP_{n+1}、SP_{n+1}、Seg._{n+1} のそれぞれの冒頭部に、その転換を知らせる発話がなされ、談話が遂行されていく。

まず、この3つのレベルについて転換の特徴をみていく。

メイン・パラグラフが転換される場合には、トピックが急激に転換される場合と、緩やかに転換される場合がある。

トピックが「急激に転換される」とは、MT_n とMT_{n+1} のトピックの関連性が非常に低い場合をいう。例えば、下記の例(21)がそれである。

例(21)：資料-(く)、インフォーマント-(I)と(J)

- 21-1 I：那还不是纯高速公路|。
- 21-2 : 就是将来呢，好像那个地段呢|，要纳入|要修的(那个)高速公路的那里边的一段|。
- 21-3 : 我想它(那个)将来改造很方便，就把边上封闭了就|就|不让自行车走就算了|。
- 21-4 : 反正就那样了|。
- 21-5 : 我临出来赶上一阵什么呢|，
- 21-6 : 不是最近中央在北戴河| (那什么)| 地方开会|，你看报没看报?|
- 21-7 : (那个)| 讲什么改革工资，改革什么的|。
- 21-8 : 就听他们| 谣传|，
- 21-9 : 有的说嘛，明年啊|，工资给涨百分之七十|，每个人都给涨七十|，
- 21-10 : 那么物价呢|，涨|一倍|，百分之一百|。

- 21-11 : 据说有这个谣传 |。
- 21-12 : 紧接呢 |, 随着这个谣传 |, 没有多久马上又出来一个 |, 今年九月一号以后 |, 所有的东西都要涨价 |。
- 21-13 : 不光是天津的啊 |, 全国的 |。你还不知道这谣传 |。

(I)は例(21)で、21-1 から 21-4 までは高速道路の話をしているが、21-5 で「動詞句 + ‘一’ + 量詞 + 名詞句」の表現（‘我临出来赶上一阵什么呢’）を用いて、いきなり次のメイン・パラグラフの提示部に入るという転換の仕方をしている（資料(く)のMT2 とMT3 を参照）。この場合 MP2 とMP3 とは、内容的に非常に関連性が低い。本稿ではこのように、MP_n とMP_{n+1} とが内容的に関連性の低い場合を、トピックの「急激な転換」と呼ぶこととする。

これに対して、MP_n とMP_{n+1} とが内容的に関連性の高い場合がある。本稿ではこれを、トピックの「緩やかな転換」と呼ぶこととする。

また、サブ・パラグラフとセグメントのレベルにおいては、SP_n とSP_{n+1}、Seg._n とSeg._{n+1} との関連性は常に高く、すべて「緩やかな転換」である。

トピックの転換を知らせる発話には、例えば‘哎’、‘你看’などのような、相手の注意を喚起するための表現があり、これらは「急激な転換」、「緩やかな転換」を問わず、MP_n からMP_{n+1} への転換、SP_n からSP_{n+1} への転換の場合によく用いられるが、Seg._n から Seg._{n+1} への転換の場合には用いられない。

また、発話者が発話の相手に質問をすることによっても、同様の転換が行われることがある。しかしこのような表現は、転換を示すために用意された表現形式ではないので、本稿の分析の対象とはしない。

本稿で分析の対象とするのは、転換を知らせる表現形式のうち、名詞（句）と非常に関わりがあり、話文のニュートラルな語順においては通常、文頭に立たないとされている成分が、文頭に位置する表現である。本稿ではこれを「題目化」と呼ぶ。

現代中国語において題目化と考えられるものには、1. いわゆる目的語の文頭表現、2. 「前置詞‘在’ + 場所名詞（句）」の文頭表現、3. 「sentence + ‘的’」の文頭表現の3つがある。このほか、ニュートラルな語順においても文頭に位置し、題目として機能している‘外位語’の表現があるが、‘外位語’が旧情報の場合、談話の展開においては、1、2、3 と極めて類似した役割を果たしているので、ここで取り上げて考察していくことにする。

以下、談話の言語資料をもとに、それぞれについて考察を加えていく。

なお、目的語と「前置詞‘在’ + 場所名詞（句）」の文頭表現及び‘外位語’

の表現の場合、目的語、場所名詞（句）及び‘外位語’は、いうまでもなく旧情報に限られる。しかし「sentence+‘的’」の場合は、‘的’の後ろに名詞の置かれることもあり、その場合は新情報、旧情報のいずれの場合もあるが、ここでは、‘的’の後ろに名詞の置かれない旧情報に限定して分析を進める。

4.1 いわゆる目的語の文頭表現

ここではまず、いわゆる目的語が文頭に立つといわれている表現が、従来、どのように分析されてきたかを概観し、コメントを加える。

4.1.1 従来の統語論的分析

目的語が文頭に立つといわれている表現は、現代中国語の統語論では、通常、‘主谓谓语句’（主語－述語の構文が述語となっている文）の中に区分される。この‘主谓谓语句’という名称は、丁声树、吕叔湘等によって編れた『现代汉语语法讲话』の中で用いられて以来、一般的に用いられるようになった。

『现代汉语语法讲话』（p.24～28）では、‘主谓谓语句’は以下の甲類、乙類、丙類の3種に分類されている。

甲類：[94] 吴天宝人小。

- ・主語－述語（‘人小’）の中の主語（‘人’）と文全体の主語（‘吴天宝’）とは関連がある。

乙類：[95] 窗户谁叫打开的？

- ・文全体の主語（‘窗户’）は、意味の上から、主語－述語（‘谁叫打开的’）の動作、行為（‘打开’）の支配を受けるものである。

丙類：[96] 我上海也到过，天津也到过，几个大商埠都到过。

- ・主語－述語（‘上海也到过’、‘天津也到过’、‘几个大商埠都到过’）の中にはしばしば‘也’や‘都’の字があり、その中の主語（‘上海’、‘天津’、‘几个大商埠’）は、述語（‘到过’）の支配を受ける。

この分類に従えば、目的語が文頭に立つといわれている表現は、乙類に入る。ここで、問題を乙類に限ると、『现代汉语语法讲话』では乙類の表現の文頭の成分を、文全体の‘主語」とみなしているが、これ以前は、この乙類の表現の文頭

の成分については、それを‘宾语（目的語）’とする見方が主流であった。その主なものを『現代汉语语法讲话』と比較したのが、次の表①¹³⁹である。

〈表①〉

例文：‘北京人的影子 我 较好了。’		
著者	書名	分析
黎锦熙	新著国语文法（1924）	目的語 + 主語 + 動詞
王力	汉语语法纲要（1946）	
吕叔湘	语法学习（1953）	
丁声树等	现代汉语语法讲话（1952～3）	（全文の）主語 + 主語 + 動詞
张志公	汉语语法常识（1953）	

そしてこれ以後、‘主語’か‘宾语’かについて盛んに討論され、いわゆる「主語宾语论争」が展開されていった¹⁴⁰。

現在では、‘主谓谓语句’は、現代中国語の中で、一つの特徴的な表現形式とされているが、その範囲は一定ではなく、孟维智1984のように『現代汉语语法讲话』と同様の3類しか認めないものから、吕叔湘1986のように、大別して5類、それをさらに細かく10種類に分け、その上に10種類からはみ出す例を10例挙げているものまでである。このように‘主谓谓语句’の範囲は一定していないが、その範囲の狭い広いに関わらず、目的語が文頭に立つとされている表現は、いずれも‘主谓谓语句’の中の一類として扱われていることにはかわりはない。

また、この文頭の目的語については、例えば朱德熙1985（p.129）のように下記の[97]を挙げ、‘杯子’を「‘潜宾语’（潜在目的語）」と呼んでいるものもあるが、最近では、「主語（文全体の主語）」とするのが一般的な見解であり、文頭に立つ目的語を「大主語」、その後ろの名詞（句）を「小主語」と命名しているものが多い。例えば、江天1978（p.478、下記の[98]）、刘月华等1983（p.416、下記の[99]）、倪宝元等1985（p.203、下記の[100]）、吕叔湘1986（下記の[101]）などがそれである。

[97] : 杯子我打破了。

[98] : 那里的情况，他特别熟悉。

[99] : 这本书我看过了。

[100] : 这种事咱不能干。

[101] : 一套衣服，老大穿过了。

上記の例では、それぞれ[98]の‘那里的情况’、[99]の‘这本书’、[100]の‘这种事’、[101]の‘一套衣服’が「大主語」で、[98]の‘他’、[99]の‘我’、[100]の‘咱’、[101]の‘老大’が「小主語」である。

そして、「文全体の主語」とか「大主語」と呼ばれている成分は、その文における「描写の対象」であり、「意味的には、それは述語動詞の意味する動作、行為の支配を受ける（受事）」、とするのが一般的な見解である。

従来の分析は、いわゆる目的語が文頭の位置に立つ表現の範囲や類分けについては出入りがみられるものの、「主語宾语论争」に代表されるように、主語（文全体の主語あるいは大主語とするものを含める）と捉えるか、目的語の提前されたものと捉えるかのいずれかである。しかしながら、この捉え方は、一文のレベルを対象としている限り、いずれの立場に立ってもこの目的語の統語的特徴を究明する視点ではない。主語だとする立場からの分析はいわゆる主述述語文の一類だとすることに尽きるわけであり、また、目的語の提前だとする立場からの分析は、中国語の基本的な表現形式が「主語－動詞－目的語」の語順だとすることが前提となっているが、個別の言語表現は話文の連続体としての談話において、それぞれ、そうであるべき、あるいはそうでなければならない必然性のあるものであって、基本型を設定し、その変形であるとする分析は根本的に問題が残される。いわゆる目的語が文頭に立つ表現も、目的語が本来の位置にあるとする表現も、いずれも現実の言語生活においては然るべき、あるいはそうでなければならない表現なのである。この現実の言語生活において、然るべき、そうでなければならない表現であるかどうかは、談話の展開によって判断され、決定されるものであり、談話レベルの分析を進める所以はここにある。

以下、談話の言語資料をもとに、いわゆる目的語が文頭に立つ表現の談話上の機能と文頭の名詞（句）の統語的特徴について分析を進めていく。

4.1.2 目的語の文頭表現とトピックの転換機能

下記の例(22)は、資料(き)の中で、目的語が文頭に立つ発話がなされている部分を抽出したものである。

例(22)：資料-(き)、インフォーマント-(E)と(H)

22-1 H：再有星海公园那边，黑石礁那边|。

22-2 E：对。那边是别墅|，那边别墅区|。

- 22-3 H: 对, 对, 对 |。
- 22-4 : 大连最糟糕住的地方, 一个是西岗 |, 再一个是寺儿沟 |。
- 22-5 E: 寺儿沟, 寺儿沟, 那是 | 那是过去劳工住的地方 |。
- 22-6 H: 劳工住的地方 |, 红房子 |。
- 22-7 E: 对, 红房子 |, 对 |。
- 22-8 H: 那个城市哈 |, 风景特别美 |。
- 22-9 : 站在那个山上 |, 我这个人好运动 |, 经常爬到山顶上去 |, 到山上往下面看…
- 22-10 E: 你爬哪个山哪? |
- 22-11 H: 就是 (那个) 辽师后面的那个山 |, 还有辽师前边那个山 |。
- 22-12 E: 马栏子 | 马栏子那边的山 |。
- 22-13 H: 嗯, 对 |。山挺高的 |。
- 22-14 E: 嗯 |。那边什么山呢来着, 不知道啊 |。
- 22-15 : 那边可以看见夏家河子吗? |
- 22-16 H: 完全可以看到 |。
- 22-17 E: 可以看到海啊? |
- 22-18 H: 对, 对, 对 |。嗯 |。
- 22-19 : 完全看到 |。
- 22-20 : 我有的时候还上旅顺去 |。
- 22-21 E: 旅顺我也常去 |。
- 22-22 H: 果把旅顺那个地方哈, 建成高校区…
- 22-23 E: 那太好了 |。
- 22-24 H: 太美了 |。
- 22-25 E: 我小学就是在旅顺上的 |, 四年 |。
- 22-26 H: 是吗? |
- 22-27 E: 旅顺, 嗯 |。
- 22-28 : 所以 | 那个时候 | 因为 (那个) | 我爸爸经常出差啊 |, 而且, 我妈也有工作 |。
- 22-29 : 所以 (那个) 就是 | 不能 (这个) | 每天照顾我们,
- 22-30 : 所以就 | 把我们 | 姊妹几个都送到 (这个) | 能住宿的学校去 |。
- 22-31 : 我的学校啊, 就在旅顺 |。
- 22-32 : 在旅顺呢 |, 就是两个礼拜回家一次 |。
- 22-33 : 那个时候, 就觉得特别远,
- 22-34 : 觉得旅顺到大连, 坐车要坐一个小时什么的啊 |。
- 22-35 : 那后来, 就去年我还去了一趟呢 |。

- 22-36 : 去年去了！就觉得好像！现在车也快了！，四十分钟就到了！。
- 22-37 : 就觉得好像！还没出北京市里那么一个感觉啊！。
- 22-38 : 可能人大了也觉得距离就短了！。
- 22-39 : 小的时候，觉得特别远，觉得！。
- 22-40 H : 就是这个体会！。
- 22-41 E : 嗯。旅顺简直是花园城市！。
- 22-42 H : 花园城市！。
- 22-43 E : 小城市！，但是！它（这个）！文化特别丰富啊！。

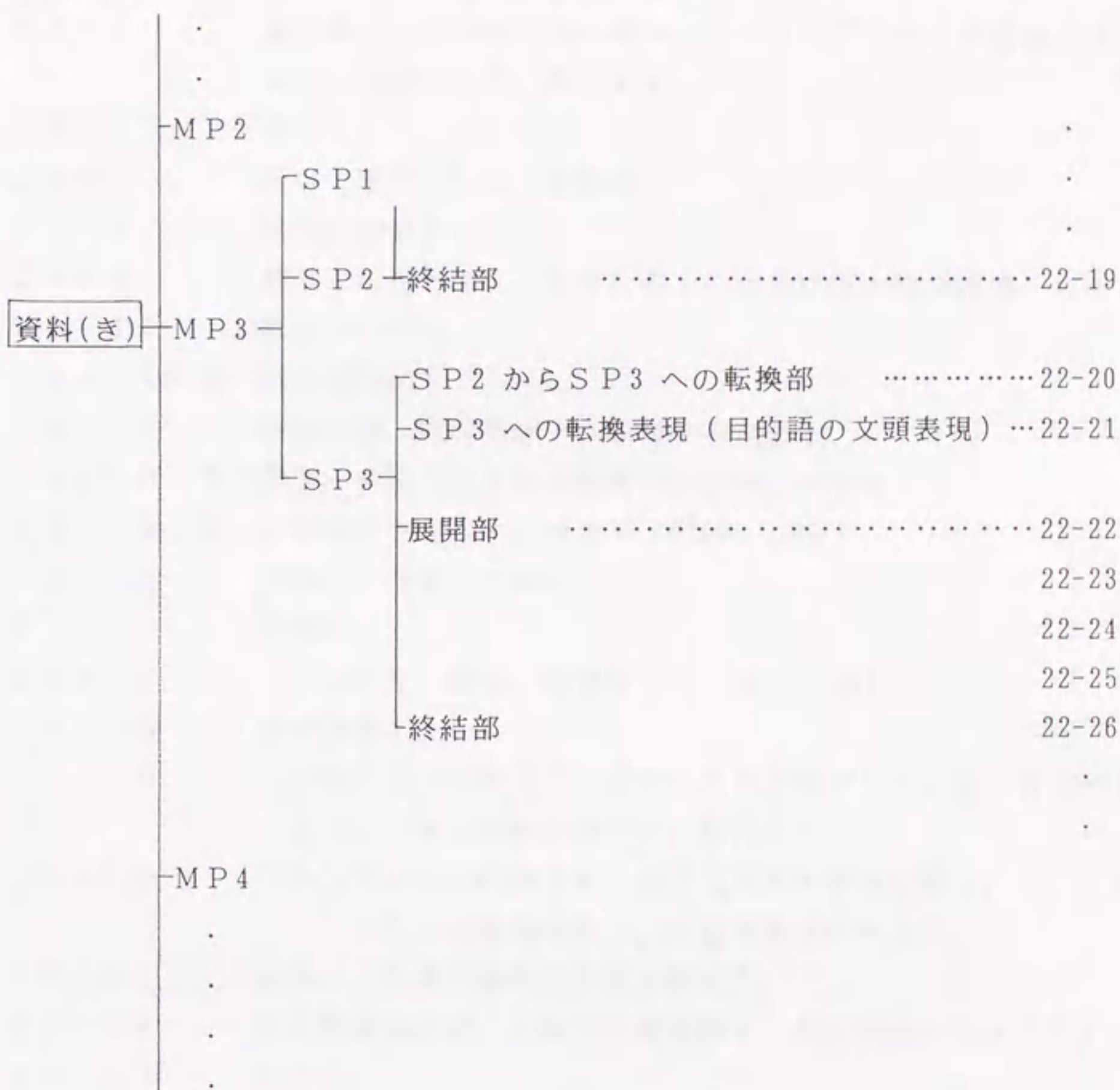
例(22)は、資料(き)の中で(E)と(H)が「中国国内の都市」をメイン・トピック(MT3)として語っているメイン・パラグラフ(MP3)の一部である。この中では、(E)が22-21で目的語が文頭に立つ表現(=‘旅順我也常去’)を用いている。以下、例(22)の談話の展開を追いながら、この表現の談話上の機能を探ってみることにする。

例(22)は、22-1から22-19までは、中国の‘大连’という都市について語られている。そして(H)が22-20で‘旅順’を談話の中に導入すると、次に(E)がそれを受け、22-21において‘旅順’が文頭に表現され、‘旅順我也常去(旅順にはわたしもよく行きます)’と述べている。そしてそれ以降(22-22~)は、‘旅順’に関する話が続いていく。

つまり、22-1から22-19までは、‘大连’をトピックとして談話は展開しているが、22-20で(H)が‘旅順’を導入し、次の22-21で(E)によって目的語が文頭に立つ表現が用いられてからは、‘旅順’が談話のトピックとなっていく。このように、22-21の表現によって、談話のトピックが‘大连’から‘旅順’に転換されたわけである。そして(H)が22-22において、‘旅順’を談話のkey-wordとして前置詞‘把’でマークしていることから、(H)もこのトピックの転換を認めていることが解る。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、次頁の《図(22)》のようになる。

《図(22)》



いま一つ、目的語が文頭に立つ表現例をみていくことにする。

下記の例(23)は、資料(き)の中から、目的語が文頭に立つ表現が用いられている部分を抽出したものである。

例(23)：資料-(き)、インフォーマント-(E)と(H)

23-1 E：有点功劳！(这个这个)居功就可以自傲啊。

23-2 :这是中国人的传统啊！，

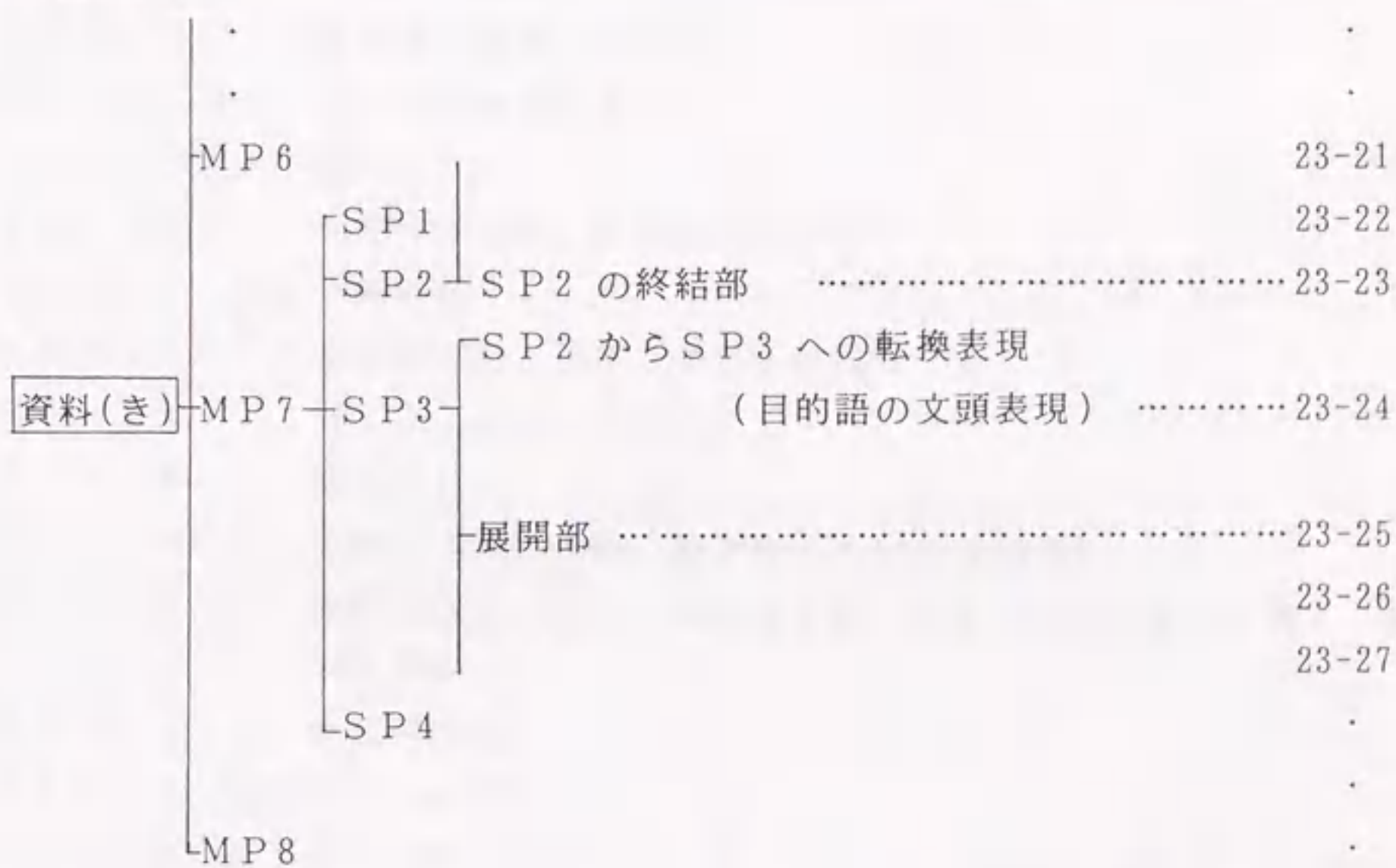
- 23-3 : 有功劳！有功劳就可以摆资格啊！。
- 23-4 : 所以！你又不可能强行让他下去！。
- 23-5 : 有时候！，上面来个统一命令，六十岁以下！六十岁全部退休什么的，这样也不行，是吧？！
- 23-6 : 是吧？！
- 23-7 : 所以！还是一句话‘没办法’。
- 23-8 : 就只好等吧！。
- 23-9 : 就是！再过十年、二十年左右！，还是这些人慢慢慢慢下去吧！，
- 23-10 : 就只好这样吧！。
- 23-11 H : 咱们老想啊！，
- 23-12 : 中国人哪，时间观念！，非常的有意思！。
- 23-13 E : 因为，中国人就是地大物博时间多啊，哈哈……
- 23-14 H : 好像咱们中国人，时间用不了似的！，哎！。
- 23-15 E : 实际上！没有充分利用！。
- 23-16 H : 是啊！。
- 23-17 : 文化大革命一耽误，耽误这一二十年！，唉！。
- 23-18 : 没事没事！。
- 23-19 : 毛泽东主席一方面说“一万年太久只争朝夕”！，另一方面呢！，
（这个）实际上整整耽误了一、两代人！。
- 23-20 : 文化大革命出生的孩子！，或者是文化大革命以前！，七、八岁！，
八、九岁出生的孩子！，你这是有这好机会！。
- 23-21 : 那些个！毕竟在城里住的是少数吧！。
- 23-22 : 在农村住的孩子！，有几个真正的！，最后就是！出头了？！
- 23-23 : 没有！。
- 23-24 : 而且，现在咱们国家教育制度，我本身搞教育的哈！，也常常想到！，
- 23-25 : 中国的城市里面！，特别是一些大中城市的教育！教育水平！，
（这个）教师的资力量！，是（这个）教学设备！，比较好！。
- 23-26 : 看看那些小城市！，看看一般的县城！，再看看一般的农村！，
糟糕极了！。
- 23-27 : 我到了农村看！、
- 23-28 : 到现在为止，有的农村学校！，还是用（那个）破庙！，
- 23-29 : 窗户呢？没有东西！，全都用砖头砌死！。
- 23-30 E : 土桌子、土凳子也有！。
- 23-31 H : 土桌子、土凳子！。

例(23)は、資料(き)の中で、(E)と(H)が「文化大革命とそれ以後の体制」をメイン・トピック (MT7) として語っているメイン・パラグラフ (MP7) の一部である。この中では、23-24で目的語が文頭に立つ表現 = ‘現在咱们国家教育制度我也常常想到’) が用いられている。

23-1 から 23-10 までは、(E)が「中国の人材の登用」について語っており、次の 23-11 で、(H)が中国人の時間に対する観念を導入し、それ以降 23-23 まで、「文化大革命による人材育成の被害」について語っている。そして 23-24 で、目的語が文頭に立つ表現が用いられ、それによって、これ以降のトピックは「現在の教育問題」へと転換していく。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、下記の《図(23)》のようになる。

《図(23)》



上記の2例によって、目的語が文頭に立つ表現は、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ (SP_n から SP_{n+1}) へのトピックの転換を聞き手に知らせる働きをしていることが解る。

次に、この表現が、セグメントから次のセグメント (Seg.n から Seg.n+1) への転換機能を果たしている例をみることにする。

例(24)：資料-(こ)、インフォーマント-(M)と(N)

- 24-1 N: 我想吧, 他觉得存款没有意义 |。
- 24-2 : 有时候一想呢, 他有时候, 他觉得, 他跟我说什么呢, 他说“小
孙吧, 中国人存钱以后 |, 就为了回国买那点东西哈。” |
- 24-3 : 他说“那东西有没有怎么的啊。” |
- 24-4 : 他那么想, 有没有能怎么的。
- 24-5 : 而且回国以后呢, 国内也不是没有啊 |。
- 24-6 M: 对, 对, 对, 对! 他想得对! |。
- 24-7 N: 在国内能,
- 24-8 : 就是 | 但是你在日本期间, 就应该 | 就是日本的那些文化, 你就
应该享受享受啊! |。
- 24-9 : 而且日本什么录象机什么的, 他已经, 他全买了,
- 24-10 : 换了三台录象机了 |,
- 24-11 : 光录象机他换了三台! |。
- 24-12 M: 他干什么换那么多? |
- 24-13 N: 坏呀! |。
- 24-14 : 买完坏了之后, 他又买一台, 完了……
- 24-15 M: 干嘛坏呢? |
- 24-16 N: 他买录音机, 用不了多长时间就坏了 |。
- 24-17 : 坏了完了之后, 他又买 |。
- 24-18 M: 修理呀 |。
- 24-19 N: 他说, 修理那些钱, 他觉得还不如买新的呢 |。
- 24-20 : 他那么想 |, 他说, 修理挺贵的, 完了, 用不了多长时间 |, 他
不合算呢,
- 24-21 : 他就买新的 |。
- 24-22 M: 那第二台呢? |
- 24-23 N: 完了, 第二台又坏了! |
- 24-24 : 他又买了一台 |。哈哈……
- 24-25 M: 哈哈……
- 24-26 N: 他说, 现在这台录象机, 他说, 这台录象机挺好 |。
- 24-27 : 这台录象机到现在没坏呢, 用的时间也挺长的。| 啊哈!

例(24)は、資料(こ)の中で(M)と(N)が、「(N)の夫」をメイン・トピック(MT13)として語っているメイン・パラグラフ(MP13)の中で、「(N)の夫の日本でのお金の使い方」をサブ・トピック(ST1)として語っているサブ・パラ

グラフ (SP1) の一部である。

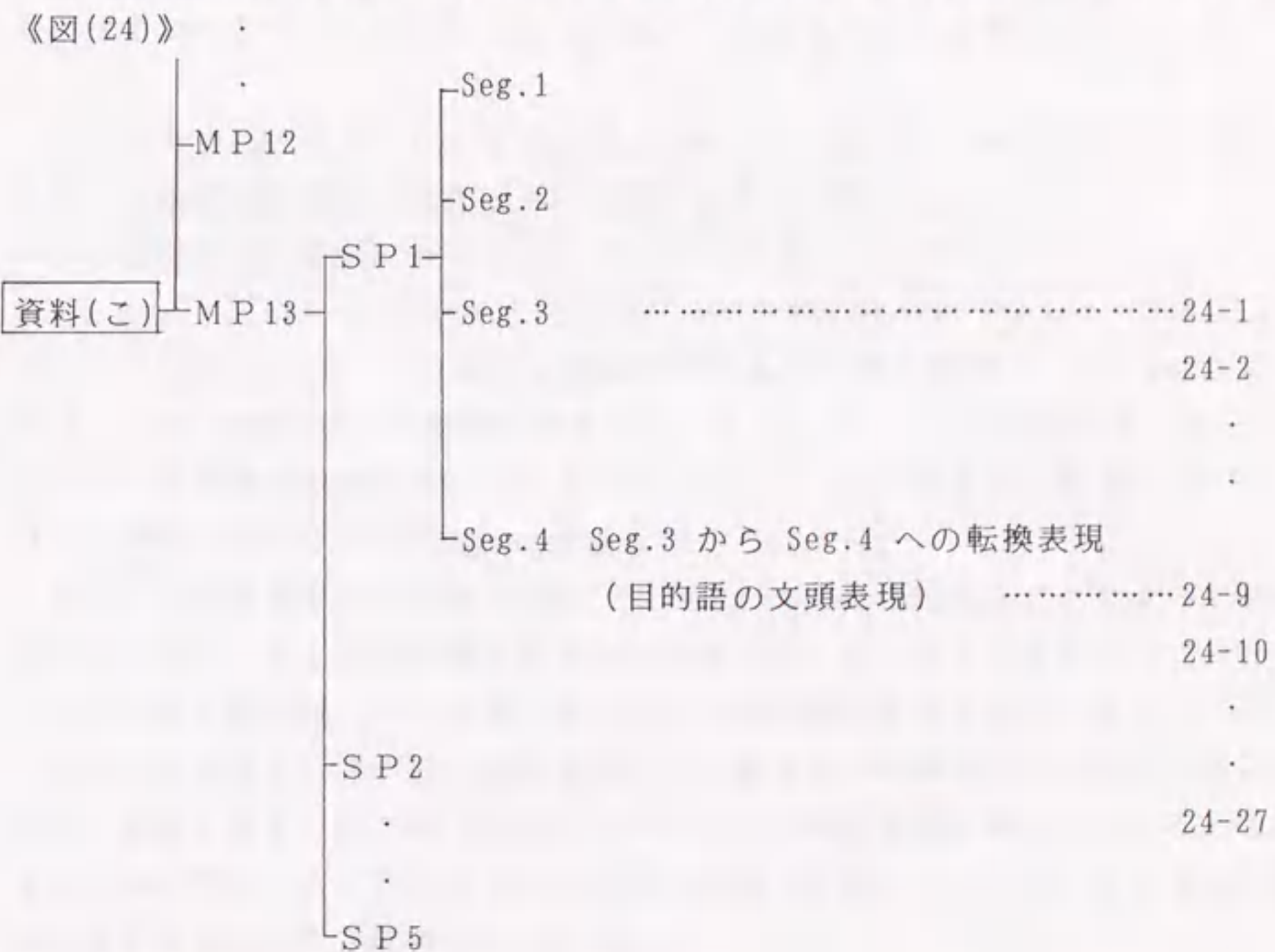
この中では、24-9 で目的語が文頭に立つ表現 (= ‘日本録象机他已经全买了’) が用いられている。ここでも、例(24)の談話を順に追ってみていくことにする。

まず(N)は、24-1 で夫の貯金に対する考えかたを述べ、24-2 から 24-8 で、多くの中国人が日本で貯金をしていることに対して、夫が非難していたことを(M)に伝えている。そして 24-9 で目的語が文頭に立つ表現が用いられ、これ以降は、文頭で表現された ‘日本録象机’ を一つの例として、それを巡って、(N)の 夫の具体的なお金の使い方へと談話が展開していく。

24-9 以降、聞き手である(M)の発話が5回ある (24-12、24-15、24-18、24-22、24-25) が、その内容はすべて、 ‘日本録象机’ を巡る(N)の夫の行為に対する発話である。このことから、24-9 で(N)が目的語が文頭に立つ表現を用いたことによって、談話の内容が、「お金に対する(N)の夫の考え方」の説明から、「(N)の夫の ‘録象机’ を巡る具体的なお金の使い方」の説明に転換していることを、(M)も認めていることが解る。

つまり、24-1 から 24-8 ままで一つのセグメントであり、24-9 の目的語の文頭表現によって、次のセグメントへの転換がなされているのである。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、下記の《図(24)》のようになる。



以上、目的語が文頭に立つ表現をみてきたが、その結果、この表現の談話上の機能は、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ (SP_n から SP_{n+1}) への、あるいはセグメントから次のセグメント (Seg._n から Seg._{n+1}) へのトピックの転換にあることが明らかになった。同時に、《図(22)》、《図(23)》、《図(24)》からも明らかであるように、この場合この表現は SP_{n+1}あるいはSeg._{n+1}の提示話文としても機能し、文頭の成分そのものがトピックの方向づけをしていることはいうまでもない。つまりこの表現は、提示部を包含した転換表現である。

言語資料には、目的語が文頭に立つ表現例は 24 例現れ、このうち SP_n から SP_{n+1} への転換は 14 例、Seg._n から Seg._{n+1} への転換は 10 例あったが、MP_n から MP_{n+1} への転換は 1 例もなかった。これらの表現例からみても、目的語の文頭表現は、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフへのトピックの転換の機能は果たしにくいと考えられる。その理由は、以下の通りである。

例(22)、(23)、(24)の3例における目的語の文頭表現からも解るように、そこで文頭に表現されている名詞(句)は、すべて、それ以前の発話の内容と非常に関連性の高い旧情報である。従って、この目的語の文頭表現によって、トピックを急激に転換することはできない。また、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフへトピックを緩やかに転換する場合にも、この構文は用いられにくい。換言すれば、目的語の文頭表現の文頭の名詞(句)と、それ以前の発話の内容とは、メイン・トピックを転換できないほど、関連性の高い旧情報なのである。

以上の考察の結果、いわゆる目的語の文頭表現の談話上の機能と文頭の名詞(句)の統語的特徴は、次のように記述することができる。

この表現形式は談話において、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ (SP_n から SP_{n+1}) への、あるいはセグメントから次のセグメント (Seg._n から Seg._{n+1}) へのトピックの転換の機能を果たしていると同時に、SP_{n+1}あるいは Seg._{n+1}の提示話文の機能も果たしている。しかし、この表現形式によってトピックを急激に転換することはできず、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフへのトピックの転換の機能は果たしにくい。

また、この表現形式の文頭の名詞(句)は、文頭に表現することによって題目化されており、そしてこの題目化された名詞(句)は、SP_n あるいは Seg._n の中の内容を受け継いだ旧情報であるという統語的特徴をもっている。

なお、言語資料には、目的語が文頭に立つ表現が 24 例あり、それらは SP_n から SP_{n+1} あるいは Seg._n から Seg._{n+1} への転換機能を果たしていることはすでに述べたが、ここで取り上げた3例以外の21例についても、それらはいずれも提示部を包含した転換表現であった。

4.2 「前置詞‘在’＋場所名詞（句）」の文頭表現

ここでもまず、従来、「前置詞‘在’＋場所名詞（句）」が文頭に立つ表現がどのように分析されてきたかを概観し、コメントを加える。

4.2.1 従来の統語論的分析

「前置詞‘在’＋場所名詞（句）」が文の中で占める位置には、文頭、述語動詞の前、述語動詞の後ろの、3つの場合がある。このうち、「‘在’＋場所名詞（句）」が述語動詞の前に位置する場合と後ろに位置する場合の相違については、従来から、多くの研究がみえる（3.2.1.1 参照）。これに対して、文頭に立つ「‘在’＋場所名詞（句）」に関する研究は、非常に少ない。

その中で范继淹1982は、文における「‘在’＋場所名詞（句）」の位置の意味を、文頭、述語動詞の前、述語動詞の後ろの3つの場合を比較することによって明らかにしようとしている。そしてその結果、統語的に以下のような機能上の相違があると指摘している（PP＝「‘在’＋場所名詞（句）」、NP＝名詞句、VP＝動詞句）。

(1) 文頭の「‘在’＋場所名詞（句）」：

- ・ $PP + NP + VP = PP + (NP + VP)$
- ・ PPは「NP＋VP」全体を修飾しており、事件の発生した場所を示している。

(2) 述語動詞の前の「‘在’＋場所名詞（句）」：

- ・ $NP + PP + VP = NP + (PP + VP)$
- ・ PPは後ろのVPだけを修飾しており、動作の発生した場所、あるいは状態の現れた場所を示している。

(3) 述語動詞の後の「‘在’＋場所名詞（句）」：

- ・ PPはVPの‘補語’である。
- ・ 動作の到達した場所、あるいは状態の現れた場所を示している。

しかし、范继淹は、(1)の「事件の発生した場所」と(2)の「動作の発生した場所」にどのような相違があり、(2)と(3)の「状態の現れた場所」をどう区別するというのであろうか。また、(3)は(1)、(2)の「事件・動作の発生した場所」に対して、「動作の到達した場所」と記述しているが、前置詞が‘到’の場合であればともかく、‘在’の場合に「動作の到達」を表すこと

はあり得ない。さらに、統語的機能の相違として、(1)は文修飾成分、(2)は連用修飾成分、(3)は補語としているが、これだけでは何ら説明がなされていないに等しい。

このほか、张志公1959 (p.150)に‘状语的位置不同，句子意义没有变化’という記述があり、これに反論しているのが、沈星怡1984である。

沈星怡は、下記の[102]と[103]を比較し、「‘在’+場所名詞(句)」が[102]のように文頭に立つ場合と、[103]のように述語動詞の前に位置する場合には、文の意味が変わるとしている。

[102] 在我们村上，家家都有余粮。

(‘家家’は我々の村の人々を指しており、‘余粮’はどこにあるのかはつきりしていない。)

[103] 家家在我们村上都有余粮。

(‘家家’は我々の村の人々を指しているとは限らないが、‘余粮’は我々の村にある。)

しかし、[102]において‘余粮’は‘我们村上’にあり、[103]において‘家家’は‘我们村上的家家’であるとするのが通常であり、‘余粮’が‘我们村上’以外のところに存在したり、‘家家’が‘我们村上’以外の‘家家’を表している状況は想定することすら極めて難しい。仮にこのような状況を表現しようとする場合は、通常‘余粮’や‘家家’に限定語が付加される。

従って、[102]と[103]は表現の知的意味は変わらないとするのが妥当であろう。

また、文頭の「‘在’+場所名詞(句)」の働きについては、黎锦熙1955bや倪宝元等1985に、その記述がみられる。

黎锦熙1955bは下記の[104]を例に挙げ、‘在教室里’が文頭に位置しているのは、強調のためであるとしている。

[104] 在教室里他们都看着书。

倪宝元・张宋正1985 (p.331~)は下記の[105]を例に挙げ、述語動詞の後ろの‘在这个醒醒的地方’は、強調するために文頭に移動して[106]のように言い換えることができるとしている。

[105] 丞相怎么能睡呢，在这个醒醒的地方？

[106] 在这个醒醒的地方，丞相怎么能睡呢？

両者とも文頭の「‘在’+場所名詞(句)」を「強調」の働きと捉えている。

このように、「‘在’+場所名詞(句)」が文の中で3つの位置を占めることができ、しかもその知的意味にも変化がないという条件下における文頭表現は、従来、取り立てであるとか強調であると捉えられてきた。しかし、3.2.1.2で福

地の指摘した「後部の重み」でみてきたように、例えば、[105]、[106]においては、倪宝元・张宋正は、[106]は‘在这个醒醒的地方’が強調されているとしているが、[105]の場合も‘在这个醒醒的地方’が強調されているといっても何ら差し支えない。

このように同一の言語表現について、相反する見解が成立するのは、場面を離れた一文のレベルで分析をしているからであり、3.2.1.1でも記述したように、強調や取り立ての概念は談話の展開の中でのみ適用できるものであり、一文のレベルでは導入することのできないものである。

以下、談話の言語資料をもとに、「‘在’+ 場所名詞(句)」が文頭に立つ表現の談話上の機能とその場所名詞(句)の統語的特徴をみていく。

4.2.2 「‘在’+ 場所名詞(句)」の文頭表現とトピックの転換機能

下記の例(25)は、資料(き)の中から「‘在’+ 場所名詞(句)」が文頭に立つ表現が発話されている部分を抽出したものである。

例(25)：資料-(き)、インフォーマント-(E)と(H)

- 25-1 H：我来日本一年多时间了|，就是名古屋|。
- 25-2 E：别的地方都没有去哪？|
- 25-3 H：没有|。
- 25-4 E：东京也没去？|
- 25-5 H：啊，啊|，奈良去过|。
- 25-6 E：东京去了吗？|
- 25-7 H：没有|。
- 25-8 E：啊|，那你真应该出去转一转|。
- 25-9 : 因为(这个)|名古屋在日本呢|，它不是|特别具有代表性|的城市|。
- 25-10 : 所以|你在这个地方，你还不能完全体会日本啊|。
- 25-11 : 所以|必须要到东京啦|，大阪啦|，还有(这个)|东边、西边、南边、北边、都串一串，看看|。
- 25-12 : 这样呢|，能|能够真正有一个|比较完整的日本的印象啊|。
- 25-13 : 就跟|中国，你光在北京也不行|，
- 25-14 : 你必需要去上海看看，去天津看看|，或者再去内地，去西安|，

去小地方看看啊|，那样的|。嗯|。

- 25-15 : 反正|在国内呀|，我去了这么多地方，
- 25-16 : 我觉得还是大连好|。
- 25-17 H: 对|，我也是|。
- 25-18 : 我现在觉得哈，在中国的话|，一个是大连好|，还有|，青岛好|。
- 25-19 E: 嗯|。大连跟青岛感觉差不多，我觉得|。
- 25-20 H: 别的地方哈，包括北京|，
- 25-21 : 我在那儿住了七年哈|，到现在为止……
- 25-22 E: 我没觉得北京多好|。
- 25-23 : 北京也就是|现在因为是首都|，供应好一点儿|。
- 25-24 : 然后|（这个这个）|外地来（这个）访华的文艺团体，多一点儿|，文化生活好一点|。
- 25-25 : 再别的|首先气候不好|。
- 25-26 H: 从自然气候来说哈，绝对不行|，春天夏天冬天|。
- 25-27 E: 真是|。
- 25-28 : 过去皇帝，也不知道怎么选的啊|，也可能那个时候气候比较好，还是怎么的|。
- 25-29 H: 是的|。
- 25-30 : 那个时候|因为，那个时候的沙漠哈|，不像现在这样|。
- 25-31 E: 据说，周围都是森林哈，那时候|。
- 25-32 H: 都是森林|，啊|。都是森林|，树也非常多|。

例(25)では、25-15 で「‘在’ + 場所名詞(句)」が文頭に立つ表現（‘在国内我去了这么多地方’）が用いられている。この 25-15 は、文頭の‘在国内’を述語動詞の前に移動した‘我在国内去了这么多地方’という表現も可能であり、またその知的意味についても、両者に違いはない。そこで、25-15 の表現の談話上の機能を探るため、例(25)の談話の展開を追ってみていくことにする。

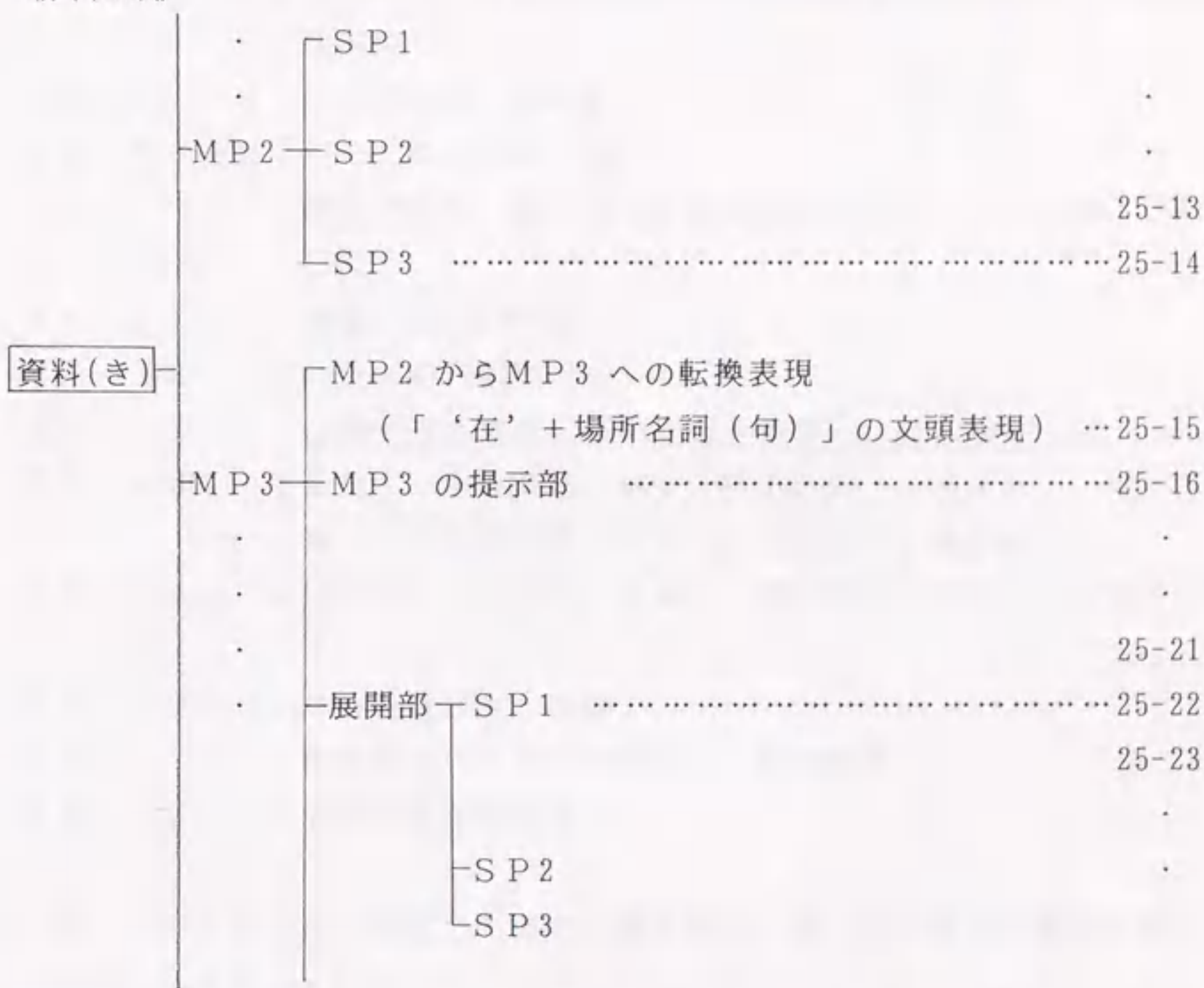
25-1 で(H)が名古屋以外の土地を知らないということを(E)に告げている。そして 25-2 から 25-7 で(E)が(H)にそのことを確認している。次に、25-8 から 25-14 では、(E)が(H)に対して、日本を知るためのアドバイスをしている。これに続いて、(E)が 25-15 で「‘在’ + 場所名詞(句)」が文頭に立つ表現を用いている。そしてこれ以降、談話の内容は日本の都市から‘国内’（=中国国内）へと転換していき、25-16 以降では、中国国内のいろいろな都市に対する(E)と(H)の感想が語られていく。

つまり、25-15 の「在 + 場所名詞（句）」が文頭に立つ表現によって、談話における場所の設定が、日本から中国へと転換され、その内容も、「日本での旅行（E）が富士山を旅行することについて→「青春18キップ」について→名古屋以外の都市を知らない（H）に対する（E）のアドバイス）」をトピックとしたものから、「中国国内のいろいろな都市に対する感想や思い出（北京について→大連について→旅順について）」を（E）と（H）がお互いに語るという内容に転換していく。

このように、「在 + 場所名詞（句）」が文頭に立つ表現は、「在 + 場所名詞（句）」を文頭に表現することによって、談話における場所の設定の転換を明示し、それによってトピックの大きな転換を知らせる働きをしている。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、下記の《図(25)》のようになる。

《図(25)》



いま一つ、「在 + 場所名詞（句）」が文頭に立つ表現例をみることにする。

下記の例(26)は、資料(き)の中で「在 + 場所名詞（句）」が文頭に立つ表現（26-13）が用いられている例である。

例(26)：資料-(き)、インフォーマント-(E)と(H)

- 26-1 H：建国都快四十年了|。
- 26-2 : 光说是什么呢|，‘希望在下一代，祖国未来的花朵，祖国未来的希望’|。
- 26-3 : 让他们在这种情况下来生活|，而那些个|公社的那些个干部们|，坐了小吉普车|，然后换成(这个)换成那什么车|小轿车|。
- 26-4 E：而且，用公款盖自己小楼什么的|。
- 26-5 H：对呀|。太……|。
- 26-6 : 我如果当干部的话，也可能我要变|。
- 26-7 : 但是，我一开始，我恐怕|，首先要把这些情况|，我全都给他砍下去|，
- 26-8 E：三把先火烧一烧啊|。
- 26-9 H：哎，三把火先烧一烧|。
- 26-10 : 烧完之后|，把那些老家伙烧得吱哇乱叫，把我打倒|，打倒就打倒|。
- 26-11 : 官僚主义特别严重|。
- 26-12 : 昨天你看到报纸没有？|
- 26-13 : 在西安那地方|，三十五万斤粮食|，野蛮装卸|。
- 26-14 : 最后|，本来就是|那个工厂不让卸|，不让卸|，加工厂不让卸|，那铁路局铁大王哪|，铁大爷|，最后硬卸|。
- 26-15 : 卸完之后，不到两、三天|，那些东西全不能用|，长了芽子了|。
- 26-16 : 然后铁道部派人追查|。
- 26-17 : 象这些个王八蛋之类的哈|，都得枪毙|。
- 26-18 : 中国该枪毙的太多了|。

ここでもこの表現の談話上の機能を探るため、例(26)の談話の展開を順に追っていくことにする。

例(26)は、先の 4.1.2 で挙げた例(23)に続いてなされた発話である。

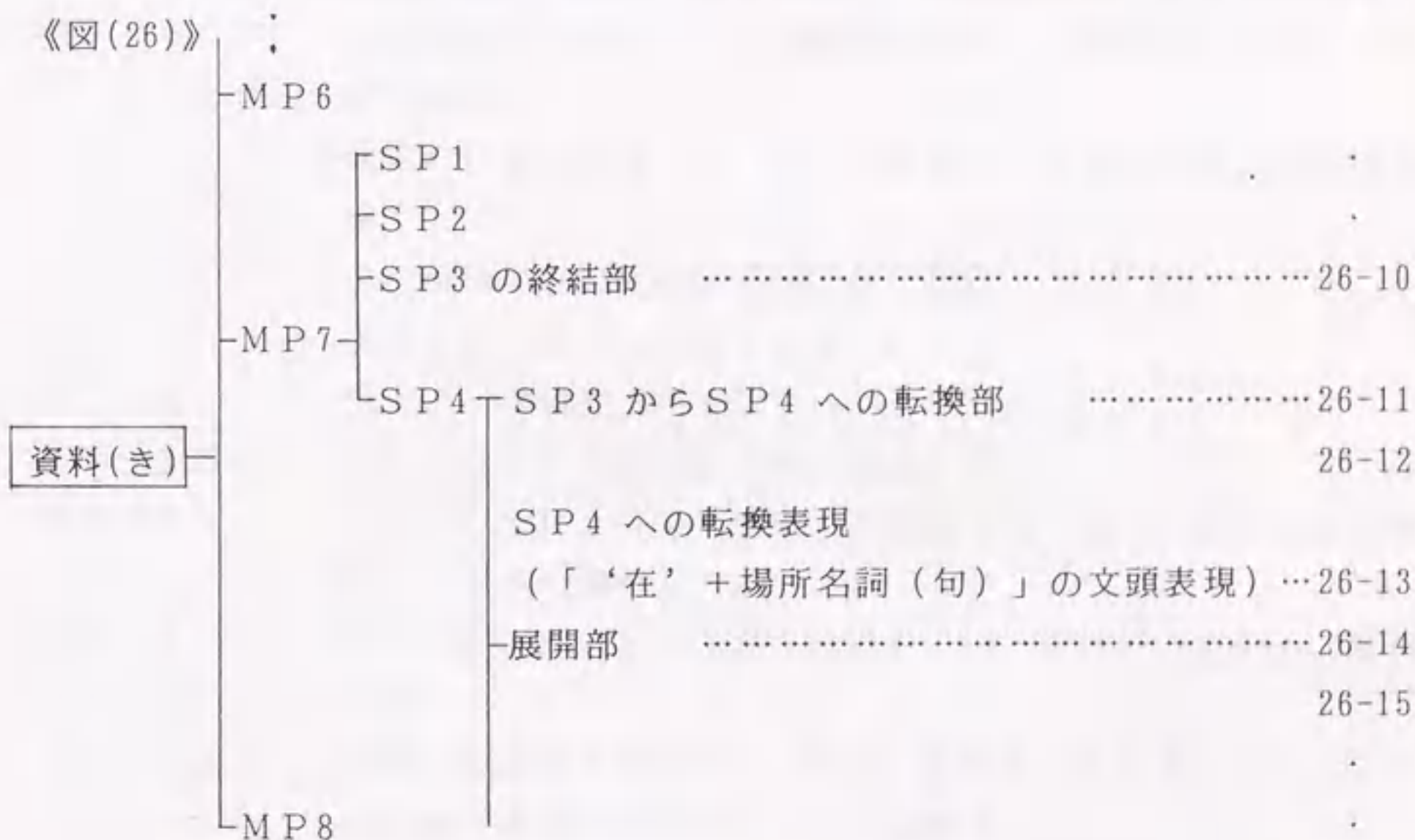
例(23)の23-24 から「文化大革命とその後の教育問題」について語られていき、それがそのまま例(26)へ続いていくが、26-3 のあたりから、「教育」に対する批判から「政府の幹部」に対する批判へとトピックがずれていく。そして 26-11

でトピックは「官僚主義」に転換されるが、すぐ次の 26-13 で、「『在』+ 場所名詞（句）」が文頭に立つ表現（＝『在西安那地方，三十五万斤粮食，野蛮装卸』）を用い、それによって談話における場所の設定を転換している。そしてこれ以降は、「西安」で起きた官僚主義に関わる事件の説明になっていく。

つまり 26-13 は、「三十五万斤粮食，在西安那地方，野蛮装卸」という表現も可能であるが、「在西安那地方」という「『在』+ 場所名詞（句）」が文頭に立つ表現によって、談話における場所の設定の転換が明示され、それによって、談話のトピックが、「文化大革命とその後の教育問題」から、「文化大革命と官僚主義」へと転換されていく。

このように、「『在』+ 場所名詞（句）」の文頭表現による、談話における場所設定の転換は、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフへのトピックの転換を明確にする働きもしている。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、下記の《図(26)》のようになる。



以上の考察から、「『在』+ 場所名詞（句）」が文頭に立つ表現が、談話における場所設定の転換を明示する働きをすることによって、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフ（MP_n から MP_{n+1}）へ、あるいはサブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ（SP_n から SP_{n+1}）へのトピックの転換を明確にする働きをしていることが解る。

次に、この表現が、セグメントから次のセグメント（Seg.n から Seg.n+1）へ

のトピックの転換を明確にする場合にも用いられることを、例(27)でみていくことにする。

下記の例(27)は、資料(か)において、(E)と(G)が「日本と中国の大学キャンパス内の生活の相違」をメイン・トピック(MT3)として語っているメイン・パラグラフ(MP3)の中で、「日本と中国の大学のシステムの比較」をサブ・トピック(ST2)としているサブ・パラグラフ(SP2)の一部である。

例(27): 資料-(か)、インフォーマント-(E)と(G)

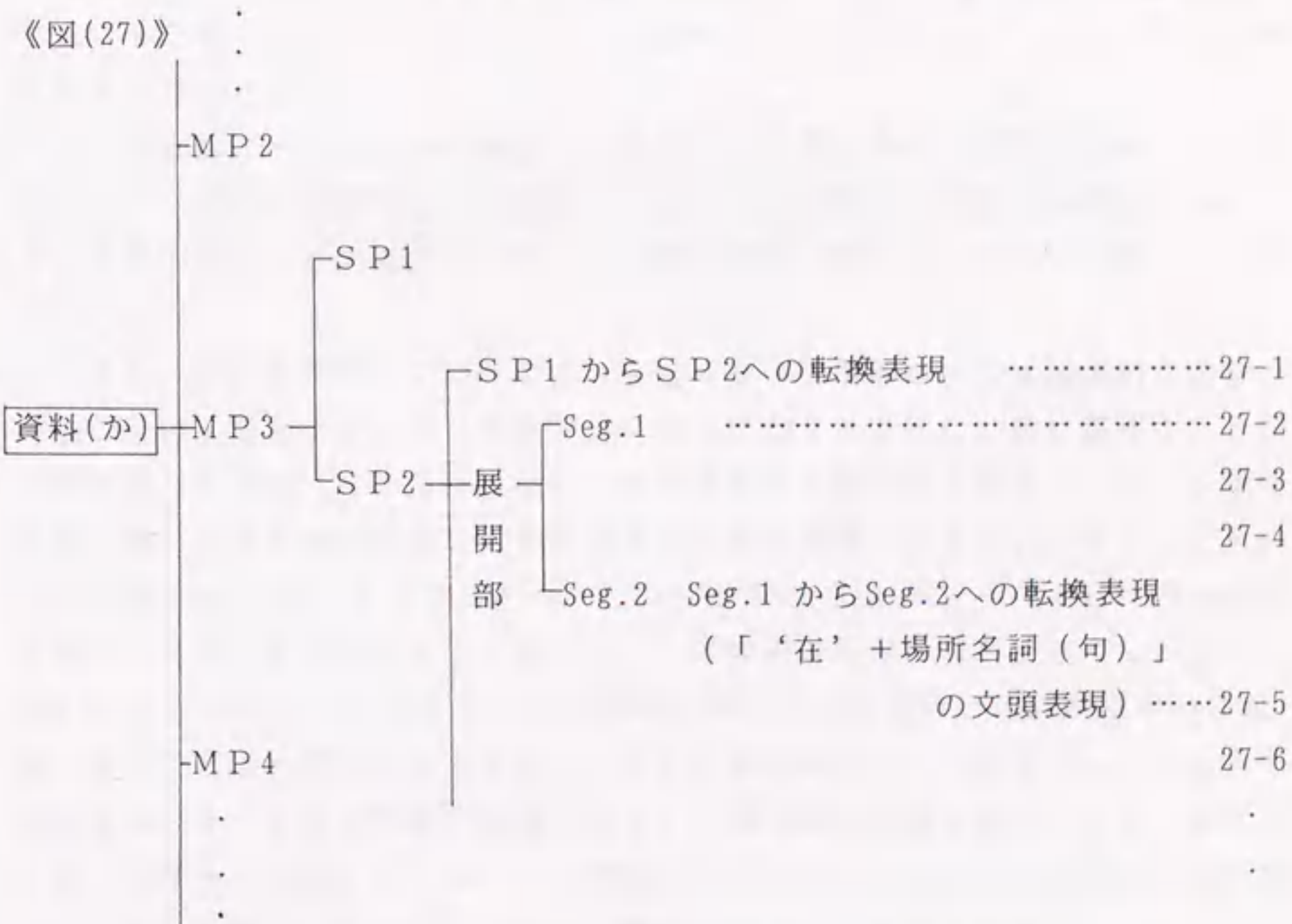
- 27-1 G: 你说是日本这样的大学的这样管理设 设施好呢? | 还是说中国那样的好呢? |
- 27-2 E: 啊, 这各有各的特色 |。
- 27-3 : 因为什么呢 |, 因为, 日本它服务比较好 |。
- 27-4 : 服务比较好, 到时我下水道坏了, 我打个电话, 人家可以来修 |。
- 27-5 : 在中国呢 | (这个) | 社会服务不太好, 社会服务 (这个) | 水平不高啊 |。
- 27-6 : 所以, 你要下水道坏了, 如果你没有几个管道工的话, 谁来给你修? |
- 27-7 : 你打电话? 你打电话你等着吧 |, 排队! |
- 27-8 : 要等个四、五天, 你的下水管 |。
- 27-9 : 这 | 这 | 学校都被水淹了 |。
- 27-10 : 所以 (这个) | 有自己人呐, 还是方便 |。
- 27-11 : 所以 (这个) | 可能 (这个) | 也跟社会 (这个) 服务行业的结构 |, 就不一样啊 |。
- 27-12 : 所以 | 你现在 | 让中国马上取消 |, 马上变成日本这样的, 也不可能 |。
- 27-13 : 因为, 变成日本这样的 |, 社会上没有人 | 社会上 | 社会上没有专门修下水道的业者呀 |, 是不是呀? |
- 27-14 G: 嗯 |。
- 27-15 E: 也没有专门就是 | 就是 | 怎么说呢 | 就是 (这个) 给学生办食堂的这样。
- 27-16 : 所以, 学校就要自己办食堂 |。
- 27-17 : 这学校的人 |, 炊事员就是学校的职工 |。
- 27-18 : 啊, 必须是这样的 |。
- 27-19 : 嗯 | 要是改的话, 就是整个社会都得改 |, 学校才能改 |。

- 27-20 : 它不可能学校自己改 | 。
 27-21 : 就好像 | 就好像 | 过去说的 ‘局部实现共产主义’ , 根本就不可能。
 27-22 : 哈哈 | 必须得大家都是这样才行, 要不然就不行 | 。

例(27)では、27-5 で(E)によって「‘在’ + 場所名詞(句)」が文頭に立つ表現が用いられている。

例(27)の談話の展開を追っていくと、まず、27-1 で(G)が「日本と中国の大学のシステムはどちらがよいか」という質問を(E)にすることによって、サブ・トピックの転換がなされている。次に、27-2 から、この質問に対する(E)の見解が述べられていくが、(E)は 27-3 と 27-4 で「日本のサービス」について説明し、次の 27-5 からは「中国のサービス」についての説明になり、このあともこのトピックがずっと続いていく。つまり、27-5 で「‘在’ + 場所名詞(句)」が文頭に立つ表現が用いられることによって、談話における場所の設定が「日本」から「中国」へと転換され、それによって、談話の内容が「日本のサービス」から「中国のサービス」へと転換されていくのである。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、下記の《図(27)》のようになる。



このように、「在」+ 場所名詞（句）」が文頭に立つ表現は、談話における場所設定の転換を明示し、それによって、セグメントから次のセグメント（Seg.n から Seg.n+1）へのトピックの転換を明確にする機能をも果たしている。

また、《図(26)》、《図(27)》から明らかであるように、この表現が SPn から SPn+1 あるいは Seg.n から Seg.n+1 への転換の機能を果たしている場合には、同時に SPn+1 あるいは Seg.n+1 の提示話文としても機能しており、提示部を包含している。しかし、MPn から MPn+1 への転換の場合には、《図(25)》から明らかであるように、この表現は MPn+1 の提示話文としての機能は果たさないが、この場合 MPn+1 の提示部にみられる提示話文の発話は、MPn から MPn+1 への転換部で発話された「在」+ 場所名詞（句）」の表現と内容の上で深く関わりをもっている。従って、「在」+ 場所名詞（句）」の表現も提示的機能を濃厚にもっていることが窺い知れる。

以上、「在」+ 場所名詞（句）」が文頭に立つ表現をみてきた。この表現形式は、「在」+ 場所名詞（句）」を文頭に表現することにより、談話における場所設定の転換を明示する働きをするが、それが、MPn から MPn+1、SPn から SPn+1、Seg.n から Seg.n+1 へのトピックの転換の働きをする理由は以下の通りである。

先の 2.1.2 において、存現文の文頭に場所名詞（句）が置かれる理由を考察した。そこで Randolph Quirk 1986(p.78)の記述を引用したが、ここでもう一度、それをみることにする。

「コミュニケーションが理解され、受け手が間違いのない位置づけを与えられるように、その手がかりとなる場所的、ないしは地理的な背景が必要とされているように思える。この点は疑いもなく人間の言語一般について当てはまることであろう」

つまり、談話を展開していく際に、トピックを場所的ないしは地理的に位置づけることは、聞き手がトピックを間違いなく把握するために非常に重要なことなのである。そこで、この場所的ないしは地理的な位置づけをする「在」+ 場所名詞（句）」を文頭に表現し、場所設定の転換を明確にすることによって、MPn から MPn+1、SPn から SPn+1、Seg.n から Seg.n+1 へのトピックの転換を行うことができるのである。そして、この表現形式が、SPn から SPn+1、Seg.n から Seg.n+1 へのトピックの転換に用いられる場合、それが緩やかな転換であることは当然のことであるが、MPn から MPn+1 へのトピックの転換である場合にも、それは急激な転換ではなく、緩やかな転換である。このことから、「在」の後ろの名詞（句）は、この表現形式が用いられる以前の発話の内容と関わりのある旧情報であるという統語的特徴のあることも明白となる。

以上の考察の結果、「前置詞‘在’+場所名詞(句)」の文頭表現の談話上の機能とその場所名詞(句)の統語的特徴は、次のように記述することができる。

この表現形式は、談話における場所設定の転換を明示する働きをしており、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフ(MP_nからMP_{n+1})へ、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ(SP_nからSP_{n+1})へ、さらにセグメントから次のセグメント(Seg._nからSeg._{n+1})へのトピックの転換の機能を果たしている。そしてそれらはすべてトピックの緩やかな転換であると同時にそれは、MP_{n+1}、SP_{n+1}あるいはSeg._{n+1}の提示的機能をも果たしている。

また、「‘在’+場所名詞(句)」は文頭に位置することによって題目化され、そして題目化された‘在’の後ろの名詞(句)は、MP_n、SP_nあるいはSeg._nの内容と関わりの深い旧情報であるという統語的特徴をもっている。

なお、言語資料には「‘在’+場所名詞(句)」が文頭に立つ表現例は26例あった。そのうちMP_nからMP_{n+1}への転換は6例、SP_nからSP_{n+1}への転換は9例、Seg._nからSeg._{n+1}への転換は11例現れたが、いずれも上記の考察にあてはまるものであった。

4.3 「sentence + ‘的’」の文頭表現

ここでもまず、「sentence + ‘的’」が文頭に立つ表現が、従来どのように分析されてきたかについて概観し、コメントを加える。

4.3.1 従来 of 統語論的分析

従来 of 先行研究においては、「sentence + ‘的’」が文頭に立つ表現を、一つの独立した表現形式として取り上げて分析しているものはほとんどなく、ただ李臨定1986 (p.261) に、「是」の表現形式の一種として下記のような例が挙げられているにすぎない。

[107] 我最佩服的是你。

[108] 他更关心的是延安。

[109] 那时候，我唱的是大鼓，又不是大鼓。

[110] 更让他难过的是没地方去诉委屈。

[111] 一个人要紧的是一家和睦。

[112] 更足以自傲的是许多老朋友也赶着来贺喜。

そして李臨定は、[107] については下記の [113] のように、[110] については下記の [114] のように、それぞれ変換可能であるとしているが、それ以上の記述はみえない。

[113] 你是我最佩服的。

[114] 没地方去诉委屈是更让他难过的。

このように、「sentence + ‘的’」が文頭に立つ表現については、従来、統語論的には全く言及されていないといっても過言ではない。

李臨定は、例文 [107] は [113] に、[110] は [114] に変換可能だとしているが、確かにこれら2組の表現はそれぞれ知的意味が同じであるが、表現価値は決して等価ではない。4.1.1 でも述べたように、これらの表現は談話の展開において、それぞれ固有の、然るべき根拠と位置づけをもって選択された表現であり、その根拠と位置づけを明らかにすることが統語論的分析でなければならない。

以下、談話の言語資料をもとに、「sentence + ‘的’」が文頭に立つ表現の談話上の機能と「sentence + ‘的’」の統語的特徴についてみていく。

4.3.2 「sentence + ‘的’」の文頭表現とトピックの転換機能

下記の例(28)は、資料(え)の中で「留学先である日本での(D)の生活」をメイン・トピック(MT1)としているメイン・パラグラフ(MP1)の一部である。この中では 28-11 で「sentence + ‘的’」が文頭に立つ表現(= ‘我觉得最受不了的就是想孩子想家。’)が発話されている。

例(28)：資料-(え)、インフォーマント-(D)

- 28-1 D：反正我说，你去了以后，有什么事情，可以给我爱人写信，打电话|。
- 28-2 :完了，你有什么，也可以给我写信|。
- 28-3 :她说，好|。
- 28-4 :反正我觉得她一个小女孩去吧，也不容易啊|。
- 28-5 :因为语言不太好吧|，总有一些害怕|。
- 28-6 :完了|，去了以后吧，完全是陌生的社会|，一点也不了解|，
- 28-7 :而且社会治安啊什么，都不如日本|。
- 28-8 :所以刚去，可能会有不习惯|。
- 28-9 :我说，没事，时间一长就好了|，你一年时间也很快就会过去了|。
- 28-10 :反正我来日本半年了，
- 28-11 : 我觉得最受不了的就是想孩子|，想家|。
- 28-12 :我孩子今年四岁了|。
- 28-13 :就是|我觉得，来了以后吧|，整天就是好像老想着这桩事儿|，总有一点不放心|。
- 28-14 :尽管我婆婆会|很好地，就是照顾我孩子，照料我孩子，
- 28-15 :但是我自己总归有一种不放心的感觉|。
- 28-16 :完了|，总觉得，作为一个母亲啊|，把孩子扔在上海，自己留学，好像|觉得在感情上啊，好像我欠了他一点什么东西啊|。
- 28-17 :尽管孩子还小，他可能他|他不太懂这方面的事|，
- 28-18 :但是从一个母亲的角度来说，我觉得我欠了他一点啊|。

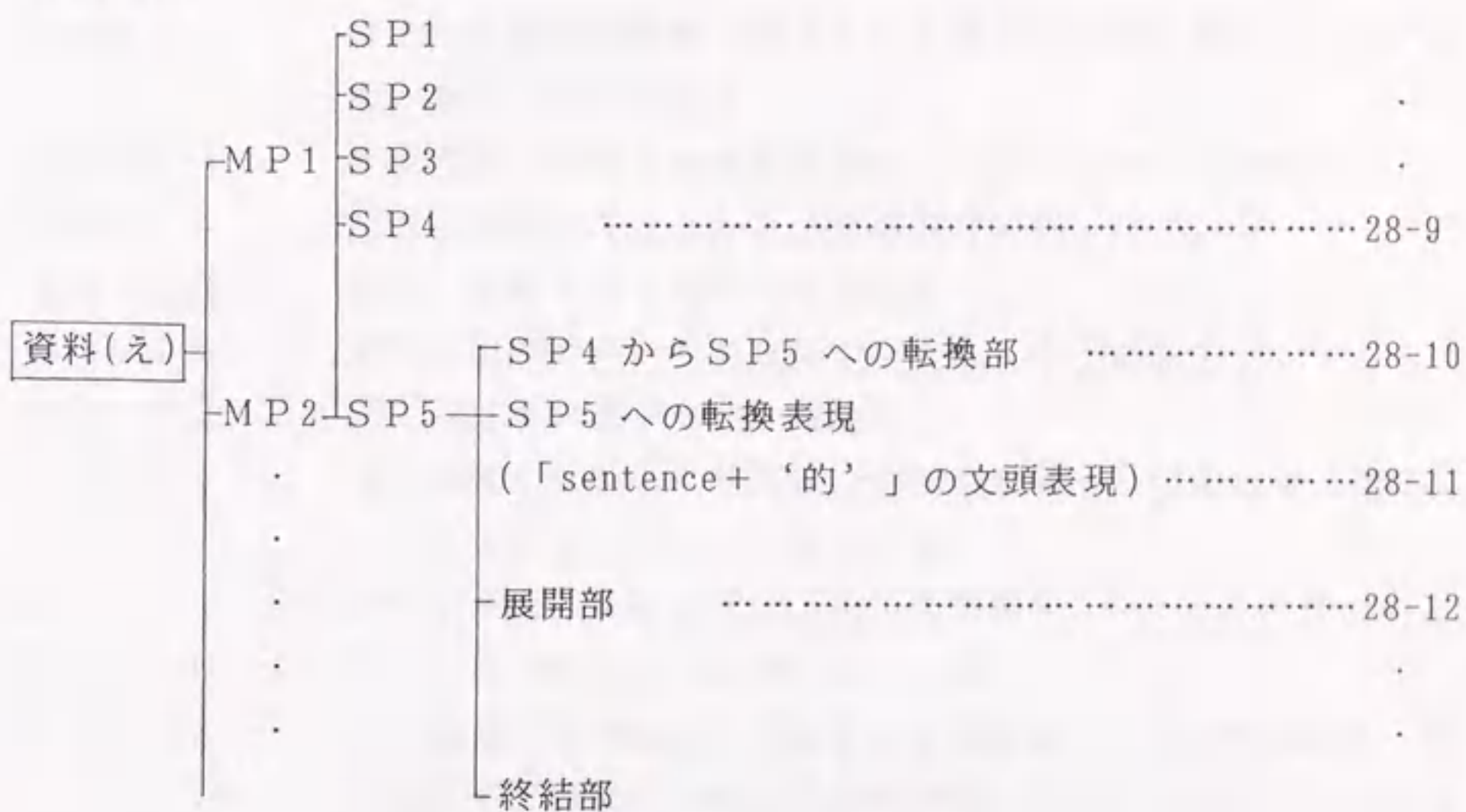
例(28)の 28-11 で発話されている表現の談話上の機能を探っていくため、ここでもやはり例(28)の談話の展開を順に追っていく。

例(28)は、28-9 で一つのトピックが終了している。ここまでは、上海へ留学

することを希望している日本人の女子学生に、(D)がアドバイスしたときのこと
 が語られている。そして 28-11 以降の内容を追っていくと、そこで語られてい
 るのは、日本に留学中である(D)の、自分の子どもに対する思いである。つまり、
 28-11 の発話によって、この談話のトピックは、日本人女子学生の上海留学から、
 (D)の子どもに対する思いに大きく変わっている。このことから 28-11 の談話上
 の機能はトピックの転換にあることが解る。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、下記の《図(28)》のようになる。

《図(28)》



いま一つ、次の表現例をみることにする。

例(29)は、資料(か)の中の、(E)の研究テーマである‘中日対照’をメイン・
 トピック (MT12) としているメイン・パラグラフ (MP12) の一部である。

例(29)：資料-(か)、インフォーマント-(E)と(G)

- 29-1 E：所以日语来讲|，日语的学习对我来讲|，不是特别重要的|。
- 29-2 : 而且，看电视哪|，就是|一个是了解日本情况|，另一个是|
可以|锻炼听力|。
- 29-3 G：你|，比如说，听日本人说话的时候|，是百分之百听懂呢？还
是百分之七、八十？|
- 29-4 E：那我得|看他说什么来呗|，那就得看他说什么来呗|。

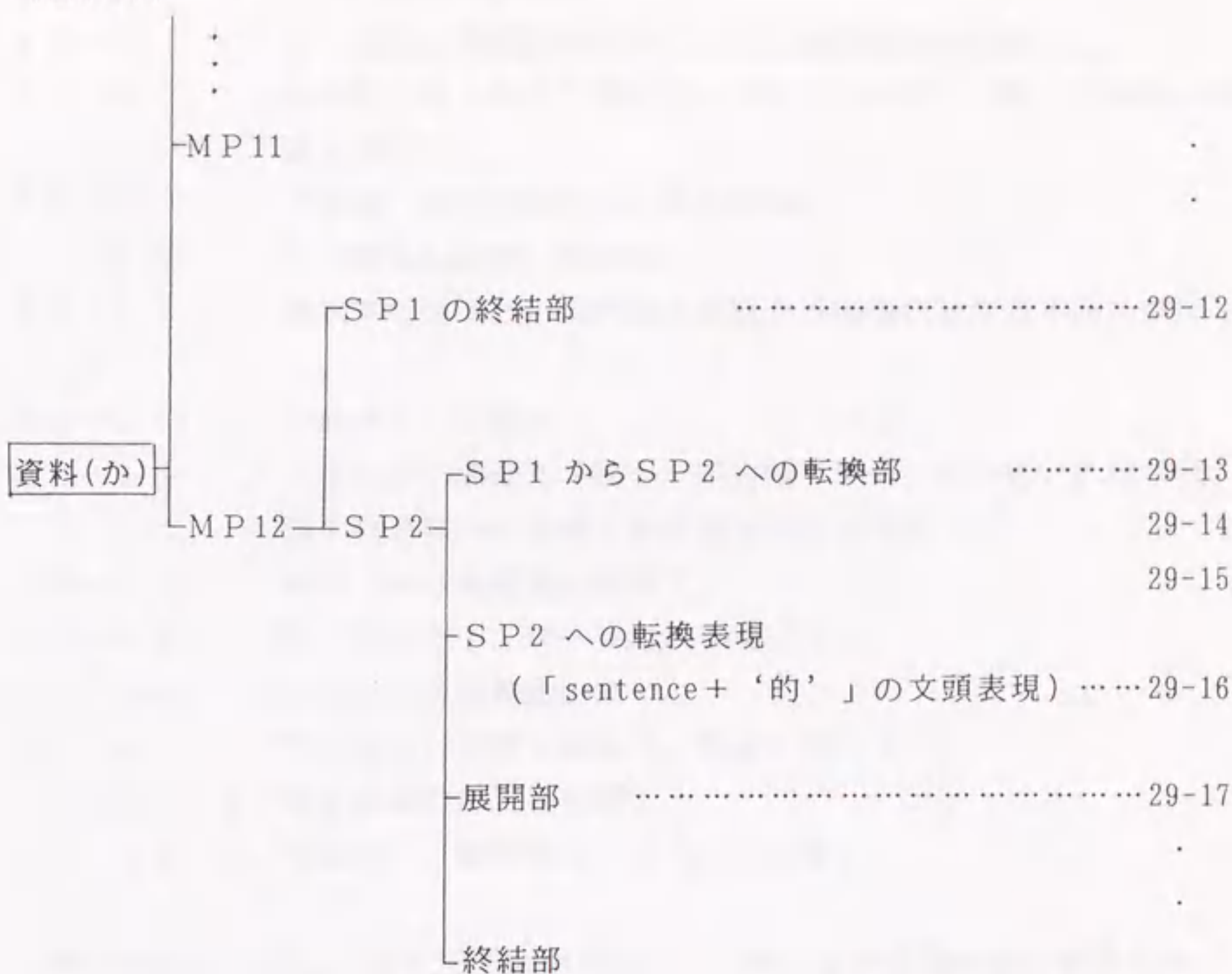
- 29-5 G: 比如今天铃木说的内容|, 今天今天她……
- 29-6 E: 她的话我全懂|。但是, 因为她那个领域|, 她研究那个领域里的东西吧|, 我就有点儿不懂|。
- 29-7 : 因为|这个呢, 你要让别的日本人也是不懂的|。
- 29-8 : 是这样的啊|。
- 29-9 : 就是说, 如果她说的话在我能理解的范围之内|, 然后我就可以听懂。
- 29-10 : 顶多有时候, 偶而的有几个单词啊|。
- 29-11 : 但是, 如果她说的东西不在我了解范围之内, 就听不懂|。
- 29-12 : 那我年数在这摆着呢, 我这|从|从小学日语已经|这么长时间啦, 所以, 听没问题了|。
- 29-13 : 听没问题, 但是|主要是我现在的目的不是中日对照吗?|
- 29-14 : 所以|他们叫(这个)|‘地域语言对照’吗|。
- 29-15 : 所以|你就|除了学日语之外啊|,
- 29-16 : 觉得更重要的是, 我现在得学中文|, 中文语法|。
- 29-17 G: 到|到日本来学中文|。哈哈……
- 29-18 E: 在中国呀|, 虽然条件很好, 环境很好啊|, 但是没有(这个)|没有(这个)压力|, 没有必要|。
- 29-19 : 谁哪个中国人说话还考虑语法什么的啊?|
- 29-20 : 因为, 我现在在这儿是搞的这个研究,
- 29-21 : 我就必须|你比如说, 你想拿日本语法跟中文语法对照吧|, 你起码你中文语法水平得达到日本语法, (这个)你的日本语法这个程度|,
- 29-22 : 如果你达不到的话, 你就没法对比|。是不是呀?|

例(29)においては、29-16で「sentence + ‘的’」が文頭に立つ表現(= ‘觉得更重要的是我现在得学中文, 中文语法。’)が用いられている。

例(29)の談話の展開を追っていくと、29-12までは日本語について語られている。そして29-13、29-14でこのメイン・パラグラフのトピックである‘中日对照’に触れ、29-16以降では、中国語の勉強について語られていく。このようにみていくと、29-16の発話によって、やはりトピックの転換されていることが解る。そしてこのことは、その次の29-17で(G)が、29-16の(E)の発話の内容をそのまま受け継いで、「日本に来て中国語を勉強するなんてハハハ……」と発話をしていることから明らかである。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、次頁の《図(29)》のようになる。

《図(29)》



さらにもう一つ、次の表現例をみってみる。

下記の例(30)は、資料(け)の中で(K)と(L)が「中国の東北地方は危険かどうか」ということをメイン・トピック(MT9)としているメイン・パラグラフ(MP9)の一部である。

例(30)：資料-(け)、インフォーマント-(K)と(L)

- 30-1 L：就是！走着女！女孩儿哈！，女同志晚上走着走着就失踪了，就是那个！，
- 30-2 : 所以，有一阵儿（那个）我爱人，还有我们同学！，就是我从班上下班以后哈，回来稍微晚一点儿，他们特别担心，都去接！。
- 30-3 : 其实我们就在校园之内！，那倒没问题！。
- 30-4 : 大街上，晚上我也不出去！。
- 30-5 : 不过，好像是！。（那个）听说（那个）白求恩医科大学一个女孩儿也失踪了！。

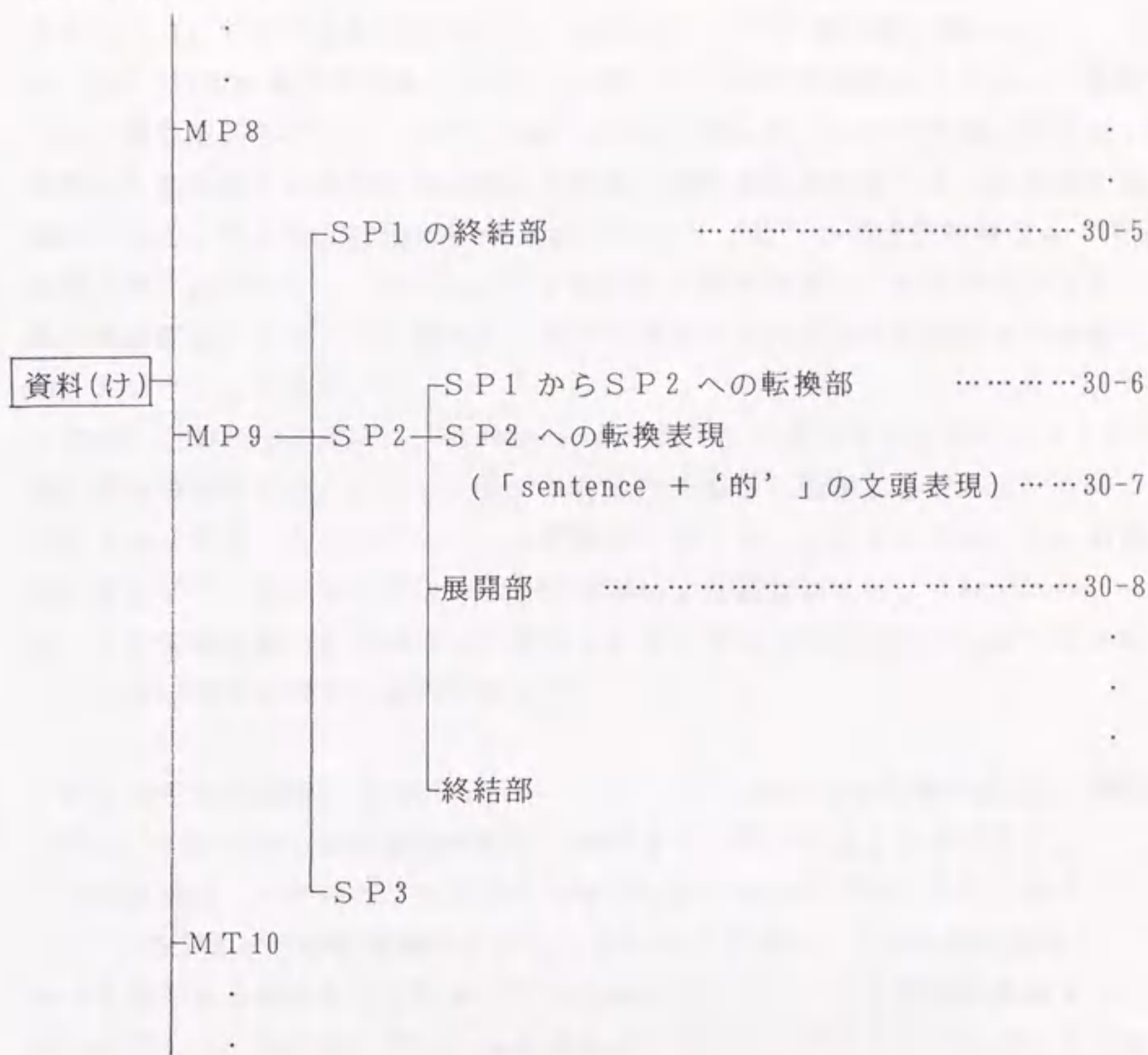
- 30-6 : 完了, 还有一个吧哈,
- 30-7 : 是! 就我们学校数学系的! 一个女孩失踪的特别怪!。
- 30-8 : 就是吧, 在(那个)理化楼! , 她上(那个)一楼, 这是晚上啊, 去上厕所! 。
- 30-9 : 正好呢, 它有时停电! , 她不知道。
- 30-10 : 其实停电的时候, 特别少,
- 30-11 : 那次不知道怎么回事! 忽然电怎么就! 可能他们故意是不是给破坏了! 。
- 30-12 : 灯就灭了, 灯就灭了。
- 30-13 : 灭了以后! 那会儿(那个)因为她(那个)特别要好的同学呢, 就! 就是我的小老乡, 都是黑龙江的小老乡! 。
- 30-14 : 她吧! 她就看着进去厕所了,
- 30-15 : 完了以后吧! , 灯一亮她找不着了! 。
- 30-16 : 怎么也没有从里边出来! 。
- 30-17 : 完了以后, 这就开始急了, 就是! 哎呀! 。
- 30-18 K : 那报给学校保卫处去啊! 。
- 30-19 L : 早就报了, 都好几天一点儿消息没有!

例(30)においては、30-7 で「sentence + ‘的’」が文頭に立つ表現 (= ‘我们学校数学系的一个女孩失踪的特别怪。’) が発話されている。ここでもやはり、例(30)の談話の展開を順に追っていくことによって、30-7 の談話上の機能をみていくことにする。

例(30)は、30-5 までは、長春のチンピラ集団と女性の一人歩きの恐しさについて語っており、ここで一つのトピックが終了している。そして 30-7 以降では、(L)の大学の女子大生の失踪事件について語られている。ここでもやはり、30-7 の「sentence + ‘的’」が文頭に立つ表現を発話することによって、トピックが転換していることは明白である。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、次頁の《図(30)》のようになる。

《図(30)》



以上の考察から、「sentence + 的」が文頭に立つ表現は、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフへのトピックの転換の機能を果たしていることが明らかとなった。

さらに、《図(28)》、《図(29)》、《図(30)》から明かであるように、この表現の次に、パラグラフの提示表現が現れないことによって、この表現が提示表現の機能をも合わせもっていることが解る。つまりこの表現は、提示部を包含した転換表現なのである。

次に、この表現形式の文頭の「sentence + 的」の統語的特徴について検討していく。

例(28)、(29)、(30)の中の、この表現の文頭の「sentence + 的」とは、それぞれ 28-11 = 「我觉得最受不了的」、29-16 = 「觉得更重要的」、30-7 = 「我们学校数学系的一个女孩失踪的」であった。これらはいうまでもなく、動詞節

が‘的’によって名詞節化された表現である。そしてその表現の意味内容はそれぞれ、28-11では「日本に留学中である(D)にとって、最も耐え難いこと」、29-16では「日本に留学中である(E)にとって、日本語を勉強するよりもっと重要であると感じていること」、30-7では「(L)の大学の女子大生が失踪したこと」であり、これらはこの表現形式が用いられる以前の発話の内容である旧情報を受け継いでいる。つまり、文頭に立つ「sentence + ‘的’」の統語的特徴は、構造助詞‘的’によって、‘sentence’が動詞節、形容詞節のいずれであっても、それが名詞節化されることに加えて、先行する発話の内容を受け継いだ旧情報である、ということである。

なお、この表現形式は、「sentence + ‘的’」が先行する発話の内容を受け継いだ旧情報であることによって、トピックを急激に転換することはできず、それによってMP_nからMP_{n+1}への転換よりも、SP_nからSP_{n+1}への転換の際に好んで用いられることはいうまでもない。言語資料には、「sentence + ‘的’」を文頭に置いた表現は17例あったが、そのすべてがSP_nからSP_{n+1}への転換の機能を果たすものであった。

以上の考察の結果、「sentence + ‘的’」が文頭に立つ表現の談話上の機能とその‘sentence’の統語的特徴は、次のように記述することができる。

この表現は、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ(SP_nからSP_{n+1})へのトピックの転換機能を果たしていると同時に、これ以降の談話のトピックを提示する働きをしている。しかしそれは、トピックを急激に転換することはできず、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフへのトピックの転換の機能は果たしにくい。

またこの表現は、‘sentence’の後ろに構造助詞の‘的’を附加することによって名詞節化され、それが文頭に位置することによって題目化されており、そして題目化された「sentence + ‘的’」の‘sentence’は、SP_nの内容を受け継いだ旧情報であるという統語的特徴をもっている。

4.4 ‘外位语’の表現(二)

‘外位语’の表現の先行研究については、すでに 2.3 において概観した通りであり、ここでは‘外位语’が新情報の場合の談話上の機能と‘外位语’の統語的特徴について考察した。ここでは‘外位语’が旧情報の場合について、談話の言語資料をもとに考察していくことにする。

下記の例(31)は、資料(こ)の中で旧情報の‘外位语’が用いられた部分を抽出したものであり、31-12 で‘外位语’の表現 = ‘你教的这日本語学院，他们也不好好学习吧?’ が用いられている。

例(31): 資料(こ)、インフォーマント(M)と(N)

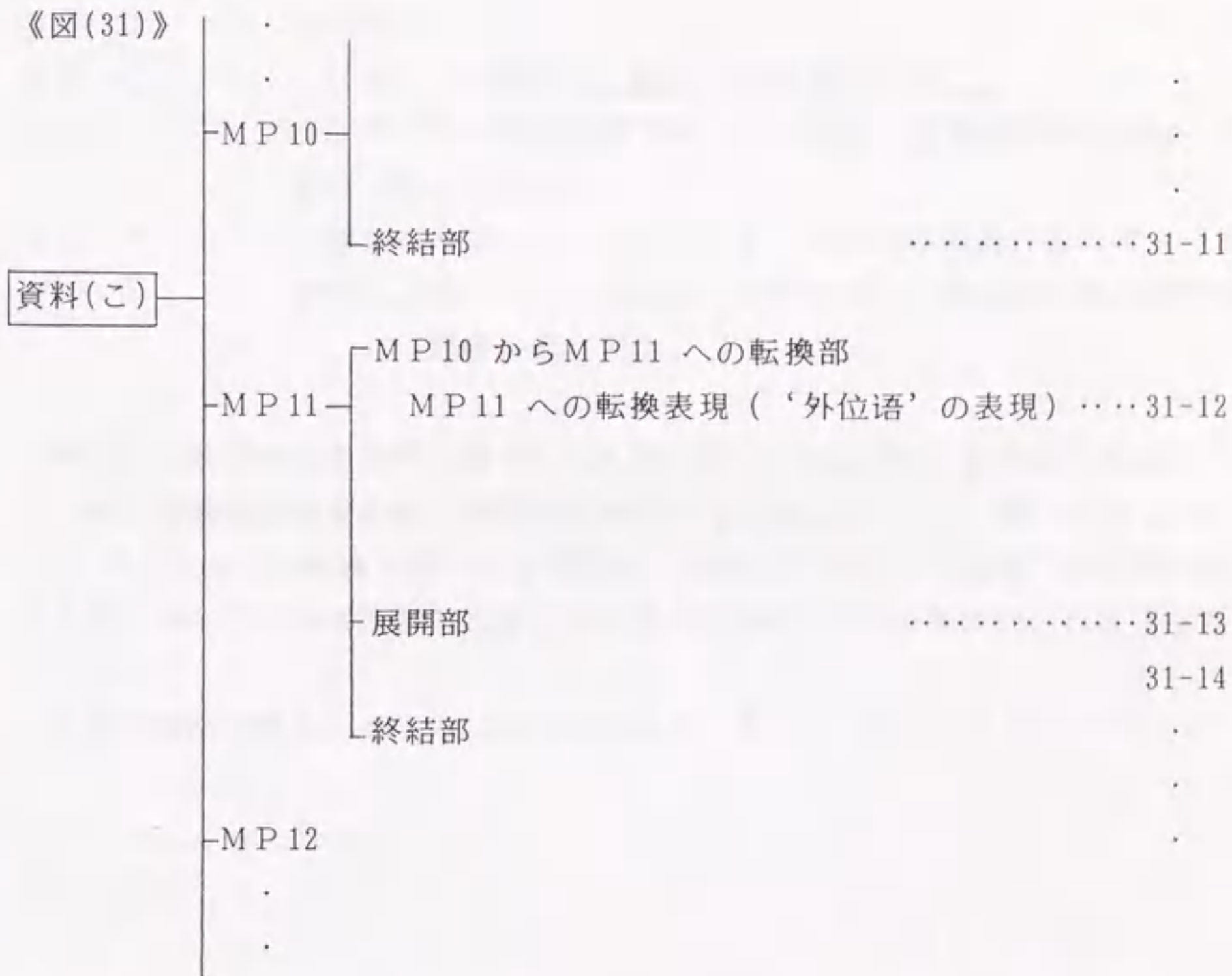
- 31-1 N: 尤其是外语系, 这样的 |。
- 31-2 : 外语系学这么长时间外语, 再出不了国 |, 他们就是 | 念念就觉
得心灰意懒了啊 |, 不太爱念了 |。
- 31-3 M: 那都考什么? 考中专啊? |
- 31-4 N: 就是什么呢, 最少大学毕业以后, 就不再往下念了 |。
- 31-5 : 大学毕业五年之内就够 | 够说的了 |。
- 31-6 : 现在不少大学中就ちゅうたい了 |, 象(那个)大学念到一半,
就不念了 |。
- 31-7 : 唔 | 国家那些规定吧 |, 怎么说呢……
- 31-8 M: 挺卡人的啊 |。
- 31-9 N: 唔 |。中国反正这个现状也没办法 |。
- 31-10 : 出去的人 | 很少 |, 是不是都回来呢? 哈哈……
- 31-11 M: 真是的 |。
- 31-12 : 那你教的这日本語学院 |, 他们也不好好学习吧? |
- 31-13 N: 他们几乎就不怎么学, 就在那混了混了, 完了, 在那儿说话 |。
- 31-14 : 完了 | 顶多给他们讲一讲, 他们听一听啊 |, 完了之后, 讲两项
通知, 就不原意学了 |。
- 31-15 : 完了之后, 就闲聊, 聊完了之后 |, 到上班时间, 就去上班去了
|。
- 31-16 : 他们不得不过来 |, 因为什么呢? (那个)学校这边吧啊 |, 上课
出勤率不到百分之九十的吧 |, 不给你签证 |。
- 31-17 : 学校不统一签证吗? 不给你签证 |, 没办法 |。
- 31-18 : 不原意学吧, 也得到学校来 |, 来了就算出勤 |。

31-19 M: 他们就是上午半天上课? | 下午开始工作 |。

31-20 N: 有的上午班, 有的下午班的 |。

例(31)を順にみていくと、31-1 から 31-11 までは、現在の中国の大学の状況について語られており、31-12 で‘外位語’の表現が用いられてからは、(N)が日本でアルバイトをしている日本語学校の学生について語られていく。ここで用いられている‘外位語’の表現の‘外位語’は‘你教的这日本語学院’であり、ここではこの学校の学生達のことを指しているのので、これを代名詞‘他们’に置き換えてもう一度表現しているが、‘外位語’の‘你教的这日本語学院’は、指示代名詞‘这’が用いられていることから、旧情報であることが解る。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、下記の《図(31)》のようになる。



このように、旧情報の‘外位語’の表現が、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフ (MP_n からMP_{n+1}) へのトピックの転換を明確にする働きをしていることが解る。

いま一つ、旧情報の‘外位語’の表現例をみることにする。

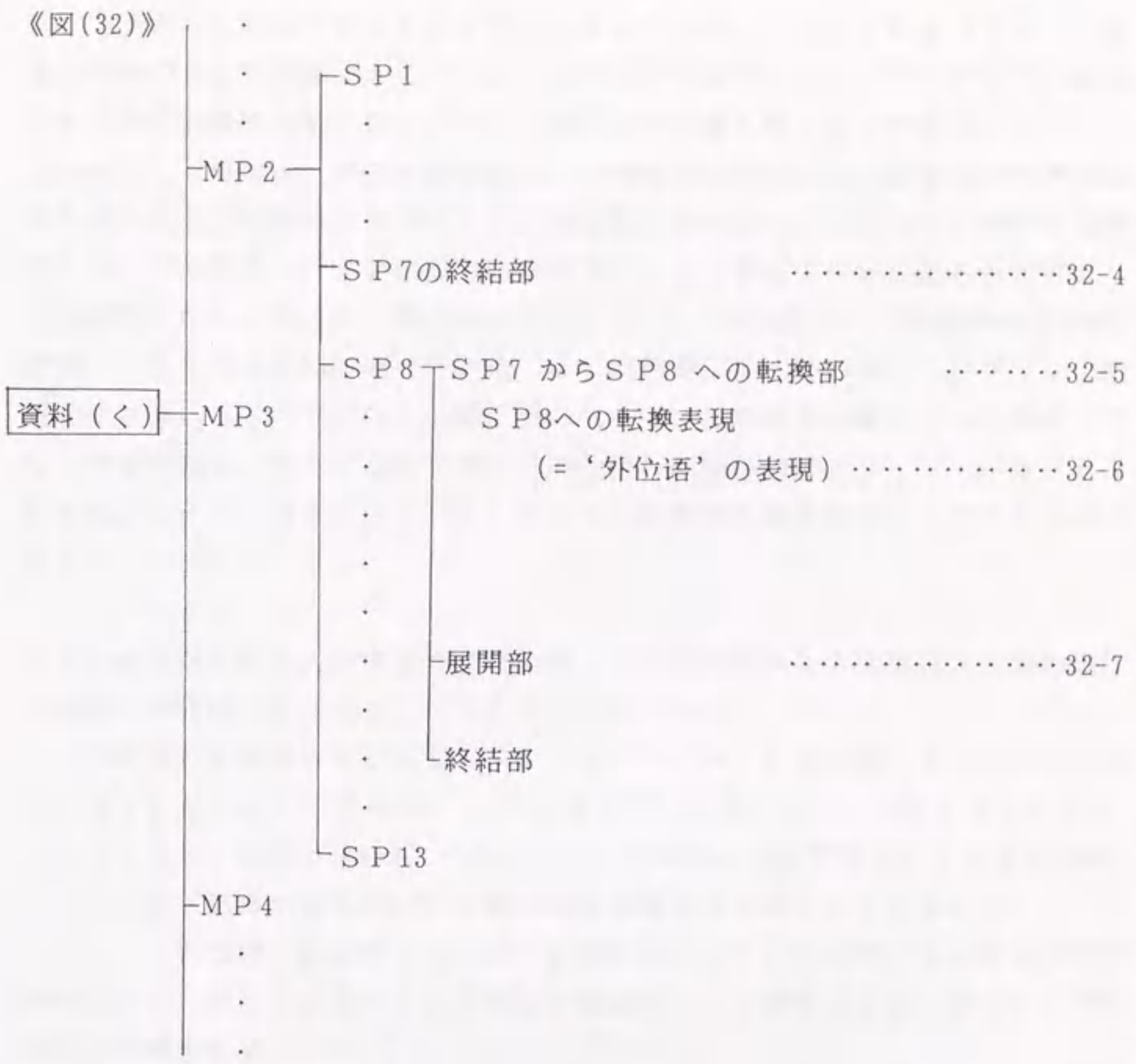
下記の例(32)は、資料(く)の中で旧情報の‘外位語’が用いられた部分を抽出したものであり、32-6で‘外位語’の表現＝‘我弟弟，他们都在工厂工作。’が用いられている。

例(32)：資料(く)、インフォーマント(I)と(J)

- 32-1 I：唉啊|，你这么算|，一个孩子一个大人的工资啊|。
32-2 : 等|等于咱|咱自己白干|。
32-3 : 白干一个月就给他交了托儿费啦，交了伙食费啦|，完了|。
32-4 J：这玩意儿也是，如|如果这样的话|，还别说买什么|电器|，买这个那个的|，你就是一般的生活，带一个孩子就够抢了|。
32-5 I：你看啊|，
32-6 : (这个)|我弟弟|，他们|都在工厂工作|。
32-7 : 所以呢|又不是特别景气的厂子，但是，还落到倒闭的程度，就是还一般，对对付付|。
32-8 : 工资又不太高，奖金又不太多|，根本就不敢吃什么虾啦|，排骨啦|，唉|什么|烧鸡啦，这类东西|，根本就不敢买着吃啊|。吃不起呀，说白了|。

例(32)の談話の展開を順に追っていくと、32-1 から 32-4 までは中国全土にみられる物価高騰現象の中で託児所が値上がりしたことについて語られており、32-5 でトピックの転換を知らせる発話がなされ、32-6で‘外位語’の表現が用いられてからは、物価高騰の影響下にある(I)の弟の会社の現状について語られていく。

これを談話の構造のモデルにあてはめると、次頁の《図(32)》のようになる。



このように、旧情報の‘外位語’の表現が、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ (SP_n から SP_{n+1}) へのトピックの転換を明確にする働きをしていることが解る。

また、《図(31)》、《図(32)》から明かであるように、旧情報の‘外位語’の表現はMP_n からMP_{n+1} への、あるいはSP_n からSP_{n+1} へのトピックの転換機能を果たすと同時に、MP_{n+1} あるいはSP_{n+1} の提示話文としても機能しており、提示部を包含した転換表現である。

次に、旧情報の‘外位語’の統語的特徴について、4.1.2 で取り上げた、いわゆる目的語の文頭表現の文頭の名詞(句)と比較して考察していく。

いわゆる目的語の文頭表現の文頭の名詞(句)も、4.1.2 で記述したように、旧情報であるという統語的特徴をもっていた。そして、それはさらに、あるパラグラフの転換部で用いられた場合、そのパラグラフの前のパラグラフの中の内容

を受け継いだ旧情報であるという特徴をもっていた。このことによって、いわゆる目的語の文頭表現は、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフへのトピックの転換機能は果たしにくいことは、すでに述べたとおりである。

しかし、‘外位語’が旧情報の場合、それは必ずしも、その表現形式が用いられたパラグラフの前のパラグラフの内容を受け継いだものではなく、聞き手自身のもっている知識や、すでに得ている情報によって類推できると話し手が判断した旧情報である。例えば、例(31)はの 31-12 の‘外位語’ = ‘你教的这日本语学院’、あるいは例(32)の‘外位語’ = ‘我弟弟’は、その前のパラグラフの内容を受け継いだものではなく、聞き手のもっている知識や経験によって類推できる旧情報である。ゆえに、旧情報の‘外位語’の場合には、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフへのトピックの転換機能を果たすことができるのである。

以上の考察の結果、旧情報の‘外位語’の表現の談話上の機能と、‘外位語’の統語的特徴は、次のように記述することができる。

この表現形式は談話において、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフ (MP_n から MP_{n+1}) への、あるいはサブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ (SP_n から SP_{n+1}) へのトピックの転換の機能を果たしていると同時に、 MP_{n+1} あるいは SP_{n+1} の提示話文の機能をも果たしている。

また、‘外位語’は必ずしも、 MP_n あるいは SP_n の内容を受け継いだ旧情報ではなく、聞き手のもっている知識や経験によって類推できると話し手が判断した旧情報である。

なお、言語資料には、旧情報の‘外位語’表現は12例あり、そのうち MP_n から MP_{n+1} への転換例は 4 例、 SP_n から SP_{n+1} への転換例は 8 例であり、これらの表現例はすべてここで述べてきたことにあてはまるものであった。

第5章 まとめ

以上、第1章において談話の構造を考察し、第2章以下においては、現代中国語の中で、名詞(句)の位置とかかわる9つの表現形式について、談話分析を進め、談話における表現機能を明らかにするとともに、その名詞(句)の統語的特徴について考察した。

以下、各章で明らかにしたことをまとめ、さらに、残された問題点、現代中国語統語論における本稿の位置づけおよび今後の展望について記す。

5.1 序章のまとめ――本稿で取り上げた、現代中国語の9つの表現形式

話し手が聞き手に情報を過不足なくスムーズに伝達するために表現形式を選択する際、その一つとして、自立的成分の位置を工夫するという方法がある。その場合、現代中国語において選択の対象となるのは、自立的成分の中でも題目、状況語(1)の中の名詞(句)、目的語(図<1>参照)に限られ、それらの成分を、述語基を中心にして、それに前置するか後置するか、あるいはより文頭に近い位置におくか文末に近い位置におくかという選択がなされる。

これら3つの自立的成分は、いずれも名詞あるいは名詞句であり、比較的、機能語の少ない現代中国語においては、これらの名詞(句)の位置は、過不足のないスムーズな情報伝達の上で、大きな役割を果たしている。しかも、個別の言語表現は話しの場面を離れて存在するものでないことはいうまでもなく、これらの名詞(句)の位置の選択は、情報伝達上然るべき根拠や理由をもって決定されるものである。

従ってこれらの名詞(句)の表現上の位置に関わる統語論的研究は、この選択のメカニズムを明らかにすることでなければならない。従来の研究において、これらの名詞(句)について然るべき記述がみられないのは、話しの場面や談話の流れを離れて一文のレベルにおいてのみ分析が進められ、この選択のメカニズムという視点が欠如していたためである。

本稿は、これらの名詞(句)の位置と関わる表現形式(p.6の{1}から{9})について、談話における選択のメカニズムという視点から分析を進めた。

5.2 第1章のまとめ——談話の構造

ここでは、第2章以下において、現代中国語の名詞（句）の位置に関わる表現形式を談話レベルで分析するにあたり、まず談話の構造について考察を進めた。

以下、考察の結果についてまとめる。

談話のまとまりを規定する要素に関する主な先行研究について、それらが単に要素の羅列にすぎないことを指摘し、同時に、その要素は形式と内容の二つに峻別されなければならないことを提起した上で、形式面における要素と内容面における要素を以下のように設定した。

（Ⅰ）形式面の要素

- 〔1〕 談話に参加する人と参加の仕方
- 〔2〕 談話で使用される言語
- 〔3〕 談話が遂行される媒体
- 〔4〕 談話が遂行される場面
- 〔5〕 談話が遂行される手段

（Ⅱ）内容面の要素

- 〔6〕 話題が存在すること
- 〔7〕 話題が全体として順を追った展開をしていること

そして、まとまりをもった談話として成立するためには〔1〕、〔2〕、〔3〕、〔4〕、〔5〕は個別の談話が完了するまで一定していること、〔6〕は談話が完了するまで一貫していなければならないことおよび〔7〕は談話が〈提示—展開—終結〉という構成であることが必要条件であるとした。

さらに、形式面の要素である〔1〕から〔5〕がどのような組み合わせであっても、前述の条件が満たされている限り、談話の構成は普遍的であることを指摘し、談話の構造のモデルとして図〈3〉を示した。

また、言語が情報伝達の機能を基本的に有するものであることから、情報伝達の仕組みを考察し、談話の構造と情報伝達のルールが表裏一体の関係にあることを論証した。この論証をもとに、談話の提示部、展開部、転換部のそれぞれにおいて、個別の言語表現は過不足のない情報をスムーズに伝達するために、名詞（句）の位置が工夫されるとし、その結果が、本稿の分析の対象である〔1〕から〔9〕の表現形式であることを述べた。

最後に、本稿の言語資料について、自由で私的な対話を選んだ理由を記述し、それが談話のまとまりと展開に適合するものであることを列挙して示した。

5.3 第2章のまとめ

ここでは、談話の提示部で用いられる3つの表現形式について、その談話上の機能および名詞（句）の統語的特徴を分析した。

5.3.1 いわゆる存現文の表現

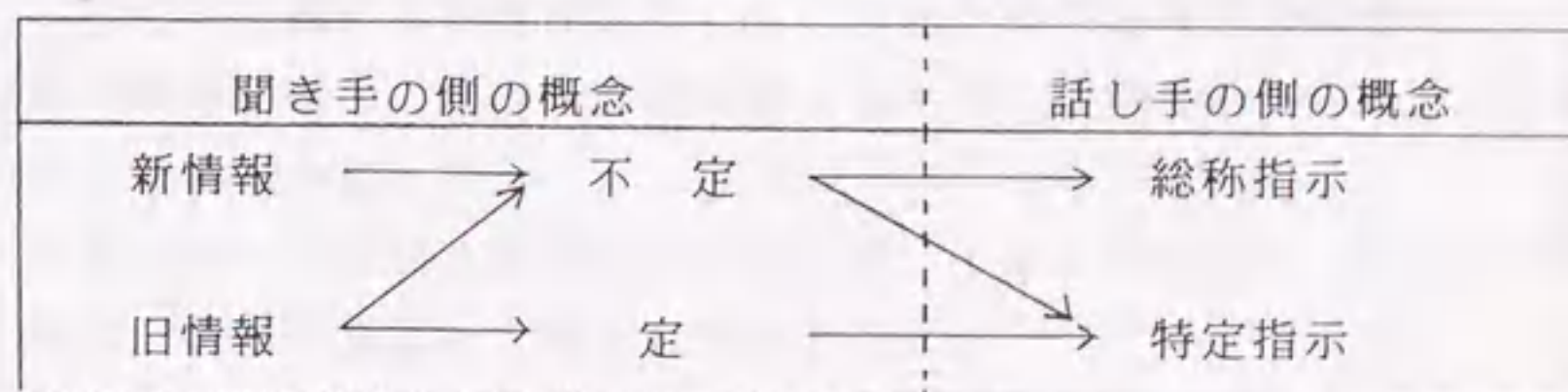
従来の先行研究において、まず、存現文を「存在」、「出現」、「消失」とされてきていることの無意味さを具体例を挙げて指摘した。さらに、動詞の後ろの名詞（句）は不定のものとする従来の統語的見解については、定、不定は聞き手にとって新情報であるか旧情報であるかの話し手の判断によって決まるものであり、話し手のこの判断は文脈の展開や談話の流れの中で決定されるものであることを指摘し、言語資料をもとに談話分析を進めた。その結果、以下のことを明らかにした。

[1] 存現文は談話の提示部に用いられ、話し手がこれから語ろうとしているトピックの方向づけとなる事柄を談話の中に持ち込むための提示話文として機能していること。

[2] 提示話文であることによって、文頭には旧情報である場所名詞（句）だけでなく、時間名詞（句）も置かれること。

述語動詞の後ろの名詞（句）は不定のものであるが、不定には新情報の場合と旧情報の場合があり、この表現形式の述語動詞の後ろの名詞（句）は新情報であること。

さらに不定のものは、話し手の意識の中では、総称指示の場合と特定指示の場合とがあるが、この表現形式の述語動詞の名詞（句）は特定指示であること（下記の表参照）。



5.3.2 ‘有’の表現

従来、‘有’の表現は、‘有’の前に位置する名詞（句）と‘有’の後ろに位置する名詞（句）の意味的關係によって、‘有’そのものの意味をいくつかに分類するというのが一般的な分析であった。本稿においては、まず、このような分析は、‘有’を一文のレベルで意味分類する限り、一つ一つの表現の数だけ‘有’の意味を列挙しなければならなくなることを指摘した。さらに、‘在’との比較による分析も、最小限の場面を設定するだけで、先行研究の立論が論破されることを具体例を挙げて示した上で、談話分析の必然性を記述し、言語資料をもとに、談話分析を進めた。その結果、以下のことを明らかにした。

- [1] ‘有’の後ろの名詞（句）が「新情報＋不定＋特定指示」である場合、この表現形式は談話の提示部に用いられ、存現文と同様に、話し手がこれから語ろうとしているトピックの方向づけとなる事柄を談話の中に持ち込むための提示話文として機能すること。
- [2] ‘有’の表現は、文頭には旧情報である名詞（句）が置かれるが、‘有’の後ろの名詞（句）は、旧情報の場合と新情報の場合があること。そして、‘有’の後ろの名詞（句）が新情報の場合には、それは同時に不定で特定指示でなければならないという特徴をもつこと。

5.3.3 ‘外位語’の表現（一）

本稿においては、まず、‘外位語’の名詞（句）には、新情報の場合と旧情報の場合のあることを指摘し、先行研究にみられる挙例が旧情報の場合に限られていることから、この統語的特徴を分析していく上で不可欠である「情報の新・旧」の視点が欠落していることを指摘した。

さらに、この名詞（句）が新情報の場合と旧情報の場合とでは談話上の機能は異なり、統語的特徴にも相違があるとし、談話分析の必要性を論述した。そして、ここでは新情報の場合に限って言語資料をもとに、談話分析を進め、その結果、以下のことを明らかにした。

- [1] ‘外位語’の表現は談話の提示部に用いられ、存現文や‘有’の表現と同様に、提示話文として機能していること。
- [2] ‘外位語’はトピックの方向づけとなる名詞（句）であり、存現文や‘有’の表現の述語動詞の後ろの名詞（句）と同様に、「新情報＋不定＋特定指示」でなければならないという特徴をもっていること。

しかし‘外位語’は、‘外位語’の中心になる名詞の前には必ず聞き手がそれを特定するための助けとなるような、旧情報である修飾成分が置かれるという点において、存現文や‘有’の表現の述語動詞の後ろの名詞（句）と異なっていること。

加えて、この場合の‘外位語’は、新情報であって、新情報が文頭に表現されるということは、「旧情報+新情報」という情報伝達のルールに合わないことになる。そこで旧情報である修飾成分を付け加え、さらに‘外位語’に近い位置でそれをもう一度代名詞で置き換えて表現するという形式をとることによって、‘外位語’が文頭の題目の位置を占めることを可能にしているとした。

5.4 第3章のまとめ

ここでは、談話の展開部で用いられる3つの表現形式について、その談話上の機能および名詞（句）の統語的特徴を分析した。

5.4.1 ‘把’構文

従来‘把’構文は、通常の語順においては述語の後ろに位置する目的語が、前置詞‘把’によって述語の前に取り出された表現であるといわれ、目的語あるいは述語の側面から、この構文が成立するための統語論上の条件を探るといふ分析が行われてきた。そして従来いわれてきたその条件は（1）目的語＝‘把’の後ろの名詞（句）が定のものである、（2）述語が目的語に対して「処置」の意味を表すものである、（3）述語には必ず付加成分がある、の3つであった。

本稿においては、一つ一つの言語表現はそれぞれその使用場面において他の表現と代替することのできない表現価値を有するものであって、‘把’構文を「主語－述語－目的語」の変形と捉えることの誤りを指摘し、定・不定、「処置（意図的・意識的）」かどうかは、談話の展開の中でのみ決定され得るものであることを具体例を挙げて論述した。

さらに、付加成分は動作・行為の結果や状態を表すものであって、話しの場面が確定しているか、それと想定できなければ付加され得ない成分であることを述べ、談話分析の必然性を論述した。そして言語資料をもとに、談話分析を進め、その結果、以下のことを明らかにした。

[1] ‘把’の後ろの名詞（句）は、その談話の中で特別な意味を付加された、いわば談話の key-word であること。そしてこの構文の伝達内容は、その談話において非常に重要な key-information であること。

[2] 従来いわれている、述語が‘把’の後ろの名詞（句）に対して「処置」の意味を表すというのは、この構文が成立するための条件としては妥当性に欠けること。

さらに、述語に付加成分が必要とされる理由については、‘把’構文は、その伝達内容が、その談話において非常に重要な key-information である場合に用いられる表現であるが、その伝達内容がその談話において重要であるか重要でないかを判断するのは話し手であり、重要であると判断した場合、その情報には当然話し手の主体的なかかわり、態度及び動作、行為、変化などの結果に対する認識を表す要素が付加されるこ

ととなることを指摘した。

そして、談話の key-word である名詞（句）が、この表現形式において述語の前に位置する根拠については、話し手の主体的なかかわりを表す要素は情報伝達上極めて重要であり、聞き手に強く印象づける必要があり、これらの付加成分と伝達内容の上で重要な key-word である名詞（句）が述語の後ろに共起するということは、相対的にどちらかの成分が聞き手にとって印象としてうすれる危険性が生じ、それを避けるために、述語の前に置かれることとなることを指摘した。

そしてさらに、述語の前の名詞（句）は基本的に題目の位置であるが、この名詞（句）は題目ではないので、混乱を避けるため‘把’でマークされるとした。

5.4.2 談話の結束性と語順

談話の結束性を示す手段については、Halliday, M.A.K. and R. Hassan (1976) に詳細な分析がみえるが、そこには「語順」という手段は取り上げられていない。

3.2 においては、この「語順」が、とりわけ孤立語である現代中国語においては、談話の結束性を示す一つの有力な手段であることを論証した上で、現代中国語の中で談話の結束性と関連する2つの語順の問題（1. 述語動詞と「前置詞‘在’+場所名詞（句）」の位置、2. 複合方向補語と目的語の位置）について分析した。

5.4.2.1 「‘在’+PN+V」と「V+‘在’+PN」

従来、「‘在’+PN+V」（以下、アとする）と「V+‘在’+PN」（以下、イとする）の表現の違いについては、その表現のどこに重点が置かれているのか、あるいは強調されているのか、という観点から論じられてきた。

本稿においては、ア、イの知的意味が同一である場合、そのいずれが選択されるかは、PNの性格によってア、イのいずれかでなければならない統語的制約のあることを具体例を挙げて記述し、この制約を明らかにすることが、この表現形式の統語的分析であり、強調だの表現の重点だのと論ずる無意味性を指摘した。そして、このPNの性格は談話の展開の中においては自ずから明確であることによって、一文のレベルでは論じられないことを述べ、言語資料をもとに、談話分

析を進めた。その結果、アとイの表現の違いについては以下のことを明らかにした。

[1] イは、この表現以降の発話の内容が、Vよりも特にPNと意味的なつながりが強い場合に用いられ、アは、VとPNが同等の場合に用いられることから、イの方が談話の結束性が強いこと。

[2] ア、イのPNはいずれも旧情報に限られるが、アは話し手が、PNとVを同等に聞き手に印象づける必要があると判断した場合に用いられる表現であり、イは、特にPNに聞き手の注意を引き、聞き手に強く印象づける必要があると判断した場合に用いられる表現であること。

5.4.2.2 「V+C+O+‘来/去’」と「V+C+‘来/去’+O」

従来、「V+C+O+‘来/去’」（以下、ウとする）と「V+C+‘来/去’+O」（以下、エとする）の表現の相違については、複合方向補語の語彙的性質、目的語の性格や構造、長さなどの観点から分析されてきた。

本稿においては、ウとエの表現形式が目的語の位置のみを異にすることによって、目的語の性格が着目されることは当然ではあるが、例えば、ウの表現しか成立しないとして挙げている条件が、陳信春と朱徳熙で明らかに矛盾していることなどを取り上げ、先行研究の論及に具体例を挙げて批判を加えた上で、このような分析が提示されるのは一文のレベルでの考察の結果であることを論述した。そして、言語資料をもとに、談話分析を進めた結果、ウとエの表現の違いについては以下のことを明らかにした。

[1] この表現以降の発話の内容が、この表現の目的語と直接関連がある場合にはエが用いられ、そうでない場合にはウが用いられることから、エの方が談話の結束性が強いこと。

[2] 複合方向補語は、述語部分だけで4つの情報を伝達していて、もともと情報過多の表現であるので、聞き手に対する情報量の負担を軽減するため、目的語である名詞（句）には旧情報が好まれること。そして、エは、特に目的語に聞き手の注意を引き、聞き手に強く印象づける必要があると話し手が判断した場合に用いられる表現であること。

5.5 第4章のまとめ

ここでは、談話の転換部で用いられる3つの表現形式について、その談話上の機能および名詞（句）の統語的特徴を分析した。

5.5.1 いわゆる目的語の文頭表現

目的語が文頭に立つといわれている表現は、研究史的にみて、1950年代までは目的語の提前、1950年代以降は主述述語文と捉えるのが一般的な流れであるが、この立場の相違はさしたる意味はなく、個別の言語表現は現実の使用場面においては、それぞれ他の表現に代替できない固有の表現価値（それでなければならない根拠）を有するものであり、この固有の表現価値は一文のレベルではなく、談話の展開によって判断され、決定されるものであることを論述した。そして、言語資料をもとに、談話分析を進めた結果、この表現形式については以下のことを明らかにした。

[1] この表現形式は談話において、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ（SP_n から SP_{n+1}）への、あるいはセグメントから次のセグメント（Seg._n から Seg._{n+1}）へのトピックの転換の機能を果たしていること。同時に、SP_{n+1} あるいは Seg._{n+1} の提示的機能も果たしていること。そして、この表現形式によってトピックを急激に転換することはできず、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフへのトピックの転換の機能は果たしにくいこと。

[2] この表現形式の文頭の名詞（句）は、文頭に位置することによって題目化されていること。そして題目化された名詞（句）は SP_n あるいは Seg._n の中の内容を受け継いだ旧情報であること。

5.5.2 「前置詞‘在’+場所名詞（句）」の文頭表現

これまで、文頭に位置した「‘在’+場所名詞（句）」に関する研究は非常に少ないが、それらに共通しているのは、「‘在’+場所名詞（句）」を「強調」するために文頭に表現するという見解である。

本稿においては、この「強調」の概念は、極めて曖昧であり、例えば、倪宝元・張宋正の論及と挙例を取り上げ、「後部の重み」の視点から、まったく相反す

る見解の成立することを論述し、このような分析が提示されるのは一文のレベルで分析を進めたことに起因していることを述べた。そして、言語資料をもとに談話分析を行った結果、この表現形式については以下のことを明らかにした。

[1] この表現形式は、談話における場所設定の転換を明示する働きをしており、談話のメイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフ (MP_n から MP_{n+1}) へ、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ (SP_n から SP_{n+1}) へ、さらにセグメントから次のセグメント (Seg._n から Seg._{n+1}) へのトピックの転換の機能を果たしていること。そしてそれらはすべてトピックの緩やかな転換であること。同時にそれは、MP_{n+1}、SP_{n+1} あるいは Seg._{n+1} の提示的機能も果たしていること。

[2] 「‘在’ + 場所名詞 (句)」は文頭に位置することによって題目化されていること。そして題目化された‘在’の後ろの名詞 (句) は、MP_n、SP_n あるいは Seg._n の内容と関わりの深い旧情報であること。

5.5.3 「sentence + ‘的’」の文頭表現

従来の、この表現を一つの独立した表現形式として取り上げて分析しているものはほとんどなく、ただ李臨定1986に、‘是’の表現形式の一種として挙例がみえるにすぎない。

李臨定は、‘是’の前後の成分を置き換えることが可能であるとしているが、もとの表現形式も変換された表現形式も、知的意味は同一であっても表現価値は決して等価ではなく、それぞれ固有の、然るべき根拠と意味をもって選択された表現であることを指摘し、言語資料をもとにして談話分析を進めた。その結果、以下のことを明らかにした。

[1] この表現は、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ (SP_n から SP_{n+1}) へのトピックの転換機能を果たしており、同時に、これ以降の談話のトピックを提示する働きをしていること。しかしそれは、トピックを急激に転換することはできず、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフへのトピックの転換の機能は果たしにくいこと。

[2] この表現は、‘sentence’の後ろに構造助詞の‘的’を付加することによって名詞節化され、それを文頭に置くことによって題目化されていること。そして題目化された「sentence + ‘的’」は、SP_nの内容を受け継いだ旧情報であること。

5.5.4 ‘外位語’の表現(二)

2.3において、‘外位語’が新情報の場合について考察したのに対して、ここでは、‘外位語’が旧情報の場合について考察し、言語資料をもとに、その談話上の機能と名詞(句)の統語的特徴について、以下のことを明らかにした。

- [1] この表現は、メイン・パラグラフから次のメイン・パラグラフ(MP_nからMP_{n+1})、サブ・パラグラフから次のサブ・パラグラフ(SP_nからSP_{n+1})への明確なトピックの転換機能を果たしていると同時に、MP_{n+1}、SP_{n+1}の提示話文としても機能していること。
- [2] ‘外位語’は必ずしも、MP_n、SP_nの内容を受け継いだ旧情報ではなく、聞き手のもっている知識やすでに得ている情報によって類推できると話し手が判断した旧情報であること。

以上、本稿で取り上げた現代中国語の9つの表現形式について、談話分析の結果明らかになった点について記述した。

5.6 残された問題点

本稿では、談話レベルで現代中国語の表現形式を分析するにあたり、中国語話者の自然発話を録音し、それを文字転写したものを言語資料とした。書記言語ではなく自然発話を採用した理由は、書記言語よりも自然発話のほうが談話の構造の特徴がより自然な形で顕現すると判断したからである。

書記言語には書き手の表現効果をねらった意図的な文章構成法であるとかレトリックの技巧など、一般的にいつて自然発話に比べてより複雑で多彩な構成や表現が現れ、本稿の分析の結果がそのまま適用できるとは限らない。とはいえ、自然発話であれ、書記言語であれ、言語が基本的に情報伝達の機能を有するものである限り、本稿で示した談話構造のモデルと情報伝達のルールは、基本的に書記言語にも当てはまるものと予測はされるが、書記言語の分析は今後の課題として残される。

また、言語資料を中国語話者二人の対話に限定したのは、中国語話者三人による会話、中国語話者四人による会話も録音し、それを文字転写した資料も作成したが、それらを中国語話者二人の対話と比較すると、話し手の発話をさえぎること(interruption)が非常に多く、また会話の参加者が多くなればなるほど会話の相手が分散され、そのためにトピックとして選択される要素が多くなるため、トピックが一貫しにくくなり、談話の流れが混乱しがちであったためである。

例えば、以下に示す三人の参加者による会話¹⁵²がその例である。

例(33)：三人の会話、インフォーマント-O、P、Q

①「P-1：今年的梅雨季节不厉害|。

O-2：啊，不厉害|。

P-3：今年没怎么下雨|。

O-4：要是|要是他们说的名古屋热的厉害，闷热|，要是这样，就没问题|。

P-5：还没到热的时候呢|。

O-6：这都快七月分了|。这都……

Q-7：八月分|。

P-8：梅雨季一完，完了以后就开始热了|。

O-9：嗯|。

P-10：一出梅的话就热了。

②「O-11：啊，（那什么）来电话了。来电话|，现在就是等，（那什么）签证

了|。

P-12: 签证, 你在这边打电话可以催一催|。

Q-13: 没有|, 我前几天给她写信了|。我告诉她, 把号告诉了她, 争取|
争取九月出来|。

P-14: 九月出来, 凉快了|。

O-15: 啊, 就是啊|。 八月分带小孩, 正难受的时候|, 何苦呢, 到这儿|。

③ 「O-16: 东北那地方多好啊|。

P-17: 啊, 就是啊|。

O-18: 那长春哪……

P-19: 长春多凉快|。

O-20: 避暑都找不着的地方|。

P-21: 就是|。

④ 「Q-22: 孩子带来了?|

P-23: 带来了。今年好象北京也热|。

O-24: 啊, 办一个护照。一起办|。

⑤ 「P-25: 嗯, 我看那几天, 三十|二十六号, 二十八号, 三十一、二度|。跟
香港的气温一样|。但是整个世界来看, 就算比较高的|。名古屋呢
够高的就是|, 名古屋也是二十八, 北京三十二|, 和香港一样|。

⑥ 「Q-26: 香港达到零上三十八、九度呢|。

P-27: 那是最|特|, 平常啊, 就是平时, 现在|。

O-28: 三十八、九度?|

Q-29: 啊|。

P-30: 最高的连续三天, 三十八度|。

O-31: 唉哟! 那那……

P-32: 六月分, 六月中旬吧|。

⑦ 「O-33: 从来没有这样的|, 再热再热的时候, 北京也没有这样|。

P-34: 没有, 所以不太正常|。最近呐, 整个天气, 气候变化无常, 不光是
北京。整个世界性的|。

⑧ 「O-35: 原来吧, 就是什么|就是东北, 长春那边儿, 那挺冷的, 相当冷啊|。

⑨ 「P-36: 现在也不怎么冷了吧? 那北京|, 我刚到北京的时候啊, 冬天可以滑
冰的|。冬天经常就是说, 学校设冰场, 设了冰场滑冰, 滑好长时间
呐, 滑一两个月呢|。现在根本冰场就设不了。

O-37: 设不了吗?|

P-38: 冻不起来。没法设。就得在那个专门的湖啊、河里凑付着能滑一段儿
|。

O-39: 八几年的那时候啊, 那(那个)我还没毕业呢|, 八〇年、八一年, 我八三年毕业啊|, 那是上|上咸阳, 那是当翻译去|, 那是实习呀, 那时候啊, 上北京去的, 北海那个地方, 还看看到滑冰的呢|.

P-40: 那现在北海也有滑冰|. 它那有大的湖面呐、河面呐, 还能滑|, 但是己冻冰场冻不了了|. 那时候北京冬天雪, 我觉得好象挺深呢, 好长时间都|那雪|积雪挺多了, 现在下了雪, 没几天就化了|.

O-41: 所以北京冬天基本都不|不用穿棉|棉裤什么的|.

P-42: 不要棉裤|.

O-43: 不要棉裤, 不用棉鞋, 都不用穿|.

P-44: 一开始, 我到北京的时候, 我觉得穿棉|鞋棉裤, 现在就一个皮鞋|, 哦, 连绒裤, 其实都不太怎么穿了|.

O-45: 哦|.

P-46: 嗯|. 北京人叫毛绒裤|, 就是穿那个就行了|.

Q-47: 棉毛裤|.

P-48: 棉毛裤|.

O-49: 棉毛裤, 哦, 那是|.

⑩「Q-50: 不过, 咱们国家最具有现代化特点哪, 还是北京|.

P-51: 北京|.

O-52: 上海|上海比不了, 北京规划挺好的|.

P-53: 上海是乱|.

O-54: 二环三环四环五环都要计划出来了|.

P-55: 啊, 对对|.

Q-56: 北京附近有几个卫星城|.

O-57: 啊, 是|.

P-58: 啊, 北京你看那个建筑啊, 还是不错的|.

O-59: 哦, 真不错啊|.

P-60: 那上海太乱了|. 到那儿, 而且那小破屋、叭叭房特多|.

例(33)は、トピックの転換によって①から⑩のパラグラフに分けられる。

各パラグラフの冒頭の発話者と、各トピックの転換のきっかけとなる発話の中の要素は、以下の通りである。

① = P-1 ‘梅雨’

② = O-11 ‘签证’

③ = O-16 ‘东北’

④ = Q-22 ‘孩子’

- ⑤ = P-25 ‘(名古屋) 那几天 / 香港’
- ⑥ = Q-26 ‘香港’
- ⑦ = O-33 ‘北京’
- ⑧ = O-35 ‘东北 / 冷’
- ⑨ = P-36 ‘北京’
- ⑩ = Q-50 ‘现代化’

また、各トピックの中の重要な要素は、気候、都市、子供、現代化であり、これをまとめると、下記のようなになる。

トピック	気 候	都 市	子 供	現代化
①名古屋の梅雨	○	名古屋	/	/
②(子供の)ピザのことと 名古屋の9月の気候	○	名古屋	○	/
③中国東北地方の気候の良さ	○	中国東北地方	/	/
④子供を日本へ連れて来ること	/	日 本	○	/
⑤名古屋の暑さと香港の暑さ	○	名古屋・香港	/	/
⑥香港の気候	○	香 港	/	/
⑦北京の気候	○	北 京	/	/
⑧中国東北地方の寒さ	○	中国東北地方	/	/
⑨昔の北京の寒さ	○	北 京	/	/
⑩中国の現代化と北京、上海	/	北京・上海	/	○

このように3人の会話の場合、各トピックの中で焦点のあてられる要素の転換が激しく、トピックが一定しにくいことが解る。

また、二人の対話の場合にも、interruption は発生するが、それは通常聞き手が話し手の発話の内容に同意しない場合や自分の意見を挿し挟もうとする場合、あるいは無関心である場合である。例えば、以下に示す対話がその一例である。

例(34) : 資料(く)、インフォーマント-IとJ (MT3-ST3)

I-1: 我就在家里呆着, 就听他们说! 说天津有时候也……! 因为我父亲在银行工作么! , 那有一个储蓄所啊! 。一天! , 就很小很小的贮蓄所! , 还不是大

的分理处什么的 |，就一天 |，支出去 |，付出去的人 |，人民币就几十万 |。到后来…

J-1：现在没人存钱了。

I-2：到后来 |，大概这个风刮了不到一个星期 |，银行就采取措施。因为什么呢？钱都付出去了 |，银行采取什么措施呢？

J-2：不让取了？ | 不让支？ |

I-3：不说不让取 |，取你存款的百分之三十 |。

J-3：为什么？ |

I-4：没钱给呀 |。嘿嘿哈哈… |。为什么？ | 比如，你存了一千块钱，那么给你三百块钱 |。你只能取三百块钱。你说我把一千块钱都取出来 |，不行！ |

J-4：到期了也不让取？

I-5：不行！ |

J-5：到期了都不让取？ |

I-6：不行！哈哈…

J-6：这一点不 | 这一点不合理呀 |。到期了你得让人家取 |。

I-7：因为什么呢…

J-7：你不到期的话…

I-8：因为什么呢 |，现在就说 | 就这抢购风期间啊 |，据说就是天津（那个） | 不知 | 不知道你去过没去过天津啊 |，天津最大的（那个） | 挺大的一个叫劝业场的 |，挺繁华的地方 |。现在劝业场 |，一天的销售额相当于平时的几倍 |。

この中では、J-1 と J-7 で J が自分の意見を挿し挟もうとしており、それによって対話は一時途切れるが、I-2 と I-8 から解るように、I はそれを無視して、談話の流れをもとに戻している。

このように、interruption によって一時中断した談話の流れはすぐにもとに戻る場合もあるが、しかし下記の例のように、interruption によって談話の流れが全く変わってしまう場合もある。

例(35)：資料(こ)、インフォーマント-MとN (MT3-ST2~3)

N-1：我们学校有就是呢，留学到期 | 嗯 | 半 | 超过半年以上，没回来的 |，就算你自动 | 自动解职啊 |。根据 | 系里边的需要呢，就是 | 有的人就回来以后，

留学回来以后吧，他就给你复职，因为它需要你。有的吧，它不需要你的话，它就安排别的老师，或者什么了。那你回去以后，你就自己找单位了。上次……

M-1：你爱人拿的那护照是公派护照啊。

N-2：他是自费公派和公派一回事吧？

M-2：对，他还是拿的外交部的护照吧？

N-3：对，对，对。

Nは、N1 で自分の現在の状況を説明し、‘上次’（=前回は）という発話に続けてさらに自分の状況を説明しようとしているのに、そこでMがNの夫のことで持ちだし（=M-1）てNの発話を遮ったため、ここでテーマはN自身から、Nの夫へと転換していく。

しかしこの場合、談話の流れはinterruption の時点で途切れ、談話の構造もそれにともなって、提示部や展開部までで途切れることとなるだけである。

このように二人の対話は、話し手は聞き手に、聞き手は話し手に関心や注意が集中するため、その他の場合よりも、談話の流れが通常、よりスムーズであり、interruption もさしたる問題にはならないことから、談話の構造のモデルや情報伝達のルールの検証にも、より好都合だと判断し、二人の対話を採用することとした。

しかしながら、談話は通常二人の対話に限られるものではないことはいうまでもないことであり、談話への参加者が三人、四人と多くなればなるほどinterruption の発生も多くなり、先の例でみてきたように、談話の構造が途中で途切れる場合もあれば、そこで中断をしてトピックが一時転換して、もとの談話の流れに戻ったり、戻らなかつたりすることがある。本稿では、談話を、話文の連続体であって、それがまとまりをもったものであるというしぼりをつけて規定しているので、interruption が入って、談話が中断し、中断したまま、トピックが転換してもとの談話の流れに回帰しない場合は、談話ではないとして捨象することはできる。

しかし、現実の言語生活において、三人以上の参加による、とりとめのないいわゆる雑談は日常の茶飯事であり、かような雑談に現れる言語表現を言語研究の対象から除外することはできない。その場合、談話の構造のモデルはより複雑化するであろうし、修正を余儀なくされることもある。この点も今後の課題として残される。

5.7 現代中国語統語論における本稿の位置づけおよび今後の展望

本稿は、修士論文において述語に後置する非自立的成分の語順の問題を考察したことを基にして、自立的成分である名詞（句）の語順について考察した。

非自立的成分は、いうまでもなく一文のレベルであろうとそのレベルを越えた談話のレベルであろうと、それ自体の語順は固定したものであるが、自立的成分である名詞（句）の語順には、一定の統語的制約のもとで任意性がある。そしてこの名詞（句）の語順は当然のことながら、話し手あるいは書き手によってより正確に情報を伝達するために選択されるものである。言語表現が情報伝達をその機能としている限り、個別の言語表現はそれぞれ聞き手や読み手を意識したものであることは自明のことである。従って、話し言葉の場合、話し手は話しの場面をしかと確認した上で、過不足のない適切な言語表現を選択する。

しかるに、従来の現代中国語の統語論の分野においては、中には話しの場面を意識した分析もあるにはあるが、一文のレベルに限った、話しの場面を念頭におかない分析が主流を占めている。

例えば、日本語の「食堂で食べる」に対応する現代中国語の、①‘在食堂里吃’、②‘食堂吃’、③‘吃食堂’において、従来、①は問題なく成立する表現、②は非成立、③は場面の支持があれば成立する、とされてきたが、これら3つの表現は現代中国語の話し言葉においては、‘昨天在饭馆儿里吃饭了，今天在哪里吃?’という問に対する返答という話の場面を設定するだけで、完全に問題なく成立する。加えて、③における‘食堂’は、この表現が成立する場合は「場所目的語」だとする分析は全く意味がない。このような方法で現代中国語の表現を分析していくなれば、目的語の種類は厳密に言えば、その表現の数だけ設定しなければならないことになる。

現代中国語は印欧諸語と比較して、語形変化のない言語であり、また、機能語は相対的に少ない言語である。このことは、相対的にいって語順が統語的に重要な役割を担っていることを意味する。そしてこのことは、現代中国語の統語論研究において、語順の問題が重要な意味をもつものであることを示唆している。しかし、この語順は統語的な制約のもとに統轄されたものであり、無条件に任意性のあるものではない。

従来は、この統語的制約を一文のレベルで、しかも、発話された一話文や書き記された一文を取り上げて考察したり分析されてきた。

しかしながら、現実の言語表現は、その一つ一つがその使用場面において、仮に知的意味が同一であっても、それぞれがそれぞれに他の表現には代替できない固有の表現価値を有するものであり、この固有の表現価値は一話文や一文のレベ

ルでは捉えることのできない場合が多い。そこで本稿で論述してきたように、現代中国語の統語論的分析をする場合、少なくとも話しの場面を考慮しなければならず、この話しの場面がほぼ完全な形で設定されているのが談話である。しかも、本稿で談話のまとまりを規定する要素として取り上げた7つは、従来、発話の場面 (situation) として取り上げられてきた要素とオーバーラップするものである。

本稿で談話を考察の対象としたのは以上の理由によるものであり、名詞 (句) の語順を分析の対象としたのは、このような談話においてほかにそれを論ずることはできないからである。

統語論的研究は、従来は、一つ一つの表現を構成している成分の機能を究明することが主流であるが、談話という一つのまとまりをもった言語表現の展開の中で、個別の言語表現やその言語表現を構成している成分の談話上の役割や働きを究明していくことは、個別の言語表現が話しの場面や文脈を離れて存在するものでない上は、今後の、いわゆる統語論研究には欠かせない重要なことである。本稿においては、談話上の機能と統語的特徴を区別し、その表現形式が談話において果たす役割を談話上の機能、そして、その表現形式の中の名詞 (句) の文成分としての特性を統語的特徴として論じてきたが、この意味においてこの二つは広義の統語的特徴として記述されるものであろう。

本稿の現代中国語統語論における位置づけは以上記述してきたことに尽きるが、このような視点に立った研究は先行研究には全くみられない。

修士論文で論じてきた非自立的成分は、従来一般に文法形式といわれている文成分であるが、現代中国語における文法形式は、文法範疇と文法形式がほぼ一対一で対応する印欧諸語とは異なり、基本的に対応するものではない。しかも、これらの非自立的成分の中で、補語、時態助詞という客観性が高いとされている文法形式であっても、話し手が言語表現の対象である事象、現象、心象をどのように捉えるか、どのように認識するかによって選択される形式である。

また、不定量詞は程度や数量を表すほかに、聞き手を配慮した、コミュニケーションを円滑に遂行するために用いられることも多く、語気助詞はいうまでもなく話し手の判断、気持ち、態度などを表すムードの成分である。この点で、現代中国語における自立的成分の語順の問題と非自立的成分の語順の問題は共通の範疇で捉えることができる。

本稿で取り上げた、名詞 (句) の語順に関わる表現形式は、談話のまとまりを規定する要素のうち、〔1〕は一対一の対話、〔3〕は面と向かい合った直接の対話、〔4〕はくつろいだ雰囲気の中での自由な対話、〔5〕は話し手の個人的な見解 (〔2〕は中国語に限られる) の場合の言語資料をもとに分析を進めたが、これらの要素がどのような組み合わせであっても、談話上の機能は基本的に変化す

るものではない。しかし、例えば、〔3〕の談話が遂行される手段が電話である場合には、身ぶり、表情など、非言語的手段によるコミュニケーションの要素が排除されることによって、それを補ったり、確認したりする言語表現の選択されることは自明のことである。

また、例えば〔5〕の談話の目的が依頼である場合には、依頼者と非依頼者の関係（上司と部下、同僚の間柄など）や、依頼の内容によって、依頼者は依頼が達成されるのにもっとも適切なストラテジーを選択し、コストを軽減するための表現を選択する。

このように、談話のまとまりを規定する要素である〔1〕から〔5〕の組み合わせによって、談話上の機能にも多少の出入りの生ずることは予測される。

このほか、語順が固定しているといわれている、受け身の表現、使役の表現、‘得’補語の表現なども同様に、談話上の機能が〔1〕、〔3〕、〔4〕、〔5〕の要素に影響されない表現形式であり、これらの表現形式についても、談話上の機能という視点に立って分析することができると思われる。

5.6 で述べた残された課題に取り組み、談話のまとまりを規定する要素の違いによる出入りを検証し、さらに、受け身、使役、‘得’補語などの表現を談話上の機能という視点から分析し、非自立的成分もこの範疇で考察することによって、現代中国語のすべての文法形式や表現の談話上の機能と統語的特徴を明らかにし、現代中国語の新しい文法体系を構築していくことが将来の展望である。

〔註〕

- 1) 以下、中国の民族共通語である‘普通话’を指す。
- 2) 仁田義雄1989 に用いられている用語。
- 3) 本稿の「トピック」は、John Hinds 1976 の‘ the discourse topic ’の考え方と基本的には同じであるが、John Hinds1976 には、本稿の1.1.1で述べたような、トピックがメイン・トピック (Main-Topic) とサブ・トピック (Sub-Topic) から成るとする考察はない。
- 4) 本稿の「パラグラフ」は、John Hinds 1976 の‘ paragraph ’の考え方と基本的には同じであるが、やはり John Hinds 1976 には、本稿の1.1.1で述べたような、パラグラフがメイン・パラグラフ (Main-Paragraph) とサブ・パラグラフ (Sub-Paragraph) から成るとする考察はない。
- 5) 本稿におけるサブ・トピック (S T_n) から次のサブ・トピック (S T_{n+1}) への転換に相当する。
- 6) 中国語話者三人による会話、中国語話者四人による会話も録音し、文字転写した資料も作成した。その結果、中国語話者二人による対話と比較すると、話し手の発話をさえぎることが多く、また話し手の関心や注意、あるいは聞き手の関心や注意が相手に集中しにくいいため、トピックが一貫しにくく、談話の流れも二人の場合の方がよりスムーズであると判断された。これについては 5.6 で詳述する。
- 7) 丁声樹や呂叔湘等によって、1952年 7月から1953年の11月まで17回にわたって『中国語文』に連載された「语法讲话」を、のちに補正してまとめ、1961年に刊行されたもの。本稿における引用は、これに依る。
- 8) 「動詞+‘一’+量詞+名詞(句)」も提示話文である。この表現形式の中の「‘一’+量詞」は、単に「一つのもの」や「一回のこと」であることを表しているのではなく、例えば 6-1 は、それが聞き手にとっては不定(indefinite)の「一回のこと」であるが、話し手の意識の中では、特定の指示 (specific reference) の対象のある「一回のこと」であることを表している。そして 6-1 は、話文全体が聞き手にとって新情報である。
- 9) [60] ~ [65] の例文は、呂叔湘1955 からの引用。
- 10) [66] ~ [73] の例文は、『現代汉语八百词 (p.50~)』からの引用。
- 11) ここでいう知的意味 (cognitive meaning) とは、conceptual meaning と同義である。

- 12) ウ = ‘你说起这事来’ と エ = ‘你说起来这事’ の表現は、例えば下記の例にみられるように、‘这事’ が後続の表現と意味内容の上で関連があるかないかの上で明確な相違が存在する。

ウ：‘你说起这事来，我想起小时候发生的一件事。’

エ：‘你说起来这事，我觉得你的做法不太好。’

- 13) 吕冀平1955に掲載されている表の一部。

- 14) この「主語賓語論争」は『語文学习』で展開され、1955年7月から1956年4月までに、この問題に関して30篇以上の論文が掲載された。その後それは中華書局(1956)より『汉语的主語賓語問題』にまとめられ、この論争は終わったとされている。

- 15) この談話の言語資料のインフォーマント及びその収録については、次の通りである。

〈インフォーマント〉

(O)：男性、35歳、長春生まれ、長春育ち

(P)：男性、37歳、黒龍江省生まれ、21歳より北京在住

(Q)：女性、37歳、黒龍江省生まれ、21歳より北京在住

〈言語資料の収録〉

インフォーマント(O)、(P)、(Q)による自由会話、

1988年録音、約60分

各インフォーマントの年齢は収録当時のものである。また、各インフォーマントの中国における職業は大学の教員であり、その発話された言語は民族共通語(‘普通话’)と認定できるものである。

〔参考文献〕

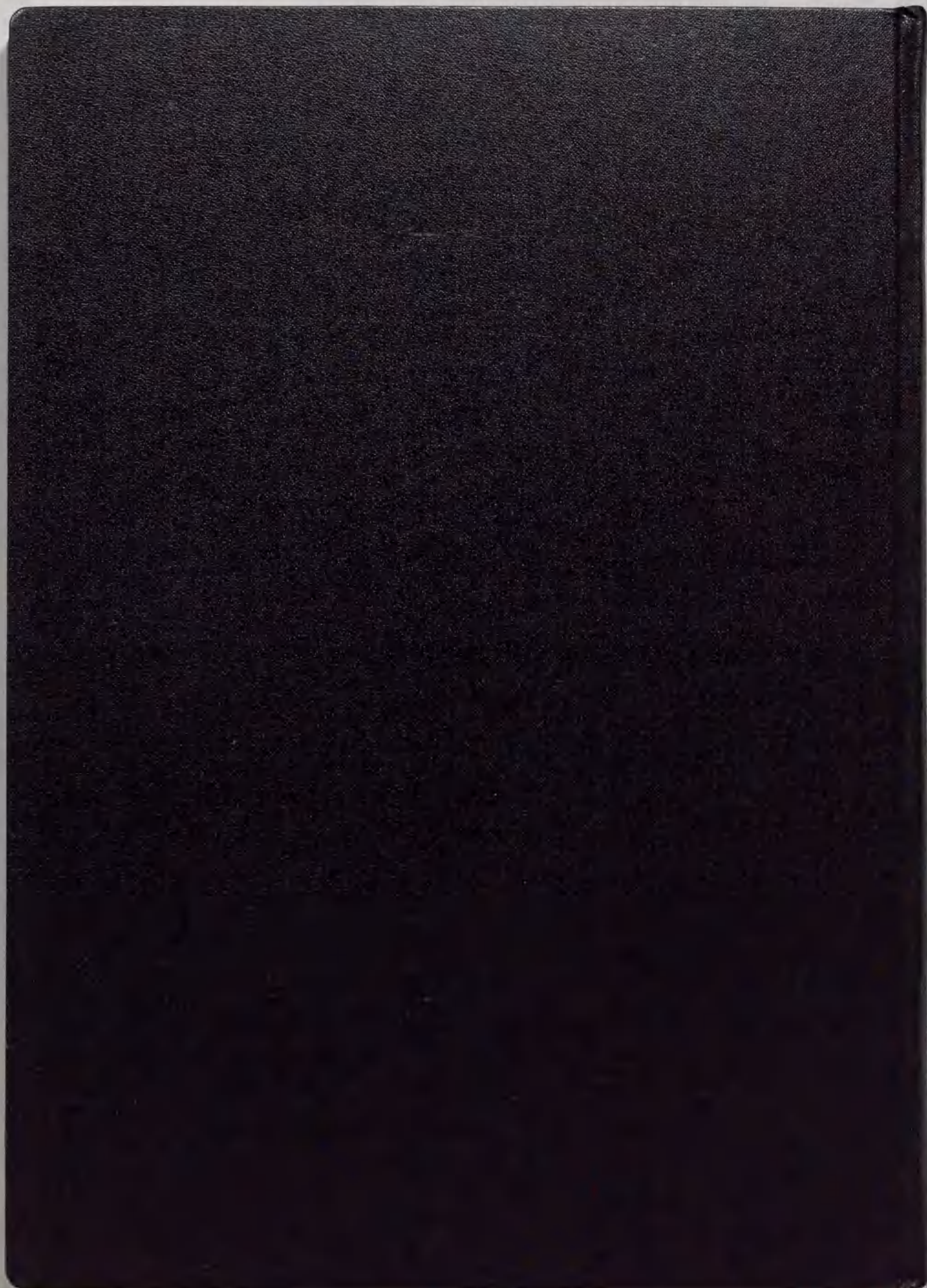
- 池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」, 『談話の研究と教育 I』, 国立国語研究所.
- 入谷敏男 (1981) 『話しことば—その仕組みと展開』, 中公新書.
- 内田慶市 (1989) 「漢語里的“無定名詞主語句”—別外一種“存現句”—」, 『福井大学教育学部紀要37 第 I 部』.
- 大河内康憲 (1982) 「中国語構文論の基礎」, 『講座日本語学10 外国語との対照 I』, 明治書院.
- 樺島忠夫 (1983) 「文章構造」, 『朝倉日本語新講座5、運用 I』, 朝倉書店.
- 川越菜穂子 (1991) 「日本語の話しことばと書きことば」, 『日本語学』 Vol.10, No.5, 明治書院.
- 児玉徳美 (1991) 「〈例解〉選択体系機能文法の実際」, 『月刊言語』 Vol.20, No.4, 大修館書店.
- 柴谷方良他 (1982) 『言語の構造 意味・統語篇』, くろしお出版.
- 杉村博文 (1984) 「処置と遭遇—“把”構文再攷」, 『中国語学』 231.
- 鈴木直治 (1965) 「「有」による強調の表現について」, 金沢大学教養部論集 人文科学篇二.
- …………… (1969) 「漢語の存在文における場所語の位置とその発話の重点」, 『密田良二教授退官記念論集』.
- 鈴木晴子 (1988) 「“把”字句の機能的分析」, 『中国語学』 235.
- 鈴木英夫 (1984) 「文章の構造」, 『講座日本語と日本語教育5』, 明治書院.
- 鈴木義昭 (1985) 「漢語における「主謂謂語句」について(1)」, ILT NEWS 77.
- …………… (1986) 「現代漢語における「無主句」と「存現結構」について」, ILT NEWS 79.
- 高橋君平 (1970) 「‘存現文’を廃し, ‘処動構造’を立てる」, 『中国語』 201.
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」, 『日本語のモダリティ』, くろしお出版.
- …………… (1990) 「談話管理の理論」, 『月刊言語』 Vol.19, No.4, 大修館書店.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』, くろしお出版.
- 寺村秀夫他 (1990) 『日本語の文章・談話』, 桜楓社.
- 中川正之 (1978a) 「アスペクト・マーカーとしての「有」」, 『アジア・アフリカ語の計数研究—』, アジア・アフリカ言語文化研究所.

- ………… (1978b) 「中国語の「有・在」と日本語の「ある・いる」の対照研究」, 『日本語と中国語の対照研究』第3号, 大阪外国語大学日中語対照研究会.
- 永野 賢 (1983) 「談話における叙述の構造」, 『談話の研究と教育 I』, 国立国語研究所.
- ………… (1986) 『文章論総説』, 朝倉書店.
- 成瀬武史 (1989) 『意味の文脈』, 研究社出版.
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」, 『日本語のモダリティ』, くろしお出版.
- 野村真木夫 (1986) 「パラグラフにおける文の展開をめぐる」, 『表現研究』44.
- ………… (1987) 「現代日本語のトピック・センテンス」, 『弘学大国文』第13号.
- 畠山弘己 (1985) 「主題の展開と談話分析」, 『国際商科大学論』第31号.
- 波多野完治 (1973) 『現代レトリック』, 大日本図書.
- 日比谷潤子 (1991) 「社会言語学からみたハリデー」, 『月刊言語』Vol.20, No.4, 大修館書店.
- 福地 肇 (1985) 『談話の構造』, 大修館書店.
- ………… (1991) 「言語分析における機能的視点」, 『月刊言語』Vol.20, No.4, 大修館書店.
- ベケシュ, A. (1987) 『テキストとシンタクス』, くろしお出版.
- ポリー・ザトラウスキー
(1991) 「会話分析における「単位」について」, 『日本語学』Vol.10, No.10, 明治書院.
- 南不二男 (1983) 「談話の単位」, 『談話の研究と教育 I』, 国立国語研究所.
- 宮地 裕 (1963) 「話しことば書きことば」, 『講座現代語1 現代語の概説』明治書院.
- 森岡健二 (1965) 『文章構成法』, 至文堂.
- 安井 稔 (1978) 『新しい聞き手の文法』, 大修館書店.
- ………… (1991) 「英文法からみたハリデー」, 『月刊言語』Vol.20, No.4, 大修館書店.
- 山口直人 (1988) 「“在+処所”に関連する2つの問題」, 『北九州大学大学院紀要一』.

- 北京语言学院编 (1958) 『汉语教科书』。
- 陈建民 (1986) 『现代汉语句型论』, 语文出版社。
- 陈信春 (1982) 「同复合趋向补语并见的宾语位置」, 『中国语文通讯』1982年第5期。
- 登福南 (1980) 『现代汉语语法专题十讲』, 湖南人民出版社。
- 丁声树等 (1961) 『现代汉语语法讲话』, 商务印书馆。
- 范方莲 (1963) 「存在句」, 『中国语文』1963年第5期。
- 范继淹 (1982) 「论介词短语“在+处所”」, 『语言研究』总第2期。
- …… (1985) 「无定 NP 主语句」, 『语法研究和探索3』, 中国语文杂志社
- 胡附/文炼 (1957) 『现代汉语语法探索』, 新知识出版社。
- 黄章恺 (1987) 『现代汉语常用句式』, 北京教育出版社。
- 江天 (1978) 「谈主谓词组作谓语」, 『辽宁大学学报』1978年第10期。
- 黎锦熙 (1924) 『新著国语文法』 商务印书馆
- …… (1955a) 「主宾小集」, 『语文学习』1955年第9期。
- …… (1955b) 「主宾小集(下)」, 『语文学习』1955年第11期。
- 李临定 (1986) 『现代汉语句型』, 商务印书馆。
- 李珠 (1979) 「谈谈主谓谓语句」, 『语言教学与研究』1979年第2期。
- 林兴仁 (1983) 『句式的选择和运用』, 北京出版社。
- 刘月华等 (1983) 『实用现代汉语语法』, 外语教学与研究出版社。
- 刘月华 (1980) 「关于趋向补语“来”、“去”的几个问题」, 『语言教学与研究』1980年第3期。
- 吕冀平 (1955) 「主语和宾语的问题」, 『语文学习』1955年第7期。
- 吕叔湘主编 (1980) 『现代汉语八百词』, 商务印书馆。
- 吕叔湘 (1953) 『语法学习』, 中国青年出版社。
- …… (1955) 「把字用法的研究」, 『汉语语法论文集』, 商务印书馆, 1984。
- …… (1979) 『汉语语法分析问题』, 商务印书馆。
- …… (1984) 『汉语语法论文集』, 商务印书馆。
- …… (1986) 「主谓谓语句举例」, 『中国语文』1986年第5期。
- 马真 (1981) 『简明实用汉语语法』, 北京大学出版社。
- 孟维智 (1984) 「主语谓语的的范围」, 『语法研究和探索2』, 北京大学出版社。
- 倪宝元等 (1985) 『实用汉语语法』, 福建人民出版社。
- 饶长溶 (1990) 『把字句·被字句(教学语法 书之十三)』, 人民教育出版社
- 沈星怡 (1984) 「主谓短语前的『在+处所』」, 『语文学习』1984年第1期。
- 史存直 (1989) 『语法新编』, 华东师范大学出版社。

- 宋玉柱 (1981) 「關於“把”字句的两个问题」,『语文研究』1981年第2期.
 …… (1982) 「定心谓语句存在句」,『语言教学与研究』1982年第3期.
 …… (1986) 『现代汉语语法十讲』,南开大学出版社.
- 王 还 (1957) 「说“在”」,『中国语文』1957年第2期.
 …… (1959) 「“把”字句和“被”字句」,『汉语知识讲话(合订本)五』,上海教育出版社. 1987.
 …… (1980) 「再说说“在”」,『语言教学与研究』1980年第3期.
 …… (1985) 「“把”字句中“把”的宾语」,『中国语文』1985年第1期.
- 王 力 (1946) 『汉语语法纲要』,『王力文集第三卷』,山东教育出版社,1985.
 …… (1954a) 『中国现代语法』,中华书局.
 …… (1954b) 『中国语法理论』,中华书局.
- 吴为章 (1990) 『主谓短语·主谓句(教学语法丛书之十)』,人民教育出版社.
- 徐静茜 (1983) 「说“来·去”」,『语言教学与研究』1983年第1期.
- 薛凤生 (1987) 「试论“把”字句的语义特性」,『语言教学与研究』1987年第1期
- 谿开第 (1983) 「把字句谓语中动作的方向」,『中国语文』1983年第2期.
- 张伯江 (1991) 「關於动趋式带宾语的几种语序」,『中国语文』1991年第3期.
- 张志公 (1953) 『汉语语法常识』,上海教育出版社.
- 张志公等 (1959) 『汉语知识』,人民教育出版社
- 朱德熙 (1982) 『语法讲义』,商务印书馆.
 …… (1985) 『现代汉语语法研究』,商务印书馆.
 …… (1981) 「“在黑板上写字”及相关句式」,『语言教学与研究』1981年第1期.
- 傅雨贤 (1981) 「“把”字句与“主谓宾”句的转换及其条件」,『语言教学与研究』,1981年第1期.
- Georgia M.Green. (1989) PRAGMATICS AND NATURAL LANGUAGE UNDERSTANDING. Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers. 深田淳訳『プラグマティックスとは何かー語用論概説』,産業図書. 1990.
- Halliday, M.A.K. (1970) “Language structure and language function.” NEW HORIZONS IN LINGUISTICS, Penguin Books.
- Halliday, M.A.K. and R.Hassan. (1976) Cohesion in English. Longman.
 …… (1985) Language, context, and text: Aspects of language in a social-semiotic perspective. Deakin University. 笈寿雄訳『機能文法のすすめ』,大修館書店. 1991.

- James H-Y.Tai. (1975) "ON TWO FUNCTIONS OF PLACE ADVERBIALS IN MANDARIN CHINESE." JOURNAL OF CHINESE LINGUISTICS, VOL.3, NO.2/3
- John Hinds (1976), Aspects of Japanese Discourse Structure. Tokyo: KAITAKU-SHA.
- Li and Thompson. (1981) Mandarin Chinese, University of California Press.
- Michael Stubbs. (1983) Discourse Analysis. Basil Blackwell Ltd. 南出康世、内田聖二 共訳『談話分析』, 研究社出版. 1989.
- Randolph Quirk. (1986) WORDS AT WORK. Singapore University Press. 池上嘉彦、豊田昌倫 共訳『ことばの働き』, 紀伊国屋書店. 1988.
- Stephen C. Levinson. (1983) Pragmatics. Cambridge University Press. 安井稔、奥田夏子訳『英語語用論』, 研究社出版. 1990.



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19

